

奇譚クラブ



新しい風俗文献誌

奇譚クラブ

1974・1

THE KITAN CLUB

Illustrated Magazine of Japanese Culture

Volume 1

1

カメラ・ハント楽我記……辻村隆
女体緊縛の醍醐味を語る……塚本鉄三



平穩態勢OK……前田真知子
 取しい裸目を味う……前田真知子
 麻痺と脱肛の明暗……前田真知子
 自由な肢のもたえ……前田真知子
 典型的後手縛り……前田真知子
 背縄横臥二態……前田真知子
 尻孔に喰い込む麻縄……前田真知子
 足間縛りの表情……前田真知子

本誌写真部構成

金髪碧眼の美女 苦打ちの悲勢	開谷富佐子	シブ・タチ	海老賣の狂態 ポリウムに挑戦	川路 薫子	シブ・タチ
鞭撻の痛苦	開谷富佐子		難打の下に 稽道の人身御供	関谷 明子	
泡風呂の序曲	長井 薫子		稚妻は縄を知りぬ	金取 加奈子	
亀甲縛りの美態	左近 麻里子		開股の正面と背面	中河 恵子	
麻縄と白肌の対照	中河 恵子		華麗な開股責め	中河 恵子	
湯を浴びた羞恥	左近 麻里子		イルリガイトルを前に	長井 薫子	
陽を浴びた羞恥	中河 恵子		非情な責めの終末	長井 薫子	
緊縛裸身の喘ぐ	中河 恵子		両手吊りの晒し	中河 恵子	
責め疲れの放心	中河 恵子		柱縛りの完了	川路 薫子	
没打の心境	関谷 明子		処女縛りとまどう	三浦 純子	
沖縄美人の緊縛	佐々木 真弓		麻縄に身をゆだね	中河 恵子	
刺玉子の縛り	佐々木 真弓		監視するSMの目	佐々木 真弓	
狂宴する裸女	川路 薫子				
責めくたびれて	佐々木 真弓				
紅毛猫眼の白人を責める	シブ・タチ				

編集部構成

[illegible]

本誌愛読の女性の方々へ

○本誌創刊以来二十数年、多くの女性愛読者
 数多々の貴重な投稿やモデルを賜ふて、
 献誌の期にたて、真摯な研究熱心な本誌読者
 方々への期待に、応えて、御遠慮なくお氣を
 望まれます。下さる、どうか御遠慮なくお氣を
 ○本誌愛読の女性の方で、間いませ、
 婚の別、年齢など一切の問合せ、
 拾方に、お申込込み、願ひに、
 ○応募された、即ち金にして、お返しに、
 は、御本人の許した方々の個人秘密の漏洩
 故、御安心の上、御座り、絶対的、
 提、御書き下さる、方、た、際、別、原稿、
 致、供、ます、つ、方、た、際、別、原稿、
 幸甚に存じます。お申込込み、お書き添え下されば、
 ○撮影いたしました写真、若し御都合によりて、
 とは、望まれません。場合、若し御都合によりて、
 表を打合せ、お出し、若し御都合によりて、
 介添えて、お出し、若し御都合によりて、
 成、つ、て、の、出、演、若し御都合によりて、
 き、たい、と思、います。その、際、の、報酬、は、改、
 個々に御相談に、応じたいと思、います。
 ○御応募に、際しては、年齢、職業、身長、体
 重、など、必ず、お書き添、え、願、います。写真、が、あ
 れ、ば、同、封、下、され、は、好、都合、です。お、手、元、に、適
 当、な、もの、が、な、ければ、結、構、です。
 ●申込先。大阪市住吉郵便局私書箱第11号
 読出版株式会社 編集部

賞金

入選作品	第一席	二十萬元	1 篇
入選作品	第二席	十萬元	1 篇
入選作品	第三席	五萬元	3 篇
入選作品	第四席	三萬元	5 篇
入選作品	第五席	二萬元	10 篇
佳作優秀作品		一萬元	15 篇
選外佳作作品		五千元	10 篇

形式は、小説、創作、読物などのフ

[illegible]

甘美なるマゾの境地

〔塚本鉄三・撮影〕



羞らいのまま待つ浣腸

△玉木章子▽



昭和四十九年

一月号目次

△第二十八卷第一号
通刊第三二一号▽

フォト「責めてみたい麗人」△川路むら子▽……………林 繁三…(21)
悦楽の一夜を体験して、編集長へのレポート

『動物(ケモノ)に变身してしまった私』……………苗木 陽子…(22)

あるデパート保 女万引の処刑部屋……………佐原陽一郎…(34)
安係員の生甲斐

連載創作『S M 企業』△第四話、本番にそなえて▽……………秋津新次郎…(40)

告白 “吾が倒錯生活の断片”……………真田 一郎…(50)

私説・梨花悠紀子「誰そ彼れ」のひと……………きくかおる…(56)

敗戦秘話『落花無残の大和撫子』……………鈴鹿 晶子…(66)

北満哀歌 テレビに依る、美女の鼻孔觀賞 “天国の椅子”……………佐藤 光保…(75)

連載小説『大 噴 火』△第六十三回▽……………千葉 青鬼…(78)

受難を待つおんな “M子再来”……………泉 一郎…(86)

私の履歴書「ゴムマント」への憧れ……………鶴崎 好夫…(93)

連載・時代S小説『紫蘭の門』(29)……………風流極道軒…(98)

懸賞入選告白 “視盗録”△音入考現学▽……………多田野平助…(112)

「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ△玉木章子の巻▽……………塚本 鉄三…(120)

「M女26」のマゾぶり、まさに拔群……………大場 公夫…(152)

おしめカパーの “私のおしめ理念”……………春日 ルミ…(154)

現実的意義 美貌のサジスチン春日ルミ・待望の告白……………大月吐志夫…(161)

『祇陰と神酒授与のことなど』……………久留米 栄…(164)

苗木陽子さまへ “S Mの血騒ぐこの頃”……………乃美 対造…(182)

砂登子抄(後)『深き水の底に沈んで』……………鬼山 絢策…(186)

想いつのりて “Mの妖美△深田菊子嬢△再会”……………霜月 一…(200)

連載・M派交友録(46)『グラマーな猛女』……………鬼山 絢策…(186)

淫魔との契約 “S M妄想記”……………霜月 一…(200)

“耽奇房”我楽多控(第十回)……………辻村 隆…(204)

二十四時の悪魔『午前零時の悦楽』(前)……………辻村 隆…(204)

シリーズ第二話……………辻村 隆…(204)

羞らいのまま待つ浣腸☆女
体を自由に操る紐☆クリッ
プ責めのワンカット☆オシ
メのある風景

玉木 章子

責めに悶える女体☆見えな
い嗜虐の手

苗木 陽子

迫りくる魔手におびえて☆
脚線を晒す

笠井奈保子

放恣な臨月妊婦……

南 加津子

ハリツケに晒す女体……

山原 清子

縛りに惑溺したい心……

深田 菊子

吊りも又楽し☆「駿河問い」
の一瞬

前田真知子

嗜みしめる縄の味☆鏡の中
の被虐

高村 浩子

責めの中の安住……

鈴木千鶴子

麻縄のいびる白肌……

松本 たえ

足を舐めてみる……

逸毛恵須子

助けを求めたい顔……

シーラケニ

柔軟な肢体の誇示……

福井 桃子

イメージギャラリーII「メリーゴーランド」岡たかし(37)

◎「調教」四馬孝(46) ◎「シエルバ」室井亜砂路(70)

◎「心中」桐原紫門(91) ◎「安心しておやすみ」原由貴

子(96) ◎「叫声発生機」岡たかし(102) ◎「鼻鬚り開始」

四馬孝(106) ◎「新品入荷」マエダヒオミ(108) ◎「下宿

への訪問者」T・原(168) ◎「王妃の豪華な悦楽」室井亜

砂路(172) ◎「執務中」三鷹I・O(177) ◎「サディステ

イン登場」マエダヒオミ(191) ◎「迫る重圧」岡たかし

目次フォト……鈴木千鶴子・西条紀代



奇クサロン (234)

ある手紙 三十路の妻より……浜野 千代
感泣の詩「泣いている」……上田 光一
迫力満点のカメラ・ルポ
「凄じい! 白豚の調教」……東 一郎
ムチにむせぶマゾ女性
関谷富佐子さんに……紀州 孫一
奇クに見るマゾ女の本物だ……石部 金吉
これこそマゾ女の感想
イメージ・ギャラリー感想
「陽の差し込む時間」他……沖 洋三
私の描く責めのプログラム……梅田 清士
縄目に酔う「恍惚の人」……松本 たえ
憧れの人 山口とき子さん……松野 和男
「妊婦責め」の妙……都築 春夫
奴隷妾北川まりこへ再び……橋 房由
マゾ妾の被虐恋歌……北川まりこ

荒尾慶子さんへの呼びかけ
「雲を呼びもどそう」……城 章夫
映画 最近の縛りシーン……東山 映史
獣姦姫千恵子の勉強法……甲斐千恵子
通信 安土城址を訪ねて……前田真知子
「獣姦願望」の甲斐さんへ……田中 或人
最近の「浣腸小説」に一言……竹迫 誠也
告白 ああ下着の哀れさよ……五月 一郎
通信 出産後の私のこと……南 加津子
編集部だより……編集部
早坂郁子様へ「手記を読んで」
羨ましい夫婦愛の極致!……浦上 健児
研究「のぞき」について……広東 研二
浣腸についての疑問、他……鎌倉 誠哉

フォト・ストーリー「故郷喪失」……山上 武志……(220)
告白「夫婦愛の記録」……古曾部 隆……(226)
読者通信……編集部選……(266)



責めに悶える女体

＜苗木陽子＞





△笠井奈保子▽

迫りくる魔手におびえて



＜南 加 津 子＞

放 恣 な 臨 月 妊 婦

女 体 を 自 由 に 操 る 紐

＜玉 木 章 子＞







＜山 原 清 子＞

ハリツケに晒す女体



脚線を晒す



△苗木陽子▽

見えない嗜虐の手

△笠井奈保子▽



＜深 田 菊 子＞

縛りに惑溺したい心

△玉 木 章 子▽

クリップ責めのワンカット





吊りも又楽し

△前田真知子▽

オシメのある責め風景

△玉木章子▽



味の縄をしめる

△高村浩子▽



責めの中の安住

△鈴木千鶴子▽



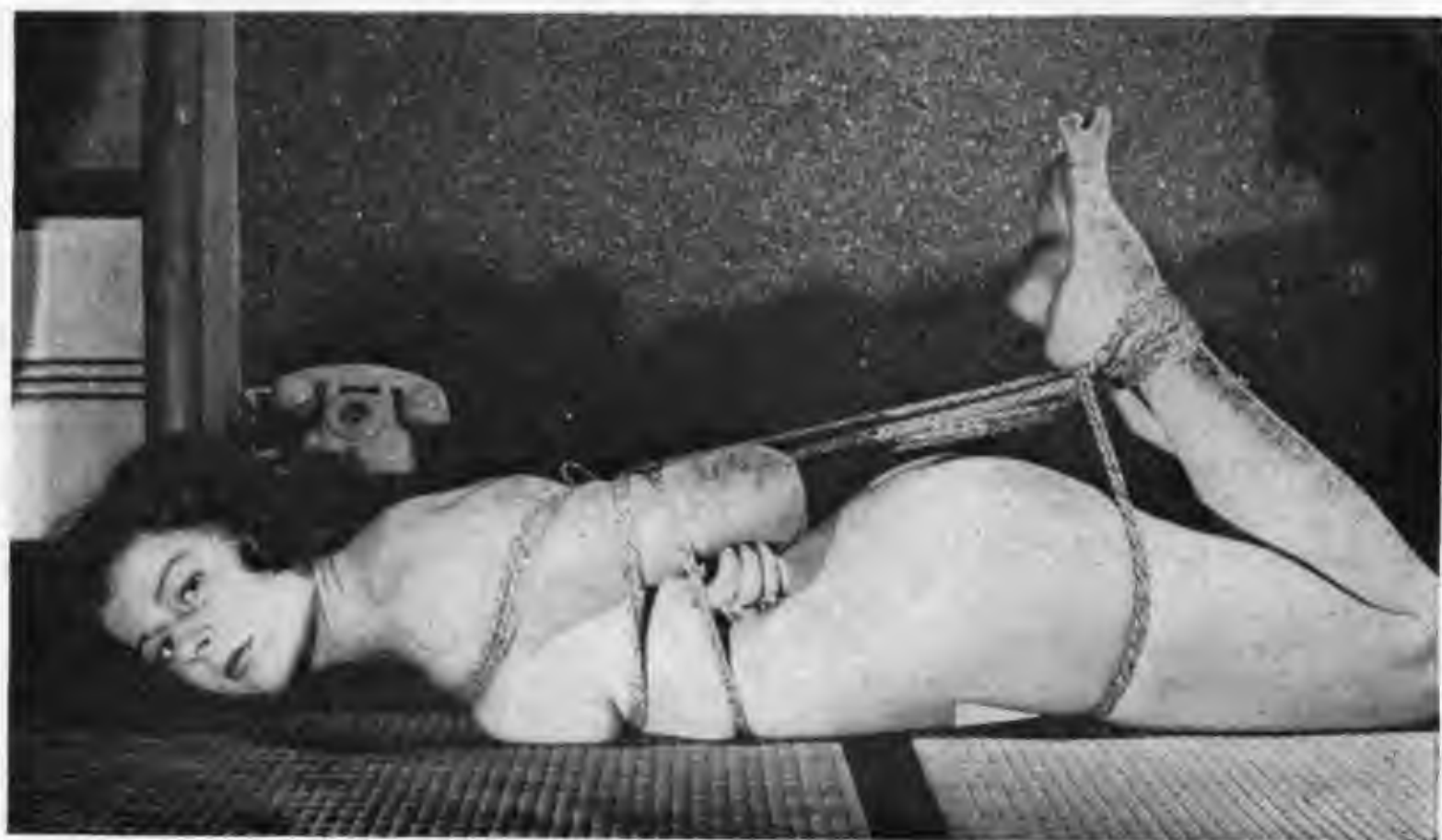
麻縄のいびる白肌

△松本たえ▽



“足を舐めてみる!”

△逸毛恵須子▽



助けを求めたい顔

＜シーラ・ケニー＞



柔軟な肢体の誇示

＜福井桃子＞



鏡の中の被虐

△高村浩子▽

“駿河問い”の一瞬



△前田真知子▽

奇

譚

ク

ラ

ブ

1974

1月号

<第28巻 第1号・通刊第311号>

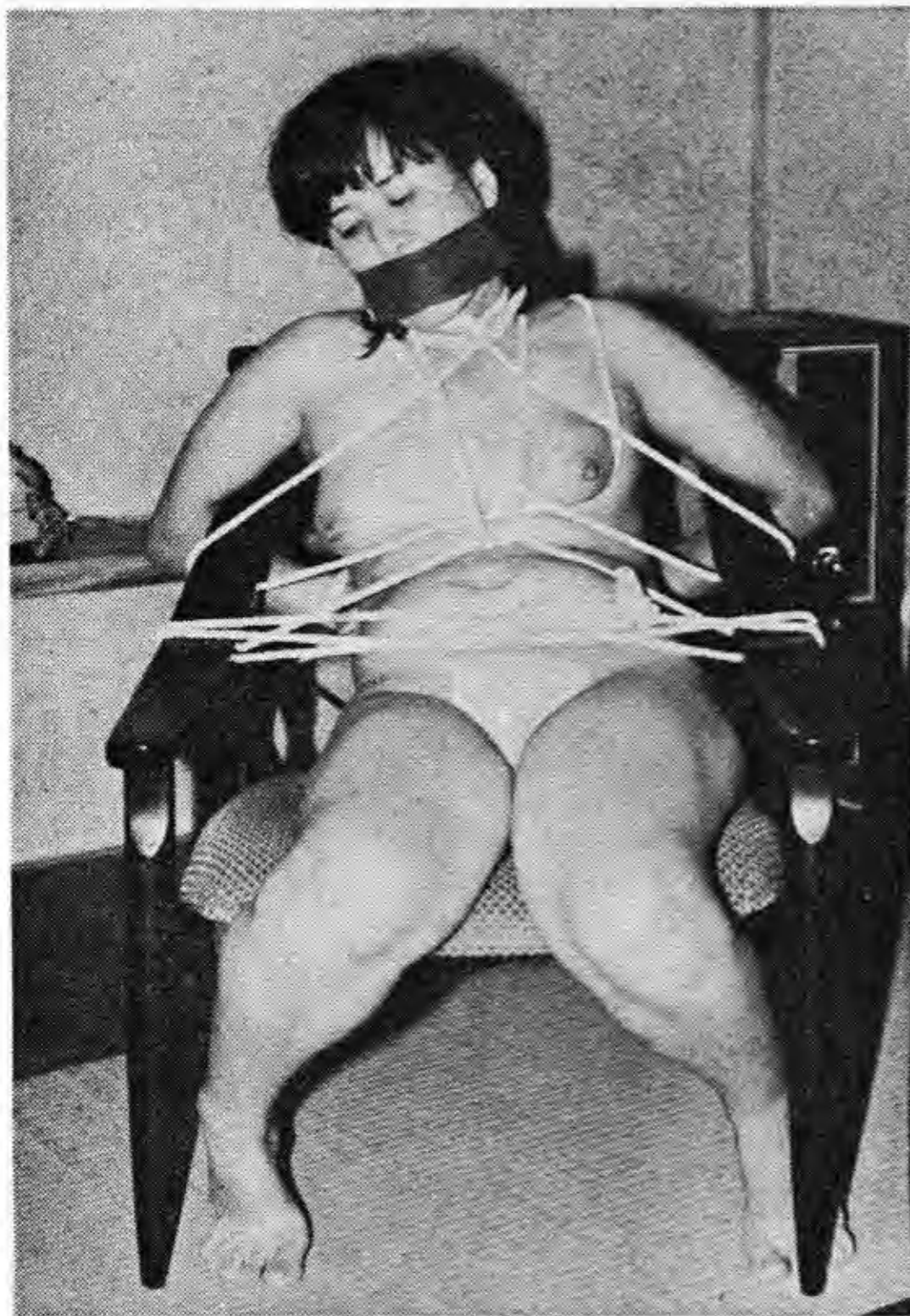
責めてみたい麗人

モデル 川路むら子

私は脂のこってりとった人妻タイプのM女が大好きである。奇クには、そういったベテランの麗人が数多く^{あや}縄を競っているの、私は、いつもこよなく目を楽しませて貰っている。そうした飼育済みのM女たちの中でも、私はこの女性の丸味を帯びた、すべすべとした肌に縄が掛かっている

のを見るのが好きである。羞恥責めに対する無限の可能性を秘めて、この勇気のある美しいM女はその全裸の姿を空間に晒しているのである。両脚の自由なのが、私にとって、自分の入り込む余地があるので空想することが楽しいのだ。

(林 繁三・記)



／＼悦楽の一夜を体験して、編集長へのレポート＼／

動物^{ケモノ}に変身^{へんしん}してしまった私^{わたし}

苗^{なえ}

木^き

陽^{よう}

子^こ

編集長さま

私が始めて、お便りを差し上げました頃は毎日、暑い日がつづいておりましたのに、もう秋風のさわやかな良い気候の日々となつてまいりました。相変わらず、お元気で御活躍のことと、心から、およろこび申し上げます。

先日、突然、あのようなぶしつけなお願いを申し上げましたのにも拘りませず、早速快く、お聞き届け下さいましたことを、厚くお礼申し上げます。お蔭さまで、生まれてこの方、未だ一度も味わったことのないような素晴らしい体験を味わせて頂きました。

私が生まれながらにして、マゾの性格の持主であるを意識したきっかけは、結婚後間もなく、奇譚クラブという雑誌を、書店の片隅で、ふと手にしたことからです。



その雑誌は、たしか、昭和四十三年の八月号でした。団鬼六先生の『花と蛇』という小説が掲載されていて、小夜子という可憐な少女が責められている場面があったように覚えております。それを読んだときの私は、足ががたがたとふるえ、お恥かしいことながら、お小水を洩らしそうになりました。

それでいて、胸がドキドキして、頬が熱くなって仕方ありませんでした。比較的、淡泊だった夫との夜の生活も、奇クを手にしたその日は、殊の外、激しく私は燃えたのです。

性来、内気だった主人は、内弁慶というのでしょうか、家庭内では我侭なことが多く、つまらないことで、よく夫婦喧嘩をしました。が、今から思えば、欲求不満気味の私が、事毎に反抗したためかもしれません。或は、主人が私を責めるように、無意識のうちに、それとなく仕向けていたのかもしれない。

よく口争いをして言い負かされた主人は、言葉につまって、私をぶつようなことがありました。主人にぶたれた後のセックスが、自分でも驚くほどのたかぶりを見せたのです。

編集長さま

こんな私って、異常なのでしょう。その頃は、ただ単に夫婦喧嘩の後の仲直りの気持

ぐらいいにしか思っていないでしたが、主人が私のこんなマゾの性格を見抜いてくれたら、もっと素晴らしい夫婦生活がご過せたのにと、今から思うと残念でなりません。

奇譚クラブの中に載っている小説を読んだ夜は、必ず燃えるということに気づいた私は次第次第に、その中に、自分の気持の安住の

地を求めてゆくようになってゆきました。

主人が亡くなって、未亡人生活も長くなりますと、女盛りの身を聖女のようにして過ごすわけにも参りません。その頃、ようやく全盛になりましたしたポルノを見聞しましても一向に楽しくなく、マスターベーションに耽っていても、それだけでは、とても満足でき



ませんでした。そうした欲望が、人一倍強かった私は、辛い一人寝の毎夜を迎えねばなりませんでした。

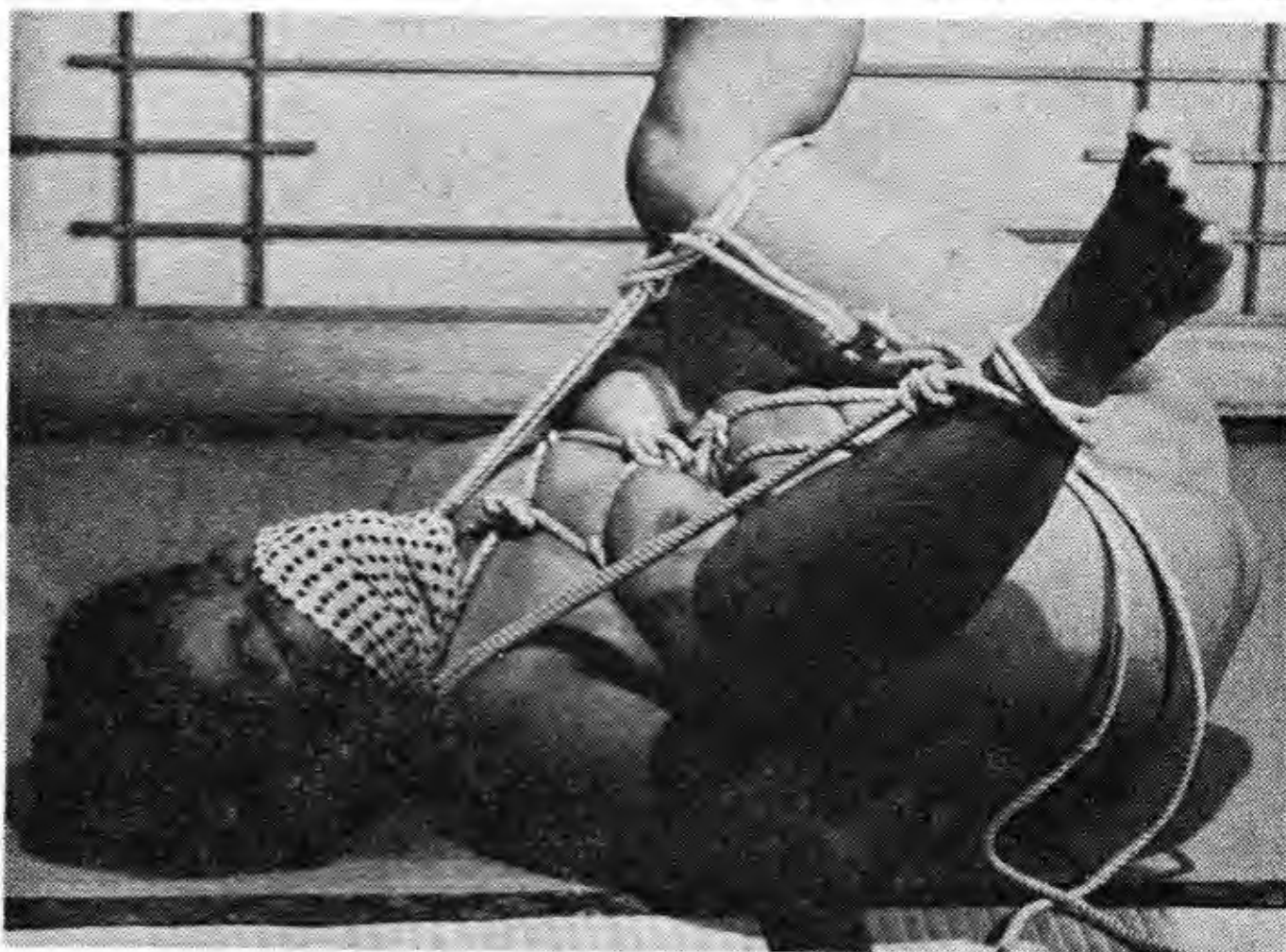
そうかといって、かりそめの浮気の相手を見つけて、デートを重ねてみても、ちっとも燃えないのです。所用で旅行した際など、行きずりの書店で奇譚クラブを買ってくるのが唯一の楽しみでした。家の近くの書店では、顔がさして、どうしても買えなかった私ですが、出先では恥かしさを忍んで目につき次第、買い求めていました。

編集長さま

この奇譚クラブという雑誌のお蔭で、私の一人寝の夜は、少し幸せになりました。

『花と蛇』の静子夫人を我が身に置きかえてみると凄くエキサイトするのです。雑誌を読み、静子夫人のことを想像してマスターベーションに耽ることで、最高に幸せだった私も、だんだんと、それだけでは、満足出来なくなってまいりました。

静子夫人の様に、みじめな奴隷として扱いたい。いえ、静子夫人そのものになりたい



という強い欲望を消すことが出来なくなりました。SMプレイが出来たら、自分の身体

は、もう、どんなになってもよいとさえ、思いつめるようになりました。SMプレイがしたい。SMプレイが出来たら……。そうした私の熱望が、私にペンをとらして、あのような厚かましくも恥かしいお手紙を差し上げ、編集長のお目を煩わしてしまったのでございます。

編集長さま

神の恵みというのは、こんなことを言うのでしょうか。早速、敏速にお手配下さいまして、一人のベテランの男性と一夜を共に過ごすことの出来た、この感激。私の拙いペンでは、どう書きあらわしていいかわかりません。

でも書かずにはいられないのです。夜を徹して、九時間に及ぶSMプレイの連続で、私の身体は、くたくたにしびれきってしまい、この世とも思えない凄く悦楽を味わったのです。その方は、あくまでも、やさしい紳士で、上品な言葉づかいで私に接して下さいました。

それがSMプレイに入った途端、鬼のように情容赦なく私を責め、恥かしめ、凌辱し、

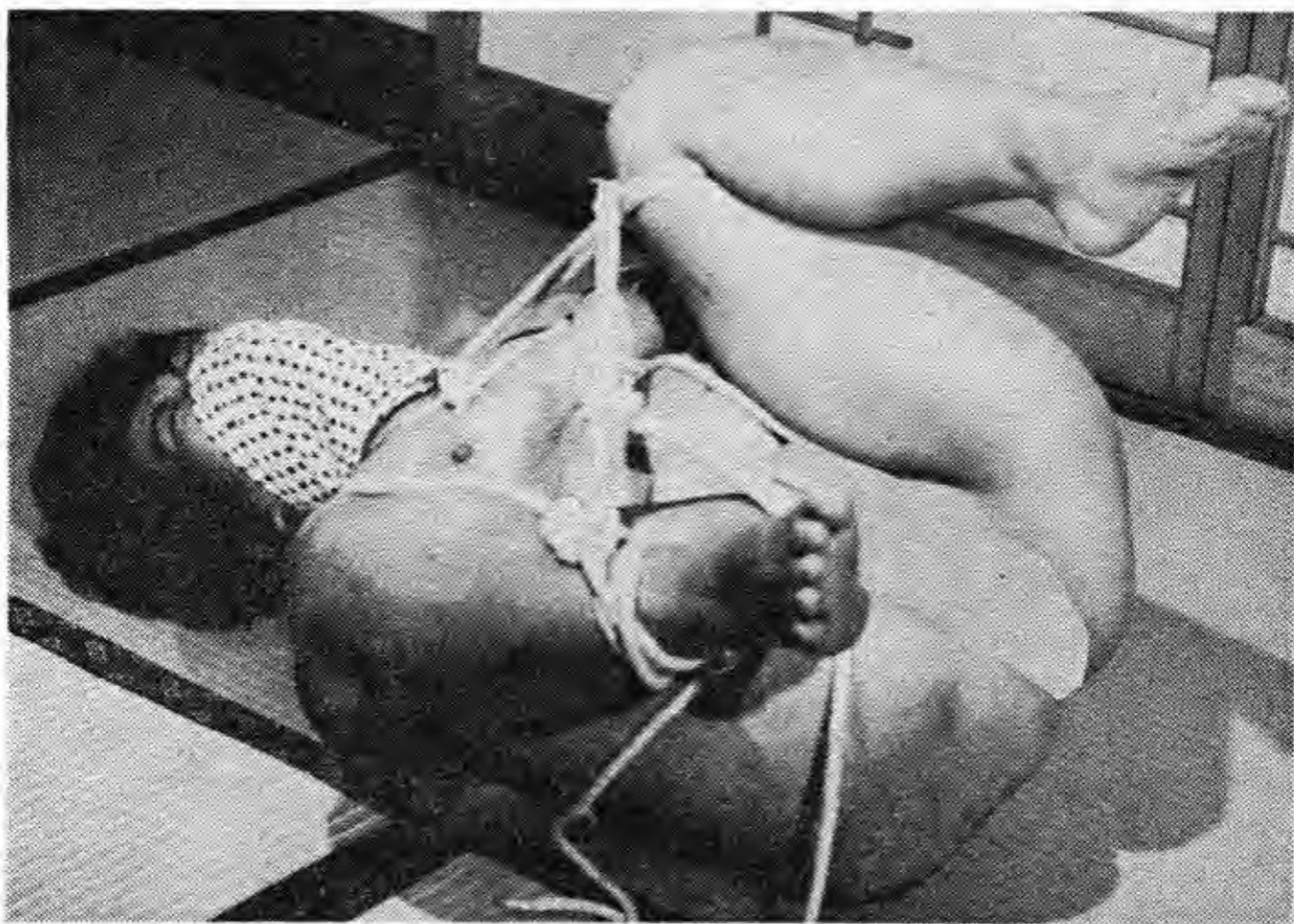
女の業の限界まで、むき出しにして下さいました。私は狂ったように、悦虐の限りを満喫して、むせび泣いたのでございます。

編集長さま

私は、この一夜の感激を、どうしても御報告したくて、このお便りを書きました。さぞ、お忙しいところ、煩わしくお思いかもしれませんが、何卒、お目通し賜われれば、これに過ぐる幸せはございません。

プレイが始まったとき、いや、私にははつきり、いつからプレイに入ったのかという、さだかな記憶はございません。何かしら、夢遊病者のように、或は催眠術をかけられた被術者のように、その方の言われるがままに操り人形さながらに動いていました。

その豪華な部屋が薄暗いムード的な藍色を基調の妖しい照明に包まれていて、私はまるで海底に住む深海魚のように漂っている気持になっているところへ、その方の自信に満ちた暗示的な言動が、すっかり私の自由意志を剝奪してしまっていたのです。



をし、どのようなことを喋っているのかさえ、しかと意識していなかったのです。

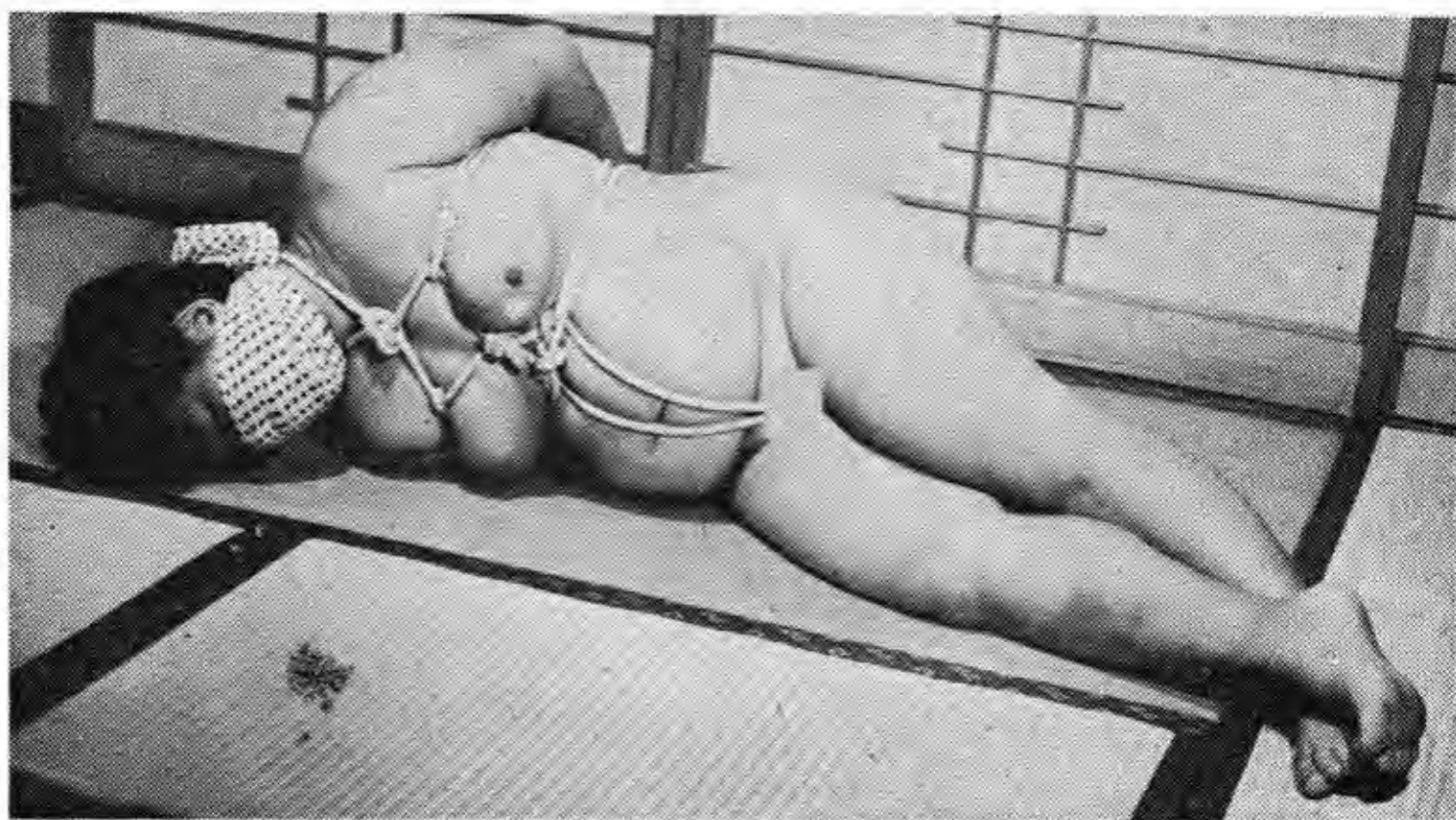
はっと気がついたときには私は裸にむかれて、左右二本の柱に両手を、それぞれひろげて縛られていたのです。なんとという恥かしさでしょうか。私は顔を真赤にして、自分の腕の中に、うずめるように伏せていました。

二十才前後の若々しさを誇る肉体を持ち合わせていない私。それに、この六十キロを越すスタイルの悪さ。私はこんな自分の全裸を晒すことの恥かしさに、耐えられなかったのでございます。両手首を縛られている縄は別に苦痛を感じるほどのことはなかったのですが、両手の自由がきかないということとは、私を精神的に被虐へと追い込んでいました。

そんなポーズのままで恥毛を剃られるのだと宣言されたとき、私の悦楽が始まり、好色の血が思い切り燃えたぎりだしたのです。

私は、唯々諾々と、その方の言われる通り動いていながら、自分が今、どのようなこと

ブーンという軽い電動音とともに自分のすっかり手の届かない場所で行われている剃毛



という微妙な作業のことを思うと、私の被虐の心は爆発点に達しました。快い振動による刺戟ばかりではありませんでした。剃られていたのだ。今、両手の自由を奪われて、無理矢理に、剃られているのだ……と思うだけで、もう、いても立ってもいられない気持が火の玉となって全身を駆けめぐるのでした。

それは、なんという素晴らしい快感だったでしょうか。両手をひろげて縛られるということが、こんなにまで、私を狂わせてしまうほどの快感を味あわせてくれるとは思ってもみませんでした。縛りと剃毛。それが掛け合わされて、私を快感のルツボの中へ追い込んでしまったのです。

私には一体、どのような作業が行われているのか、さっぱりわからないまま、その陰微な刺戟は、ますます強まってきました。私の耳に、間断なく囁かれる、その方の恥かしくも、おぞましい言葉がいやが上にも、私の好色な心に油をそそぎました。

剃るばかりでなく、責め先を変えて、あらぬところへ悪戯をされるたびに、私

のマゾの血は騒ぎに騒ぎました。顔を左右に振って、大きな声を思わず出していました。両手首の縄がちぎれんばかりに、全身をねじって悶えながら汗まみれになっていました。

ああ、なんという悦楽でしょうか。

静子夫人に加えられた淫虐な責苦が、現実、自分の身に思いきり味わうことが出来たのです。責められるということが、こんなにも素晴らしいものだったとは、私は今の今までも知りませんでした。

編集長さま

私は奇譚クラブに載っています小説の通りに責められて、そしてマゾの喜びに身も世もない悦虐に、むせび泣きました。

身体中がしびれ、とろけて、その余りの快さに、何もかもわからなくなっていました。気がついたときには、両手の縄は解かれて、そこに全裸のまま長々と、のびていました。静かに燃え残っていた奥底のマゾの血に火がついたように狂いだし、ほてった熱い裸身が再び燃えだしてきたとき、私は、何ごとが起ったのかと、とまどいました。

私に襲ってきた責苦は、今までに未だ一度も経験したことのないような激しいものでした。身体中の肉という肉が、とろけてしまっ

て、外部へ流れだしてしまいそうな、言うに言われない快感でした。

そのとき、私には、何事が起ったのか、自分でも、さっぱりわからなかったのです。思いつき大きな声を張り上げて、心の中の激情を洩らしつづけました。声を挙げれば挙げるほど、快感は強烈になりました。

私は、こんな素晴らしいセックスなんて今までに味わったことはありません。悲鳴を挙げたくたに疲れきっているのに、攻撃は一向に止まず、長時間にわたって、続きましたので、私の山は幾度となく訪れました。

編集長さま

こんなことを、臆面もなく、お手紙に書く私を、きっと好色な女と、思いでしょう。そして、さげすみのお気持ちを抱かれることと思います。それでも、私は書かないではいけない気持ちに、かられます。

どういうことをされたのか、と問われても私には、どういうことをされたのか……私にもわからないのです。ただ、私の感じましたのは、とろけるような快さだけでした。

それは身体の中心部の奥底から湧きあがってくるもので、決して外部から、かき立てられるものではなかったように思います。

「こんな責めは、まだまだ手始めだよ」

あの方に、そう言われたとき、私は何故かしら、ホッとしていました。この悦楽はこれで終わったのではない。これから、もっともっと素晴らしい快感が自分を待っているのだと思うと、その未知の世界に対して胸がわくわくするような期待を持ちました。

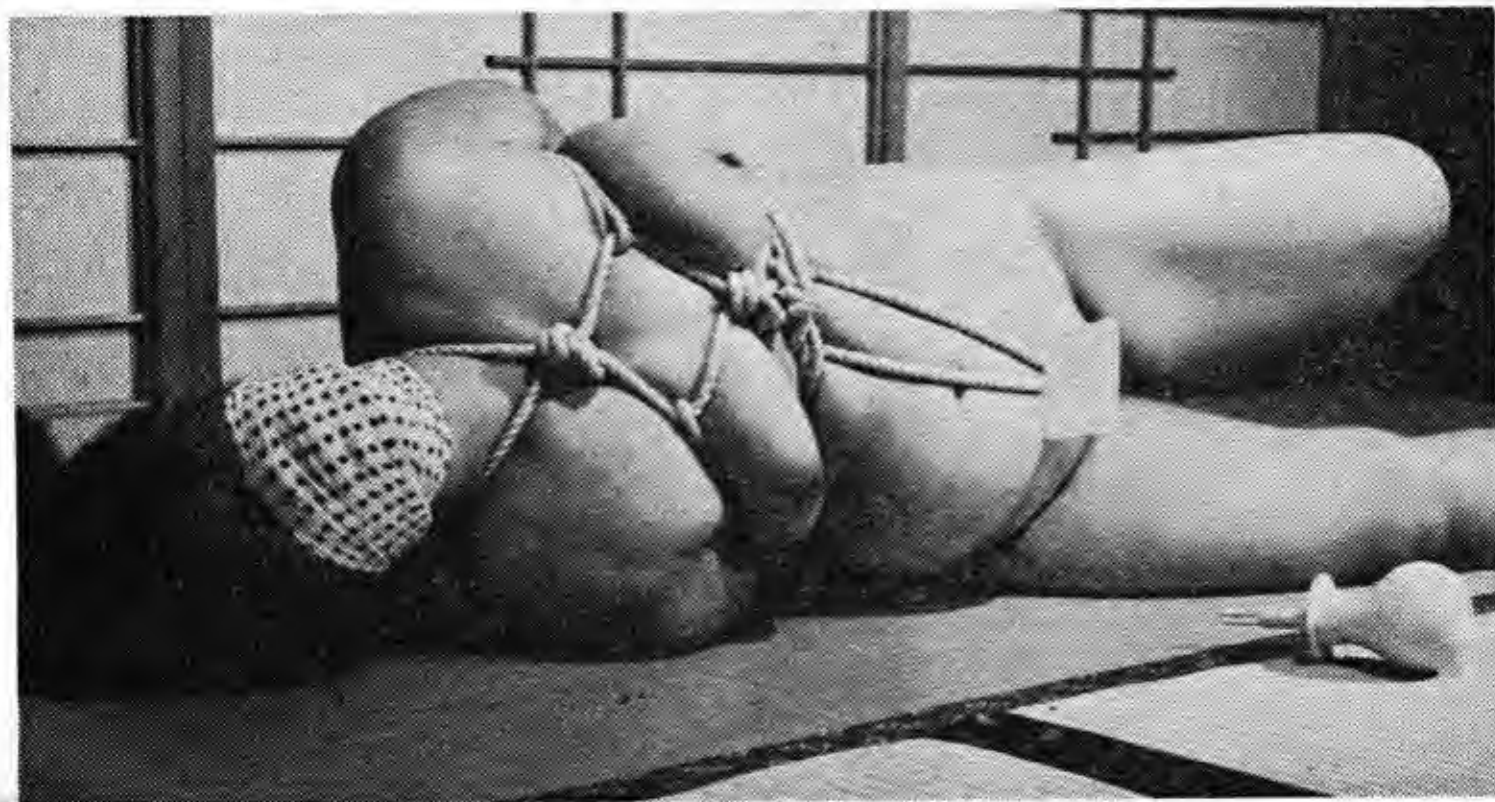
編集長さま

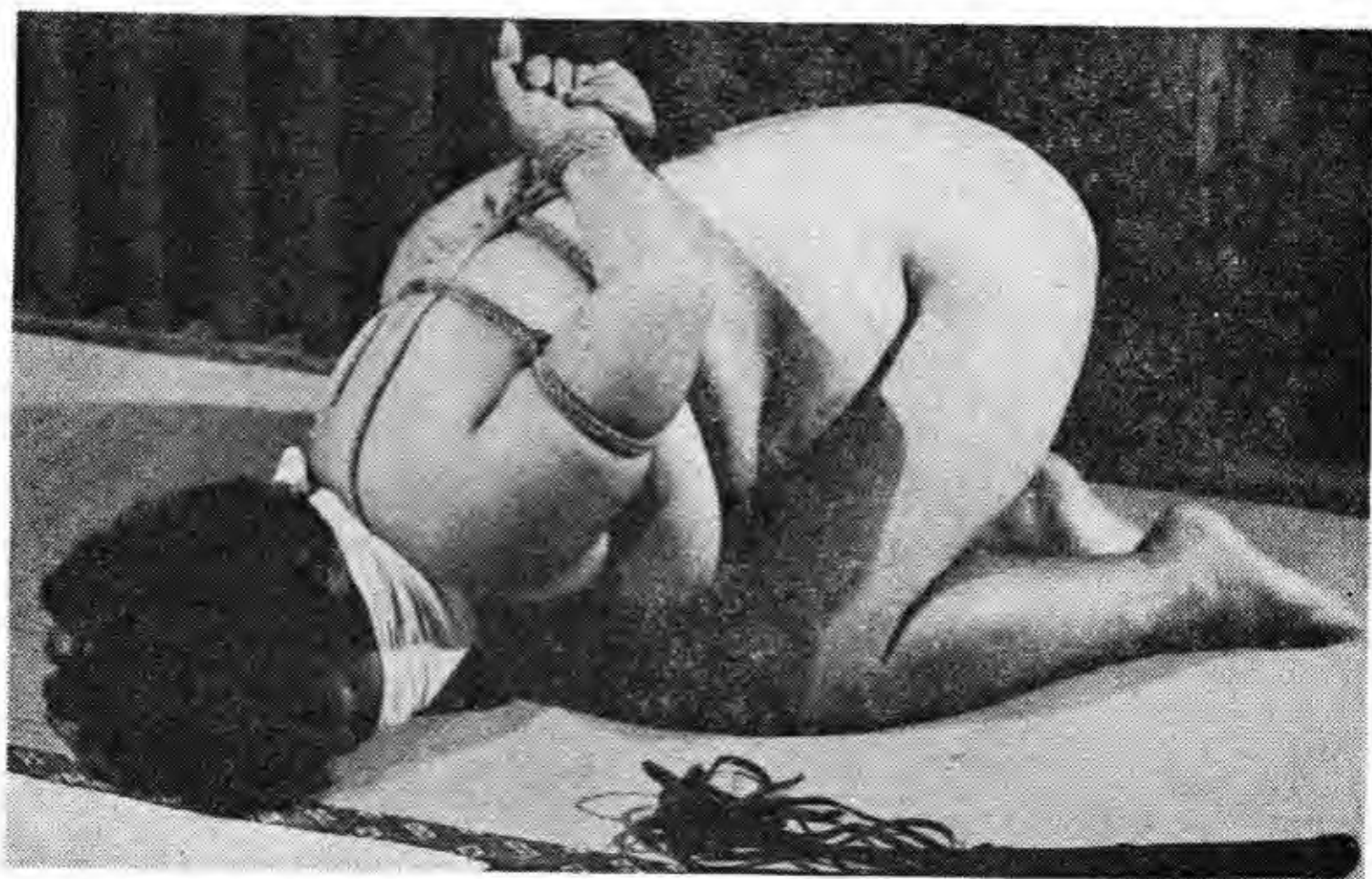
私って、本当に真底から縛られることが大好きな女なのでしょう。

あの方に、柱にぐるぐると縛りつけられたとき、余りの快さに、私の心は宙に舞いあがって、花の咲き乱れる花園をさまよっていました。ああ、なんという気持ちのよい世界なんでしょう。この世の楽園、パラダイスというのは、こんな処を指すのでしょうか。

外部から私の身体に与えられる刺激は、すべて快く感じました。頭はぼうとして、自分には何がなんだか、わかりませんでした。あの方の喋られる言葉は、すべて私には気持ちよく感じられました。いや、あの方が、絶対的な力を持たれる神さまか、仏さまのように感じられたのです。

あの方の言われる通りに身体をさらけだ





すことで、私はしびれるように幸福でした。それは精神的な安心立命であるばかりでなく、肉体的にも凄い快感の連続でした。

失神が、どのくらい続いていたのか、自分ではわかりません。気がついたときは、私はあの方の鋭い眼光に射すくめられており、身動き出来ない呪縛の中に肉体をさらしていました。全身が泡立つような凄い快感が、相変らず私を間断なく襲っていました。

縄、ムチ。そして、あの方の肉体……。

それが、まんじともえとなって私に迫っていました。生き絶えんとしても死なせてくれず、生きのびようとしても、次々と迫ってくる責苦に私は泣きつづけました。

声を出せば出すほど、快感もまた凄いということを、私は初めて知りました。「声を出せ」と命ぜられて、私は正直に従っているうちに、知らず知らず、あの方の術中に、はまってしまつて、それは

それは、今思い出しても顔が真赤になるようなことを口にさせられました。でも、それがまた、私のマゾの心を、いたくかきたてるのでした。

編集長さま

ムチで叩かれる気持って、ほんとうにたまらないものです。痛さは、それほど耐えられないというほどのものでもなく、ムチの痕といつても、肌がほんのりと赤くなる程度で、何らのアトカタも残りません。

それでいて、あのムチでぶたれる、ぶたれているのだという被虐感、たまりません。これは、きっと私がマゾだからでしょうか。

もっともっと、きつく、ぶってほしい。身体中、バラバラになるくらい、ぶって、ぶって、ぶちまくってほしい……という私の気持ちを、先まわりして、あの方は、心憎いまでに私の全身を打ちつづけました。

ムチばかりでなく、あの方の叱咤が、激しい言葉のトゲとなって私の裸身につきさりました。ムチが飛んでこないのに、ムチ以上の言葉のトゲに私は恐れおののき、狂ったように、もがきました。裸身をエビのように曲げ屈め、そして、四肢を力いっぱい、つっぱりました。あけびろげた処へ当たったときのム

チの痺れるような快さは、私を咆哮させました。なんという悦楽でしょうか。

そればかりではありません。あの方は、責苦の間には、それに何倍も値する素晴らしい御馳走を与えて下さったのです。

ムチに喘ぎ、呻き、悶え抜いた末、しばしの休息を頂いたことがあります、そのかりそめの休息すら、私にとっては飽くことのない悦楽のひとつとなったのです。

編集長さま

私は一人寝の淋しさをまぎらわすために、あの俗に春画と呼ぶ絵を幾枚となく集めたことがございます。あの絵に表現されました、まことに見事な格好よさがあの方そのものでした。姿が抜群であるばかりでなく、長さや太さや固さも素晴らしいものでした。

それに、なんといっても、私の一番に心を奪われましたのは、その持続性の長さで、如何に好色な私でも、タイムを要求したくらいです。休憩が休憩にならず私の身体は、とろけてしまいました。

私は、ケモノにしてほしいと思います。ケモノにしてほしいという私の気持

は、動物のような、あのみだらな格好で犯してほしいという潜在的な気持があったからなのと、街頭で犬の交尾を眺めていたことから

そんな処を人に見られたいという、みだらな気持が、あったからなのでしょう。

縛られているうちに、急に、犬のようにして、犯されたいと口走るようになりました。そんな私の願望を素早く見抜かれたあの方は、私に簡単な縛りを施された上犬そっくりの体位にされたのです。

アヌスも責めてほしいと秘かに願っていた私のことですから、そんな格好で、なにもかも、さらけだしているということは、もう、それだけで、たまらない感激でした。

いつの場面でも、カメラが私に向かって狙いをつけていて、時々パツパツと、まぶしい光を放つので、私のマゾの血は、その度に一層、燃えさかりました。こんな羞かしい、みじめな格好が写真に写されるのだ……とただで、かっと全身が熱くなりました。殊にこんなに、お尻を高く高くあげて、すっかり何もかも露出している処に焦点を合わされていまずと、思わず、ぞくぞくとして、悪感のような身ぶるいに呻きました。

「ああ、写されているのだわ」

そのときの気持って本当にたまりませ





ん。

燃えに燃え、身体中が、くたくたに、やわらかくなっている処へ、あの方の肉体が襲ってきます。こんな責苦って、あるでしょうか。

息苦しく、そして、目もくらみました。

身体中の血という血が、絞って絞って、絞りつくされようとしている状態でした。

喘ぎながら許しを乞い、やっこのことで解放されたかと思えますと、白豚と罵られ、それがまた、私のマゾの血を、かき立てるのでした。疲れと馴れとで私が、くたくたになつてのびてしまう筈なのに、あの方は必ずといってよい程、新しい場所に対する新しい責めで私の肉体を飽きさせませんでした。

刺戟の連続だけでしたら、必ず麻痺を起してしまうでしょうに、私は生まれて初めて、パイプの併用という巧妙なテクニッ

クの責めを受けて忽ちのうちに、今まで一度も味わったことのないような天国を、味わいました。

縛られていて両手が使えないということは丁度、動物にされたのと同じでした。

「ケモノにしてほしい……」

はからずも私が口にした、その言葉を、幾度となく繰り返し口にさせられました。そして、いつとはなしに、自分が、すっかりケモノに、なり下っているように錯覚してしまつて、そのように行動してしまつた。

ケモノになつてしまつた以上、あの方の足の裏や、もっともつと汚い所を舐めさせられても汚いと思わなくなりました。いや、汚いと思うどころか美酒のように思えたのです。美酒というよりも、身体中が、ぞくぞくする快感を味わつたのです。

もしも、これが普通の時きだったら、いくらマゾの性向を持っている私でも拒否してしまつたでしょうが、このように徐々に馴らされて仕込まれてしまいますと、あの方の一番汚い個所が、この世で最も美味な処に思えてくるから妙です。それは味というものではありません。法悦とでもいった玄妙不可思議な言うに言われない刺戟でした。

私は、強要されなくても、自分の意志で、むしゃぶりついてゆきました。そこが汚ければ汚いほど、私にはたまらない魅力でした。私は、あの方と下の口でも、上の口でも一体となり、そのお情を最もみじめな状態で、頂戴することに、限らない恍惚境を味わいました。私は幸福感を一杯に感じました。

編集長さま

ながながと、つまらないことばかり、書き並べて、さぞ、好色な私のことを、おさげすみのことと思います。

でも、私は今、剃毛されたあとがチクチクして悩ましく、あの夜のことが恋しくて、どうにもならない気持なのです。せめて、編集長さまに対するお手紙によって、気をまぎらわしておりますので、どうか、今しばらく、御辛抱下さるよう、お願い致します。

編集長さま

私に与えられました御主人様が、このように素晴らしいものだとは、思ってもみませんでした。あの方から受けました責苦の一つ一つが、すべて私にとりましては、生まれて初めて体験する驚異のものばかりでした。三十一才にもなる女盛りの私が、こんなことを申し上げても、きっと本当になさらないとは



存じますが、本当のことでございます。

家庭の主婦なんて、案外、そんな方が多いのではないのでしょうか。つましいことが美德として教え込まれた女性が、恥かしい声で思いきり出せと言われても、急にそんなことは出来ません。でも、このように巧みに仕込まれてしまつては、知らず知らずのうちに、

その術中に、はまり込んでしまうものです。

失神直前のあの気の遠くなるような快さ、羽化登仙の境地は、いついつまでも続いていてほしいと思う反面、次の責めを期待して、つい身体を開いてしまうのです。

「浮気止めのために剃ってやる」と言われたときは、自分が夫にかくれて浮気をしていた



のがばれて、そのためにお仕置されているみたいな気持になってしまっていました。

責めの趣向や縛り方が変わるたび、味わうことの出来る変った味のセックス。それはあらゆる体位を駆使して、マゾ女としての私の限界を試しているようにさえ思えました。

幾度となく次々と訪れる山また山……。そして、めり込むような全身の没落感、虚脱感が縄によって、ようやく支えられています。

縄が私の虚脱感をふり起たせ、更に、責めの巧妙なテクニクが、私の裸身を石段を一段一段、登るように、上へ上へと追いあげてゆきました。もう駄目と思って、必ず、何かの手段が、私をたまらなく気持良くさせ

私の好色な心を捉えて放しませんでした。

パイプまたパイプ。小さなパイプから大きなパイプへ。自分には、どうなっているのか見えないので、さっぱりわかりません。手は縛られていて、自由がききません。チラッと盗み見た水を、たっぷり含んだ大筆や、大小さまざまなクリップ……。

それらの小道具が、一体、どのようにして使われるのか、使われているのか、自分で確かめるわけにはいきません。私にわかることは現実、自分の肉体の感覚として、じかに感ずる凄く快感だけなのです。

縛り方は余り痛くなくて、それでいて全身が、きゅっと締まるような緊縛感は快いもの

でした。縛られるということが、これほどまでに気持よいものだと知りませんでした。そのとき、私の足の裏に、激甚な快感が、つつと走りまわりました。それが、私の足の裏をくすぐっているのだとわかったのは、それから大分、経ってからでした。

なにがなんだかわからないまま、「気持がいい」という言葉を連発していました。声を出すまいと思っても、自然に声が出ました。声を出せば出すほど気分がのってきて、しまいは、自分の声に酔ってしまいました。

縄は痛いけど、辛抱出来ないくらい痛くなくて、こう、なんだか、縛られているということ、思いきり、羞かしい姿態をさらけだせるという楽しみがありました。

タテ縛りというのが、どんな仕掛けになっているのか、私にはわかりませんでした。私にとっては辛い縛りで、畳の上を、ごろごろと転がっている間に、身体のまわりから写真を撮られてしまって、私の裸身のすみずみまで、すっかり記録されてしまいました。

これで、私の身体は、完全にあの方の支配下になってしまったのだわ……という思いが一層、私をマゾ的にしてしまいました。

編集長さま

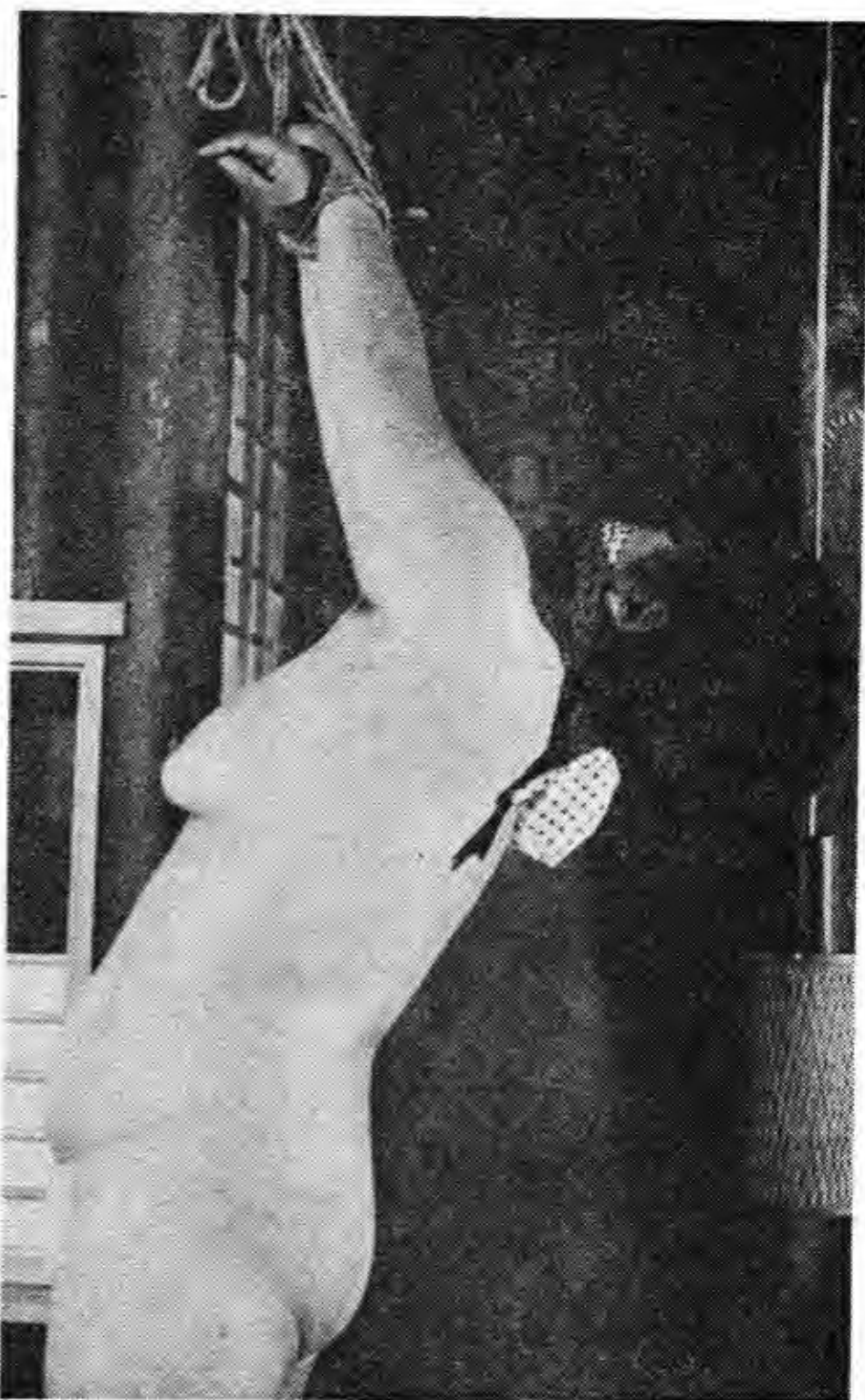
私は、お手紙をお出しして、本当によかったと思っています。そのお蔭で、こんな素晴らしいSMプレイを体験することが出来たんですもの、感謝しておりますわ。

私、未婚の娘時代には、やはり逞しくて乱暴な男性に、ほのかな憧れに似たようなものを抱いていました。具体的に、どのような人って、いうことはなかったのですが、その頃から、私のマゾの性格が、なんとなく芽生えていたのでしょうね。

それから、私って、一度も、そんな経験がないのに、アヌスを責めてほしいと思っていました。それは多分に、奇譚クラブの影響を受けていたかもしれません。或は、そんなところを責めてほしいと頼むわけにもいかず、経験がないということが、一層、私をアヌス責めに憧れさせていたのかもしれません。

私って、好色で欲張りな女だと思います。でも、あの方は、こんな貪欲な女なのにも拘らず、私の希望の先を見越して、次々と責めの手を変えてゆかれました。もう、この方だったら、どんなことをされても、それがみんな凄い快感になってしまうのだという信頼感が、私を暗示にかけていました。

ああ、なんという気持よさでしょうか。



SMプレイのない人生なんて、もう私には考えられません。あの方に責められた、あの素晴らしい責めに魅せられて、身体がうずいてたまりません。剃毛されたあとのチクチクした感触が私をSMプレイの虜にしています。

編集長さま

今更、こんなことを再びお願い出来た義理ではございませんが、どうか私に、もう一度御主人様をお与え下さい。

セックスの奴隷として、私がくたくたになるまで、思い切り責めさいなんで下さる方、私の前に現われて下さい。

いじめて、責めて、叩いて下さい。こんな狂うような私を、どうか、助けて……。

身体中を燃え上らせて、待っています。

乱文ですので、さぞ、お読みづらいこととは思いますが、何卒御判読の上、よろしく、お願い申し上げます。

かしこ

カット・名古屋S生

あるデパート保安係員の生甲斐

女万引の処刑部屋

佐 原 陽 一 郎

(1)

その日も私は、じつと獲物を狙う猟犬のように柱の陰に身をひそめていました。

デパートの中は蛍光灯の白いひかりに満ちあふれ、フロアを行き来する人の流れが、何か私には目的のない深海魚の群れのように見えます。エアコンがよく利いて涼しいほどの店内ですが、私の視線がとらえた黒いスーツの女は、大きな白いハンケチで、さっきからひっきりなしに顔の汗を、ぬぐっています。

二十二、三才ぐらいでしょうか、色白でふっくらした男好きのする顔立ですが、時折、左右へ乱れる視線は男のように鋭く、落着きがありません。

私は、都心から私鉄で三十分ほど入った所にあるデパートの保安係です。デパートといっても、もともと小さな衣料品店だったスーパー・マーケットが、多少業績を伸ばして総合デパートに成り上ったという程度ですからあまり大きな店ではありません。

私のように、妻子に逃げられた上に失業した中年男を、簡単な面接だけで採用したというのも、郊外のこんな店なので、人がなかなか集まらなかったからでしょう。それでも四

十もなかばを過ぎて髪がうすくなった男の職場といえば、雑役夫が駐車場の整理か万引の監視ぐらいなものです。

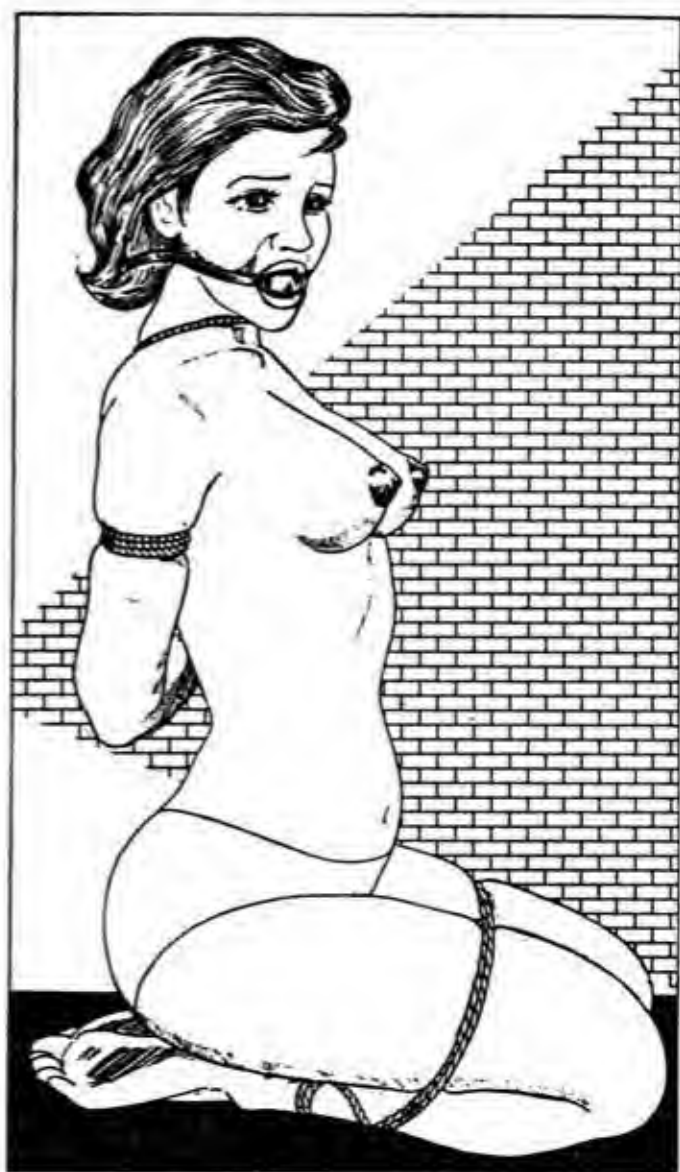
囚人服のようなダブダブのスポンをはかされ、二まわりも年が違ふ大学出の係長にアゴで指図されながら、私の新しい勤めが始まりました。私は今までに転々と職を変えました。景気のいい時期には、広告会社をつくて数十人の部下を動かしていたこともあるのですから、新しいこの職場で、客が汚したトイレなどを洗わせられる時などは本当に、なさけなくて涙が出ました。

若い係長は、タイルの上に四つん這いになって、便器にこびり付いた汚物をタワシで洗っている私を、何の理由もなく小突いたりするのです。

こんな係長が居るからかどうかは知りませんが、私と同じように、何かで失敗して転職してきた同僚たちは、みな一週間たらずでやめてゆき、いつの間にか私一人だけが残っていたという状態になってしまいました。

そのお蔭といってはヘンですが、私は用務員兼保安係を命じられ、万引犯人とかかわり合うようになりました。

万引といっても、衣料品を主体としたデパ



ートですから、犯人はほとんど女性です。万引の被害は売上高の二パーセントといわれています。薄利多売のスーパー式デパートは、激烈な販売競争で純益率は下がる一方ですから女の万引といっても馬鹿にはできません。大手のデパートでは万引対策に専門のガードマンを雇うこともできますが、私のデパートは、その余裕もなく、私に万引被害の全責任を押しつけてきたのです。

私は、そのやり方に腹が立ち、デパートをやめて他の働き口を見つけようかと幾度も迷ったこともありましたが、結局は現在の仕事をつづけることにしました。その理由は、万

を目覚めさせたのです。

私は地下に三坪ほどの小部屋をもらい、万引女の取調室をつくりました。裸電灯に事務机がぼつんとあるだけの殺風景な部屋ですが私にとっては自分一人の王城です。学歴もなく金もなく、仕事に恵まれなかったダメな男が、初めて相手に対し主導権をとれる場所、それが万引女の（処刑部屋）でした。

私は、皮ケースのついた真物ほんものと全く同じような手錠を、アメ屋横丁で見つけました。重さといい、光沢といい、手首にはめた時の手応え等も、私が長い間、夢に描いていた手錠と同じでした。おまけに警視庁のマークのよ

引女を捕えることに異常な楽しみを感じてきたからです。現行犯として見つかり恨めしそうに見上げる女の目付や、逃げようとしてもがく女の腕をねじ上げて連行するときの柔らかな肌の感触が、生活に追われてしばらく眠っていた私の肉欲

うなもので、念入りに彫ってあるのです。

私は、安アパートの暗い電灯の下で、毎晩おそくまで手錠をみがきました。油雑巾で丹念に手入をし、一点の曇もない程ピカピカに光った手錠を眺めながら一人で飲むコップ酒に、私は正体もなく酔い痴れるのでした。私を裏切った数多い女の顔が私の前に現われては消えて行き、最後に若い男のもとへ去った妻の能面のように、のっぺりした顔が出ました。私は妻にとびかかり、ねじ上げた手首に手錠を叩きつけました。妻の恐ろしい悲鳴を聞いたと思ったら、すぐ悪夢から目が覚めました。

私は、その夜から人が変わったように、熱心な保安係になりました。刑事さんの真似をして捕縄も自分でつくりました。手錠をはめた犯人の腰に麻の捕縄を一巻きして引廻すのです。万引犯はセーラー服の女学生から六十過ぎの婆さんまでいますが、いちばん従順で責めやすいのは二十二、三才の若妻でした。

できごころで万引をしてしまったが、そんなに世間ずれもしていないというような人妻を捕えると、私は地下の取調室で、ゆっくりと獲物をいたぶるように責め上げるのです。私が、ぴったりマークしているとも知らず

女は階段を利用して二階から三階へと昇っていきます。三階には婦人肌着の売場があり、女万引が最も活躍するフロアです。

階段を昇る女のミニスカートの包まれた腰が、なまめかしく揺れ、むっちりした太股にまつわるシュミーズの白いレースがチラチラのぞいています。女というものは何という罪つくりな服装をするのでしょうか。男にこれでもか、これでもかと見せつけて性犯罪を犯させるように挑発しているようなものです。

女は大きな紙袋を持っていました。その底に穴を明けておき、手を差し入れて品物を万引するのは最も初歩の手口です。

女が急ぎ足になると黒い髪が揺れ、肉厚のミミタフ^{ミミタフ}耳朶が後からも見えます。それが心持ちピンク色に染まって、犯行を前にして緊張している様子が手に取るように感じられます。

女の視線が一つの売場に止まりました。丁度レジスターの陰の、店員からは死角になるコーナーに、安物の下着が乱雑に積み重なっており、女は左右にちらっと目を走らすと、紙袋をその上にのせ、何気ない風を装ってブラジャーを底の穴から袋の中に引き入れてしまいました。万引は初犯の女ほど大たんに手早くやります。前科のある女は慎重に下見を

して、なかなか手を出さないものです。

成功に気をよくしたらしい女は、売場を移動してシュミーズを狙いました。店員は三人いましたが、カウンターの背に私語を交わして、万引女の存在など、まったく気づいてはいません。

女の白い腕が紙袋^{ペーパーバック}の中で微妙に動いているらしく、シュミーズが、ずるずると引き込まれてゆきます。

もう完全に現行犯ですから、女を捕えることはできます。しかし私は、じっと気を落着けて、女が階段を降りるまで待ちました。このデパートはセルフセレクション^{セルフセレクション}といって売場ごとにレジスターが置いてあり、勘定場まで客が品物を持ってきて精算することになっています。ですから頭のいい万引女は「これからお金を支払うところなのよ」などといって追求を逃れる術を心得ています。

まして現在では人権尊重の時代ですから、大勢の客の面前で犯人を相手に、テレビドラマのように大向うをうならせる捕物は、まず不可能といってよいのです。

私は万引女を泳がせ、客のいない階段の踊り場で引つとらえることにしています。

腰をくねらせて階段を小走りに降りる女の

背後に迫った私は肩を抱くようにしながら、「ちょっと事務所まできてもらおう。身に覚えはあるはずだ」

とドスの利いた低い声で女の耳元に、まず一発かましてみます。ほとんどの女はこれで全身の力が抜け、私の腕に体をもたれさせてしまいます。その女も顔を紅潮させ、観念したように、うなだれてしまいました。

客がいないのを幸いに、両手首にガチャリと手錠をはめてやりました。女は一瞬びっくりと全身をふるわせましたが、両手を拘束したのが手錠だとわかれると、見る見るうちに目がうるんで、すすり泣きをはじめました。

「泣いたって罪は軽くないぞ」

人目を避けて手錠にハンカチを掛け、女のスカートに手を回して腰の感触を楽しみながら私は、手に入れた獲物をどういたぶろうかと異常な興奮に打ちふるえ、全身が熱く、ほてってくるのでした。

(2)

そこは文字通り、私の権力が振るえる『処刑の部屋』でした。

デパート全体の冷暖房を管理する大きな機械室の真下にあたり、時折、にぶいモーター

の響きが天井に、かすかな震動を伝えてきます。曲がりくねった得体の知れない数十本のパイプが天井を這って、薄汚れたペンキが壁に、こびり付いています。どんなに泣こうがわめこうが、この地下室からは、ぜったいに外部には聞えません。

万引女を処刑するためのロープや鎖は十分に用意されています。そして、恥辱にのた打つ女体を映し出す等身大の鏡も……。

処刑部屋への階段を降りれば、もう誰にも気がねは、いりません。制服の腰に束ねた捕縄で女の腰を一巻きし、手錠の鎖と連結して



イメージギャラリー

『メリーゴーランド』

岡 たかし

手早く「囚女引廻し」のスタイルをつくり上げました。

縄尻を持って思い切り、女の豊満なヒップを蹴り上げてやります。女は、ちいさな言葉にならない叫びを上げ、スカートから脚を惜しげもなく露出して踏み止まろうとしますが床に突き倒されてしまいます。

私は、床に横たわった女の房々した黒髪を私の汗臭い足で踏みにじります。時には泥がこびり付いた足の指を無理に口をあけさせて押し込んでやります。

ルージュを濃く塗った女の唇が足指をなめつくすまで、私は縄尻を、ぴんと張って、決して女を許しません。

その日の万引女は色白で、全体に豊満な肉体といった感じで、何より私を有頂天にさせたのは、汗ばんだ肌から発する何ともいえない甘ずっぱい体臭があることでした。

体臭にも、いろいろあって、ワキガなどは興ざめですが、女体から立ちのぼるように、何となく匂ってくる甘い香りは、とくに私の感覚を刺激するものです。

私は女の身体を反転させながら引き起して手錠のまま天井のパイプから下ったロープで両手吊りにして、一寸きざみに吊り上げてゆ

くと、女はハイヒールで、つま先立ちをしな
がら、身をよじって耐えようとします。

ミニスカートというのは厄介なもので、両
手を吊られると自然に、たくし上って、太股
までも、あらわになってしまします。

女のスカートをまくり上げるのは、たやす
いことですが、こうして見るともなく見え
てくるパンティを、ゆっくり床に腰を下ろし
て鑑賞するのも、またよいものです。

それに、女はパンティストッキングではな
く、太腿までしかない黒いストッキングをは
いていました。今どき珍しい、この靴下の正
確な名称は、何というのでしょうか？

最近、西武百貨店が提携した米シアーズロ
ーバック社の通信販売用英文カタログを見る
と、THI^{サイ}・TOP^{ストッキング}、STOCKINGと写
真入りで出ていますから、これが正しいのか
も知れません。THI^{サイ}は太腿ですから、感じ
は出ています。

とにかく黒いストッキングにピンク色のガ
ーター（靴下留）という取り合わせは、何と
もいえない色気があります。黒とピンク、そ
して、柔らかな白い太腿へと続く色彩のコン
トラストは、すばらしいものです。ずり落ち
るストッキングをゴムの張力で押さえるとい

う原始的なガーターも、今ではもう、数少な
くなっています。

しかし万引女にとって、手軽に物を隠すと
いう機能からいったら、これに優るものはあ
りません。万引した指輪などをパンストに
隠すには手間がかかりますが、靴下留になら
スカートを、ちょっとまくりさえすれば、す
ぐに、はさめます。

万引女の中には、靴下留に小さなポケット
をつくっておく常習犯もいます。私も十年ほ
ど前でしたか、ある場末の洋品店で、靴下留
にポケットが付いていて、千円札などを折り
たたんで入れられるようになっていたのを見
たことがあります。

私が捕えた万引女の靴下留も、異様にふく
らんでいました。たしかめると、真新しい口
紅が一本、巧みに隠されていました。

下着を万引する前に、他の売場で万引した
のに違いありません。

「さあ、前科を、みんな白状するんだ」

私はスカートと、その裾にまつわりつく白
いシュミーズのレースを高々とまくり上げな
がら、万引女の厳重な取調べを開始します。

女の汗と涙で、せっかくの化粧がくずれて
いますが、私は委細かまわずパンティをずり

下ろし、太腿に細引を掛けて上に引っ張り、
首縄と連結させて開股の姿勢をとらせました。

「ああ、いやっ！ 許して……。お願いで
す。やめて下さい」

女の真正面の壁には等身大の鏡が貼りつけ
てありますから、自分の全身が、ともに目
に入ります。両手を吊られて太腿を、いっば
いに開いた自分の惨めな姿、羞恥にもだえる
肢体の様子を、いやでも見なければならぬ
女は、もはや人格を剝奪された汚辱のアニマ
ルです。

十分に成熟しきった女、それもまだ子ども
を生んだことのない人妻を責め上げるとき、
私は日頃、人にさげすまれ、馬鹿にされた心
のやり場のない、うっ積を、伸びやかな白い
肢体と豊かな胸の隆起に爆発させ、ズボンか
ら引き抜いた皮ベルトで、女の悲鳴がかすれ
て聞こえなくなるまで打ちすえるのでした。

(3)

私たちの陰語で、女の万引犯を赤マンとい
います。別にこれといった理由はありません
が、男なら黒マン、女なら赤マンという単純
な命名です。

今日、私の手に入った赤マンは、京子とい

って、二十三才の若妻です。夫は三十近い公務員で出張が多いといひます。本当に私の欲望を満足させるには、もってこいの女です。

私は女の右手だけを自由にしてやり、マジックインキを持たせて、画用紙ほどの大きさの紙片に文字を書かせます。

△私は赤マンの京子です。私を縛って、あなたの好きなように責めて下さい▽

△女万引犯人、京子を奴隷として存分に恥かしめて下さい▽

△私を汚い言葉で恥かしめ、股間縛りのままで店内を引き廻して下さい▽

まだまだ色々なパターンがありますが、要するに、この紙片をセロテープで赤マンの身体に張り付けて晒しものにするのです。

女もすこし慣れてくると、口に出すのものはかるような肉体の名称も、すらすらと書くようになり、さらには自分で直接、肌に書いたりもします。

本当に女というものは、わからないものです。私は万引女に対する仕置として、左の太股に赤いマジックインキで五センチ幅ぐらいの輪を書いてやります。前科一犯は一本、二犯は二本というようにしてやったら、いい見せしめになります。家に帰ってから、なかなか

か消えないマジックの色を、ごしごし洗っている姿を想像してみして下さい。赤マンには、ふさわしいお仕置です。

私は、ボーナスでカラー写真も写るポラロイドカメラを買いました。

黒いストッキング、ピンクのガーター、白いパンティのコントラストは、カラーでなくては生きてきません。

キューブ型のフラッシュが、縛り上げた女万引の裸体にきらめき、すっかり観念した獲物は私が命じるままのポーズをとります。

カメラを使うようになってから余計に感じるようになったのは、同じ縛り方で同じポーズをとらしても、女によってそれぞれ体の表情が違うものだということです。

印画紙を並べて見ると、肉付きによる体の線が主になって、やはり違うんだなと思える程度になってしまふのですが、シャッターを切るまでの、「胸をそらせろ」「もっと足を挙げろ」「顔をこちらに向ける」などと命じると、ビクッと慄える女、すぐに命令どおりにする女、許しを哀願する女等々で、結局は私の思いどおりのポーズにさせますが、そこに至るまでの裸身全体で見せる羞恥の表情は、ちょっと説明出来ないほど微妙な個人

差があつて、私を楽しませてくれるのです。

出来上った羞恥の印画紙を女の素肌に次々と貼りつけてやるときの快感は、何ともいえません。女は、はじめのうちこそ自分の姿体に目をそむけますが、時がたつにつれ、笑いながら自分のポーズに新しいアイデアを考えだしたりするようになるのです。

現在、この京子を含めて、私は六人の赤マンを飼育しています。いずれも二十二、三才までの若い女で、中には女子大生もいます。私の呼び出しに応じなければ、ポラロイド写真を公表するといつてあるので、電話一本で、どこのホテルへでも、やってきます。

勿論、どの女も私に呼び出されるといふことは、裸にされて縛られ、いろいろな責めかたでいたぶられることだと承知の上でやってくるのですから、マゾ的な気持であることは違いなく、従つて、最初の万引女逮捕の時の新鮮な感激？を味わえないのは事実です。

私は今日も新しい獲物を求め、陳列台の陰で、じっと息を、ころしています。

私の生きがいは、もうこれ以外に何も残ってはいないのでから……。

連 載
創 作

S

M

企

業

《第四話》

— 本番にそなえて —

カット 岩 波 大 介

秋

津 新 次 郎



地下室の奴隷部屋では、三匹のメス奴隷に対して厳しい調教が行なわれていた。洋子には一号、美紀には二号、珠子には三号と、それぞれの背中と胸に、マジックインクで奴隷番号が書きこまれていた。一号と三号は、いずれも薄いパンティ一枚の姿で、一号は首輪に後ろ手錠の高手づりで、三号はロープで高手小手に股間縄、二号

は革のパンティに革の拘束衣で後ろ手姿に正座していた。

傍には、脱ぎ棄てられた三匹のメス奴隷が、着ていた衣裳が散乱し、奴隷たちは、あと数日に控えた本番にそなえて、衣裳を脱ぐところからはじまり、身体を自由を奪われるまでのパターンが、もう何度か繰り返されていたのだ。

「よし、立て！」

仁王立ちになった三人の男の中からピノキオが命じた。今日は三人とも黒い三角頭巾でスッポリと顔を覆っている。

「よし、解いてやれ」

修一の声にピノキオとボロ武は前に進むと三匹のいましめを解きはじめた。

「二号と三号は概ね、よろしい。二号！ お前は、やり直しだ」

（だって、そんなの無理だわ。私は貴方に、してほしいのよ）と口に出して言えないのが辛い美紀である。この部屋に入ってから二日目である美紀は、まだ一度も修一の手に触れられていなかった。

「二号！ なにを、もたもたしてやがる、早くしないか！」

激しいピノキオの声に、あわてて散らばった衣裳を身につける美

紀である。

一号と三号の視線が冷やかに美紀に突きささった。いつ話合ったのか、一号と三号は美紀の正体を見破っていたようである。自分達を罠にかけて、この地獄に突きおとした張本人が、ママの美紀であることを知った時から、いつの日かは美紀に対する復讐をなしとげる約束までされていたのだ。

部屋に仕掛けられたマイクロホンが、ただのおどしではなく、わずかな私語に対してすらも激しい懲罰となつて、はね返ってくる。しかし男達が、この部屋を出てから、ほんの暫くの間だけ、マイクロホンは、その用をなさなくなる時があるのだ。そのわずかな間隙をぬって洋子と珠子は話合つた。あとは両手が自由にされている間を利用して、それぞれの身体に指で字を書いては、意志の疎通をはかったのだ。

だがその結果、どういう事が起るかを修一は想像していたのだ。そこまで見通していたからこそ、型通り私語は禁じておいたもの。あとは見て見ぬふりをしておいたのだ。この部屋に美紀を追い立てて入った時、一号と三号の、美紀に対する態度や目付きが、それを証明していた。無論、美紀も、うすうす、それは察していた。だが一号と三号の自分に対する憎悪が、それほど激しいものであると考へてもいい美紀である。

「よし、二号！ 脱げ！」

折角、身につけた衣裳を、また一枚一枚自分の手で取り去らねばならない。美紀は、まだあと一日、残っている調教の過程を思つてうんざりした。目ざとく、その表情をくみ取つたピノキオは、激しい怒声をとばした。

「二号！ なんだ、その面はー」

ぞっとする声色である。修一の前で、姐さん姐さんと卑屈なほどへりくだつていた態度は、その姿からは微塵も感じられない。

明日一日、修一と、ボロ武は用事があるので、この場には、いない。この残忍な男一人の調教に委ねられるのだ。美紀は救いを求めるように修一の方を見つめた。三人の男の黒い三角頭巾は、かろうじて身体つきや声から区別が出来るだけで、修一の表情は、よみとれなかった。

（ねえ、あなた。許して頂だい。もういや、こんな男に好き放題にされるなんて……）

思わず声に出して修一に救いを求めたい衝動をこらえたのは、修一が今度の仕事に、どれだけ、心血を注いでいるか知っているからだ。美紀は、どうしても言葉が声にならなかった。もし今度のこの計画が、自分の手前勝手から壊れたときに、修一のとる態度が想像できるだけに、恐ろしかったのである。

『お前は遊びの延長のつもりだろうが、俺は本気なんだぞ！ いやならいやだと今のうちに言つてくれ』と念を押されている。もしここで変な事を口走ったりしたら、修一はもう二度と自分のもとへ帰ってこないだろう。その時のことを思うと、もう地獄の底まで一緒にでも、ついて行きたくなってくるのだった。自分のこんな思ひを、修一は今どんな気持ちで見ているのかと考えると、思わず涙があふれてくる美紀である。

ピノキオの残酷な手は、革パンティ一枚の美紀の裸身を、革の拘束衣で、ひしひしと締め上げていった。本番をあと五日後に控えて激しい鞭打ちは身体を醗くするからと修一が禁じている。この少し

の容赦もないピノキオの無情さは、鞭打ちを禁じられている腹いせなのだろう。奴隷に対する緊縛は必要以上、厳しかった。

ブラジャーとは名前のみで、革製のそれは、乳房がとび出すように、くり抜かれていて、人一倍、豊満な乳房をほこっていた美紀は却ってそれが、あだとなって苦しかった。後ろ手は革手錠に、がちりと縛られている。首には革製の首輪がはまり、革手錠についた短い鎖と連結されるように出来ている。

ピノキオは美紀を俯伏せにすると、後ろ手を高く引きしぼり、首輪に鎖をつなぐため、力を入れた。美紀は苦痛の声をもらした。

「うむ、ぐぐっ」

ピノキオは、その恰好が修一とボロ武の視角に入ったのを知ると膝を美紀の両足に割り込ませて革パンティをつき上げた。

一見、何の変哲もない革パンティのようだが、大人のオモチャ屋で売っているSMプレイ用のパンティである。それなりに細工が施してあり、穿いただけで責め効果を現す仕掛けになっているのだ。ピノキオはその膝を意地悪く、ぐりぐりと、こねまわすのである。

「アアッ、ヒッ！」

もともとマゾ性の強い美紀であった。心ではピノキオの拘束衣を憎悪しながら、羞恥と苦痛の入りまじった感情の中で、我知らず艶めかしい声をあげてしまっていた。

☆

☆

翌日である。修一とボロ武は一日中、車で走り廻った。SM雑誌に出した広告によって連絡のあった相手で、住所が書いてあった者の様子を調べたのである。現在の職業や、その収入。その人柄や家庭状況。また近所の評判。それに当日、会場に使用する場所の選定

など、漸くすべての段取りが終了できた時は、もう、夜の十時を、かなりまわっていた。

人には、それぞれ使い方が あるものだが、それにしてもボロ武はよくやったわい、と修一は内心で感心した。元々テキ屋上りで弁のたつ事は知っていたが、興信所の職員になりすましたり、一流キャバレーを閉店後から翌日の昼まで借りる段取りを鮮やかにやってのけたのだ。

「兄貴、いよいよですね」

「うむ、ご苦労だったな。だが今回ののは、ほんのテストケースだ。まだ素姓の解っていないマニヤの中から、ものになりそうなカモをより出す、こいつが一番、大仕事になるぞ。このテストがうまく行ったら今度は、もっと大々的に広告をするんだ。それがうまくいって、今度はM男の募集だ。あと半年か、いや一年は時間をかけるぞ。そのつもりで、いてくれ」

「へえ。なあに大丈夫ですよ、俺は……。しかし兄貴。それまで女の方が、もちますかねえ。何しろピノキオのやつの手荒さは……」

「む、それなんだが、どうもあの野郎にも困ったもんだ。しかし調教師としちゃ捨てたもんじゃねえ。お前や俺にゃあ、ちょっと出来ねえ事もあるあな。その点、奴なら……」

「ええ、そりゃ俺だってわかってますよ。だけど、姐さん大丈夫ですかね。あつしが覆面をかぶらせて下さいって言ったのは、どうも素面じゃ見ちゃいられなかったもんで」

「うっふっふう。なるほど、おめえも案外、気の弱いところがあるんだな」

「違うんですよ。ただ俺は、ピノキオの野郎みたいに変態じゃねえ

「だけですよ！」

「なにいっ！ ほう、変態か」

「そうですよ。あの野郎は変態ですよ」

修一の目がキラリと光った。

「おい、武。それじゃきくけどな、変態ってのは、どういうことなんだ？」

「えっ？」

急に厳しくなった兄貴の目付きに、うろたえたボロ武だった。改めて変態とは、どういうことだと聞かれても返事は出来ない。

「そりゃ、そのう……変態てのは……つまり、まともじゃないってことですよ」

「ふっふっふ、考えやがったな。まともじゃないことか。それじゃお前のいう、まともてのは、どういう事なんだ」

「どうも弱っちゃうなあ。勘弁して下さいよ兄貴。俺は兄貴みたい在大学出のインテリじゃねえですよ」

「馬鹿野郎、俺はそんな難かしい事を聞いてやしねえ。ノーマルとアブノーマル、つまり、おめえの言う変態と、まともとは、どこで区別をしているんだって事なんだよ」

「どうも、よわいなあ。俺は理屈は、からきし、だめなんですよ。そのう……つまり早く言えばですね……」

「うむ、早く言えば？ どうしたい、早く言えばよ」

「どうも、やあだな兄貴。どう言えば、いいのかな」

「もういい武！ いいか、お前は太森組じゃ、そう頭の悪い方じゃなかったんだ。俺がこの仕事にお前を相棒に選んだのは、それなりに考えがあっての事なんだぜ。ま、そのことは、いずれ話すとして

今、お前が何の気なしに言ったこと、変態ってのはどういうことかという事、こいつをよく頭の中に叩き込んでおく必要があるんだ。人は簡単に、あいつは変態だ！ なんて言うが、じゃ変態ってどういうことだ、とひらき直られると、どうにもうまく説明できやしねえ」

「へえ、しかし……」

「まあ黙って聞け。こいつは、今度の仕事にとって一番、大事なことなんだ。世の中には男と女がいる。大体、普通は男が女に、女は男に興味を持つもんだ。ところがどういう訳か、男のくせに女にゃ全く興味を感じない奴がいる。つまりホモという奴だ。またその反対でレズって奴もある」

「知ってますよ、それぐらいの事なら……」

「馬鹿野郎、黙って聞け。いいか、じゃあ、どうしてこのホモが変態なんだ。世の中には、いろんな人間が住んでるんだ。たまたま男で男に興味を持つ人間が、いたからといって、その人間が、どうして変態呼ばわりされなきゃあならねえかってことなんだ。お前は、どう思う」

「それはですね、つまり、そんな奴は、そんなにたくさん、いやしねえでしょう。大抵は……」

「ほう、つまり数でいくわけだな。それじゃあ聞くけど、昔の坊主だな、ちよん留時代の……。その時分の坊主は、絶対に女を抱いちゃあいけねえって定められていた。つまりお前えの言う、まともじゃねえ状態で一生を送らなきゃならなかったんだぞ。こいつは変態か？」

「そりゃ違いますよ。俺だって映画を見て知ってますが、その坊主

は心から、そう思ってるんじゃないんでしょ。自分じゃあ女を抱きたくってしょうがねえのを辛抱してるんですよ。だから違いますよ」

「いいか、その時分にゃあな、お寺には寺小姓という奴がいたんだよ！」

「あっ！ そうか……知ってますよ。そうか……」

「何を感じてやがる。わかったか！ だからって、あの時代の坊主が、世間の人から変態呼ばわりされたか？ いや坊主だけじゃあねえんだぞ。織田信長は小姓の森蘭丸とホモの関係だったって話は歴史上、定説のようになってるんだ」

「へえっ？ さすがは組切つてのインテリと言われた兄貴だ。恐れ入りやした」

「バカ野郎。大事な話だ、まじめに聞け。お前、女のパンティやシミーズを見て、どう思う？」

「えっ、女のパンティ？」

「そうだ。よく物干などに派手な色のやつが、ぶらさがっているのを見た事があるだろう」

「ああ、あれですか。そうですね、別に……」

「本当か？ 嘘だろう。本当に何とも感じねえか。俺だったら、おう、艶かしいのが、ぶらさがってやがる。どんな女が、あれをはいてやがるんだろうな？ ぐらいの事は思うがな。お前は何とも感じねえのか。とすると、お前少し、おかしいぞ」

「ああ、そんなことですか。そりゃ俺だって兄貴と同じですよ」

「そうだろ。艶かしい女の下着を見て、何も感じない奴が、いてみる。そいつの方が、おかしいんだ。ところがだ、そのパンティやシ

ミーズを見ると、ムラムラとして、どうしても欲しくなる奴がときどき、いやがるんだな、パンティ泥棒って奴だ。つまり我々と少し違うところは、その欲望が、ちよいとばかり強すぎて、自分で自分を抑えられない。これが、よく世間で言われる変態って奴なんだ。おめえだって覚えがあるだろう。いやだいやだって、ただこねる女を、こました事は一ぺんもねえ、とは言わせねえぞ」

「へえ、そりゃあ」

「そういうもんだ、どだい男ってやつは。さあ、どうぞって思い切りオッピロげられてみる、却って、げんなりしちまあ」

「そうですね。妙なもんですね。いやだいやだって言いやがるやつを無理に押え込んでみりゃ、いやどころか、こっちが面喰うくらい、しがみついてくる女が、いやしたからね」

さすがに修一が目をつけた男だけあった。大して風采の上らないボロ武だったが、修一の言わんとするところを、すこしは理解出来たようだった。

「兄貴。そう考えると、こいつは人助けの仕事ってことですね」
まさか今度の仕事が入り助けたとも考えていない修一は、ボロ武の単純な結論に思わず苦笑したものである。

☆

☆

「調教、ありがとうございました」

「うむ、よし。一号、忘れるな」

「はい、ご主人様」

全裸のピノキオは、さも満足げに、うなずいた。

鬼の居ぬ間の洗濯とばかり、ボロ武と兄貴が、いなくなったのを幸いに、さて、どう三匹の牝奴隷を、いたぶってやろうかと舌舐り

をした。ピノキオであった。高手小手の不自由な姿で、ピノキオに懸命な奉仕を続けさせられた一号は、むっと鼻をつく、男性の臭いにむせかえりながら、うっかり、ご気嫌でも損なおうものなら、またどんな、いたぶりが待ち受けているかと思えば、必死にならざるを得なかった。

「二号！ 立て。脱げ！」

激しいピノキオの叱咤に、修一のいなくなったあとの覚悟は出来ていると言っても、美紀は思わず胸振いを感じた。

「早く脱げ！」

ブラウスを脱ぎ、スカートを下ろす。それも無造作に脱ぎ捨てるのではなく、一枚々々まるで生娘の如き恥じらいの姿態を演じながら脱がなければならぬ。漸く最後のパンティに手がかかった。薄いパンティは、もう何も身につけていないのも同然であったが、それでも全裸でいるよりは、ましだった。

「どうした、早くせんか」

ピノキオの鞭がピシリと音を立てて床を叩く。

その音におびえた美紀の手が、するするとパンティを、ずり下げた。反射的に前かがみになり、両手が前身を覆う。

「ばか！ 背中を伸ばせ。両足を開いて手は後ろに組め」

「ああっ」

（いいか。俺がいなくても、ピノキオに命じられた通りに、するんだぞ！ もし、すこしでも逆らってみろ。その時は、ピノキオが許しても、この俺が承知しねえからな！）

修一に因果を含められているのだ。美紀は、命じられる声を修一の声だと思ふことで、それに堪えた。

「ようし。だいぶ、よく言うことを、聞くようになったな。革パンティを持って、俺の前に立て！」

美紀の口から思わず拒否の言葉が出た。

「いや！ ねえ、もう許して」

「なにいつ！ そうか、そんなに電気鞭が、ほしいのか！」

ピノキオは、そのチャンスを待っていたのだ。言葉より早く、電気鞭が三号の裸身に、のばされた。それもこともあるうに、もっとも敏感な急所へ……。

「ヒエッ！ グッ！ やめて、ああ……」

美紀は、その鞭の主が、もうピノキオである事すら忘れてしまっていた。気がつくとも修一に哀願をくり返してきたいつものプレーの癖が出てピノキオの足にすがりついて許しを乞うていたのである。

「へっへっへ、どうだ。もう一度、試してやろうか」

すがりついてきた美紀の足をふりほどくと、ピノキオは無慈悲にも、また鞭をのばした。

「ヒエッ！」

思わず叫び声をあげた美紀である。

「へっへっへ、今のは電気なしだ。今度は電気を入れて……」

「ああっ、お許し下さい。わるうございました。お許し下さい」

もう恥も外聞もなかった。今にも、あの恐ろしい電流が襲ってくるかと思うと、土下座をしても詫びるほかはなかった。

「そうか、許してほしいか。よし、革パンティを俺の目の前でつけろ！ さあ立て」

美紀が革パンティを手を立ち上ると、ピノキオはその前に胡座あぐらをかいて坐り込んだ。今にも鼻の先につかえそうになるほど美紀に近

イメージギャラリー 『調教』 (ちようきよう) 四馬 孝



ついたピノキオは、電気鞭を手にニタニタと、いやしい笑いをもらした。
「ああっ」

ない。いや、むしろ日頃の修一に、あごで使われながら、べこべこする卑屈な態度を見ると、虫ずが走るぐらい嫌悪を感じる男ですらあったほどのだ。そんな男に、恥かしいポーズをとらされた

美紀の口から悲痛な呻きが洩れた。無理もなかった。ただの革パンティを身につけるのではない。責め具がついているのだ。しかも、無情なピノキオが、鼻息すら感じられそうな距離で見詰めているのである。女としてこれ以上の屈辱はないであろう。だが今の美紀は、バーのマダムでもなければ、ただの女ですらないのだ。この粗野なサジスティックな男に調教される、悲しい牝奴隷にすぎないのである。

美紀は屈辱の涙をしたたかせながら、低いすすり泣きをもらして革パンティに両足を入れたが、手を添えて導いてやらなければ、穿くのは無理である。ピノキオの手が待っていたように伸びて介添えを買って出る。

「あれっ？ ようっ！ こりゃ驚いた。あれほど、いやだいやだっていいながら……」

美紀の顔に、さっと朱がはしった。修一とのSMプレイによって開花したマゾの血は、この期に及んでも美紀の意志とは反対に、悦虐の炎を呼び起こしてしまっていた。

「ああ、恥かしい。もう、ゆるして……」

憎い男である。一度も好きだと思ったことはない。いや、むしろ日頃の修一に、あごで使われながら、べこべこする卑屈な態度を見ると、虫ずが走るぐらい嫌悪を感じる男ですらあったほどのだ。そんな男に、恥かしいポーズをとらされた

挙句、自分の意志とは反対に燃え上がるマゾの火を見られてしまったのだ。美紀は激しい羞恥の中で、もう自分では制止できない血の昂ぶりを感じないわけには、いかなかった。

（ああ、貴方、早く来て！ こんな男じゃなく、私は貴方にいじめてほしいのよ）

美紀は、口に出しては言えないもどかしさに、身をくねらせた。

「ううっ、ああっ」

ピノキオのおぞましい手が、しっかりと装着された革パンティを撫ぜさする。

「ううっ！ ヒイッ！」

ぐりぐりと握り拳で、こじあげられた美紀は、もうこらえようもなく眉をしかめ、熱い呻き声をあげてしまった。

☆

☆

（たしかエマソンだったか？ 真に人に愛された事のない人間は、真に人を愛することは出来ない）

学生時代に、ふと見た文章を思い出した修一は苦笑した。今頃になつて思わぬでもないが、かつて多くの女と接しながら、一度も女に惚れたことがない修一である。十才で両親に死に別れ、親戚中をたらいまわしにされた幼い頃の暗い記憶は、今までの修一の性格形成に、ぬきがたい人間不信を、うえつけてしまった。

「冷たい人ね。でも、そんなところが魅力なんだわ」

何人もの女から聞かされたセリフである。むろん美紀も例外でない。そんな修一が、今、自分のどうにも押えがたい感情を、もて余していた。

「いいかピノキオ。遠慮しなくってもいいぞ。俺の女だと思わなく

つていい。他の奴隷と同じように扱え」

「へえ、わかってますあ」

ぶすっとした声で答えながら、明らかに喜びの表情を抑えかねているピノキオを見て、不思議な感情にとらわれた修一である。それが嫉妬心であるとは、その時は考えてもいなかった。

（飼育する奴隷は商品と思え。絶対に抱く事は許さない。それ以外なら、どんな調教をしようと、それはお前に任せる）そう厳しく申し渡しておいたのだ。まさかピノキオが、その命令に逆らつてまで美紀に対して、不埒な振舞いをするとは思えないが、残忍な男である。組で行なわれるリンチには、修一も驚くほど残忍に振舞った事がある。

美紀に対しておこった、かすかな憐愍をふり払うようにして、ポロ武と奴隷部屋を出た修一は、まだその憐愍が嫉妬心だとは気づかなかった。

今一人で、マンションのベッドに大の字になつてタバコをふかしている、奴隷部屋でとらされているであろう美紀の、惨めな姿態が目先にちらついて、かつて一度も味わったことのない奇妙な倒錯した嫉妬心が、メラメラと音を立てんばかりに燃え上がるのを抑えかねていたのである。

すぐにでもとんで行つて、美紀を連れ戻したい気持ちを辛うじて押えたのは、まだ約束の時間に間があったせいもあるが、これから先のことを考えると、弱みを見られるような軽卒な行動は慎まねばならなかったからだ。まだ先は長いのだ。

今のところ、修一の本当の計画は、まだ誰にも話していない。ただ単にSMクラブを作つて、奴隷の数をふやし、会員を集めてみて

も知れているのだ。入会金を目をむく程とってみても、会費をいくらつり上げてみても、恐らく一千万円の金を握ることすら無理であろう。だが修一の計画は、億という単位の金を握るつもりなのだ。勝算は充分ある。だがこの計画は、まだまだ、うかつに話せなかった。美紀に対しても、そこまでは話していない。

どうにも抑えられない嫉妬心の衝動を、ごまかすために修一は今別れたばかりのボロ武との会話を思い出していた。

「お前、トルコへ行ったことがあるだろう」

「そりゃ、ありますよ」

「その時の事を思い出してみろ。あれが、まともな男と女のやる事か？ ええっ、どうだい」

「そう言えば、そうですね。このごろは、段々変態じみてきてやすね」

「それじゃあ、お前は変態か？ え、どうなんだ」

「そんな……そんなことってないですよ」

「だがお前、今言ったじゃねえか。このごろ段々変態じみてきてるって」

「……」

「いいか。あのトルコ風呂の中でやっている事を、普通の家庭の主婦が見てみろ！ いや女だけじゃねえ、まだトルコなんぞ一度も行ったことのないマジメなサラリーマンでも見てみるってんだ。一ぺんに、きめつけられるぞ。あれは変態のやることだってな」

「まさか、そんな……」

「そのまさか、その道を知らない人間の、きまって言う、セリフさ。ところが、サドとマゾは、おめえのように、まさかなんて思っ

てやしねえんだ。自分達のやっている事を普通の人が見たらどう思うかってことを、人一倍よく知っているんだよ。自分のやっている事を人がどう思っているか考えもしねえで、自分だけが、まともだなんて思い上っている人間よりもサドやマゾは、自分の事を人がどう思っているかを、よく知っているだけ、よっぽど、まともなんだよ」

「ふむ、そんなもんですかねえ」

まだ釈然としないらしいボロ武である。

「おい、武。おめえ、男と女が抱き合っているところを、どのくらい見たことがある？」

「さあ、四回、いや五回……」

「おいおい、俺の言っているのは白黒シヨーのことじゃねえぞ。人に見られてるって事なんか考えてもない男と女のことだぜ」

「兄貴、そんな……俺には、のぞきの気^けなんかありませんよ」

「嘘つけ。のぞきの気^けのねえやつが、白黒シヨーを見たりするか。どうだい？ 見たことはねえだろう」

「そりゃそうですね。兄貴は見たことがあるんですか？」

「俺も、ねえよ」

「なんだ、つまらねえ」

「つまらねえ？ パカ野郎！ 世の中にはな、ごまんと夫婦があるんだぞ。その夫婦の夜の生活を、みんなべらべらと人に話すか？

ましてや、人に見せたりするわけはねえ。そしたら、男と女が二人だけで、どんな愉しみ方をするかわからねえじゃねえか？ お前だって、もうそろそろ、SMってものが解^といてもいいころだ。この日本中の男と女の秘めごとを、のぞいて廻らない限り、どんなやり方が変態で、どんなやり方が本態、つまり変態の反対という意味で

だ、本態か知れたもんじゃねえだろ？ それともお前は、はつきりと変態と本態を区別できるって、言い切れるか」

理屈では到底、兄貴にかなわないボロ武である。すっかり考え込んでしまったボロ武を見て修一は、にやりと嗤った。大学時代、国際法上の解釈の問題で、教授をやりこめた時のことを思い出したからである。

☆

☆

「それから、どうされた、えっ？ さあ白状するんだ」

全裸でベッドに腰をかけた修一は、床に、シュミーズ一枚の姿で後ろ手に縛られて坐っている美紀を睨みながら、もう何度も同じ問いを発していた。

「はい、それから革のパンティを、はくように命令されました」

「それでどうした、ええっ？ はいたのか」

「は、はい」

「それから、どうした？」

「はい、それから……」

「それから？ どうした、言わんか！」

「はい、奉仕……口で奉仕しろって……」

「なにいつ！ 野郎、それでどうした。お前のことだ、嬉しそうにすぐ言うことを聞いたんだろ、えっ？」

「そんな……いや、もうゆるして頂戴。そんな……恥かしい」

「嘘つけ！ ピノキオに聞いたぞ。まんざら、いやそうでもなかったそうだな」

「ああ、はずかしい。私は、あなたに……あなたに虐めてもらいたかったんです」

執拗な言葉による、いたぶりは、美紀のマゾ性を強く刺戟したようである。修一を振り仰ぐように後ろ手にゆわえられた姿で、にじり寄った。

「よせ！ けがらわしい。牝奴隷の分際で！」

修一の足が、にじり寄った美紀の肩を蹴り上げた。後ろ手に膝立ちの不自由な姿勢は、どたりと音をたてて転がった。

「ヒエッ！」

豊満な太腿が艶めかしく宙に舞って、修一の激しい欲望を、さそった。

「起きろ！」

激しい叱咤の声に、あわてて起きながら、ようやく起き上った美紀は、目をうるませて修一を見つめて正座した。

「どうした、ええっ？ 忘れたのか！ 俺が許すと言うまで詫びるんだ。さあ」

（まさか？ この人、嫉んでいるんじゃない……）美紀は一瞬、胸が熱くなった。（そんな……でも、いつもの様子とちがうわ）

「どうした！ 何だ、そのつらは！ よっぽどピノキオにイカレちまいやがったな。くそっ！ あんなチンピラに」

もう、まちがいがなかった。いつものプレイとちがって、さも憎々しげに美紀をにらみつける修一の目には、もうかくしようのない嫉妬が、あらわだった。

（ああ、うれしい。この人、嫉いてるんだわ。はじめてだわ。私のこと、本当は愛してくれてたんだわ）

美紀の目から、うれし涙が、いく筋も糸を引いては、ながれおちた。

《告白》

吾が倒錯生活の断片

真田一郎

△近親相姦、ホモ、下着蒐集、スワッピング、覗き、その他▽



カット・室井亜砂路

私は本年32才。既婚で3才の男の子がおります。大学卒業後、ずっと一部上場会社の研究部に籍を置く技術屋であります。

幼児期から現在に至り、これからも続くであろう私の赤裸々な「性の人生」について語りたと思います。

私は肝腎のSMプレイを除いては、全てのジャンルにわたるセックスに興味を持ち且つ実行してきました。時々、自分自身にあきれると共に、世の中に同好の士の、いかに多いことか、と驚いています。考えてみれば、正常なセックスのみで満足している人間なんて数はしれているのではないかと思う程です。

一見、清楚に見える女学生、上品ぶっている家庭の主婦、中年の堂々たるタイプの紳士なども、一皮むけば意外なセックス面での特異な内面を持っていることを知って、意を強くすると共に、一層の興奮度を高めている次第です。

私のセックス・ライフを語るには、母親を抜きにしては考えられません。昭和16年生れの私には、物心ついた時には、既に父は無く母一人、子一人の生活が続きました。

母親は女優の新珠美千代に似ていると言われるくらい、まあ十人並み以上の美貌の持主でした。現在も健在で53才になりますが、デパートのデザインの仕事をしている関係上、髪も染めており、お化粧も派手でマニキュアなんかもして、10才以上も若く見えるので、一緒にいても親子には見られません。

気分が若いというのか、未だにビキニのパンティを愛用していて、勿論、生理もあるらしく、アミ目の生理帯なんかも、よく干してあります。

私は大柄な体格に似ず甘えん坊で、小さい頃から母と同じ蒲団で、しかも、身体をびったりつけて抱いて寝てもらっていました。

私の5才か6才の頃は戦後間もない混乱期で、母に抱かれて、乳房を弄びながら寝たのを未だに覚えています。小学校に上った頃でも、戦災にあつて家もなく、狭い借り住居で佻しく暮らしていた記憶がありますが、母とはずっと一つの蒲団で寝ていたものです。

今でも、はっきりと覚えてゐるのは、小学校6年の夏の夜、母と一つの蒲団で寝ながら『男と女の身体の違い』や『どうしたら子供が出来るのか』ということなどについて、説明を受けたことです。その頃の私は、まだ発毛していませんでしたが、時々大きくなり、なんとなく快感というものを経験するような年頃になっていました。

近所の女の子と、八お医者さんごっこVのような遊びを始めたのも、その頃からです。冬になり、暖房の設備もない貧しい住居のこととて、母の身体でじかに暖めて貰うのが関の山でしたが、そんな私を、母はしっかりと両腕で抱きしめてくれるのでした。

そうした環境の中で母と私とが、道ならぬ間柄になるのに、その日を経ちませんでした。が、それというのも戦災による極度の住宅事情の悪さと、戦後の虚無的で頹廢した民心が預って大きかったのでしょう。

最初のうちは、ほんの真似ごとのような遊びでしたが、そのうち、私もだんだんと成長

して、射精ということも経験するようになり、したので、母の手で「貴方も男の子になったのですから……」と、ゴムの袋をかぶせられたときには驚きました。

私の体が急に男らしくなってくると共に、性器の方も包茎がなくなり一段と逞しくなってきました。母はハンドバッグの奥から、数枚の例の写真を出して見せて呉れたりしましたが、思えば母も好きな女だったのです。

私はその頃、女性の生理について非常に興味を持っていました。どの部分から、どのようにして出血するのかについて、知りたくてなりません。その頃、ようやく街に氾濫したカストリ雑誌なんかを、手当たり次第に乱読して、そうした知識を得ようとしたが、殆どは興味本位の内容のものばかりで、すぐに飽きてしまいました。

高校生の頃には、母と新婚夫婦のように、一晩に二回も三回も楽しんだものです。「好きもの」の母は、そうした行為を私と耽るばかりではなく、女性の性器への関心が強く、いろいろと私に実地に説明して呉れるのでした。一度、母と一緒に旅行したときがありました。そこは田舎の温泉旅館で混浴でしたが、他の女性についての品定めなどをして教えて呉れたことを覚えております。

高校三年の時、ガールフレンドが出来、家

へ連れて来たことがありましたが、その時、母から「何故、早く関係を結ばないか」と、そのかされたこともありました。

今の女房と結婚して五年になりますが、母親は自分の本当の娘のように女房を可愛いがります。結婚した今でも、半年に一度ぐらいは出張といって外泊し、母とホテルで楽しい一夜を過ごしている次第です。

母も私も、肉親の間で情を交すという倫理感よりも、お互いに、痒いところをかいてやるのだ、痛いところをマッサージしてやるのだという軽い気持ちで、不幸にして持っていないが、道学者から言わせると、道徳的には言語道断かも知れません。

しかし、実際には、お互いに気心の知れ合った間柄でもあり、身も心もリラックスして楽しめるのです。そうした旧道徳律さえ無視してしまえばの話ですが……。私達二人は、現在は超越した気持ちであります。

母は未だに、私以外の男性は怖いと言って敬遠しております。「変な男の人とお付き合いするぐらいなら、自分でした方がいいわ」と常に言っていました。母もまた、女性オナニストの一人かも知れません。ただ、母の部下の若い女性（同じデザイナー）に慕われて今でいうレズの関係が出来、彼女が結婚するまでの間、時々性戯の相手をしていたよう

すが「とても疲れるわ」と言っていました。

母も「好きもの」ですし、その相手の娘もセックスは嫌いな方ではないらしく、きつと相当激しいレスプレイをやっていたのでしよう。私も一度、母に紹介されてチラッと見たことがあるのですが、色白の男好きのする可愛い娘でした。

私はホモもやりますが、母には全部、話しました。新宿の伊勢丹前の地下の映画館で知り合った男性は意外にも電力会社の重役さんで渋い感じの二枚目でした。奥さんはすらりとした長身で和服のよく似合う美人でした。

数カ月間、そのH氏とホモの付き合いをしている間、H氏の邸宅を数度、訪ねました。私も母とのことを詳しく話し、お互いに胸襟を開いたところで、是非一度、奥さんのお相手をしたものだと言いましたところ、彼は快く承諾してくれました。

私達夫婦もいろいろと、かなりのことを試みましたが、二人とも満足出来ないのです、何か刺戟が欲しいと思っていたところだから、と言って、私の申出を喜んでくれました。

彼の電力会社の保養所が日光にあるということで、私と母と彼ら夫婦の四人が一緒に日光へ遊びに行こうと約束しました。彼の話では、彼の奥さんが、私達母子に凄く興味を持っているとのことでしたが、最初、私がこの

話を母に持ち出した時は年甲斐もないと、恥かしがって渋っておりました。

やっこのことで母を口説き落して、それでは一度だけということと四人が逢いました。それが意外なことに、母と先方の奥さんが意気投合して話はずみ、ホモ、レスボス、夫婦の浮気や交換など、話題には、こと欠きませんでした。傍で聞いていた私にも、その奥さんは相当の「好きもの」という感を受けたものです。

そんな、あけすけで、ざっくばらんの話から、四人は忽ちにして打ちとけ、日光の療養所へ着いた時は、先ず、私と母、彼ら夫婦という組合せから、次には、彼と母、私と奥さんというカップルに交ってしまいました。

母とH氏は恋人のように肩を並べて別室へ消えてゆきました。後で聞いたところにより、まず、母は二度も彼に可愛いがられ、お互いに凄く満足したとのことでした。

私は、その「好きもの」のH氏夫人と部屋に落着くなり闇を共にしたのでした。一ダース入りのコンドームが殆どなくなってしまうほどの熱戦の連続で、私は珍味をむさぼるように味わい、夫人も又、御主人にはない感じを私から吸いとったようでした。その感度は抜群で時が経つのも忘れたほどでした。

なんといつても御主人公認の浮気というこ

とで、その刺戟も素晴らしく、別室では御主人と母とが、全裸となって、お互いに楽しんでるのかと思うと、二回や三回では、すまないのは勿論のことでした。

入浴をすませて夕食後は、H氏夫人と母とが、私達二人の前で全裸となって、その部分の品定めをしたり、抱擁やレスボス行為をして見せ、私達男性の方も、負けじとホモの行為に耽って、それは乱痴戯の限りでした。

一度だけという約束が、余りの快適さに、それから、数度、お逢いしました。そして、いつも、破廉恥の限りを尽くしていましたがH氏夫妻が海外転勤という事情のため、遂にこの四人の交際は中絶してしまいました。

H氏とはホモを通じて知り合った関係ですが、セックスというものは徹底して楽しむということが大切で、中途半端なことでは、十分に、その快味を味わうことが出来ないのじゃないかと思えます。私はホモの親友はH氏以外にも沢山の知り合いがあります。

雑誌の文通欄を通じての知人、映画館の中で知り合った人、公園のトイレや出張先の旅館の風呂場で意気投合した人——という具合に、意識的に或は偶然に、いろいろな男性諸氏と交際しました。一度で終わった人、数年間に亘って続いた人、未だに家族ぐるみの付き合いをしている人などいます。矢張り、長く続

いた人は社会的地位の高い人、真面目な方に多いようです。

雑誌で知り合ったO氏は、中央郵便局に勤めていて、奥さんを亡くされてから二人の娘さんと三人で暮らしていました。中野の小綺麗な旅館で落ち合い、カーテンを引いた薄暗い部屋でホモ遊戯に耽りました。ホモ遊戯といっても、私のは専らサービスをして貰う方ですが、肛門の方は一度も使ったことがありません。それでも、妻や母、オナニーでは得られなかった肉体的快感を得ました。

次に知り合ったのは、湘南地方のお寺の住職のH氏でした。小柄で淑やかな日本的な美しい奥様がおり、「家内ともさせる」ということだったので非常に興味を持ち、お宅を訪ねました。離れが二部屋あり、その一室がH氏の居間でした。

古い造りでしたが大変落着いていて、まだ宵の口だというのに蒲団を敷いて、その中で寝そべりながら、彼が蒐集したという、いろいろな写真や本、絵などを見せて貰っているうち、変な気持ちになって、お互いに能動的になり、私自身数回、H氏も二回、遂情しました。H氏はテクニクが素晴らしく上手で、私は今までにない快感を味わいました。

夏の夜、H氏を訪問しましたとき、奥様が出て来られて挨拶をしましたが、こんな可愛

いくて美しい奥様と出来るのかと思うと、凄く胸がわくわくしました。

夏のことで、隣の部屋との仕切りには、簾の戸がしてあり、向うの部屋には蒲団が敷いてあるのが見えました。H氏とのプレイが終って休んでいますと、簾越しに隣の部屋に奥様が入って来られたのが見えました。

洋服、シュミーズを脱いだかと思うと、浴衣を着て蒲団の中へ入りました。三十分ほどしてから、やっとH氏のOKが出たので、私は、そっと簾戸を開けて隣室へ忍び込みました。蒲団の中へ、そろそろ手を挿し入れて寝息をうかがいますと、よく眠っているようです。私は彼女を起さないように、身体を足の方から蒲団の中へすべり込ませ、手をズロースのゴム紐にかけました。

私は、あっ気なく終り、それまで狸寝入りをしていた奥様はH氏の部屋へ移りました。H氏は、それまで懐中電燈を照らして私たちの行為を、じっと見ていたのです。

H氏も奥様も二人とも全裸でした。物凄く大人のプレイが始まったのです。

ダイナミックと言おうか、すさまじいと言おうか、二人とも汗みどろの熱戦でした。私に、その結合部分がよく見えるような体位をとって三十分ばかり激しいプレイが続きました。見ている私にとって、奥様の白くて可愛

いいお尻の動きが悩ましくてたまりませんでした。そんな光景を懐中電燈を照らして見ていて私は再び元気が出てきました。

奥様は私をうまくリードして、たまらない境地に誘ってくれました。奥様が疲れると、私とH氏で楽しみホモプレイをやりました。その間中、奥様は二人の行為を、じっと見ていました。

そんなことがあってから、月に一度ぐらいは、欠かさずH氏宅を泊りがけで訪ねて、三人プレイに夜の明けるのも忘れて爛れた、ひとときを過ごしました。

東京ばかりでなく、地方から上京した同好者が集まり、H氏宅で一夜のホモ乱交プレイの会合が開かれたことがあり、私も招待されました。また夏には岩場の多い海岸に集り、数人の若い男性をモデルにしてヌード撮影会を催したり、ホモプレイの写真を撮ったりしました。

次にトイレの覗きについて述べます。最近ばかりこの方向を楽しむ時間はありません。というのは、トイレの中で、じっと我慢して待つのは可成り、時間の余裕がいります。

小田急線のS駅、H駅。相鉄線Y駅、I公園、浜松駅前地下食堂街のトイレ等、全て男女兼用のトイレですが、矢張り好きな人が多いらしく、格好の場所に覗き孔があいてお

ります。私が愛用していた三個並びの男女兼用のトイレの真中のボックスなんか、扉に小さな孔があるばかりでなく、中へ入ると、前と後の下から6センチぐらいと、15センチぐらいの所に孔が開けてありました。

うまい具合に、顔形から下着までよくわかり、放尿状態、性器の細部、紙の使い方に至るまで観察でき、今思えば出すだけでも百人以上のさまざまな女性のトイレ使用の状況を具に観察させて貰いました。高い金を払って、ストリップなんか見に行く人の気が知れません。隣のボックスとの仕切りの下が開いている構造のトイレでは、手鏡が有効ですし、また汲取り式のトイレは殆ど便壺が共通になっておりますから、傘の柄の先に手鏡をつけて少し下へ挿し込むと、隣の排尿中の様子が手にとるように、よくわかります。

話が交りますが、私の趣味の一つに女性の下着があります。学生時代に一時、下宿していた頃、タンスの抽出が一杯になるくらい集めたことがあります。特に汚れたパンティ、脱いだばかりのパンティには、こたえられないものがありました。友達とお互いに家族の女性の下着を持ち寄って交換して舐めたり、身につけたりしました。

友達と一緒に、お互いのガールフレンドを連れて海水浴に行った時など、女達を先に更

衣させて泳ぎに行かせ、こっそりパンティを舐めたり弄んだりしました。パンティについていた陰毛をコレクトしてノートに貼り、名前や蒐集場所、日時を記録したりしたこともあります。キャンプへ行った時なんか、女性の排尿のあとを指ですくって舐めたり、生活用品を観察したり、変ったことばかりやりました。

それから、私の趣味と言いますと、全国の女性との文通です。下は女学生から上は五十才代の家庭の主婦まで、今、三十人ぐらいの女性とレターの交換をしています。文通といっても、矢張りセックスに関係した内容が殆どで、中にはポルノ写真や絵の交換をしている女性もあります。汚れたパンティを送ってくれる独身の女性や、性毛、使用後のナプキン、コンドーム、オナニーの後始末をした紙を送ってくる女性もあります。

家庭の主婦とか結婚間もない若妻なんか、夫婦間の営みの微妙なやりとりなんかもレポートしてきます。勿論、そんな報告を受けるためには、私の方も詳細に経験談を書き送ってやります。こうした文通は、なかなか楽しいものです。

私は小学校3年の時に上京して以来、ずっと東京住いですが、電車で一駅の所に親戚があり七つ下のM子というイトコがいました。

よく遊びに行ったり彼女が来たりしているうち仲良くなり、お医者さんごっこなんかやるようになりました。彼女が二十才で英国人と結婚するまで、ずっと交際を続けていましたが、幼児から成人するまでの一人の女性の構造の成長を見続けてきたことになります。

M子は一人娘だった関係で特に私に親しくなんでも相談するばかりでなく、身体のだんな個所も見せたり触らせたりしました。小柄でしたが、色白で下ぶくれの可愛い娘でした。毛深いのが特徴で一緒に入浴したときなど、かき分けて隅から隅まで観察させてくれたりしました。

以上が私の今までの性生活の偽りない断片ですが、個々には、もっと面白い話も沢山あります。最後に現在、私の勤めている会社のA子について書いてみましょう。

A子は中学卒業後入社した長身のグラマーで、お尻とオッパイが大きい娘でした。入社して暫くして会社の若い社員と恋仲となり相当、親しくしていたようですが、一年ばかりで彼氏が退社してから急に私に近づいてきました。その頃、私の研究所は工場と同居していました。工場の敷地内に社員住宅や独身寮があり、共同の大浴場もありました。

その頃、私も独身だったので寮生活でしたからA子はよく私の部屋に遊びにきて、きわ

どいセックスの話なんかも平気でしました。

「見せろ」と言うのと、進んでスカートをまくって触らせたりしました。私がプレイボーイの評判の高い青年だったので接近してきたのでしようが、彼女の助平度も相当なものでした。当時まだ十八才ぐらいだったと思います。私が私とだったら平気でホテルへ行きました。

大柄な割に顔なんかは子供っぽく、大人と子供が共在しているといった感じの娘で、工場の共同浴場で見てきた寮に住む同僚の品定めをよく私に聞かせてくれました。女子寮には百人ぐらいの独身の女性がいて、殆ど私の顔馴染でしたから、A子から無毛症や毛深い女性のことを聞くのは楽しみでした。

同僚の女性の浴場に於ける下半身の様子を喋るときのA子は、情熱を持った口調になりましたし、社内で評判の美人の細かな観察を聞くときの私の目は好奇心に輝きました。殊に社宅に住む若奥さんの下半身の詳細な報告には興味を持ちました。

A子と新宿御苑を散歩して芝生に寝ころんでみると、傍の女性を見て「あの子のパンティ見えてるわ」と、私に覗きをそそのかしたりしました。夕方、日比谷公園をA子と一緒に散歩して他のアベックを観察したり、他のアベックの前で殊更、刺戟的なポーズをとって、その反応を眺めて楽しんだりしました。

また、或雑誌で知り合った中年の夫婦の方と、夫婦交換をしようということになり、私はA子を家内に仕立てて会ったことがありません。その方のお宅を訪問したときは、A子とは、すっかり夫婦になりすまして行きました。私達二人が大変若いので、先方の御夫婦とも喜ばれて、御馳走をしてくれました。

先方の奥様は非常なテクニシャンで、私は一晩中、寝かしてもらえず、くたくたにされましたが、A子も充分、満足したらしく、日曜日の午後、一緒に帰る時には、ぼんやりしていたのは寝不足ばかりではなかったようです。

A子とは、勤務中でも現場の片隅や倉庫の奥でデートを重ねる程でしたが、私の結婚後すぐ退社して、渋谷のキャバレーに勤め、それから暫くして、新宿のクラブに変わったというのを聞きました。

最後に、今年の夏、私が体験した奇妙な話を一つ、書いてみます。突然、急な仕事が出来て、たった一人で居残って残業をしていたときのことです。研究室の一階下にあるトイレへ用足しに行きました。

いつも清掃会社の人達が請負いで夕方から廊下や階段、トイレの掃除にくることになっているのですが、その日も中年の上品なおバサンが、モップでトイレの床を洗っていました。

た。私は何の気なしに便器に向って排尿しながら、ふと、人の気配に横を見ると、そのオバサンが、じっと手を休めて私の方を眺めているのです。質素な身なりでしたが、小柄なので三十五、六ぐらいに見えました。

「そんなに見つめられたら恥かしいじゃないか」と、冗談のように言葉をかけると、それをしおに近寄ってきて、やや大きくなりかけたのを覗き込みました。「いいのかい？」と言うと、「ええ」と答えるので、一緒にトイレの一番奥のボックスへ入りました。

すぐズボンを下ろし彼女のスカートの手をかけました。狭いボックス内で自由な体位がとれないことと、人が来るような気がして落着かず、簡単に終ってしまいました。それ以後、清掃会社の人には注意していますが、残念ながら、彼女には顔を合いません。臨時に仕事に來たアルバイトの人かもしれません。が、次に逢ったときはホテルなんかへ行っただけで、次はプレイしたいと思っています。

つまらない告白の文章を永々と書き綴ってさぞ、退屈されたことと思います。と言いますのは、私自身には強い思い出や印象が残っているのですが、読まれる方々には大して興味を持たれない場合も多いかと思うからです。

——(おわり)——

花 悠 紀 子》

れ』のひと

さんと辻村隆氏に捧ぐ)

か お る



おれは今、何を考えているのだろうか。一人でこんなところに来て何を考えているのだろうか。ここは新幹線の「新大阪」駅だ。おれは時たま、ここに来て誰を見送るのでもなく、ここに立っている時がある。

今も、おれの目の前を一人の女が行き過ぎた。白いワンピースが、よく似合う足の細い女だ。顔の印象よりも先にそこに視線が行くのはどうしてだろう。おれは後を振り返る。女は、おれの視線をうけているのに気がつい

ているのだろうか。肩のところに髪が長く伸びている。まあ、云ってしまえば、今様の女だ。年齢は二十才ぐらいではないか。だんだんと行き過ぎていく女を見送りながら、おれは昔のことを思いだしている。

今の女も、特に目立つ女ではなかった。その証拠におれはその女の顔を、もう一度、思いおこせないではないか。

ここは、新幹線の「新大阪」だけあって、人の行き来は多い。黄昏時であるせいか色の鮮明な方が、よく目に立つ。おれはまた前をむく。次の女が来るのを待つわけではない。おれは、ここに遊びに来ているのではない。そう云っても旅をするわけでもない。おれは「たそがれ」になると、ここに来たくなるのだ。難波でも心斎橋でも戎橋筋でも、かまわぬが、おれは、この方が好きなのだ。

あれは昭和三十五年十二月のことだ。おれは何という目的もなく、戎橋筋を散策しておった。あたりが暗くなつて人の顔が、ぼんやりと見えてきた頃だった。戎橋筋は勿論、螢光灯のあかりで明かった。おれは、ぼうつとしていたのだ。おれは、だれかに呼ばれたような気がしたのだ。前だったか、後だったか

私説 ≪ 梨

『誰そ彼^たが^が』

(この一文を梨花悠紀子

き く .



それもわからなかったので、その場で立止まった。まわりを見ていたら、前の右手にいたいた。あれは友人のRだ。背の高い男だったから、すぐ判る。あいつとの付合も永いわい。今は家が離れてしまったから会うことも減ったが中学の時は、よく遊んだものだ。

Rの隣に一人、可愛い子がいた。おれからいうと、子と成るが、十八、九ではないかな。あれは誰かいな。

ロングヘヤーでもないし、ショートカット

でもない。パーマメントをかけているが、チリチリさせてはいない。小さな顔を丁寧に包むかのように、ゆるやかなウェーブがかかっているのだ。背は、おれよりも少し低い。Rが高過ぎるので小さく見える。

可愛い女の子だ。

おれは今も、この時の『出会い』を思い出すと胸が、うずく。おれも、あれからいうと年をとったものだ。早いもので、もう十三年も、たっている。誤解してもらうと困るので云うておくが、おれの今の家内が、この子と違うのではない。おれは、その時、もう結婚しておった。

家に、もうすぐ小学校に行く長女と次女がおる。なれど、この道ばかりは、どうしようもない。女が好きというのではない。おれの好きなのは、あの道だ。蛇の道はヘビというではないか。おれは女を縛り上げたいのだ。

「おッス、久し振りやないか。なんか用事であんのか」

「別にあるかいな。なんや、お前の方は調子ええやんか」

「アホー お前は、何、思うとんね。顔見たら

わかるやんか。妹や、由紀子や。お前、知つとるやろ。これ、中学の時の友人や」

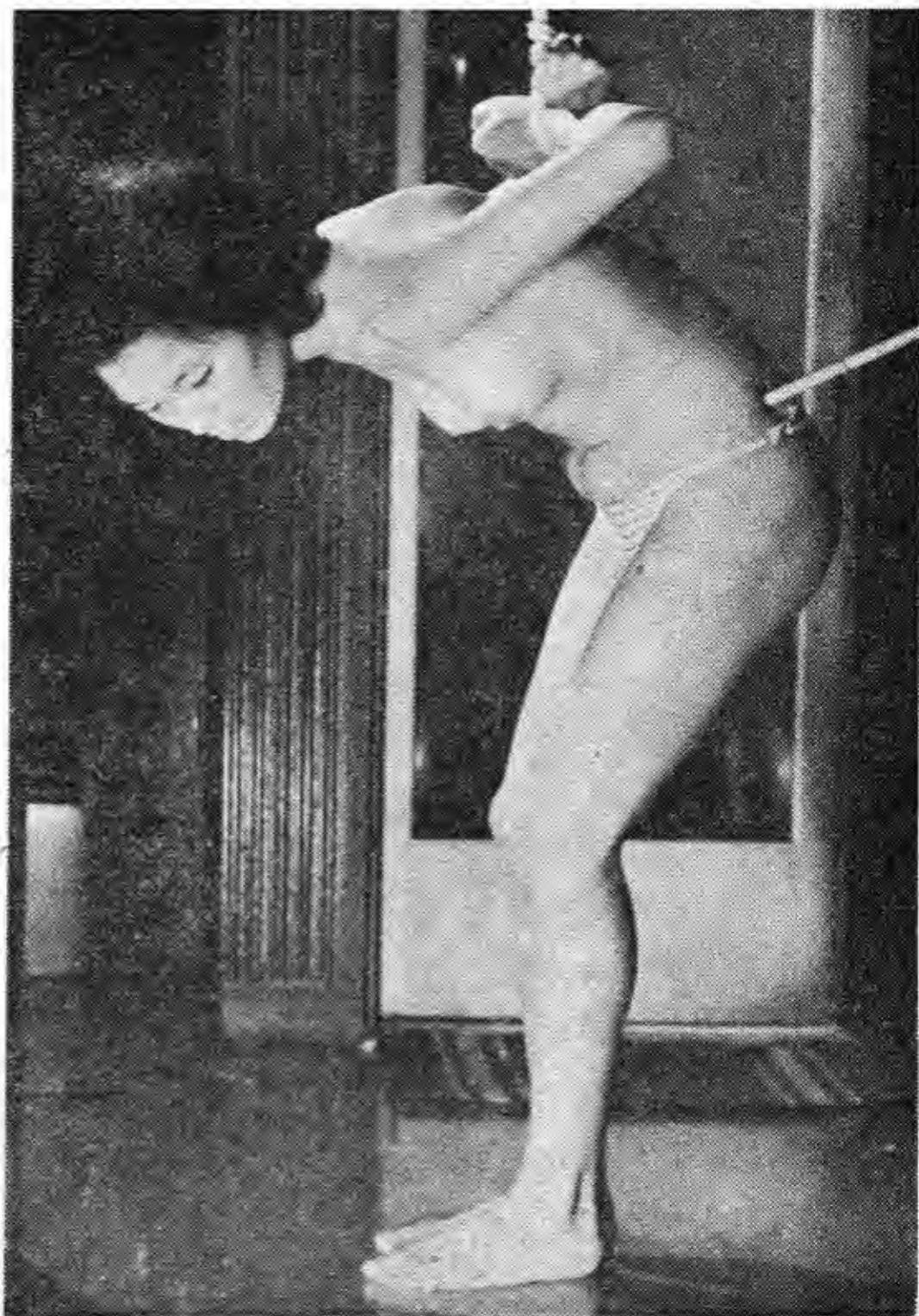
「由紀子です」

「ぼく、高石戸徹です」

「恰度ええときに会うたな。今からもう一軒飲みに行くねん。付合えや。由紀子と二人では飲めん。用事もないんやったら、おごるから来いや」

おれはRと、たいそう親しいというわけでもなかった。あんな年の離れた妹がおったとは知らなんだ。胸が、どきっとしたわけでもないが、人混みの中なのに、他の人は眼中に無く、由紀子さんだけが見えていた。

おれはRに返事して、付いていった。Rは結構、飲める方だったが、その時も、よく飲んだ。由紀子さんは紫色のワインを、ゆっくり飲んでおった。Rの向う側に坐るので、おれもRを、しゃあないやつやと思うた。顔よりも三角のワイングラスをさわっている手の指が奇麗やった。白い指というのは、だれでも云うが、細いというのではなく、少しばかり肉付きのいい、さらっとした指やった。マニキュアも塗っとらん健康的なピンクの爪がおれの氣にいった。



おれもRに勧められて、ビールを飲んだ。Rはこの時、行きたい所があったようだ。

しかし由紀子さんを連れては、いけない所だったようだ。そこで、ここでおれに会うたのをいいことに、おれに妹の世話をさせるつもりだったのだろう。おれにビールを勧めて何か云いたそうだった。結局、おれは彼の云う

通りになった。

こんな事ばかり、くどくど書いたら、何時までたつたって仕方ない。一足とびに行こう。

おれが彼女を縛ってしまったのは、それから四日ばかりたってからだ。あの日はRから



由紀子さんを頼まれて、由紀子さんの云う通り（彼女は、こういうんや。「私、帰り難いわ」「だって、きっと兄さん今夜、帰らないでしょ。私、独りで帰ると、お義姉さんヒステリーにきまってるもの。だから明日、会社へ電話して、一緒に帰れば、私がついていたと思って何とか、とりつくるるんだけど——。麻雀とか、友達のことか……」）おれは、その夜、二人でGホテルに泊った。

この夜は何もなかった。なかったのではなく、おれは彼女を前にして、貴女のその美しさを是非、写真に撮りたいと熱心に頼んだだけだ。おれが貴女の若さ、美しさを

是非、写真に撮りたい云うたら、由紀子さん可笑しいのか微笑んだ。おれは、その笑顔が又、気に入った。女房に悪いので云うておくが、女房も美人だ。そして、いい顔で、よく笑う。決して女房が笑わんから、由紀子さんの笑顔が気に入ったわけではない。

あとで聞いてみれば、こういうことだ。彼女は着衣か、それとも裸体か、どちらかと聞こうかと思ったのだそう。そして、すぐおれの真剣な顔を見て、裸体の方と思って微笑んだというわけだ。

彼女は、この時は、おれに返事してくれなかった。

何事もなく明けた翌朝、食事を終えて、ホテルを出て、おれが別れを云おうと思っていたら由紀子さんが「写真、撮っていただけですか」と云うて来た。この時は期待がなかっただけに、嬉しかった。

彼女は某日、某ホテルで裸体を撮られることに、抵抗はなかったようだ。パンティ一つになって、おれの方を向いた。年の割に大きくはった二つの乳房を両手で隠して心持、頬を染めると

「これも脱ぎますの——」と囁きかけた。

「ええ、まあ、どちらでも」

「思い切って、とりますわ」

由紀子さんは衣桁の傍らで後をむくと、水色のおろしたての透き通るようなパンティをとった。

おれの方を向いた時、彼女は前を手で隠していた。つややかな胸の二つのふくらみは大きく張り切っていた。大きな白いふくらみの真ん中に桜桃のような乳首。そして、それをとりかこむ円型の乳暈。こんなに大きい少女も珍しい。

おれは、ローライコードに三脚をはめ、二五〇W電球を三コ両側からつけて、早速、立

って貰った。

何でもないヌードを、ゆっくり五、六枚撮った。彼女は美しい。肌が白いせいもある。フィルムがカラーだったらと（かつては映画の色つきを総天然色と云うておった）思った。

小柄であるが、無駄のない肉付であった。大きな胸の割に、きゅっとしまった胴まわり。そして長い足へと、つづく。

正面から、また横側をむいてのポーズ。後を向いて背中をさらしたポーズ。

閑話休題。

今の歌手の中に、由美かおるさんがいる。『炎の女』という歌を色っぽく、またショッキングなドレスで歌っておるが、少し前『同棲時代』という映画に出た。彼女がヌードを、はじめて撮ったというので話題になった。

この時のヌードみたいなものだ。ただ彼女と由紀子さんの違いは顔の内容が違う。彼女（由美さん）は、若さいっぱいというだけで



ある。世間は色気があると云うとるが、おれの見るところ、あんまりなかった。ただ彼女は、今が一番、美しい盛りだ。映画は、つまらない。彼女の乳房が、とても美しい。ただそれだけを娛しめばよい。

由紀子さんは有馬稲子だ。今の読者には有馬稲子さんは大したことはないだろうが、お

れの年代では新珠三千代、有馬稲子、八千草薫、久慈あさみ（こんな人、知るまい）淡島千景さんなどが、すばらしい、女性だったのだ。

舟橋聖一先生に『白い魔魚』という小説がある。この中でヒロインが裸になるところがある。そこが、いい。日活ロマン・ポルノで云うと、片桐夕子さん、山科ゆりさんの方だ。田中真理さんではない。彼女は色気がない。肉体だけではダメなのだ。由紀子さんには愧らいがあった。

おれは彼女に、これ以上、頼めるかどうか、わからなかった。きようは、ここまでで、よかったのだろう。しかし、おれの心は逸り立つ。

それを云い出すことによって、おれは彼女の信頼を失うかも知れぬ。これで彼女との縁が切れてしまうかも知れぬ。しかし、おれは云いたい。云いたくて、どうしようもない。

おれのこの一言が、今も思い出すが、彼女

の一生を左右したと云っても過言ではあるまい。そういうことばが人生にはあるものだ。おれに、それを止めることはできなかったと思う。それを言わせたのは、勿論、神ではあるまい。悪魔でもない。人間を超えた大きな力が、おれに、そのことばをいわせたのだと今に思う。

「由紀子さん、縛らせてくれませんか」

その一言を云った時の、おれの顔は、どんな表情をしていたかと思う。真剣だったのだろうか。

由紀子さんにしても驚いたことと思う。なぜ「縛らせてくれ」と云うのだろうか。わたしを縛ってそれからどうするのだろうか。二十歳前の女の子にとって、自由を奪われるということが何を意味するか――。

裸体をさらすことさえ勇気のいることなのに、縛られ、どんなふうに扱われるかそれもわからぬ時不安であつたらう。当然、拒否す

るであろう。拒んで当然である。

そんなことを思ったのではないか。そんなおれの、いろいろの思いが一瞬のうちに頭を駆け巡った。

しかし、しばらくのち、彼女は首をたてに

振った。

彼女は美しい白い裸身を見せたまま、蹲った。そのまま、じっと動かない。

おれは物も言えない。何の音も聞えない。縄をとりに行く時間も惜しい。もし、彼女の気が変ったら、ここで「いやです」と云ったら、もし、泣き出したら、どうしよう。

おれはこの時は、ほんとうに神にでも祈るような気持だった。皮のカバンをとり、チャックをあげ、赤と白の、だんだらの縄を取り出した。真新しい、その赤と白が、おれを祝ってくれる紅白の幕に思えた。

由紀子さんは、そのまま蹲っていた。おれは彼女の右手を、つかんだ。おれの手少し冷たいのが、彼女の肌のぬくもりの故に気にかかる。おれは、この時ほど手の暖かい男を羨ましく思ったことはない。

右手をつかんで、背中へまわすと、彼女は左手を同じように、うしろにまわした。指を柔らかく握ったまま。

おれは、うしろにまわした彼女の両手を組ませた。おれの手は縄を投げ出し、





等分に割り、そこに半径五寸ほどの丸い輪を作った。首に、はめるためだ。彼女は、目をつむった。自分が、これからどうされるか、それを思っておるのだろうか。

おれは輪になった縄を彼女の首にはめる。残りをネクタイのように胸にたらし、二本の縄を右左にして、うしろにまわす。おれは組

んだ彼女の後手を、きつく、縛り、背中へ吊り上げた縄を再び肩から胸に、まわした。両つの乳房の間で交叉させ、乳房の下をまわし乳当てのように張り切った乳房を強調した。余った縄は背から腹へまわり、腰を縛った。

彼女は何も云わない。

おれはカメラのアングルを決める。勿論、

どの角度からも撮りたい。正面よりも少し横の方が乳房が美しい。処女の乳房は、前に突き出している。胸に秘めたものが、いっぱいにつめられているようだ。

肌の白さに縄の模様が変化を、もたらししている。つきたてのもちを、上からおさえたように腰を縄が二つに区切っている。

ついで、彼女のネッカチーフで猿轡をはめる。このネッカチーフは墨流しのよう大きな流れが入っている。うしろで括り、結んだ残りをカメラに入るよう前へまわす。

おれはこの時、次の縛りを考えたわけではない。自然と、手が動き、縄が動いたといえる。彼女は自然と立っていた。縄を、つぎ足し、股縛り。次いで両股を括った二本の縄尻を用いて、両脚をそれぞれ縛る。カメラは勿論、正面から狙う。全身を狙ったカメラは三脚とも前進。豊かな胸乳、下半身を、それぞれ撮影という具合。

一度、縄をほどこいて休んだあと、またもや緊縛が始まる。

彼女の両手を後ろに縛り、背中から太腿にかけて、ぐっと押えておいて縄をかける。次

いで両足も揃えて縛り、猿轡をして、撮影終了。

おれは、彼女に贈るつもりで持ってきたルビーの指輪を彼女の左手の中指に、そっと差し込んだ。

旅館の出口で彼女が「写真、撮っていただけますか」と云った時に、もし撮影が単なるヌードで終わったとしても、彼女にやろうと決めたものなのだ。

彼女は、縄をほどかれても、じっとしていた。それから手を前にまわし、おれのはめた紅玉の指輪に気がついた。それから、おれの方をむいて、じっと、おれを見つめた。おれは、こういう時、困るんだなあ。「素晴らしいわ。私に下さるの？」

おれには、この時の縛りが、新妻の初夜の如くにも思える。今までに家内を縛ったこともある。また知人の撮影行の助手として緊縛写真を撮ったこともある。しかし、自分ひとりで撮ったのは初めてだった。

あれ以後、何回も彼女の麗姿を被膜に焼き付けることができた。今も思いだす場面——「シーン」と云うのだろうか——がある。

堺市郊外の山田鉱泉（温泉）で撮ったのもよかった。知人Y氏の別荘のも、よかった。今のSMの流行からすると笑われそうだが当時は女を縛ることなど、不可能とすら思われていい。おれはその当座、由紀子さんに打ち込んだと云ってもいい。

『奇譚クラブ』のフォトを見てもらうと彼女が、第二の川端多奈子、第三の絹川文代に成長していくさまが、ありありとうかがえる。

あれは『鑑賞用の像』という題であった。後手に縛られた彼女がホテルの一室に、ぺたんと腰をついている。縄は三条ばかり胸乳の





上を袴々と、しめつけている。二条ほど、へその上を、まわっている。わきの下を、しめつける結び目がある。

彼女は全裸であった。ただ僅かに腰をおおうタオルが一枚、無雑作にかけられていた。おれは上から見おろしながら彼女に、あれこれ指示した。

あの時の、むずむずするような生理的な喜びは、今のおれには、もうない。次から次へと女を縛っている今の生活より、由紀子さん一人を縛っていた頃が懐かしいのは、どうしたわけだろう。

彼女は小柄ではあったが均斉は、とれていなかった。体重は十二貫五〇〇だった。縛り上げた彼女を、おれは抱きあげたこともあった。肌のぬくもり、女の匂い、香りが、おれを狂わせたのだろうか。彼女にあぐらをくませ、カメラの方を向かせた。彼女の首すじに一条、汗が流れた。おれはカメラをのぞきながら、彼女の髪をつかんで顔を上向きにさせた。

彼女の髪は、しなやかで豊かであった。あきらめきったような、そういうムードを彼女は見せた。彼女は、おれが非道く手をかけないと信じている。おれは女体を痛めつけ

ることは好まない。

なれど、今から考えれば、あの「鑑賞用の像」のフォトの時代は、彼女自身を充分、出し切っていなかった時代ではないか。おれは興奮して、いきり立っていたが、彼女は冷静におれに協力してくれていたのではなかったろうか。

光と影が見事に彼女の力感ある女体を浮き上がらせた。

「艶容と清美の造型」これは第一ページが大塚啓子さんの「諦観」であった。その裏の第二ページが由紀子さんであった。

フォトで掲載するとともに、おれは彼女に新しい名前をつけた。梨花悠紀子というのが誌上で彼女の名前であった。

この時、おれはホテルの床で彼女を縛り上げた。彼女の身体が軟らかいのを、また飼育のかいがあったのか、後手を逆に組み、高小手に縛り上げ、余った縄で胸乳をしめつけるといった姿態であった。縄は細めであったので彼女は痛そうであった。

日本手拭いがあったので、口を割る猿轡をした。

縛りあげた彼女を、おれはベッドの上に追

いあげた。手ごろな竹が室内の小庭にあったので、それで尻をたたいてやった。

彼女は、わきあがってくる欲びをかみしめているのか、じっと、こらえておった。おれ

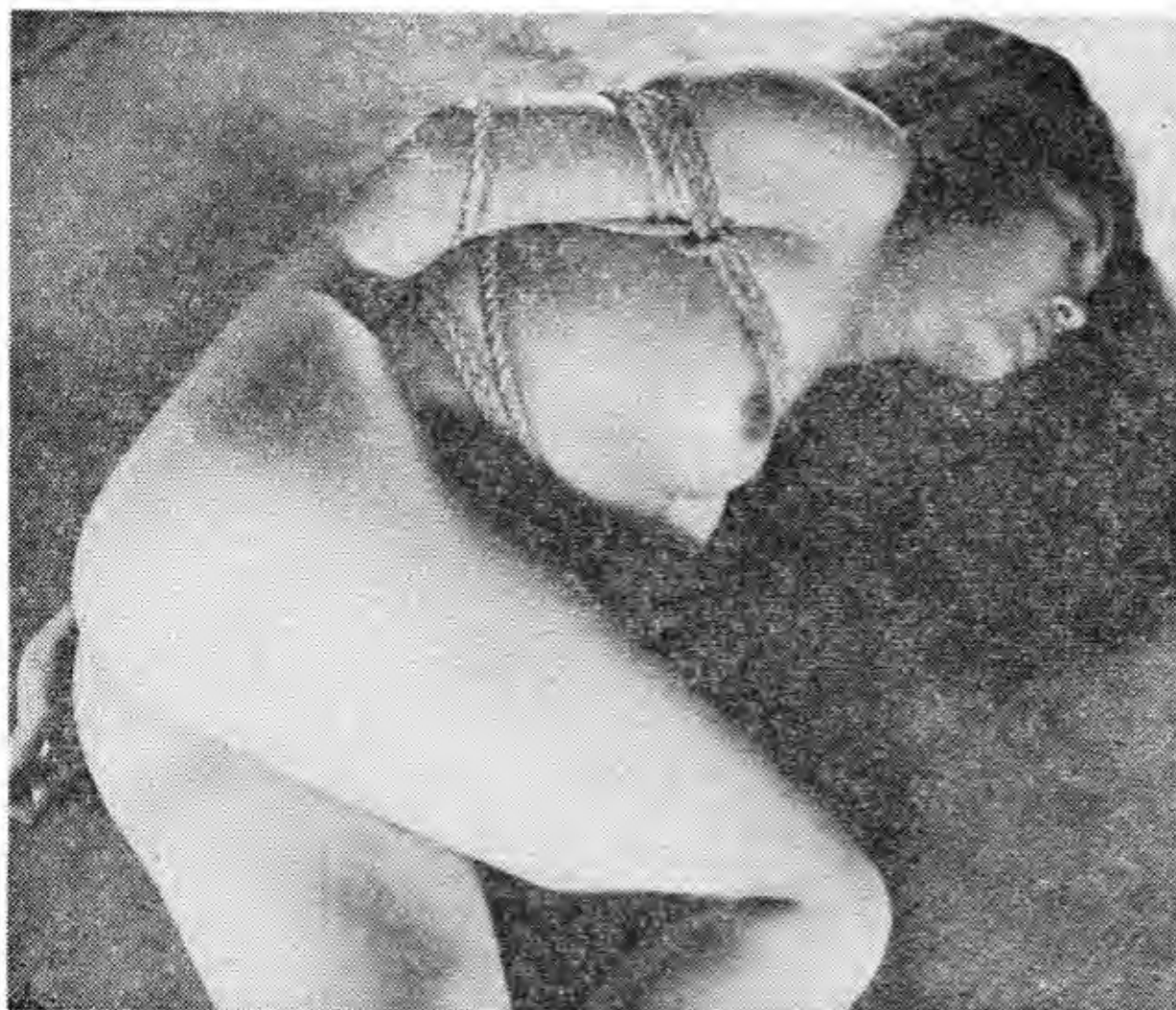
は一言も悲鳴を上げぬ彼女を、その竹の棒で、あちこち、突きまわした。太腿、腹、乳房。フォトでは肩先をおしているところを、とらえているが、おれがどんなにつよく突いたかは、その時にできている影からも想像できよう。

彼女は、この時、十九才であつた。

目線（めせん）の美しい子であつた。下を向かせても、目をまっすぐ見せても、どこからでもサマになっていた。

おれは、これでもか、これでもかと、彼女を責めたわけではない。この程度なら、彼女も協力してくれるだろうと思ひ、少しずつ、強い責めをしていっただけだ。

彼女は、おれのそういう気持を見透かすように、もう少し、きつい責めでも耐えられるようなことをも云った。



後手にしびった彼女を、おれが両足で首をしめるように、はさんだフォトもある。彼女が口を少しあけ、たしかに何か呟いた。あの時、何をいったのだろう。『新大阪』駅で、たたずみながら、おれは彼女のことを思いだしている。

それから数年後、彼女が、ある事情のため、家出同様に家を、とびだし、上京する時、おれは彼女の電話を、きいた。受話器から流れてくる彼女の声は、おれに別れを云ったのだが、その声は、つまりがちで泣いておった。

おれは「今どこにおる」と聞いて、とびだしてきたのだ。手元には少ししか金が無かったが、その金を封筒につっこんで、ここで彼女にわたした。何も云う必要はなかった。おれにできることは、今までの彼女の誠意、献身に対して、真心で対するということだけだった。

超特急「ひかり」に乗り、窓側に坐った彼女の顔には悲しみを秘めた『いのち』があった。彼女は自分を賭けに賭けたのだ。

汚れを知らぬ無垢な日本の乙女の真白き女体に対して、異国の大男が、恥しらずな凌辱を加えてきたというのも、戦争に負けた国の女性が受けねばならない漬罪なのであるうか。ベッドのシーツを真赤に染めて、大和撫子の処女は暴虐の魔手によって、はかなくも散り去っていったのであった。

敗戦秘話

北満哀歌

落花無残の大和撫子

カット・四馬 孝



鈴

鹿

晶

子

「みなさん、一寸、手を借して下さらない。お願い致しますわ」

地下室へ降りる階段の踊り場で、山口夫人の悲鳴がいたしました。みると、ドアのところで山口夫人が、高松夫人を抱きかかえて今にも倒れそうに立っているのです。

胸元を抱え込まれている高松夫人は、まるで軟体動物のように、力なくうなだれ、股を大きく、ぐんにやりと拡げています。両腕も風にゆれる柳の小枝のように、ぶらぶら揺らしながら、ヒイヒイと小声で悲鳴をあげているのでございました。

「早く、助けにきて。私、転げ落ちそうよ」

山口夫人の切端つまった言葉に、床に寝そべって、疲れをいやしていた智恵子先生と私は、はじめたように飛び起き、急いで階段を駆け上りました。

「高松さん、どうかなさったの？」

智恵子先生は心配そうに訊ねられましたが高松夫人は、それに答える余裕もないらしく

「い、痛いよ。うっ、く、苦しいっ」

顔をしかめ、妊娠五カ月のお腹を、大きく波打たせながら、苦痛を訴えています。

「高松さん、階段ですけど、ご自分で降りられますか？」

私が言葉をかけますと、山口夫人があわてて首を振りしました。

「晶子さん、今の高松さんには、そんなこととても無理ですわ。疲れきっていて、足を突

っ張る元気さえございませんでしょう。だから、お二人で足と体を持って下さらない。私

が頭の方を、お持ちしますから……」

そう言えば、高松夫人は全体重を山口夫人にあずけているようで、今にも腕の中から、ずり落ちそうでした。

階段の下では、大坂夫人や宇都宮夫人が、心配そうに見あげています。

「晶ちゃん、静かに持つよ。高松さんは、

妊娠なさっているのですから、ひどい震動を与えないようにね。そおと、持たなきゃいけませんよ」

先生はおっしゃりながら、高松夫人のお尻の下に手を当てがわれました。私も先生のお言いつけ通り、高松夫人の両足を捧げるようにして持ち、これれ物を運ぶように、静かに階段をおろしたのでございます。

運ぶ者、運ばれる者、下から見上げている人達。私達は、みんな全裸でございました。ロシア軍の奴隷となったあの日以来、私達は体をかくすようなものは、一切、身につけることは許されなかったのでございます。

部屋の真ん中まで、やっとのことで運び、静かにおろして寝かせますと、高松夫人は、うっすらと薄目をあけて、うわごとのように弱々しく訴えました。

「み……みず……水……」

私は、すぐに部屋の片隅に置いてある薬缶とコップを持ってまいりますと、智恵子先生が高松夫人を抱き起こされました。

「さあ、高松さん、お水ですよ」

声を掛けられましたが、高松夫人は、焦点が定まらない瞳を開き、「水……水……」と呻くばかりでございます。もう、疲れ果てて

水を飲む気力さえも、なくなっているのでしょうか。私は見ていて悲しくなりました。

「さあ、高松さん、お水を飲むのよ」

先生はそう言われるなり、ご自分でコップの水を含み、高松夫人に口うつしで飲まされました。

「うっ、うっ……」

高松夫人の喉が二度、三度、鳴りました。

「ありがとうございます」

やっと、気がついたようでございました。しばらく、焦点の定まらない目で、みんなを見まわしていましたが、ふうーっと大きな溜息をついて、つぶやきました。

「私、助かったのね」

「どお、まだ痛むの？」

山口夫人が訊ねますと、

「ええ、まだ、ここんところが、ズキンズキンと、うずくんですの」

言いながら、下腹部へ手を当てて、ゆっくりと、さするのです。夫人を抱きおこしていた智恵子先生は静かに横にさせました。

「高松さん、じっと寝ていらっしやい。私がさすってあげますから。痛むのは、ここなんでしょう？」

先生は、ようやく、ふくらみが目立ちはじ

めた高松夫人のお腹や、痛みを訴える女の一番敏感なところを、やさしく、いたわるように、さすってあげるのです。高松夫人は、うっとり目を細めております。

「先生、ありがとうございます」

「こちらあたりですの？」

先生は患者を診察する要領で、あちこちと高松夫人の体を押していらっしゃいます。疲れのひどい高松夫人は、だらしなく股を左右に大きく拡げていましたが、先生の手が敏感なところに触れるたびに、ピクピクとお尻を痙攣させていました。

「山口さん。高松さんは、一体、どんな責めを受けたんですの？」

宇都宮夫人も、いかにも心配そうに、高松夫人を覗き込みながら訊ねました。山口夫人は乱れていた髪をたばねてから、その手をとめて答えました。

「もう、それはそれは、大変な責め方だったんですのよ。子宮責めって、いうのでしょうか、徹底的な責めを受けられましたのよ」

「ええっ、子宮責めですって？ それは、どんなことなんですか？」

私には初めて聞く言葉でございました。たたみかけるように訊ねました。

「お話する前に、お水を一杯のませて頂けません。私、とっても疲れてしまって……」

コップに二杯、一気に飲み干してしまいました。山口夫人は大きな息を、二度、三度してから、喋りはじめました。

「ああ、おいしかったわ。これで、やっと一息つけましたわ。あのね、さっき、私と高松さんと圭子さんの三人が一緒に呼び出されたでしょ。連れていかれたのは、例の診察室なんだけど、圭子ちゃんだけは、また、すぐにお八重さんに、二階へつれて行かれてしまいましたわ」

「それじゃ、圭子ちゃんは、どうなったの？」

私は急に心配になりました。

「さあ、どうなったか、私にもわかりませんわ。それっきり逢っていませんもの」

「ひどい目にあっていなければ、いいんですけれどもねえ」

智恵子先生も眉をひそめておられます。

「私と高松夫人とは、奥の手術室へ入るようにな言われたんです。手術室には、多勢のロシア軍将校と李さんがいました。そして、中へ入ると李さんが、これから高松夫人に、子宮責めを行うと言って、私に、それをするように命令したんです」

「子宮責めなんて、私、知りませんわ」

私だけでなく、他のみんなも、初めてのようでございます。先生がそうおっしゃいますと、みんなは大きくうなずき、体をのり出すようにして山口夫人の話を待っています。

「私も知らなかったんですけれど、子宮に液を入れるだけ詰め込むって言う責めなんです」

「子宮に液を注入するんですって？」

智恵子先生が不審そうにおっしゃいます。

「ええ、そうなんです。なんでも、李さんが説明するのには、男性と関係する女性は、男性の体液を子宮に受け入れるのだが、お前たちの子宮には、それが何人分ぐらい一度に注入することが出来るかを調べるんだって、言うんです。それをね、妊娠して、子宮が狭くなっている高松夫人に、まず試してみるって言うんですの」

「まあ、ひどいことを……」

「そこで私は、はじめに片栗粉を練るように言われたんです」

「ええ、片栗粉ですって？」

「つまり、男性の体液と同じ粘度のものを、子宮の中に注入するって言うんですの」

「なるほどね」

「それが出来ると、男性のものに似せて作

ってあるゴムの棒状のパイプの中に入れ、それを高松夫人の体の奥深くまで差し込み、パイプの手元のポンプ式の握りを押して注入するんです。私は何回も嫌だって、断ったんですけれど、その度に李さんに鞭で責められ、無理矢理パイプを握らされてしまいました。しかも、注入するのは一回だけじゃありませんのよ。入るだけ入れろって、言うもんですから、七回も八回もさせられるんです」

「注入する時は、痛まないのですか？」

「ええ、最初の一、二本は、どうともないよ。うなんですけれど、三本目位ごろから、高松さんは大層痛がりはじめましてね。手や足をばたつかせるんです。すると将校や李さん達が寄ってたかって押えつけ、私に、どんどん注入しろって、けしかけるんです」

山口夫人は、そう言うてから、横になっている高松夫人に目をやるのでした。高松夫人は、安心したのと、痛みも少しは薄らいだのでしょう。時折、苦痛を訴える小さな呻きを洩らしながら眠っておりました。

「私、もう、お気の毒で、何度パイプを投げ棄てようかと思ったかも知れません。でも、一寸でも手元を加減すると、すぐ李さんが、鞭をふるって叱りつけるでしょう。だから、

それも、うかつには出来ませんのよ。もう最後の頃は、高松夫人は痛がって、ヒューヒュー、悲鳴をあげて、のたうちまわるし、それを押えつけているロシア軍将校の怒鳴る声と、面白がって笑う声。あまりの残酷さに、泣きながらパイプを握る私でした。私の動作がにぶいと言って叱りつける李さんは、その都度、床を鞭で叩いて私を威すのです。手術室の中は、まるで戦場のような騒ぎでしたわ」

「責めを受ける高松夫人も、辛かったでしょうけれど、無理矢理やらされたあなたも、さぞ苦しかったでしょうねえ」

智恵子先生は、山口夫人の肩に手をおいてしみじみと、おっしゃいました。

「ええ、それはもう、大変でしたわ。高松さんのお腹は、グングンとふくらんでくるでしょう。痛がって、止めて、止めてって、手足を男たちに押えつけられているものだから、お尻だけを前後左右に激しく揺すって、泣き喚くんです。そうすると、男達は、私が注入出来ないというので、また別の人が、高松さんのお尻を押えつけ、動かないようにしておいてから、私に早く、どんどん液を注入しろって、けしかけるんです。高松さんは痛みに耐えかねて、声いっぱい泣き喚きながら、時

折、私をうらめしそうな目で、じっと見つめて、止めてって、哀願するでしょう。それを見ると、私だって、本当に死んでしまいたい位、辛うございましたわ」

山口夫人は、かすかに寝息を立てている高松夫人に深々と頭を下げ、泣き声で心から、謝まるのでした。

「奥さま、どうぞ許して下さいませ。でも、私も、とても苦しかったのですのよ」

☆

圭子ちゃんが帰ってきましたのは、それから一時間ほどしてからでした。足早やに階段を降りくるなり、智恵子先生の胸に顔を埋めて泣きじゃくったのでございます。

「先生っ、わたし……」

「どうしたのよ、圭子ちゃん。私達は、とっても心配してたのよ」

横坐りをしていた先生は、胸の中で肩をふるわせて、嗚咽する圭子ちゃんの髪を、優しくいたわりながら訊ねるのでした。

「わたし……わたし……」

圭子ちゃんは、こみあげる涙と悲しさで声も満足に出ない有様でした。

「一体、どうしたっていうの、圭子ちゃん。随分、おそかったわねえ」

僕のイメージ画集

『シエルパ』

(山下悠子に想う)

室井亜砂路



圭子ちゃんの悲しみの様子が、唯事でない
ので、私達も心配になり、先生のまわりに寄

り集まりました。

「圭子ちゃん、泣いてばかりいないで、先生

に、詳しくお話してごらんなさい」

先生は彼女の顔を覗き込むようにして言われます。そして、おやっと気がつき、

「あれっ、圭子ちゃん、あなた、パンティをはいているじゃないの」

びっくりしたように言われました。今までうっかりして、気がつきませんでした。先生に、そう言われてみますと、どうしたのか、彼女は紫色をしたメンス用のパンティをはいているのでございます。

「はい」

彼女は、先生の胸の中でうなずきました。

「これは、一体どうしたの。早く、話してごらんなさい」

「さっき、私は、お八重さまに呼ばれて、連れてゆかれたでしょ」

彼女は涙の一杯溢れた瞳をあげ、しゃくりあげながら話しました。

「ええ、でも、山口さんと高松さんのお二人は、さっき帰ってきたのよ。山口さんのお話では、圭ちゃんだけ、二階へ連れて行かれたって、言っていたけれど……」

「そうなの。圭子だけ二階の元の入院室へ連れていかれたの。そうしたら……」

彼女は言葉を区切るたびに、小さな肩をふ

るわせ、しゃくりあげながら嗚咽をくり返すのです。お人形のように可愛いく揃った長い髪が肩の上に扇のようにひろがり、そのたびに、さらさらと揺れるのでした。

「先生っ。そうしたら、そうしたら、ニコライエフ司令官殿と、ガガーリニコラフ情報中尉殿がいて……、私を無理矢理に……、ベッドの上へ、押し倒して……、おおお……」

そこまで言うとな彼女は、再び先生の胸に顔を埋めて、よよと、声をあげて泣き出してしまったのでございます。

「そうだったの、やっぱり……」

智恵子先生は、すべての事柄を了解されて彼女の髪を撫でながら絶句されました。心やさしい先生の目には、いち早く、大粒の涙が溢れるようにこぼれていました。

「圭子ちゃん、さぞ、辛かったでしょうね」

ロシア軍に捕われの身となって以来、可憐な圭子ちゃんに対して、いつかは、このような凌辱をすることは予想されたことですが、実際に、こんないとけない少女に、むくつきき大男の魔手が……襲ってきたのだ……となってみますと、覚悟はしていたというものの、圭子ちゃんにとっても、また私達にしましても大きなショックと限らない悲しみとで

ございました。

「私、私……、どうすればいいの、先生！」

彼女は、赤ん坊が、いやいやをするように体をもんで、泣きじゃくっています。

「圭子ちゃん、もう忘れるのよ。私達は戦争に負けて奴隷になったんですもの、どんなひどいことをされたって、一言も、文句は言えない境遇なのよ」

「私達だって、毎日毎日、今、圭子ちゃんがされたより、まだまだ、もっとひどい仕打ちを受けているのよ。だから、我慢するのよ。いいこと、恥を忍んで、生きてさえいれば、また、救われることもあるわよ」

口々に慰めの言葉をかけるのですが、こんな言葉なんか、今の彼女にとって、何の慰めにもならないことは、私達にもよくわかっています。しかし、すべての自由を奪われ、屈辱の連続である哀れな毎日を送っている私達には、こういつて力づけるより他に、なんの慰めの方法もなかったのでございます。

「はい……済みません」

彼女は、はにかむように淋しく笑いながらうなずき、やっと顔をあげました。悲しみと恨みの入り混じった涙が頬を濡らしている顔は神秘的な美しさに輝いています。私は、そ

んな圭子ちゃんが、堪まらなくいとしくなり「圭子ちゃん。ねえ、我慢するのよ。姉さんが、しっかり抱いてあげるからね」

先生の胸から圭子ちゃんを奪い取るようにして引き離し、強く抱きしめると、何度も何度も頬ずりしたのでございます。

「圭子ちゃん、しっかりするのよっ。どんな目にあつたって、すべて忘れてしまうのよ。お姉ちゃんだって、毎日、それはそれは、恥かしい目にあわされているのよ。でも、お姉ちゃん泣いたりしないでしょう」

「はい、晶子お姉さま。圭子、泣いたりしてごめんなさい……」

「いいのよ、いいのよ。泣きたい時には、思いつき泣くのよ。そうしたら、悲しみは、少しは薄らぐものだわ。でも、こんな無垢な圭子ちゃんを、手錠めにするなんて、本当にひどい男達だわ。辛かったでしょうねえ」

二人は、ぴたりと、肌と肌とを合わせて抱き合っていました。肌を通して彼女の体のぬくもりが、ほんのりと伝わってきます。

「晶子お姉さん、圭子を、しっかり抱いて」

彼女は武者ぶりつくように、私の体を抱きしめてまいります。私も、それに応えるように、彼女の胸のふくらみを自分の胸にぴった

り合わせ力一杯、抱きしめました。

「圭子ちゃん、その時の様子を、くわしく先生に、お話してごらんなさい」

智恵子先生は、心配そうに、彼女の体を見つめながら、おっしゃいました。

「そんな場合には、後の処置が、とても大切なよ。もし、圭子ちゃんの大切な所に、ひどい傷でもしていたりしたら、すぐ手当をしておかなければいけないでしょう」

「はい」

彼女が素直にうなずくを見て、私は背にまわしていた手を、ゆるめました。

「それで、司令官殿が、どうしたの？」

「私が、お八重さんと一緒に部屋へ入ってゆきますと、お酒を飲んでいらっしやった司令官とガガーリニコフ情報中尉とが、私に、お酌をしろって言うのよ。それで、私、仕方なく、お酒を注いであげたんですけど……」

「もうお二人は、その時、相当酔っていらっしやったの？」

「いいえ、そうでもありませんでしたわ。そのうちに、ガガーリニコフ情報中尉が、私にも飲めって、無理矢理、お酒をグラスについで下さいましたのよ」

「お酒って、どんなお酒だったの？」

「美しい赤い色をしているお酒でした。一寸甘くて、いい香りがして、口当りのよい、とてもおいしい、お酒でしたわ」

「ああ、そのお酒でしたら、この間、私も飲まされましたわ。圭子ちゃん、そのお酒って透きとおったように綺麗な赤い色をした、ちよっと、とろりと粘り甘口のお酒でしょう」

山口夫人が口を、はさみました。

「はい、その通りですわ」

「やっぱり、私が飲まされたものと同じですわ。そのお酒、どれ位、飲まされたの？」

「小さなワイングラスに三杯です」

「まあ、三杯も飲んだの。圭子ちゃんって、凄いのねえ」

「いいえ、私、一杯飲むのも、やっとだったんです。でも、お八重さんや司令官殿に、やいやい、すすめられて、断るのも悪いと思つて、辛抱して飲んだんです」

「それを飲んだら、体の中が、かあーっと、火照ってきたでしょう」

「ええ、山口さま、その通りですわ。飲んでしばらくすると、もう、圭子の体中が、痒いような、熱いような、いても立っても、おられない気持になつてしまいましたのよ」

「私も同じでしたわ。先生、あれは一体、な

んというお酒なんでしょうねえ。それはそれは、早く酔ってしまつて、今、圭子ちゃんが言ったように、もう、いても立ってもおられない、うずうずした気持になるんです」

「さあ、なんという、お酒でしょうねえ。ロシア人が飲むのですから、ウォッカという、お酒じゃございませんの？」

「いいえ、ウォッカやウイスキーでしたら、私もいただいたことがありますから、よく知っていますけど、私、あんなお酒って、初めてですわ」

「お酒のことは私にもわかりませんわ。一体なんというお酒なんでしょうねえ」

智恵子先生も、首をかしげておられます。

「そのお酒を飲まされて、しばらくしますと突然、ニコライエフ司令官が、私を抱えあげようとするんです。私はびっくりして逃げようとしたけれど、お酒に酔ってしまつて手足の自由がきかないんです。その上、お八重さんが、私を逃がさないように腕を引っ張っているものですから、簡単に抱えあげられて、ベッドの上へ押えつけられてしまったんです。私……」

彼女は、その時の悲しかった事を思い出したのでしよう。大きな涙の粒を、いっぱい

ためた瞳で、じっと私を見つめています。

「それで、それで……私……晶子お姉さま、私……、とうとう……おおお……」

切なそうに泣きじゃくるのです。

「司令官殿に乱暴されてしまったのね」

「はい」

なんとということでしょうか。こんな無垢で可憐な小娘の圭子ちゃんにまで、獸欲の魔手を伸ばして満足しようとは――。

「その時、ガガーリニコフ情報中尉や、お八重さんは、どうしていたの？」

「はい、いくら、お酒に酔っていたといっても、私だって、必死になって、足をバタバタさせて抵抗しましたんです。そうしたら、二人がかりで、私の手と足を、こうしてベッド

に押えつけたのです」

「まあ、そんな残酷なことをしたの」

「それに、乱暴したのは、司令官殿だけじゃなかったんです。司令官殿が私の体から離れたかと思ったら、中尉殿がすぐに、いどんできたんです」

「じゃあ、圭子ちゃん、あなたは、続けて二人の男に犯されたのね」

先生は思わず絶句なさいました。

「痛かったでしょう？」

「ええ、とっても……。もう、お腹の中が、引き裂かれるような痛みがして……」

「可哀そうにねえ。こんな可愛い圭子ちゃんに、最初から二人もいどみかかるなんて。それで圭子ちゃん、後始末はどうしたの？」

☆必ず自作の未発表の作品を御投稿願います。白い画用紙に黒色のペン又は毛筆を御利用下さい。大きさは御自由ですが本誌の雑誌大位までが適当です。カットの的なものは半分大でいいと思います。☆掲載作品につきましては、作品の出来に相当した画料をお支払致します。アイディアだけの時は、鉛筆画にても構いません。奮て御応募下さるよう期待します。

△奇譚クラブ編集部▽

☆SM画稿募集!!☆

☆SM雑誌の草分けとして、二十数年の輝やかしい歴史を誇る本誌にふさわしいSM画稿を読者の方々から募ります。

☆画材は、女体責め、女体緊縛を初めとして、女王様や女御主人の狂暴ぶりでも結構です。女体切腹の悲愴美は勿論、下着などのフェチシズムに関係したものでも、本誌の内容にマッチするものでしたら、お好みのものを、お寄せ下さい。

随分、出血したんじゃないって？」

「ええ、ベッドのシーツが、真赤に染まっていたわ。でも、その仕事は全部、司令官殿達三人で念入りにして下さいましたわ。乱暴が終わってから、私を離さないで、何やら話しあいながら、私を見ていました。そのうち、お八重さんが、このメンスバンドを持ってきて穿かせてくれたんです」

これで先刻、呼び出された時、全裸だった彼女が、紫色のパンティを穿いているわけがわかったのです。私達は、メンスの時だけはパンティを穿かせて貰えたのでございます。

「圭子ちゃん。一度、先生に診て頂いたら。」

もし、怪我でもしていたら大変でしょう。ねえ、いい子だから、診て貰いなさいよ」

私は軽く彼女の背中を叩いて、たしなめ、抱いていた腕をときました。

「そうよ、圭子ちゃん、晶ちゃん（あき）の言う通りよ。もし、怪我でもしていたら大変だわ。先生が診てあげるから、パンティを脱いで、そこへ仰向けに寝てごらんさい。さあ、圭子ちゃん、早くう。あなたの体のことなのよ」

先生に、きつく促されて彼女は、しぶしぶ床の上に横になりました。

「圭子ちゃん、パンティを取るのよ」

私が言いますと、

「いや、いや、私、恥かしいわ」

彼女は両手で顔を掩い、首を振ります。

「仕方がない子ねえ、自分のことなのに。じ

ゃあ、晶ちゃん、貴女が脱がせてあげて」

智恵子先生は、彼女の足元へ、しゃがみこまれました。私は紫色のパンティに手をかけますと、彼女は最初、体をこわばらせていましたが、脱がしにかかる、自分から、お尻を持ちあげ、脚を開き加減にして、脱がし易いようにしました。パンティの中に、挟みこまれていた脱脂綿には、べっとりと血が滲んでいました。

「圭子ちゃん、両足を大きく左右にひろげてごらんなさい」

智恵子先生は、彼女の体を覗き込みながら指示なさいます。

「これ位で、いいのですか？」

「そうねえ、そうしておいて、膝を立てて、ちょっと、お尻を上へ持ち上げ加減にして、先生の方へ突き出してごらんなさい」

「こうですか？」

彼女は素直に、先生の言われる通りに、体を動かしていますが、花も恥じらう乙女としては、たまらない羞恥なのでしょう。顔を真

赤に染めています。

「そして、暫く、じっとしているのよ」

智恵子先生の手は、可愛いく盛り上った彼女のお尻の下に当てがわれました。

「出血は、もう止まっているようね。それに怪我也大したことはないようだね。圭子ちゃん、今はもう、余り痛まないでしょう？」

「はい、脚を動かした時、ちょっと、ズキンとするくらいですわ。でも、なんだか、ほおばったみたいで、変な感じですよ」

「そうでしょうねえ。傷の方は、まあ、極く普通ですから心配は、いりませんが、なんといっても、まだ最初ですから……」

「そうですわ。初めての時は、誰でも、あとで、そんな感じがするものですわ」

夫人達も、自分の経験から、互いに、うなずき合って顔を見合わせるのです。

「これが乱暴された時に受けた傷ですけど、今でも少し血が滲んでいるようね。これ位なら、何も心配することはございませんわ。粘膜の傷は、案外早く治るものですから……」

そう説明されて、私達は改めて、もう一度そこを覗き込んで安心するのです。

「先生、もういいの？」

彼女は、長い間、両脚を大きくひろげ、下

腹部を上へ持ち上げて、お尻を突き出す姿勢をとらされていたので、苦しうに顔をしかめています。

「あら、ごめんなさい。私の話が、つい長くなってしまつて。もういいのよ、圭ちゃん」

お尻の下へ手を当てがい、静かに床へおろしてあげるのをごさいました。

「でも、圭子ちゃんは、よかったわねえ。大した傷でなくて……」

心の優しい宇都宮夫人は、我が事のように喜んでいます。

「先生、こんな小柄な圭子ちゃんが、あんな大柄なロシア軍将校に、しかも二人にも一度に犯かされながら、これぐらいの怪我ですんだっていうのは、奇跡ですわねえ。どうしてでしょうか？」

山口夫人は、不思議そうに、顔をかしげて先生に問いかけています。

「そうねえ、多分、乱暴される前に、赤色のお酒を飲まれたって、言っていたけれど、それがよかったのかも知れないわねえ」

智恵子先生は、そう言われながら、圭子ちゃんに、パンティを穿かせてあげるのをごさいました。

——(つづく)——



カット・マエダヒオミ

テレビに依る「美女の鼻孔観賞」

天 国 の 椅 子

佐 藤 光 保

昂ぶるのです。

私にとって女性の鼻孔というものは、セックスアピールがあつて大変、魅力的に感じられるものです。

る、素晴らしいテレビ番組があることを、私は知ったのです。それと同好者の皆さんにも、この朗報をお知らせしたいと思い、筆をとった次第です。

つては渴望の番組ということができるでしょう。

前置きはこの位にして、次に、その番組について述べてみましょう。

最近、女性の鼻孔の魅力について投稿をされる方が多いようですが、鼻孔マニアの私にとっては、力強く思え、嬉しいかぎりです、毎月、奇巧の発売を楽しみにしております。

もちろん私も、女性の恰好のよい鼻孔に限りない魅力を感じているものの一人です。美しい女性の顔を仰向けさせて、至近距離からその形のよい鼻孔を観賞すること、を想像しただけでも、妖しい官能の疼きを覚えて、私の心は激しく

れるものですが、残念なことには鼻孔は下方に向いて開いているので、正面から相対した場合には見えません。顔のまん中の、一番目立つところであり、すぐに見えそうである、なかなか見ることができない鼻孔に、私ばかりではなく鼻孔マニアの皆さんも、きつと欲求不満の思いを抱いていられるのではないのでしょうか。

ところが、そんな欲求不満を吹き飛ばしてくれるような、女性の鼻孔を心ゆくまで観賞させてくれ

だいたい、女性の鼻孔というものは、普通の状態では、なかなか見られないものです。テレビドラマ等で、病人がベッドに寝ている場面を、カメラの位置を仰臥している人の足元に構えて写してくれると、どうやら鼻孔が写ります。が、そんなシーンが放映されるのは、ごく稀にしかありません。それがこの番組では、必ず女性の鼻孔がパッチリと、しかもクローズアップで見ることができるので、私のような鼻孔マニアにと

それは、毎週土曜日の午後十一時四十五分から始まる、日本テレビの『土曜イレブン』です。内容は、日本テレビの、『イレブンPM』や、NETテレビの二十三時『ショウ』と同様のお色気番組ですが、その中に『天国の椅子』というのがあるのです。

まず、毎週一人の美女が選ばれて、床屋の椅子のようなものに腰をかけさせられ、革バンドで、身体を椅子に括りつけられた上、両腕も、椅子の左右の肘掛けに固定



されます。そして、この番組の常連である三人の男性タレントが、彼女のまわりをとり囲みます。美女を悶えさせ、天国に送る仕置人の役目をおおせつかった三人の男性達は、大いにハッスルして、次々に意地の悪い質問を彼女にあげせかけ、その答が悪いと云っては、椅子を一段ずつ、後ろに倒してゆくのです。

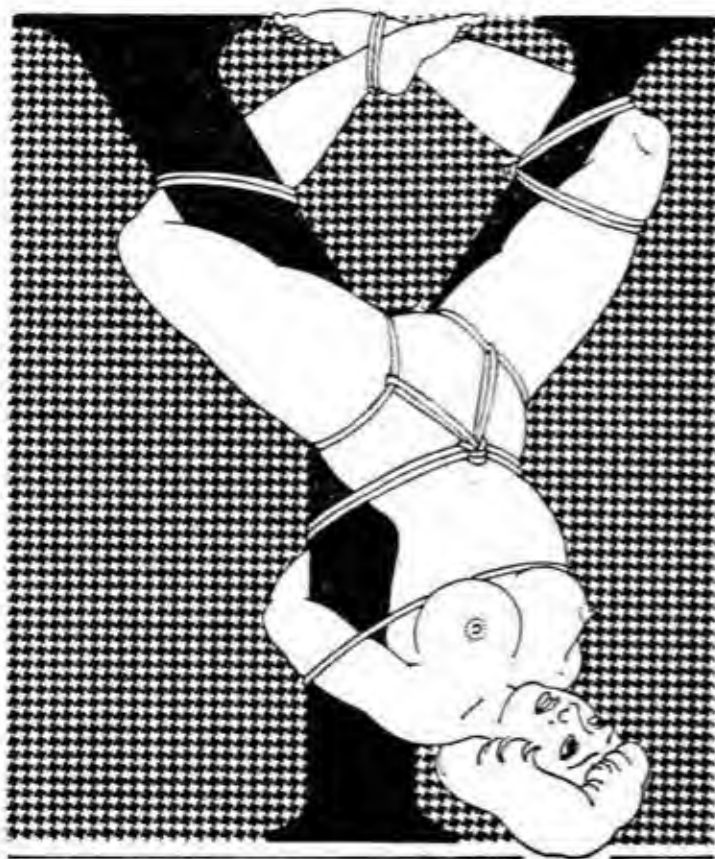
私は、このゲームを見るとき、頭のなかで椅子を拷問椅子か処刑台におきかえ、この男達を、役得とばかりに女囚に淫靡な責めを加える好色な拷問役人。椅子に坐る女性を、無実の罪におとしいれられて苛酷な責めに悲鳴をあげて悶えるあわれな犠牲者——という風に、想像することになっています。こういう空想をしながら見ると、一段と楽しいからです。

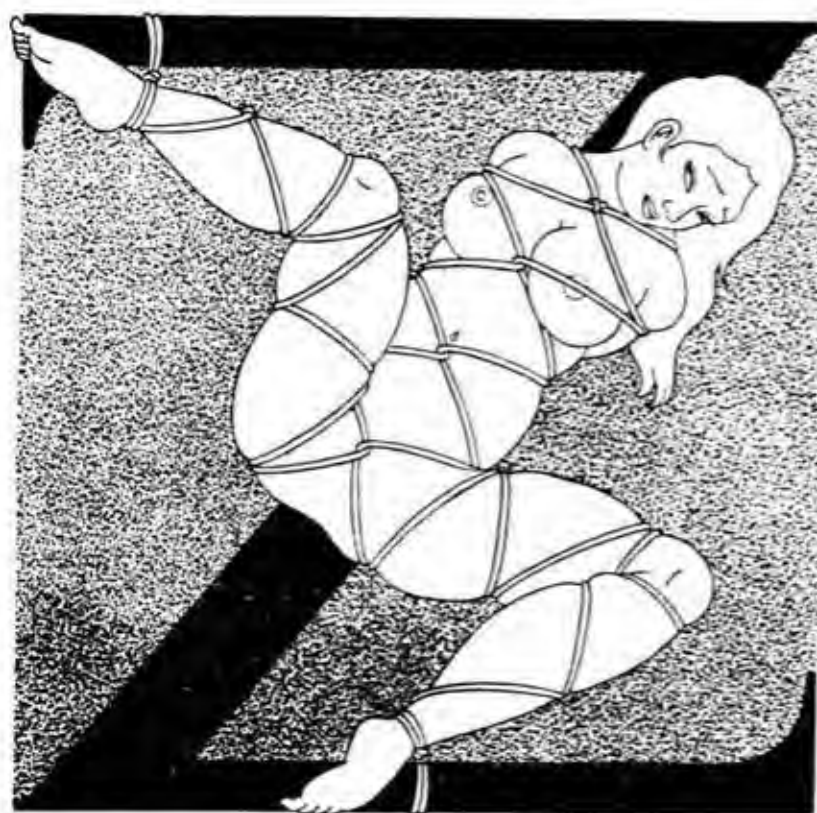
で、結局は椅子を後ろに倒されてしまうことは避けられないという運命にあるのです。そして最終的には、椅子は水平から更に、への字型にされて、女性は身体を弓なりに反りかえらされ、その上椅子に仕掛けられたパイプで全身を責められて、天国に昇天するという

椅子が、しだいに後ろに倒されてゆく過程を、テレビカメラは真正面からロングで、又はアップでとらえてくれるのですが、女性の体が、だんだん仰臥してゆくにしがたがって、カメラが女性の顔を下側から写すことになり、当然、鼻孔がクローズアップで写しだされてくるのです。

大勢の男に寄ってたかって、いびられ、否応なく椅子を後ろに倒されてゆく女性は、困惑とはじらいの表情を見せながら、その美しい顔を、しだいに仰向けてゆきます。それにとまって、TVカメラに写される鼻孔の向きは、刻々と微妙に変化してゆき、最後には完全に丸見えになってしまうのです。

美しい女性の、顔の下側から、真正面にクローズアップされる鼻孔の孔——。それは、すぐくセクシャルで、何とも言えないエロチシ





ズムがあるように思います。

私には、煌々と明るいライトに照らされ、カメラの前に鼻孔をあからさまに晒される羞恥のためか形のよい鼻孔がヒクヒクと動き、両鼻翼と上唇との接点周辺が、微妙に拡がったり狭まったりするのも、たいへん官能的に、感じられるのです。私は、胸を熱くしながら、テレビにかじりつくようにして、全身の血をゆさぶられるような想いで、その魅惑的な鼻孔を、

じっと見つめるのです。

女性の美しい鼻孔を見たとき、どういうわけか、私は激しい欲情的な気持ちになってしまふのです。何時でしたか、造化の神の傑作とでも云いたいような、素晴らしく形の整った鼻孔が、ブラウン管に写し出されたことがあります。その時は、あまりにも美しい鼻孔に、たまらなくなつて、思わず、自らを慰め、テレビの画面で悶絶する美女と一緒に、私自身も昇天してしまいました。

○

私は、この番組を知つて以来、毎週欠かさず『天国の椅子』を見ています。

『天国の椅子』が始まるのは、土曜イレブンの後半です。午前0時三十分頃になつてしまします。しかし、幸い、翌日は日曜日で朝寝がきますので、私は

この番組の女性の鼻孔が見たいばかりに——それは、ほんの数分の短い時間であるが——眠い目をこすりながら、深夜まで起きています。

それにしても、毎週、テレビの画面に写し出される女性たちの鼻孔の、なんと種類が多く、その形状が、微妙な変化に富んでいることか！

卵形をした、いかにも好ましい恰好の鼻孔。丸い、小さな、可愛らしい鼻孔。あるいは、タテに細長くのび、ハの字型に並んだ美しい鼻孔など、まさに十人十色です。

鼻は、顔の中央部の、もっとも目立つ場所にあるためか、顔の美醜にも深い関係があるようで、容貌の美しい人は、みな、形の整った美しい鼻を持っているように思えます。

私の好きな鼻は、鼻筋が高く通っていることはもちろんですが、鼻頭や小鼻にも肉がタツプリついた、いくぶん肉の厚目な鼻が好きで、たとえば女優の長谷川裕見子、三矢歌子、亀井光代。歌手では、

三沢あけみなどの鼻が好きです。この人達の鼻は、みな一級品で、スッキリと高い鼻筋、やさしい丸みをおびた鼻頭、豊かな肉付きの形のよい小鼻など、どの点から見ても申し分なく、まったく理想的な、素晴らしい鼻だと思います。そしてこのように形のよい素敵な鼻なら、その鼻の孔も、きっと美しい形をしているに違いないと思うのです。

私はいつも、この人達が顔を仰向けて鼻孔を見せてくれたら、どんなに素晴らしいことだろう——、などと考えているのですが、彼女達は意地悪にも、絶体、と言つてよいほど、鼻の孔を見せてはくれません。なぜなのでしょう。あの、きっと美しい鼻の孔を公開したら、もっと人気が高まるだろうにと、私は思いますが、どうも彼女達は気付いていないようです。

それで、この四人の女性に、土曜イレブンに出演してもらい『天国の椅子』に坐つて鼻孔を見せて貰えたら……というのが、私の切なる夢なのです。

——(おわり)——

茶色の目

ジャンヌこと、小林敏子の人位式終了をもってG号作戦発起の準備は悉く終了した。したがって、原子力潜水艦ネプチューン号は、予定通りポートエリアの基地を発進する。洋上に出ると、最初は進路を真西に取ってインド洋を進んだ。

数日してモーリチアス諸島に接近する。モーリチアスには有明の資本が大量に投入され、特にレジャー産業の開発に力が入れら

れていた。それが、ひそかに、彼の秘密王国への補給基地となっていたことは誰一人として想像すら出来ないことであった。

幾つかの島々は全島、有明に買収されて、住民は移転を余儀なくされた。しかし、どこかの国の土地収用に比べて、有明の場合はこれら住民に対して破格の補償を支払っていたから、住民パワーなどもなく、住民は、むしろ有明のことを、救世主のように感謝しながら、進んで移転して行った。

そのあとが大変だった。有明の注文を受けて、日本の建設会社が工事を請負い、大規模

な工事が始まったのである。ある島はヌーデイストの楽園となった。ある島にはモナコやラスベガスにも、ひけをとらないギャンブル施設が調っていた。そして島々の間は大型ヘリと水中翼船で完璧に結びつけられている。独立したモーリチアスの中で、もう一つ、有明の主権が、この島々に認められているという感じだった。

出航してから、ずっと個室に閉じ込められていた山本百合子は、有明から呼ばれて、むしろ、いそいそと玉座の間へ出頭した。



今は、もう素っ裸の生活にも、いくらか馴染みはじめていたし、この国での特殊な作法も見習っていたから、平伏して房門をくぐることも、自然に出来るのであった。

しかし、平伏したまま一寸ききみに扉口を入った彼女が、許されて顔をあげた途端、「あっ……」

といて、思わず顔を伏せてしまった。

それも無理からぬことであつた。有明は、出航して以来、再びジャンヌこと小林敏子をひき寄せている。パレスエリアの公式生活では、少尉に任官したばかりの小林敏子などでは有明の顔を拝むことさえ大変な光栄であつた。

前号まで「秘密裸女王国の独裁主有明は世界中から誘拐蒐集してきた数千の美女に君臨し畜従隷従を強制している。彼女等は、その材質に応じて、五段七階級に分類され、巧緻な統制管理を受けている。なかでもF作戦での最大の獲物である山本百合子については有明自ら慎重なアプローチを試み、百合子の心も遂に有明に仕えることを希望するようになってきた。ここで有明は、賭を打つことにした。彼女を不可触のまま東京へ連れて行って両親に会わせようという計画であるこのテストに耐えれば、百合子の心は完全に有明のものになったと見ていい。

た。まして、お手がつくことなど想像も出来ぬ。絶対者の有明が何をしようと勝手だといえ、それまでだが、彼にしても彼自身が作つた秩序は尊重しなければならぬ。

ところが、航海に出れば話は別であつた。もともと、日本にいるときから、お手がついたジャンヌを、有明が呼ばない理由はない。

白絹のシーツをピシッと張ったマットの上で、有明はジャンヌと抱きあっていたのである。

「どうした。気分でも、わるいのかね」

有明は片肘を立てて、上半身を起した。

狼狽しつつ顔をそむける百合子。だが、そんなことに頓着する有明ではない。

「さあ、しっかりしなさい。もっと、そばへおいで……」

しかし、百合子は動かなかつた。いや、動けなかつたのである。深々とした敷物の中に顔を埋めて、ひれ伏したまま、イヤイヤをするように、身をよじっていた。

何とも、たとえようもない屈辱感だった。

今まで有明と会うときは、いつも彼女一人きりだった。たとえ彼女が、どんなに、つましやかな女性だったとしても、特別扱いの

待遇に、その自尊心を癒すことが皆無だった筈はないのである。知らず知らず、次第に培われてきた特権意識が、ここにきて無残にも叩きのめされてしまった。

歯ざしりしたい程、口惜しかった。

出来れば走り去ってしまいたかつた。しかし、それが許されないことは身にしみて解っていた。彼女の生活は、一般の女囚たちとは比べものにならないくらい、ゆるやかなものであつたが、それでも幽囚の身であることには変りなかつたし、この国のすべての一挙手一投足が、有明に対する奉仕にのみ存在し、その許可がなくては何事も、なし得ないということを覚っていた。

人の心理は奇怪なもので、どんなに欲しかったものでも一旦、自分のものになつてしまふと案外、関心が薄くなり、逆に、それ程でなかつたものでも、自分から去って行こうとすると、夢中になつて引きとめようとする。

有明の心が自分一人に、そそがれているのではないということ、今ハッキリ実例をもつて見せつけられたとき、百合子の内心を吹きまくったリアクションは、敗けてたまるかという雌の闘争本能だった。もっと綺麗に言

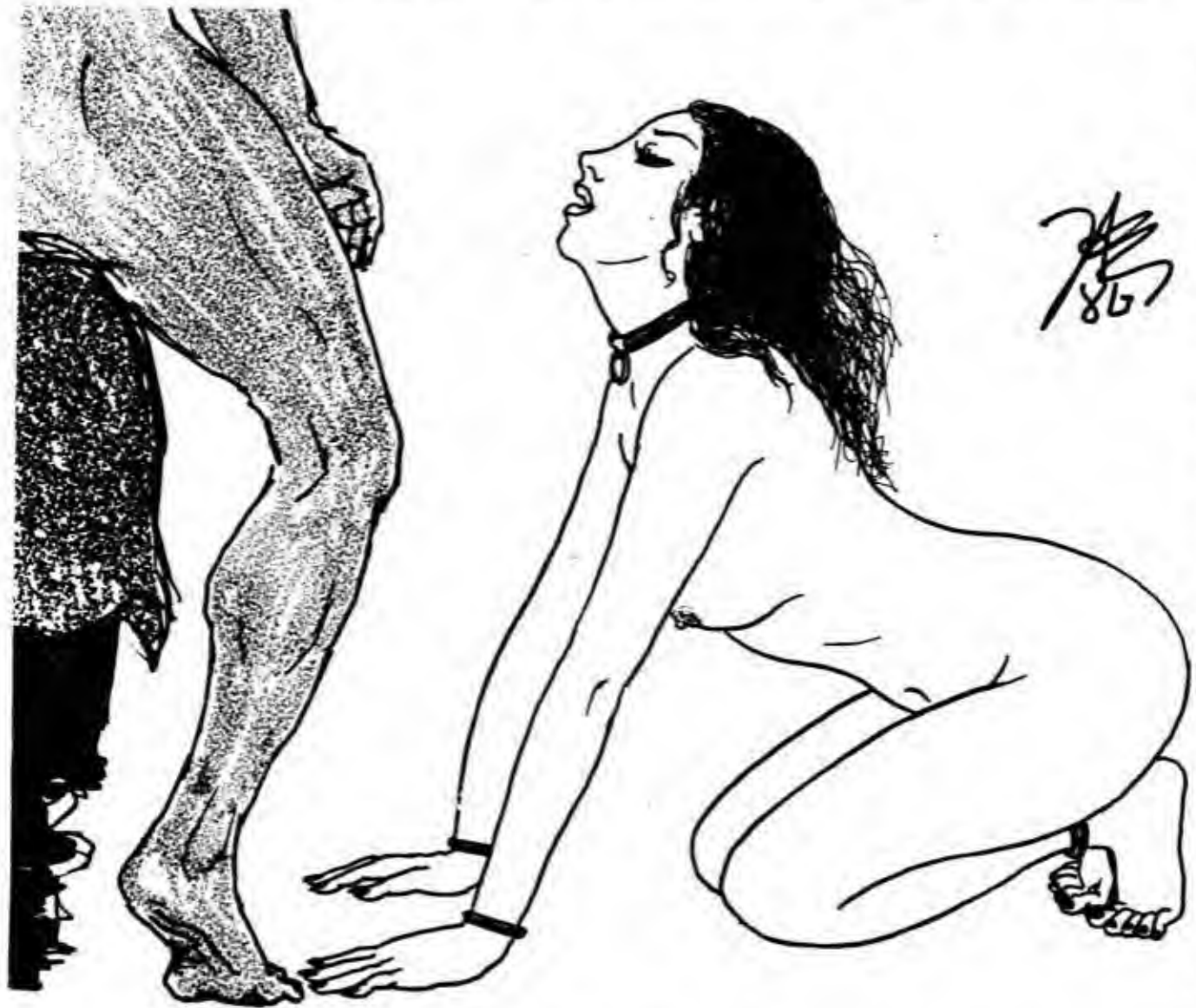
えば、今まで莫然と安住していた有明への思慕が、激しい愛欲に変貌したとも言えよう。

豊富な経験から、有明には百合子の心が手に取るように見抜けている。心憎いまでに計算し尽された彼の処遇は、遂に百合子をして自ら有明に全面降伏をさせる羽目に到らしめた。これから先、百合子は有明なしでは、いられなくなる。それは恰も、麻薬中毒にかかったものが、ヤクなしでは、いられなくなる姿に似ていた。それ程彼女は恥も外聞も、かなぐりすてて、有明の心を牽きつけようと決意していたのである。

こうした心理経過は、文章に書くとは長たらしくなるけれども、実際はホンの数秒の間に、電子計算機が複雑な計算を瞬間的に答えてしまうように行われたのである。そして、それは山本百合子という美女が、単に美しいというばかりでなく、回転の早い賢女であることを、如実に実証したといつてよ

い。

もう一度、有明が声をかけた。その声の調



子には、科学者が実験の結果を冷静に見極めようとする慎重さが、こもっていた。

「どうした。気分でもわるいのなら、下がって休んでいてもいいんだよ」

ところが、百合子は、もうためらわなかった。彼女は顔をシャンとあげて、涼しげに、こう言ったものである。

「いいえ、もう大丈夫です。ご迷惑でなければ、ずっとお側に置いていただきとうございます」

「ご迷惑なものか！」

有明が、嬉しそうに叫んだ。彼も又、この類稀な美女を完全に、わがものにしたことを覚ったからである。

「どんなことでも、私のいいつけに従うことが出来るかね」

わざとらしく、いかめしい表情を作りながら有明は、にじり寄ってきた百合子の肩に手をのせた。その肩がピクッと揺れるのが、わかった。それは、百合子にとって

岩のような重さであった。そして、すぐに融けた鉄のように熱く、全身が燃えるように感じられた。

「……」

言葉はなく、美女は愁いをこめた眼差しで頷いてみせた。

有明は執拗だった。

「合頭礼というのは私の国の大切な儀式だ。

知っているね。さあ、今、やってみよう」

「いいえ、いけません。それは……」

突然、今まで黙って、ぐったり伸びていた小林ジャンヌが、起き上って叫んだ。百合子はその礼を行なうことは、何としても我慢がなかったのである。

百合子は、すでに有明のすぐ前に進んでいた。咄嗟にジャンヌが割って入ったので、百合子はハネ出されて敷物の上に横転した。アマゾン女兵として鍛え抜かれた体力は、そんな気がなくても、百合子を突きとばす結果となった。

おとなしい百合子が、ハッキリと瞋りの表情を見せた。

「何をなさるのです」

ジャンヌは、百合子のなじり声を脊中に聞

き流して、有明にしがみついていた。

「バカ」

苦笑いしながら有明はジャンヌの脊中を愛撫するのだった。

百合子の心に嫉妬の嵐が吹きすさんだ。生れてはじめて覚えた瞋恚だった。

「アッ」

「さて！」

ジャンヌと有明が同時に叫んだ。一瞬早く百合子はジャンヌの脊中に、とびかかっていた。

力一ぱい、その髪を掴んで引きずり倒そうとする。ググッとジャンヌの頭が、反って有明の体から離れた。

雪のように白い百合子の肌と、やや、浅黒いジャンヌの肌が、からみ合ったまま有明の足もとに転がった。しかし、勝負の結果は明瞭だった。ジャンヌが最初にやられたのは不意を突かれたからであって、ひとたび立直ってしまえば、百合子などが、敵う相手ではない。

もんどり打ったジャンヌは、アッと驚く百合子の手から、自分の髪を引き抜いて、その手を逆にとって床に押さえつけてしまう。

そうしながら、有明の方に顔を向けて、そ

の指図を待つ態度は余裕タップリだった。

「放してやれ。もう手向いは出来まい」

事実、百合子の戦意は、もう消えてしまっていた。ただ、無性に情けなく、泪があとからあとから溢れ出てくるのを押えることが出来なくなっている。

「私の国では嫉妬の念を外にあらわすことを絶対に禁止している。私の女たちは相互に仲よく、助け合って暮さなければならぬ。それが出来なければ、私と一緒に居ることは出来ない。まして君は先輩に飛びかかった。それは無礼なことだ。たとえ君が、この小林君より高位者となったとしても、矢張り先輩は先輩なのだから……」

皆まで言わずに、百合子はガバと平伏して必死の声で叫んだ。

「わかりました。わたくしが間違っておりまして。これからは、皆さんと仲よくいたします。ですから、ですから、どうかお許し下さい」

今の百合子には、有明から別れることなど想像すら出来ず、また離れることが怖ろしかった。

有明が黙っているの、哀れにも又、つけ

加える。

「どんな、どんなことでもいたします。わたくしを罰して下さい。おそばにさえ、置いていただけるならば、どんなお仕置きでも喜んで従います」

はじめて有明が笑顔を見せたので、有明の表情を死ぬ程の想いで見守っていた百合子はホッと吐息を洩らした。

「小林、君は許してやれるかね」

ジャンヌがニッコリと頷くのを見て、

「よし、それなら、ここへ仰向いて寝てごらん。そうそう、膝を立てて、出来るだけ開くんだよ」

ジャンヌは易々として命じられた姿勢をとった。そこで、さてという風に百合子を見た有明は、

「床にアゴをつけて、この小林さんの茶目にキスをするんだ。それだ、君のお詫びのシルシだということにしよう」

「……」

百合子にはブラウン・アイの意味が、わからなかった。有明が嗤って、

「ここだよ」

素早く彼女の後に回って、指で示した。

百合子にとって、これも又、初体験だった。

「アッ」

と思わず、その手を払いのける。

「逃げるなよ。逃げると、もう一度、お仕置きだよ」

有明は、いよいよ意地が悪い。

こうして百合子は、惨めな気持で恋敵に屈服させられたのである。

有明を見あげた百合子の顔は、キラキラと輝いていた。

親不孝

百合子が、見えない紐帯で完全に繋ぎとめられてしまったというのに、有明はまだ彼女を抱いたことがない。百合子は焦らされるだけ焦らされている。水なしで赤熱の砂漠を幾日も幾日も歩かされた様に乾き切っていた。その百合子の目の前で、凄まじいばかりのベッドシーンが展開された。有明の翻弄ぶりもさることながら久しぶりの熱愛にジャンヌは燃えに燃えた。叫喚をあげ、号泣するのであった。

百合子は正座して、その光景を見詰めていなければならぬ。それは一種の拷問であっ

た。彼女は齒を喰いしばって、涙をポロポロこぼし続けていた。

そして東京へ行って、たとえ懐かしい両親の膝下に帰れるチャンスが到来したとしても（かつては、そのことを、どんなにか願望したことであろう！）自分は、どうしても、ここへ帰って来なければならぬ。そして現在の飢餓感から救われる道は、それ以外にないのだと、われとわが心に言い聞かせていた。わたくしは、もう山本家の娘では、なくなってしまったんだわ。お父さま、お母さま、さようなら。不孝な娘を許して下さい。と心の中で、つぶやくのであった。

翌日、再び有明のところへ呼び出された百合子は、折角30センチ程に伸び揃った黒髪を男刈りに切り落されてしまった。

全身に特殊なプラスチックを吹きつけられる。頭部をスッポリ覆うマスクが、かぶせられる。いずれも、皮膚呼吸を妨げないように気孔が、あけてある。

数分で、美しい日本娘、山本百合子の姿は消え失せ、代りに、お世辞にも美女とはいわねるアフリカ女が生れた。

小林敏子も同じように変装しなければなら

なかった。彼女は例の学生騒動の黒幕として指名手配されていたからでもある。

いつもの通り、ゴムボートに乗って漂流していると有明の交え玉が操るクルーザーが近づいてきた。八名ほどが居住出来る大きさなのだが、秘密を守るために「替え玉」君しか、乗ってこない。

ついでながら、替え玉といても有明の分身として行動しなければならぬの

だから並大抵の男で動まる筈はない。この男本名は浅田一雄といって、日本における有数な敏腕弁護士として知られていた。ところがある疑獄事件に連座して莫大な借財を負わされ、社会的に葬られてしまったのである。そのとき、ひそかに救いの手をのばしたのが有明だったことは、いうまでもあるまい。数カ月の後、すっかり有明に心服した彼は、進んで整形手術を受け、自ら有明の替え玉となった。このほか、有明には、彼の分身である蔡樹理など、数名のダミーがいることは既に記



した通りである。

手短かに語ってゆこう。

クルーザーは三人を近くの島に運んだ。そこにも数ある有明の施設の一つがあつて、その私設飛行場からMU小型ジェット機に乗りかえて国際飛行場へ。そこからシンガポールバンコクを経由して東京まで一気に飛ぶ。

僅か一日足らずで、有明達は東京にあるホテルHの特別室に陣取っていた。

女二人のパスポートも、有明のと同じガボ

ン政府発行の公用旅券であつてみれば、入国上、問題の起る筈がなかった。

このガボン娘は兩名とも有明の秘書という名目だった。姉（実は山本百合子）も妹（小林敏子）も姉妹揃って啞であるという振れ込みだった。

農業問題ばかりでなく、ガボンと日本の間には色々な交渉があつた。有明は、その多くを精力的にサバいて行った。その仕事ぶりからいって、有明を疑う者は誰一人として、いなかったのである。

或晩、ガボン大使主催の歓迎会があつた。あたかも、通産大臣をつとめていた百合子の父、山本万蔵は夫人共々、この晩餐会に正式に招待されていた。これはもともと、有明が百合子に最後の試練を与えるために企てたチャンスだったのである。

その朝、百合子は有明に声をかけられた。ホテルHの豪華な特別室には有明の居室に

あてられる応接間、キッチン付のスイートの他に独立した寝室が三つもあって、家族や使用人の宿泊に利用出来るように設計されていた。それら全部が、廊下にある頑丈なドアによって他の宿泊客から完全に遮断される。メイドといえども有明の許しなしにドアの内側へ入らないように、手配してあった。その上有明はホテル側に強要して特注の鍵を、つけ加えた。

ホテルの一角に、他人の窺い見ることの出来ない特殊な部分が出来上ったのである。その中で、二人の美女たちは有明に仕えるのを夢中で競っていたのである。

有明はといえば、不便なことに、二人の美女の裸身を覆っている薄いプラスチックの皮膜を剥ぎとるわけに行かなかったから、その「ひと皮」かぶった裸身を眺めることで満足していなければならなかった。

なかでも百合子の方は未だ「不可触」の立場だったから、下着まで取りあげて個室に軟禁して置くだけであった。彼女は、それがひどく不服だった。彼女に逃亡の意思がホンの少しでもあれば、用心深い有明が、こうして東京まで連れてくる筈がないのである。それ

なのに、依然として拘束を解こうとしてくれない。その上、我慢が出来ないのは夜になると有明の寝室に呼ばれて、あの東館での夜と同じように、手足を大の字なりに一方のベッドに縛りつけられてしまうことであつた。そのあとでジャンヌを相手にしたプレイが長々と続くのである。目を閉じて顔をもむけても、嬌声は遠慮会釈もなく耳に、とび込んでくる。

前の百合子ならいざ知らず、身も心も有明に捧げようと決心した今は、たとえようもない屈辱と、はかり知れない嫉妬の苦しみだった。

寝不足で目を赤くしたジャンヌが、手足をほどこしてくれると、無意識に肌を手でかくすのが、有明には初々しく、固唾を呑むような観物だった。

「今夜、ご両親に会うことになるだろう。勿論、私の秘書、ガボンの女性としてだ。どうかね、百合子だと気付かせない自信があると思う？」

——いよいよ最後のテストが始まるのだわ。さあ、百合子。しっかりしなくっちゃ。

百合子は、われとわが心に、そう言いきか

せながら、真剣な眼差を有明に向けた。

「大丈夫ですわ。わたくしには、もう父も母もごさいません。毎日毎晩、そのことばかり考えつづけておりました。もう絶対に迷いません」

「そうはいっても、どんなにか会いたかったろう。会って名乗りたくなるんじゃないか」と有明は、ますます意地がわるい。

思わず涙ぐむ百合子だが、それでも健気に言いはるのだった。

「両方を、両方をとることが許されないのですもの……」

ガチャン。

百合子の手からマルティニのグラスがこぼれて、床で粉々に割れた。

「山本通産大臣閣下ご夫妻」

パトラーが大声で来客の名前を報せたとき百合子の受けたショックは計算以上だったのである。

「どうした。しっかりしたまえ」

有明が落ちついて言った。

そうこうしているうちに、忽ち山本大臣は有明を見つけて、ツカツカと近寄って来た。

有明が今日の主賓であつた故もあるが、この

日系ガボン人の実力は、余りにも有名だったし何よりも日本語で話せるのが心強かった。

それでも、有明は日本風というより、ヨーロッパ風のエチケツトで、うやうやしく山本夫人の手をとって、その甲に唇を近づけるのであった。

わきに立っているガボン娘が目立って慄えるのを山本万蔵は怪訝そうに眺めた。

「失礼しました、ご紹介をいたしましょう。こちらが姉のマリア、こちらが妹のユリー、子供の頃、奴隷に売られていたのを私が買ったのです」

「奴隷ですって！」

山本夫人が眉を、ひそめた。

「アフリカでは、まだ秘かに人身売買が行われているんだよ」

山本万蔵が妻に言いしかせた。

「大変な食糧不足が、人間に理性を喪わさせているんだ」

「その通りです、閣下」

と有明が、うやうやしく言った。

「一人、二人の者を救うのなら誰でも出来ましょう。ですが、何百万という難民の群れをどうやって喰べさせることが出来ましょう」

「わが国も無関心ではられません」

山本大臣が胸を張った。

「余剰食糧を出来るだけお送りしているのですが何分にもコストの逆ザヤが問題でして」専門的な話に関心のない山本夫人は、二人のガボン娘の方を向いて、

「パ・レ・ブ・ジャポネ？」

と問いかけていた。日本語を話せますか、とたずねたのである。

「奥さま。この者たちは二人とも啞でございます」

「え？」

「はい。奴隷商人どもが、売り出す前に手術をしてしまったのです」

「そんな、ひどいことを……」

山本夫人が顔色をかえた。

妹のユリーになりましたジャンヌの方は別に何でもなかったけれど、姉のマリアの方は、ひどく腹を立てていた。

両親の会話が、おそろしく空虚に感じられたからである。百合子が、今、ここに立っているというのに、両親は平然として、他のことを有明に話している。彼女は、無意識に、狂わんばかりに愛娘の失踪を悲しみ苦しんで

いるものと想像していた。その想像が、すっかりチグハグなものになってしまった。

「それにしても、お嬢さまのご消息は、まだおわかりになりませんか……」

と、有明が突っ込んだとき、山本大臣はこう答えたものである。

「さらわれたのなら身代金の要求があるでしょう。それもないということになると、娘が勝手に出て行ったとしか考えようがありません。親不孝なやつです。当時は、それでも随分、悩みましたが、今はもう私どもは、そんな娘を、もともと持たなかったものと諦めることにしております」

マリアの慄えが、はた目でも異様に思える程、ひどくなった。マリアの中で、百合子が本当に怒り出したのである。

有明の目くばせで、ジャンヌが姉をやさしく連れ出したので、辛うじて破綻を免れたのであった。二人の後姿を見送りながら有明がハッキリと言った。

「山本さん、世界はひろい様で、又狭いものです。若し、どこかで、お嬢さんにお会いしたら、私はあなたのご意見を必ずお伝えしましょう。その方が、お嬢さんにとっても気が楽になるでしょうから」

(未完)

△受難を待つおんな▽

M

子

再

来

泉

一郎



昨年の九月号に「M子受難」と題して、ファンタジック・ストーリーともいう拙文を掲載して頂いたが、その時の切腹女性モデルM

いうものは、ポーズをつけるものではなく、モデルが本当に、その気になり、悦楽のうちに切腹して果てる一連の行為の、いくつかの

子は、あの時を最後として私のところから去ってしまった。切腹ということに、あまり興味を持たないM子に切腹ポーズをとらせ、結局断わられはしたが、剃毛、全裸ということを求められて怒ってしまったのかも知れなかった。

たしかにあの時のフォトは、いやいやながらポーズをとったという

ことが、ありありとみえて私も気にいらなかった。切腹フォトと

断面としての、スタイルフォトでなければ、いけないと思う。できるなら、一秒間に三コマ位、撮影できるカメラで連続して撮影し、その中のいくつかを取り上げるべきかもしれない。ポーズをつけている間に、行動は活力を失い、切腹ではなくて短刀を腹にあてがっているヌード写真にすぎなくなってしまう。九月号のフォトについては、FK誌上にて、法谷四郎氏にも、そのような点を指摘され、反省している次第である。

しかし、M子を失った私には、捲土重來のチャンスは、なかなかやって来なかった。読者通信等にも投稿したが反応は0であった。こうして「M子受難」以来、一年が経った夏の暑い日である。私は郵便受に見れない筆跡の封書を、山のようなダイレクト・メールの中に発見した。こんな時に一しよに配達されたDMは、あわれなものである。忽ち紙屑籠へ直行となる。

封筒の差出人は、ただ「受難を待つM子」としてあった。どういう意味だろうと、いぶかりながら、あわてて封を切ると、香の匂う便箋に流れるような文字が目飛びこんできた。

.....

先生（M子は私のことをこう呼んでいた）突然に姿を消してしまったことをお許し下さいませ。先生から送られたK・K誌に印刷された私の姿を見て、一時燃やしてしまいたい程でしたが、私にはどうしてもそれができませんでした。K・K誌はそのまま、私の机の引出しに置き去りにされたまま半年もそのままになっておりました。

今年の春の日曜日、何もすることがなく何とはなしに引出しの整理を始めましたとき、あのK・K誌と再会しました。始めて見て驚きと怒りと恥かしさに眠れぬ一夜をすごしてから半歳、あのお写真をとって頂いてから、というよりは、いやがる私が無理やりポーズを取らされ、縄をかけられてからはもう一年近くも経った頃です。こんどは少し落着いてもう一度、自分の姿をながめ、先生の文章を読ませて頂きました。そして、もう一度、そしてもう一度。この日は結局、三度も読みかえしてしまいました。

始めて見た時は、あれ程驚き、怒り、そして恥かしかった私なのに、どうしてでしょうこの日曜日以来、私は、あの写真と文章を読まないで床につけなくなってしまいました。

それと同時に、私が先生の前から姿を消してしまったことが、先生を悲しませているのではないかと悔まれてなりません。

もう会いたくもないと、先生がおっしゃるならば、私は永久に先生の前から消えます。私もこの一年、先生を悲しませたのですからその償いをいたすつもりです。私のお詫びを聞いて下さる心が少しでも先生にございまして、次のところへお電話下さい。午前九時から十時の間か、午後四時から五時の間にお願いいたします。

受難を待つM子より

.....

封筒の差出人としても「受難を待つM子」と誌してあった。私は直感的に、期待と、喜びと、そして何故かわからないが、おのきを覚えた。

M子が受難を待っている。私の前から一年も姿を消していたM子が、再び、縛られ、肌もあらわに切腹をして見せるというのだろうか。しかも、待つということは、M子の自由意志で、それを望んでいるということなのだろうか。

翌日、指定の時間を待つて早速、電話を試みた。

「〇〇でございます」

「泉というものですが、M子さんは、いらっしゃいますでしょうか」

「私がM子でございます。先生ですか」

「泉です、しばらく。昨日、お手紙を見ました。逢って頂けますか」

「今夜七時、モナ・リザで」

事務的な返事であった。モナ・リザというのは、「M子受難」の撮影をした時に待ち合わせた店である。わざわざ、そう云う場所を指定したのは何か意味があるのだろうか。

▼

▲

指定の時刻の五分前に、私はモナ・リザに到着した。階下の座席を見まわしてもM子の姿は見えなかった。まさか、とは思ったが、ウェイトレスに訊ねてみた。

「スペシャル・ルームは席があいてる？」

モナ・リザは、階下に普通席、二階はスペシャル・ルームが七つあって、商談等に利用する人も多い。最後にM子と、ここで待ち合せた時もスペシャル・ルームを利用した。

「残念ですが、空席はございませんけれど」

「そうかね」

私はもう一度、思いきって訊ねた。

「三号に若い女性が予約してないかね。もう

一人、男の人が後から来るといって」

「泉様でいらっしやいますか。どうぞ」

「といって案内してくれたのは、スペシャル・ルームの三号であった。」

私の予感的中した。M子は、思い出の、（それが苦いか、甘いかは別として）スペシャル・ルームを予約しておいたのだ。一年前この同じところで私はM子を口説いたのだ。そして出来上ったのが「M子受難」のフオトである。

今日の再会を、果して苦い思い出とするか甘い思い出とするか。いまから五分後には運命が定まるかと思うと、階段を上る脚も、ふるえきみであった。



一年前と同じであった。ルームの様子も、そして、そこで待ちうけていたM子も。

「先生。私のこと、怒っていらっしやる？」

「怒る？ どうして。君の方こそ、私のことを怒ってるんじゃないの。突然に姿をくらましたりして。もっとも、いやがる君を、おさえつけるようにして縛ったり、切腹の真似をさせたりしたんだから、当然といえば当然だね。おまけにK・Kに載せちゃったんだから君が怒っても無理はないと思うよ。あやまら

ねばならんのは私の方だよ」

私の言葉に微笑したM子は、運ばれてきた冷たい飲物を私にすすめながら、

「どうぞ、今日は私のおごりよ。これには眠り薬が入っていないわ」

M子受難の文を思い出させるような口ぶりであった。

「私、M子受難を、この半年の間、毎日一回読み返しましたの。そして写真も。あの時にあれ程いやでたまらなかったのに、この一カ月というものは、読み返し、写真をじっと見つめてからでないと眠れなくなってしまいました。床についてからでも、ついお腹に手をやって短刀をつき立てて引きまわす仕草をしてみたり……一体どうしたのかしら。先生の文章は私には魔術みたいなのかしら」

「そうね。切腹というのは、美しいものなのだ。決して遊びでできるものではない。ただ、本当に真刀でやれば大変なことになるから、疑刀でやるんだけれど、仮に、真刀だといって渡されても、何のためらいもなく突き立てるだけの真剣さがなければ、本当の切腹プレイとか切腹マニアとはいえないだろう」

「こわいわね」

「切腹というのはね、単に自殺の手段ではないのだ。文字通り真剣勝負なのだ。自殺しようとする人は大抵いこんなことを考えるね。どんな方法が一番楽だろうか、苦しまずに死ねる方法はないだろうか、と。これでは自殺は敗北なのだ。切腹は自殺ではないよ。結果としては自分で自分を死なせるから自殺といえるだろうが、切腹をした人、ことに武士の切腹は勝利なのだ。それだから、武士にとって切腹は、名誉なことなのだ。武士の世界は命のやりとりだ。昨日のテレビで新書太閤記を見ていたが、武田勝頼が切腹をして武田家の滅亡の場面があった。敵と戦うのが武士ならば何故、最後まで戦って戦死しないのだろうか。切腹しても戦死しても武田家は亡びることに間違いはない。しかし戦死をすればそれは敗北である。敵に武田勝頼は討たれるのだ。しかし切腹はちがう。武田勝頼を討ったのは武田勝頼なのだ。彼の心は永遠に敗北を知らない。わかるかね」

「……………」

「今の話は、武士の切腹のことを、私なりに考えたことなのだが、医学的には、いろいろのことが考えられるね。まず第一には、何故腹を切るか、ということだ。死ぬのが目的ならば、始めから頸動脈でも切った方がよい。

或は、心臓を刺してもよいだろう。それなのに敢えて腹を切ったのは、何故だろうか」

「先生。むつかしいお話は、またこんどにして下さい。それより先生は、『M子受難』の最後に、次の機会には、全裸、血紅、真刀でやってみたいと書いてらっしゃいましたね」

「ああ、たしかに書いた。あの時は、M子がどうしても云うことを聞いてくれなかったからさ」

「私、M子受難を毎日、読み返していただけてはありせんよ」

M子は、しばらく眼を閉じて何かを決心しているような様子だったが、不意に立上ると「これを見て下さい」

といって、巻きスカートのボタンを手ばやくはずすと、それをハラリとおとした。一年前のあの豊かな腹部。そしてM子は、思いきったように純白のパンティを、ぐっと押し下げた。快く皮下脂肪のついた下腹部。しかし一年前と違ったところを、私は即座に見出した。深い臍の下、約一寸を左右に横切る一条のみみずばれのような痕である。いや、一目でわかったのは一条であったが、そのまわりには何日かを経過したと思われる数条の痕。そして、ぐっとまくり上げたブラウスの下、

みぞおちのあたりから正しく臍を通る縦の痕も、うっすらと判明した。その痕を目でたどった私は、異常なことに気がついた。反射的に手が延びて、私はM子のパンティを、更にぐっと引き下げてしまった。

「あっ」

と口の中で声にならぬ声を出したM子は、それでもじっと立ったまま眼を閉じていた。剃毛しているのだ。その様子から判断すると、十日程も前だろうか。そのまま沈黙の数が過ぎた。

私は右手をのぼし、切腹プレイ痕の上を静かに、たどった。M子は、ぐっと息をつめて私に、そのふくよかな腹を切られる思いにひたっているのだろうか。呻きとも受けとれる声らしいものを出した。

「ウームッ」

そして、身をはげしくよじるのであった。一年前との激しい変りように驚いた私は手をはなした。

「先生！ ウームッ、受難は、まだ終わってないわ。最後のとどめを……お願い……」

私は即座にその意味を解して、左手でM子のブラウスをぐっとまくり上げるや、ノーブラの豊かな左乳の下へ、右の人差し指と中指

を二本揃え、ぐっと刺すように押し立てた。「アッ、アッ、ウ、ウームッ」

M子はくずれるようにシートに倒れ、そのまま、肩で荒い息をしていたが、やがてそれも静かになって、ピクツ、とも動かなくなつた。まるで失神したようである。

数分の時間がすぎた。眼をぱちりとあけたM子は、ハッと我にかえったように立上ると、私の方に背を向けて身づくろいをするのだった。

これは一体どうしたことなのだろう。あれ程の抵抗を示した一年前にくらべて、この変身ぶりは。

M子は、やっと落ち着いたとでもいう表情で飲物を一口してから、次のように、語り初めた。

「先生のM子受難を、繰返して読んだことは申しましたわね。何度も読んでいううちに私であるM子と受難のM子は、だんだん同じものになってきました。文章による催眠術のよくなものですわね。そしてある夜、日課のようになつた読み終りの後、つい机の上のポールペンを右手に持ち、下着をひろげて、お腹の左の方を軽く突いてみました。どういうわ

けか、その瞬間、ジーンとした響き。痛みではありません。響きが、お腹全体に走りまわった。それは何ともいえない感じとなってお腹中を回り始めたのです。ボールペンに少し力をいれてみました。また、響きが走り回ります。そのまま、ゆっくり、右へ引いてみました。お腹には、ボールペンの赤いインキの痕が、すーっと一すじ。私は何だか恐ろしくなつてその夜は、それで止めてしまいました。

翌日の夜、私は昨日の快い響きが忘れられずに、もう一度同じようにボールペンを手にしてしまいました。やはり同じような響きがお腹の中を走り回りました。そしてその翌日も同じようでした。次に私は、M子受難のように、縦にも切ってみようと思ひました。いいえ、縦だけでなく、全くM子受難を再現してみようと思ひました。写真の方の再現ではありません。文章の方の再現です。でも、やはりいざとなると一寸、恐ろしく出来ませんでしたわ」

「君も、すっかり切腹マニアらしくなつたようだ。しかし、君の話の限りでは、本当の切腹マニアではないね。僕の解釈では、君のは切腹によるオナニーとでもいうものかも知れない。お腹を刺激することによって快感を求

めようとしている。女性は、全身が性感帯だそうだが、君の場合は、それが腹部に、余計意識されるようになってゐるわけだ」

「……………」

「さっき、君がお腹を見せてくれたね。その時、私が、切腹の痕をなぞったら、君は悶えた。それが何よりの証拠さ」

M子は、私の言葉の意味がわかったと見えて、真赤になつて、うつむいてしまつた。

「もちろん、切腹が性的興奮に結びつくことが悪いとか、切腹を冒瀆するものとはいってない。昔の武士が行なつた切腹というものでも、むしろ形式的にさえなつてしまつた。武士の末期では、切腹刀をとり上げた瞬間に介錯してしまふという位だ。これなどは打ち首と実質は変わらないと思う。その形式を、自己SMにしたものが切腹プレイともいえる。自分がSであると同時にMなのだ。いずれにしても、M子が切腹に興味を持つようになったとは感激だな。この前のようなフォトでなく、もっとすごいのを是非、次の機会にとらせて貰いたいね」

「実は先生、そのことなのです。M子受難の最後に全裸、真刀、血紅を使った写真をとりたいと書かれたこと、覚えてらっしゃる？」

「うん、覚えているとも」

「次の日曜日、お暇ございます？」

「暇なんてものは、作ればどうにかなるさ」

「午後二時、ここでお待ちします。カメラお忘れなくね」

と云い終わるや、にっこり笑つて会釈をすると、後もふりかえらずに出ていってしまった。

○ ○

約束（といっても、M子からの一方的宣言のようなものだ）日曜日午後二時、私は愛用のカメラ、今では旧式に見える二眼レフとストロボ、フィルムを三本用意してモナ・リザへ出かけた。私は長年、この二眼レフを愛用している。国産品としては一級で、もう二十年も使っているが少しの狂いもない。いささか速写性に欠けるが、6×6という大きいフィルムは、素人が鮮鋭な引伸しをするにはもってこいである。大きなピントグラスを通しての被写体観察は非常に写し易いし、眼高位置カメラとちがつて、被写体に直接視線を向けられないことは、モデルにとつても面映ゆさが削減されるとみえ、自然の動作や表情がよくあらわされるのである。

ぴったり午後二時。M子も私も、時間の正

イメージ
ギャラリ

「心中」

桐原紫門



確さでは負けない。私はM子のこのところが気にいっていた。女はとかく時間にずぼらなのが多いがM子は全く正確である。

モナ・リザの一階の隅のテーブルに向い合ったM子の膝の上にはハンドバッグではなく、小さなアタッシュケースがあった。

「おや、見なれないものを持ってるね」

「あ、このケースのこと？ この中には、七つ道具が入っているの」

「七つ道具？」

「そう、これのためのね」

「といってM子は、右手を自分の腹にあて、右へ引きまわす仕草をしてみせ、ふふふと微笑んだ。

「ところでこれからの予定は？」

「そうね場所はおまかせするわ」

「じゃ、去年、最後に君を写した例のところではどう？」

「いいわ。私、本当に受難を待つM子ね」

それから三十分後、私達は、郊外のあるモテルの一室にいた。一年半前、いやがるM子に無理矢理、切腹のポーズをさせた思い出の場所である。

「先生。体を潔めて参りますから、写真の仕度をして置いて下さいね」

「といってM子は、浴室の方に消えた。浴槽にお湯を入れる水の音が響いてきた。浴槽に湯をみたすには十分はかかる筈だ。その十分間、M子は何をしているのだろう、といふかっていると、

「ウーム、アッ、アッ！」

という、M子の苦しそうなうめき声がきこえるではないか。何事かと、あわてて浴室に駆け寄る。

「M子！ どうかしたのかい」

だが、返事は激しい語気ではね返ってきたのだった。

「何でもなしの。あっちにいったて」

その見幕におどろいて部屋にひっこむや、M子は浴室から飛び出し、隣のトイレに駆け込んでいったと思うと、激しい下痢の音。

しばらくしてM子は浴室に戻ったらしい。

私がカメラを取り出しストロボを用意しているうちにM子は浴室から出てきた。

不思議なことに、服装は前のままである。私は、M子のことだから白装束か何かに着換えてくるのではないかと思っていたのに、少々当てがはずれた。

ベッドルームの隣の、控えの間の小さな机の前に坐ってお茶の用意をすませると、

「ねえ、先生、こちらにいらして」

M子の前に腰をおろした私に、彼女は語り始めた。

「先生、K・KのM子受難、そのままにして下さい。私もM子になりきります。そして先生のお好きところで写真をとって頂いて結構ですわ。ただし、お茶の中に睡眠薬はいれないでね。明日の朝まで眼がさめないと困るから。このところだけは、眠るお芝居で勘弁してね。それから剃毛のところね。もし先生がどうしてもというのでなければ、少しだけにして下さらない。後でちょっと困りますもの。そしてもう一つ。写真を投稿する時は、顔だけはいれないで。これだけはお願ひ。他のことは、M子受難のとおりにします」と、きっぱり云い切った。そして持参のア

タッシュケースを開くと、玩具の短刀、そして驚いたことに縄が十メートル程きれいに巻いたもの、懐紙が一帖、そして奉書に何やら

書き記したものが、きちんと整理して入れてあった。奉書をひろげてみると、私がM子受難にかいた「自刃の書」のくだりが、きれいな筆跡で、そのままに、しるされていた。

私はジーンと何か胸の中をつきあげてくるのを覚えた。M子は、私の書いた、汚辱を受け、それを清めるために自ら腹を切り裂き、汚された肌身を、えぐり、命を絶ったM子になりきろうとしている。そして一年前に、かたくななまでに拒絶した全裸の切腹シーンの撮影をも許すというのである。それが、あの時の拒絶の償いのつもりかも知れない。

「しかし、M子。受難のM子は縛りや剃毛、切腹だけではなかった筈だよ。課長に犯される場面だけではどうも……」

「いいえ、先生が課長になって下さっても構いません。そのためにお先に失礼して体を潔めてきました。これは筋書にはありませんけれど……」

と、私の眼をじっとみつめるのであった。そしてそれは一途に思いつめた熱い鋭いものを感じさせた。

暫く沈黙がつづいた。私が意を決しかねているのを悟ったのか、M子はアタッシュケースを開くと白紙に包んだものを取り出してテ

ーブルに置いた。

「切腹プレイには、もちろん、犯されるといふことは必要でないかも知れません。しかしM子受難では犯されることが絶対に必要なのです。犯されなかったら、M子は切腹し、その上、えぐる必要はなかったでしょう。犯す場面を省略したのでは私はM子になりきれません。もし先生がどうしても駄目とおっしゃるなら、この紙包みの中のものを使って下さい。いえ、今は見ないで下さい。もうじき私は眠くなってくる筈です。さっきからもう私は自己暗示をかけて眠くなりかけています。それからこれを見て下さい。この短刀はいつも私がプレイしているものではありません。今日は、M子のようにこの体をえぐってみせます。そのためにプラスチックの玩具のものを用意してきました。これならば傷つけることもないでしょうから。ああ、だんだん眠くなってきましたわ。先生、私の決意がおわかりになったと思います。お写真の用意はよろしいのね」

そう言いおわると、M子は本当にテーブルに、うつ伏して軽い寝息を、たて始めた。

——(つづく)——

私は「奇ク」を手にしてから、まだ二カ月と過ぎておりません。然し、奇クのパックナンバーは、ほとんど目を通し、必要なものは買い求めました。そして、私に人生の希望を与えてくれた奇クに、心からなる感謝の意を表しております。なぜ、もっと早く、もっと以前に奇クを知る機会に恵まれなかったかと残念でなりません。

その感謝の意をこめて、ここに拙い一文、「私の履歴書」を書いてみました。思い出を心に描きながらスケッチも添えました。それ



【私の履歴書】

『ゴムマント』への憧れ

鶴崎好夫 (カットも)

も、これも、永い様で短い、又、短い様で永い、私の人生のページです。

一、ゴムマントへの目覚め

それは、私が小学校の六年生になったばかりの春のことでした。その日、私の人生最大のハプニングと、それからの私の人生を、すっかり変えてしまう事件が起きたのです。

私のこの履歴書Vを語るには、先ず、その事から書き始めなければなりません。

その頃、私達一家は、二軒続きの小さな借家に住んでいました。隣には、三十才ぐらいの小母さんが一人、住んでいました。はじめは夫婦の二人住居でしたが、ご主人が一年程前に結核で入院してからは、彼女は料理店の仲居として夕方から勤めに出ていました。

水商売の人に似ず、いつもきちんとした服装をしていて、殊に洋服のよく似合う、やさしい小母さんでした。私は、隣同士という上に小母さんのやさしさに甘えて、自分の家のように、ちよいちよい家へ上り込んで、お菓子を貰ったりして可愛いがられていました。

その日は土曜で朝から雨がしとしとと降っていました。半日で学校が終り、昼食が終った私は、母に言われて回覧板を持って小母さんの家へ出かけて行きました。

表の戸には鍵がかかっていて開かなかった。で、留守だったら回覧板だけ置いてこようと思って裏へ回り、裏木戸に手をかけてみました。するとドアは、すっと開いたので、一歩、家の中へ入り、声を掛けようとしたら奥の部屋から、「ううう、う」という呻き声

が、かすかに洩れてきたので、私は、ぎょっとして、その場に立ちすくみました。

小母さんが急病にでもなったのではないかと、私は心配しました。回覧板を台所の上り框へ置くと、そっと足音を忍ばせて、奥に入り換のすき間から中を覗き込みました。病気で小母さんが蒲団の中で苦しんでいるのかと考えた私は、そうでなかったで、ほっとした気持ちでした。

私の目にうつったのは、男物の黒いゴム引きマントの雨合羽を着て、フードをすっぽりとかぶり、男物の長靴をはいた小母さんが、鏡の前にべったりと座り、鏡台にもたれるようにして、うずくまっていた姿でした。

小母さんは、かがみ込むようにして、低い呻き声を、とぎれとぎれに出していました。そんな光景を目にした私は、帰るに帰れない気持ちで、じっと見つめていました。やがて、かがんでいた小母さんの頭が急に後へ、そりかえり「ああっ」と高い声を発しました。

私は我を忘れて襖を開けると、思わず知らず、「おばさん、苦しいの、大丈夫？」と声を掛けていました。その時、彼女が何をしていたのか、わかったのは、私が中学へ入ってからでした。

私に声を掛けられて願った、合羽のフードをかぶった小母さんの顔は、驚きとも困惑と

も、何とも言えない表情でした。赤く塗られた形の良い唇が、わなわなと、おののきにふるえ、何か言わんとして声にならず、目はとろっとして焦点を失っていました。

その時の、黒いフードをかぶった小母さんのあの表情が、今でも忘れられません。それほど私にとって、その顔が、たまらない程、素晴しかったのです。

その次の瞬間、小母さんは、わっと手を顔に当てて泣き伏してしまいました。私は、何かに引かれる様に、小母さんのそばに近寄ると、ゴムマントの上から、小母さんの背をさすりながら、「おばさん、大丈夫？ お医者さんを呼ぼうか」と言って、彼女の顔をのぞき込む様にして聞いてしまいました。

その時、何もわからない私は、彼女が雨が降っているの雨合羽を着て出かけ様としていて、急に体の調子が悪くなったと思い込んでいました。

しばらく、しゃくり上げる様にしていましたが、私がこの光景が何かわからず、病気だと思い込んでいたらしいとわかったのです。う。やっと顔を上げて言いました。

「一生のお願いだから、今日の事は誰にも言わないと約束して……」

ゴムマントの中から両手を出して、私に手を合わせた時、マントの前が開いて、彼女の

白い肌が見えたので、私は目のやり場に困りました。彼女はマントの下には、何も着ていなかったのです。そういえば、鏡台の横には脱ぎすてられた下着が見えました。どうしていいか、わからない私は、小母さんの頼みに只、首をたてにふっていました。

ほっと気を取り戻した小母さんは、裏の木戸が開いていた為、私が入ってきた事を聞き誰かくるといけないからと、私に裏のカギを閉めてくる様に言いました。

カギを閉めて戻ってきた私を、「いい子だね」と手招きしたので、私が近寄ってゆきますと、次の瞬間、ぐっと私を抱きすくめていました。マントのゴムの匂い。それに女の肌で、じかに抱きすくめられた女の匂い。私の体の中に、わけのわからない、おののきが走りました。彼女はフードに包まれた顔を私の顔に寄せて頬ずりしました。

私は、ぼうとして、気が遠くなってゆく思いで、ふらふらと、そこに横になっていました。彼女のゴムマントの重味に気がついた時は、いつの間にか、私は下半身を小母さんの目にさらしてしまいました。彼女は私の半ズボンから下着まで手ぎわよく取ると、私の下半身をやさしく、なでまわしながら「まあ、こんなに大きくなっているのね」と言いました。

その時、生れて始めて、私のペニスが勃起

していたのです。それ迄に、朝起きた時など尿意の為に、大きくなっていった事はありませんが、その様な状態とは全然違った感覚でした。痛い程大きくなっていくといった方がよいと思います。事実、どうしていいか、わからぬ程痛く、そして、その次には、しびれる様なふるえと共に、激しい尿意が私を襲いました。この尿意が、尿排出の為に尿意ではなく、射精の前ぶれのしびれである事がわかったのは、私が中学二年になってからでした。

どの位の間、そうしていたかわかりませんが、包茎だった私の先端を、小母さんは無理矢理むくり上げたのです。私は激しい痛みに彼女をはねのけて飛び起けると、耐えかねる尿意に便所へかけ込みました。

便所で力いっぱい、りきんでみましたが、どうしても放尿できないのです。暫く私は、そこにしゃがみ込んでいました。尿意があるのに、どうしても出ないのです。こんなに赤く、むくれ上ったので尿が出なくなったのではないだろうかと思はれ、自分自身の体を、じっと見つめていました。暫くすると少々気分も落着き、あれ程激しかった尿意も少しも排尿しないのに嘘の様に消えてゆきました。

部屋に戻ると、小母さんは、もうちゃんと服を着ていて、にこやかに笑いながら私に下着とズボンを、はかせてくれました。私はズ

ボンをはかされながら、壁に掛けてある黒いゴムマントと部屋の隅に、きちんと並べてある長靴を夢の様な気持ちで見つめていました。

「今日の事は呉々も誰にも言わぬように」と注意され、お菓子をもらって裏の木戸から戸外へ出た私は、自分の体に残るゴムマントのゴムの匂いと、小母さんの体の匂いに、うっとりとして、すぐ家に帰る気にならず、雨の中を、ふらふら歩いていました。

そんな事があってからも、小母さんの私に対する態度は、以前と少しも変わりありませんでした。道で逢っても笑顔で挨拶する程度で一、二週間は、私もほっとしていましたが、一カ月余になっても全然、変わらない彼女の態度に、私の方が、いらいらしました。

たまに、用事を作って小母さんの家へ行っても、お菓子をくれて、「さようなら」を言うだけの彼女に、無しように、しがみついた様な気持ちにかられました。自分が何をしたいのか、小母さんにどんな事をされたのか、考える気持ちもなく、只二人きりで小母さんに逢いたいという気持ちで、いっぱいでした。

思えば、あの日から、私のゴムマントに対する愛好の歴史が始まったのでした。

夏が来て、学校から臨海学校で『海の家』へ二週間の旅行をして帰ってきた私が見たものは、小母さんの家の貸家札でした。なんで

もご主人が病院で亡くなったとかで、荷物をまとめて田舎へ帰ったのだそうです。空しく悲しい気持ちで数日を過ごしました。

その年の秋、台風が近づいてくるという予報のあった日です。学校へ出かけようとした私に、母は風が強くて傘は駄目だから、少し小さくても雨合羽を着て行きなさいと、押入れから雨合羽を出してくれました。

私の小学校では、低学年は雨の日は皆、雨合羽を着ていたもので、教室前の廊下は色とりどりの雨合羽が、ずらりと並んでいたのを覚えております。然し高学年になるに従って、格好が悪い、みっともないと言って、雨合羽を着て行く事も少なくなりました。五年の春に買って貰った雨合羽が、五年の後半には着る事もなく押入れにしまっておいたのです。

マント式の雨合羽を母に着せてもらい、長靴をはいて雨中の戸外へ出た私は、自分の体に激しいふるえにも似た、しびれを感じ、何にも言えない快感を覚えました。どの道を、どう歩いて学校に着いたか覚えていない程でした。途中、激しい尿意の為に、排尿の姿勢を取りましたが、排尿出来ず、ぐったりした気持ちで学校に辿りつきました。

そのしびれが、その快感にも似た激しい尿意が、あの日の小母さんに、いたずらされた時の気分と同じものであったとわかった私は

イメージギャラリー 『安心しておやすみ』 原 由 貴 子



雨合羽を教室へ持って入ると、授業中も、その雨合羽を膝の上に置き、うっとりとして、その手ざわりの感触を楽しみました。

帰り時間には台風もそれて天気はよくなっていました。友達と別れた私は雨合羽を着てフードをかぶり、遠まわりをして歩きまわり、しびれるような快感をかみしめ、夕方おそくなつてから家に辿りつきました。

黒光りのする、何ともいえないゴムマントの感触。それは私の情欲をかきたてました。それからというものは、雨の日は必ず雨合羽を着て登校する事にしました。そして家人の留守を見はからつては、押入れから合羽をとり出して、鏡の前で着てみたり、いつでも排尿出来る様にと、便所の中

で雨合羽を着て、しびれるような快感を味わいました。

それまで余り着なかった雨合羽を急に愛用する様になり、雨が降らない時でも雨合羽を持って登校する私に、母は変に思ったかもしれません。或日、母の留守を見はからって押入れから、いつもの様に雨合羽を出して着てフードをかぶり、机の前に座って、しびれる様な快感に、うっとりとしている時、突然、母が帰ってきて部屋に入ってきました。

あわてた私は、「これから友達の家へ行くのだけど、雨が降ると困るから」と、その場は言いつくろいました。それから間もなくその雨合羽は、母の手によって屑屋に払い下げられてしまいました。その次の雨の日、雨合羽を探している私に、「雨合羽は小さくなつたから、もう着ないと思って、屑屋に売ってしまったよ」と告げられた時、谷底へつき落された思いで、もう二度と、あのしびれる様な快感を味わえないかと思うと、涙が出てきて仕方がありませんでした。

やがて中学校へ入った私は、自転車通学を希望しました。自転車で三十分程の距離にある中学校は、電車通学でも同じ位の時間がかかります。然し私は、時間の事よりも自転車通学ならば、雨の日は当然、雨合羽が必要であり、夢にまで見た黒いゴムマントの雨合

羽が買ってもらえると期待していたのです。

然し、その期待も、学校側の危険防止の為雨の日の通学は電車通学という方針によって無惨にも破れてしまいました。それでも、電車通学の出来ない級友二人が、雨の日は黒いマントを着て自転車通学するのを見て、うらやましくなりませんでした。そこで私は、雨の日、一つの計画を樹てました。

昼休みに、忘れ物をしたので家返りに帰りたいので、自転車を借してほしいと、その友達に頼みました。友達は快く自転車のキーとゴムの袋に入った黒いゴムマントを貸してくれました。

私は天にも昇る思いでマントの合羽を着ると自転車に飛び乗り近くの川原まで、すっ飛ばしました。その時、強く感じた事は、折角待望の雨合羽を着ても、自転車に乗って飛ばしていたのでは、あまり気分が出ないという事です。やはりゴムマントを着たなら、長靴を踏みしめて、ゆっくり歩き、マントの裾がガサガサ、ゴワゴワと揺れ、ゴム合羽の表面が雨にピシャピシャと叩かれてこそ、一層気分が乗ってくるのだという事を知りました。

川原で自転車を降りた私は、近くに誰もいないのを幸いに、草むらの道を行ったり来たりして、忘我の境地を一人で楽しみました。

やがて激しい尿意を感じたので、あわてて

ゴムマントの前をひろげて排尿の姿勢をとりました。然し、どんなにきんでも小便は出ません。しびれる様な、むずかしい様な複雑な気分になり、じりじりしながら、私は、もどかしさの余り、あの時の小母さんにされた様にしてみたいのです。あの時、飛び上る程に痛かったと同じ事が、その時は、別の気分を一層強く感じさせました。

両手で、その運動を、ゆっくりと四、五回くり返した時です。私は我を忘れて「あっ」と呻く様な声を出してしまいました。私は体中から泉が溢れる様な激しいしびれと、快感感の中で、生れて始めての精を出してしまいました。

しばらくして、雨足がピシャピシャと雨合羽を叩く音に我に返った私は、排尿の姿勢をとっていたので、友達に借りた雨合羽を汚さないでよかったと思い、自転車に跨がると夢中でペダルを踏んでいました。昼休みは四十分でしたが、学校へ戻ったのは三十分も遅れ、午後の授業は始まっていました。

遅刻した私は、その時間、廊下に立たされましたが、心配する友達の配慮もよそに、私は今、川原で行われた光景を思い出して、うっとりとしていました。雨合羽による快感が、この様な形で遂げられた事に、私は心からなる満足感を味わっていました。

その頃、私は一週間に一回の割で小母さんの夢を見ました。いつも黒いゴムマントと、小母さんの白い肌が現れました。その為、私はいつも寝る前に、パンツの中にタオル一枚を入れておきました。夢の中の光景は、いつも同じ様なものでした。

黒いゴムマントを着てゴム長をはいた私が川原を歩いて行きますと、向うから、同じ服装の小母さんが近寄ってきます。小母さんは私を草むらに横にして下半身を愛撫します。私がしびれる様な快感にあえいでいますと、「心配ないのよ。私も同じ気分よ」と、やさしく、いたわってくれます。「雨合羽を着ているから汚しても大丈夫よ。安心してゴムのマントの中に全部、出してしまいなさいよ」と言って、小母さんの白い指は微妙な動きを示します。私も小母さんも黒いゴムマントの姿で、しっかりと抱きあうのです。

目をさました私は、又夢か、とがっかりしこの夢が現実にならないかと祈りながらも、そのあとの恍惚とした気持を、ゆっくりと反芻するのでした。不思議な事に、ゴムマントが夢の中に出て来ない時は、全然、気分が出ないのです。こうして、私の少年時代の春の目ざめはゴムマントと共に始まりました。

(次回は「青年期」)

連載・時代S小説

紫

蘭

の

門

(29)

カット・もりひでお



風 流 極 道 軒

紫蘭の門とは、狭き門、広き門、
天国の門、地獄の門、幸運の門、
悲運の門……の何れにてもあり、
亦、何れにても非ず。
只、己れの生涯を極むるの門也。

ためであろう。

「な、なんだって、急に……そ、そんな」

うっとりと、責められる美女の妖しさに見惚れていたものを、突如、夢を破られた昭吉も不満であった。

「青蛇さん。驚かしっこなしですよ」と抗議する。

「別に驚かすつもりはなかった。ただ、姫を田楽刺しにしてやろうと思っただけ」

「田楽刺し——ですって？ 青蛇さん」

昭吉が、ふくれっ面を振り向けて尋ねると「田楽刺しは、女にとって無上のものと、孔子とか孟子とかいう偉えお方がいったというが、それをやるためにまず露払いをしておか

田 楽 刺 し

「白鳥騷り」のポーズで天井から吊られ、昭

じいまでの絶叫を、ほとばしらせた。
「お、おやめになって！ お、おやめになっ
て！ お、お願い！」

唇が、べとべとに濡れているのは、唾液の

ねえとな」

極楽筆がひとひねりされると「クッククック……」声にならない呻きが、貴子の唇から洩れた。

白鳥縛りの身では、青蛇のまたとない攻撃目標であった。

三度、四度、五度……極楽筆の軸が、結び灯台の明りのなかで躍り、五匹の狎さえも異様な光景に、しずまりかえっていた。

ものの二十回から三十回も、貴子の呻きが繰り返されたときであろうか、

「青蛇、もうよろしかろうぞ。あまりいためつけては元禄屋に悪かろう。始めるがよい」という水野の声に、

「はっ、かしこまりました」

極楽筆を備後畳に投げ捨てた青蛇は、藍染めのきものの裾を、はしおった。

「田楽刺しですぜ、姫。あ、きら、めて、いただきやしょうか」

瞬間、貴子の五体がキューツと縮まった。

田楽刺し——男・女・男と三人によるプレーのことであり、女体をその語のごとく「串刺し」にすることを言う。もちろんこの場合は実際に貫くことではなく、横からみて、貫いているように見えるのでそのように名付け

たもの。

昭和四十八年の現在ではこれを「H遊び」と称するらしいが、これはまさしく言いえて妙。実際にこの遊びに興じたものか、またはこれを観賞するチャンスに恵まれた第三の男が、いいひろめたものに相違なからう。

日本橋の本宅から、ここ雑司ヶ谷の寮へと場所を移されて、もう二刻以上も責めつけられていた貴子にしてみれば、その間に何度か失神に似た状態に陥っていた。

「元禄屋、いかがじゃな。愛する女のこの姿は。フッフッフッフ……」

水野が小肥りした脰をゆすって、悠々と盃を唇に運んでいる元禄屋に呼びかけた。

「愛する女……、ハッハッハッ、これは水野さま。さすがは、老中御筆頭。いきな言葉をお使いなさる」

破顔一笑した元禄屋は、

「たしかにこの貴子は、私の五指を超える女たちのなかでも、もっとも可愛いく美しい女でございます。そして」

グイッと酒を、のみ干して、

「美女は独占すべからず。どうかたっぷりと慰みものにしてやって下さいませ」

「フッフッフ、相変らずよのう、そちは。ま

ったく破天荒の男じゃわ」

（では遠慮はいたさぬぞ）とでも言わんばかりに、五尺余の黒髪をふり乱している貴子を、楽しそうに見つめたが、

「いくら高貴の姫君でも所詮、女は女か。どれどれ、青蛇。もそつと余に見せてみい」

左足一本で全身を支え、右足は高く天井へと滑車で吊りあげられているという、女としてこの上もなく恥かしい姿で責められている貴子の裸身に、なおもギラギラする眼を向けるのであった。そして、

「麝香鹿の香か。まったく、みごとな女よ」と呟いたが、次に、突然、

「やめい、二人とももう。ぼつぼつ狎たちのお出ましじゃわ」

相手が相手だけに、青蛇たちはその命令に背くわけにはいけない。いや、不平不満の表情を顔にうかべることもできないまま、サア

前号まで——残るは「戌夜のロザリオ」ひとつ。悠然とかまえた元禄屋は、雑司ヶ谷の寮に水野出羽を迎えて迎春の宴をひらく。酒肴としてひき出された貴子は「白鳥縛」という屈辱的姿態に哭き、さらに「狎鸚」の責めをうけようとしている。

「ッ」と前と後へと、とび退った。

「アアアア……………」

おぞましい責めが中止されてホッとしたのか、形容しがたい喘ぎを洩らした貴子が、ぼんやりと、ななめ上を見上げた。

そして水野の視線と、もろに逢うと、顔をまっかにして俯向いたが、それは、妖しいまでの美しさであった。

「青蛇、それに昭吉。余のいうとおりに、この姫を縛りつけるのじゃ」

我欲を中断されるということは、男にとっては一段と頭にくるもの。水野に当りちらすことのできない二人は憤懣を貴子に向けて、
「白鳥縛り」を解くと荒々しく、そのほてった裸身を縛りあげていくのであった。

どこに触っても暖かかった。

脇腹も乳房も、ふくらはぎも燃えていた。ふだんは冷たいはずの双臀の頂、鼻のさき、それにふっくらした耳朶までが「雪の花火」のようにほのあったかい。

「右手を、もっと吊りあげる。それに左手をあわせて……よかろう。次は左足首に縄をまきつけて吊りあげる。もっとだ、もっと！」

昭吉も青蛇も、そして和吉も、ひよっとすると水野出羽守忠成も元禄屋さえもが、情欲

の虜囚となっていているであろう状態のなかで、貴子の優雅な体が、数寄屋造りの部屋で「責められる女の舞い」を舞いつづけた。

そして、水野が会心の笑みをうかべたほどの姿をとらされながらも、なお、うっとりとした被虐悦の表情を、貴子はその端麗な顔にうかべていた。

真名鶴縛り

「白鳥縛りに対してこれを『真名鶴縛』と名付けておる。どうじゃな真名鶴が若草の野に舞いおりて一本脚で立っておる姿に似ておるであろうが」

脇腹に垂れた五尺余の黒髪を撫であげながら水野は言う。

「さすがは御老中さま、風流な名をおつけてして……。まったく、よく似ております」

自分たちで縛りあげた姿を、盃を手にして眺める昭吉たちが、うなずいて見せた。

再びここで、前号の、「スワン型のバランス」につづいて女子器械体操にたとえて貴子のあられもない姿を現代風に説明しよう。

女子器械体操がその根本にエロチカルなものを持っていることはまえに述べたが、なか

でも平均台競技は、そのもっともたるものと言えよう。二、三をあげれば、

前後開脚——平均台上で、せまい台に沿って脚を前後にのばすのであるが、両脚が一直線になるまで開かないとダメ。当然、評点が悪くなる。ブスはさておき、十人並みの容貌の女がこのポーズをとれば、不逞な男たちなら、その視線をどこに集中しようとするかはご想像におまかせしよう。

開脚上り——平均台と直角におかれた踏切板で跳躍して両手を平均台におき、両腕に力を入れて体重をのせてから十分に開股して台上にあがる。

また、開股胸倒立上り——助走して踏切板の上で平均台を両手で握り、前をのぞきこむようにして上半身をのり出し、腰をひきあげながら足を左右に開いて「△」の型をとり、さらにそれをグイッと「V」の字にして台上に立つ。

そのほか「片脚半旋回前後開脚上り」とか「片足中抜き上り」「側転倒立開脚下り」など、やたら「開脚」「開股」という言葉がつかわれているのに驚く。これは平均台だけでなく平行棒競技や鞍馬競技、鉄棒競技についても言えることである。

それはともあれ、いまの貴子は、平均台の静止技のひとつの「Y」字バランスのポーズに、まぎれもなかった。

Y字バランスとはその名のごとく、全身がYの字に見えるので名付けられたものであるが、それはまさしく、観点を離れた不心得男の心をそそってやまぬポーズとも言えよう。

まず平均台上で、気をつけの姿勢をとる。

左手で左足首を（あるいは、ふくらはぎ、もしくは膝のあたり）握り、左上方へと、ひきあげるとともに、右手を斜め上方にのばす。

文字にすると簡単であるが、体重を支えるのは右足だけ。しかも両手はバンザイの恰好にしなければならぬのだから、なかなか難しいポーズである。

それだけに、そのポーズをとった女の「芸術的な美しさ」は、見るものの視線をひきつけてやまない。

もちろん、公卿育ちの貴子が、そのポーズを自分ひとりでとることはできなかった。だから——天井の二つの滑車から垂れる縄が、彼女に「手を貸して」美事なY字バランス、水野出羽の言う真名鶴縛りの姿をとらせているのであった。

「では、いよいよ、お預けの狛騨りにかける

ことにしようかの、姫」

いかにも満足そうにその美体を眺めて悦にいつていた水野は、五匹の狛のうち二匹の首輪を外すと、

「お・腋、毛・虫！ それ、たっぷりと馳走にあずかるがよいぞ」

貴子の前方に半円を描いて坐りこんだ昭吉たちが、ゴクツと生唾をのみこんだ。

狛騨り——それは始めてみる光景である。それにしても、あれほどこの責めを嫌がって、それを回避するためにこれまで唯々諾々として水野の命するままに、操り人形のように動いてきた貴子が、いざとなって反抗しないのは、なぜだろう——と昭吉はチラッと考

えたが、その疑問は、すぐに解けた。お腋と毛虫が、ワワン、ワンとほえながら一本足で立っている貴子のふくらはぎに前肢をかけ、舐めはじめたとき、

「いや、いや！ お、お許しを……お願いですから……」

唇からは、たしかに拒否の声は洩れたのである。が、その口調には、甘ったるい媚のようなもの、うかがわれたのである。

昭吉は、ニヤッと笑った。

事実、貴子は被虐悦の状態に陥り、たとえ

相手が誰であろうが、翻弄を受け入れる体勢を備えきっていた。

ふくらはぎを舐めたお・腋が跳びあがって乳房を噛んだ。

毛・虫は後肢をのばして立ち上ると、太腿へと前肢をのばす。

——ワワン、ワン、ワン、ワン……

水野の手もとに残された三匹が、朋輩をうらやむように鳴くたびに、その鎖がガチャガチャと鳴った。

貴子は、もうここが雑司ヶ谷の寮であることも、あれほど拒みつづけた狛たちが、襲いかかっていることにも気づかないくらい、錯乱状態にあるのであろうか。

「ア、アアア……」

ときどき洩れる喘ぎも悩ましく、斜め上へと吊りあげられている太腿も、騨られる喜びに、うちふるえているように見えた。

鼻梁がなく、鼻孔だけが大きい、狛の面がその太腿めがけて、とびあがる。

すでに、たっぷりと貴子の匂いのしみこんだ白い布を嗅がされている犬たちには、自分のえもの、がどれなのかは鋭敏な嗅覚で知っているらしく、毛・虫は這いあがり、お・腋は跳躍を何回となく、くり返し、貴子の喘ぎが、し

イメージギャラリー 『叫声発声機』 岡 たかし



だいに長く尾をひく鳴咽へと変っていく。
ところで、ここにひとつ、不思議なことは
二匹の犬が、いくら裸身にとりすがっても、
その痕跡が残らないことであった。
めざとくも、それに気づいた昭吉が、

「御老中さまにお訊ね申し上げます。この狎
さまには爪がないのでござりましょうか。ま
た噛まれても痛うはございせんのでしょうか。
ほれ、あ、あのように跳びあがりまして
ほれ、あ、あのように嘔んでおりまするに、

お内儀さまは少しも痛い、苦しいとは仰せられませぬが」

「よいところに気づいたの、昭吉とやら。フッフッフ、さすがは元禄屋の一番番頭。賞めてとらせようぞ」

「すると、やはり御老中さまがお飼いならしになられましたもので」

「それもある。だが、この狎という犬は元来が噛みつかぬもの、爪をたてないものなのじやわ」

へえっ——と驚いたように顔を見合わせる昭吉たちに、

「だからこそ、この狎が女どもの間で珍重されるのよ。おわかりかの」

赤貝のあたまを撫でながら水野は、

「須磨の浦、という言葉を知っておるか」

「あの明石のこちら、淡路島の見えるという須磨でございますか」

「違うのう」

「するとこの江戸の近くに須磨の浦というところでもございますので」

青蛇がよこから訊ねた。こと女にかけては千軍万馬の羅卒の鞭兵衛の一の乾分も、どうやら知らぬらしい。

「フッフッフッ。では『逆碁』『百たたき』

「せせり」「猫なで」「指人形」……まだわからぬかの。「五人囃」では、どうじゃ」

「わ、わかりました！」「五人囃」のことでござりまするか」

「存じておるか」

「へえ。吉原で一度だけ、とっくりと眺めさせて頂きやした」

「それは目の保養を致したの。男の場合じゃと」「五人娘」とか「きせはぎ」とか……」

ここまで言われて和吉にも昭吉にも、五人囃の意味が、やっと、のみこめた。

「男の独りあそびを」「五人娘」、女のそれを「五人囃」とは、まったく雅な、表現じゃてのう」

チラリチラリと、真名鶴縛りのまま二匹の狎に颯りつづけられ、

「アウ……ウ、ウ、ウッ……」

と、せめても、けだもののような鳴咽を洩らすまいと、けなげな努力を試みている貴子をみやりながら昭吉が、

「その五人囃のことを、なぜ「須磨の浦」と申しますのでしょうか」

「古語じゃよ、古語」

これまた、貴子の燦めくような裸身のうねりを、じいっと見つめながら水野は、

「すまの浦のすまとは、すまるといっての、万葉集にもある言葉じゃ。すばるともいう。その意は、一つにまとまる、すばまる、手でまとめる——ということになっておる。浦はむろん修辭語じゃが、浦と言えは入りくんだところ、その浦をすまる——どうじゃ、これまた五人囃と同じように、いかにも雅びな女性言葉であらうかの」

「ま、まったくでございます。須磨の浦とは今日まで存じませんことで。ひとつ鞭兵衛親分たちを、おったまげさせてやりましょう。有難うござんした」

と言って青蛇、相手が筆頭老中であることに気付き、「有難うござりまして奉ります」と、あわてて平身低頭するのであった。

狎 颯 り

ところが、まだわからないのは、なぜ狎がその「須磨の浦」と、関わりあいをもつかである。

おそろおそろ尋ねる昭吉に、

「狎という犬は、噛むように一見、見えるが実は舐めておるだけじゃ。それに、ほれ、このように爪と爪との間に長い飾毛が生えてお

って、ふだんは爪をかくしておるのじゃ」

沖の石の前肢をとって水野が説明を始めたが、まさしく狎の爪は、いつでも毛でおおわれるようになっていた。

「だから、この狎は、すこし飼いなれば須磨の浦に、もってこいの小道具となるのじゃ。この江戸でも、それを商売にしているものがいると聞く」

「へえっ、狎を飼いならして売りつけるのですかい」

青蛇、ふたたび、ぞんざいな言葉をつかったが、水野は咎めようとせず、

「奥女中、小唄の師匠、吉原、深川、新吉原の女ども、それに高禄をはむ武家の妻も、関八州見廻り役の女房……土農工商を問わず、もとむる女は、すこぶる多いと、きいておるわ。ワッハッハッハ……」

「女というものは、男よりもスキなものでござんしょうか」

「ハッハッハッ、そのとおり、そのとおり。男なしでは三日とすごされぬのが女じゃわ」

水野の哄笑がおわらぬうちに、それよりも高くひびかったのは、貴子の叫声であった。

「それ、それ、あのとおりじゃ」

盃をグイッとのみ干した水野は、

「さあ、あのままじゃと、犬どもが遊びにく
 かるう。青蛇、大の字形がよかるうぞ。余も
 この犬どもを解き放つてやろう」

「ハイ！」と口をそろえて答えた青蛇、昭吉
 和吉の三人が、右足一つで縛りあげられてい
 る貴子を解き放ち、いままで人待ち顔であつ
 た特別誂えの黒塗りの台の上に、貴子を、大
 の字なりに縛りつけるのに手まひまはいらな
 かった。

その間に沖の石、赤貝、舌長と、三匹の狎
 の首輪を外した水野は、

「さあ、たつぷりと遊んでくるがよい。お前
 たちが始めて味わう、前右大臣菊亭政房卿の
 姫じゃ。香りもよかるう、柔らかみもよかる
 う。それ、行け！」

——キャ、キャン、ワワン、ワーン、ワン、
 お・腋と毛虫が加わって五匹の狎が、一糸も
 まとわず長机を逆さにしたような台上で、仰
 向けにされて手足を南蛮錠で固定されている
 女体に、とびついて行く。

「ヒ、ヒヤアッ……」

いくら被虐悦の境地をさまよっているとは
 いいながら、五匹もの犬にいっせいにとびつ
 いてこられたのでは貴子もたまったものでは
 なく、おもわず悲鳴をあげて切長な美しい眸

を、はりさけるようにみひらいた。

——キ、キャン、キャン

赤貝がその額に前肢をかけると鼻を舐め、
 頬を舐める。

「ヒ、ヒヤアッ……イヤ！ ダ、ダメ！
 ダメ！ ゆ、ゆるして！ ア、アレッ」

ふたたびあがつた絶叫にひきつけられたよ
 うに背の上で巻いた尻尾をピンと伸ばした
 沖の石と毛虫が、二匹揃って乳房の上につけ
 あがり、唇と肩口を舐め廻す。

「ア、アッ、アッ……アワワッ……」

脇腹が、巨大な白蛇のようなうねりをみせ
 ると、お・腋がそこに鼻をくっつけ、毛虫の後
 肢のあいだに喰いこむようにして、かたちの
 よいへそを柔らかく噛みつづける。

残るのは舌長——このザラザラした長い舌
 の持主は、一匹だけ悠然として「ハ」の字に
 ひらかれた貴子の太股のあいだに身を埋めて
 いた。

「ヒ、ヒイ、ヒイ、ヒヒイツ……」

貴子の唇から、ほとばしる叫びが、次第に
 細くなり、細くなるにつれて強く、甲高く、
 笛のような鋭さを、ともなってくる。

男たちは、もうまんじりともしないで眼前
 に繰りひろげられる光景を見守るだけ。

ただひとり、悠然として盃をあげるのは元
 禄屋だけであったが、彼とてもその大驚のよ
 うに爛々と閃めく眼を、貴子の妖しく艶めく
 美体から、はなそうとはしなかった。

「元禄屋。女には五人の男がよく似合うと、
 そなた常々言うらしいのう。ハッハッハッ、
 余は、こう思うぞ。見ておれよ！」

と、意味ありげに言った水野は、両手をひ
 らいて、元禄屋を見ながら、ポン、ポン……
 と、拍手を打つように五つたたき、ついで大
 声で、

「女には五匹の狎がよく似合う——と、どう
 じゃ！ 元禄屋」

「まことに……」

と、元禄屋は、なにげなく合槌をうちかけ
 たが、ふと眼をひからせ、

「これは、これは。さすがは、おみごと！」
 感嘆の声をあげた。

水野が、五つ、拍手をうつやいなや、いま
 までわれ勝ちに貴子にむらがっていた五匹の
 狎たちが、突如、とび下っていっせいに「チ
 ン、チン」の恰好をとったのである。

それは青蛇たちにとって、口に運ぶ盃を
 途中でとめたほどの驚きであった。

「……ポン……」

ひとつ打つと躍り出たのはお腋であった。その名のように、貴子の右脇にすすみでて戯れはじめる。

つづいて、ひとつ拍手すると、毛虫が、これまた左脇に前肢をくぐらせ、三つ目のポー——という音で、舌長が胸の上にとびのつて、双の乳房に交互に戯れはじめたではないか。

「すげえ！ まったくおどろきだ！」
「すると赤貝というあの犬は……」

青蛇、昭吉、和吉が、一ひざのり出して見つめるなかで、四つ目の拍手のひびきがしたかと思うと、赤貝が、しゃなりしゃなりと愛嬌のある面付きで、すすみでて、彼らの予想どおりに……。

ひととき、貴子の絶叫がたかまるなかで、
「すると沖の石は……沖の石とはいったいどこなので」

昭吉の問いに、水野が答えるまでもなかった。青蛇が、



イメージギャラリ

『鼻翯り開始』

四馬

孝

「わが袖は汐干に見える沖の石の——という歌を知らねえか」

「知ってますよ」

「じゃあわかるはずだぜ、昭吉さん。人こそ知らねかわくまもなし」——つまり、いつも濡れているということじゃあねえか」

「濡れている……沖の石が。すると……」

何を考えたか昭吉が、ゴクツと唾をのみこんだが、五度目の拍手はなかなか鳴らず、四匹の朋輩が、それぞれの分担を賞味するのをじいっと、沖の石は待っていた。

やがて、いまの時間にして五、六分間が過ぎたであろうか。

ほんのりと汗ばんだ貴子が、あえかな動きを示し始めたのを見てとった水野出羽は、

「沖の石——行け！」

と叫び、大きく拍手をひびかせた。

——キャン、キャン、キャン……

待ってました！ と人間なら言うところであらうか、勢いよく跳躍した沖の石。

青蛇たちが、「フウーッ」と溜息をついたのは、そのときであった。沖の石が覗きこんだたん、赤貝が面をあげて、二匹の犬は、鼻と鼻とを、こすり合わせたのである。

それはあたかも、「あとはまかせた」「よ

し、ひきうけた」という合図であったのだから、いままで赤貝が戯れていた辺りに今度は沖の石が戯れ始めたではないか。

「す、すげえのなんのって。こ、ここまで犬畜生を飼いなすたあ、さ、さすがは御老中さま。なびかぬ女は、もちろんなし。草も木もけだものまでも御威光になびき従う……」
「青蛇、まだまだ世辞をのべるのは早いようじゃ。しばし、みておれ、赤貝と沖の石のごきを」

「へ、へい……」

見まもるうちに一、二分がすぎると、二匹は再び鼻先を、あわせた。

はてなにごとか——と見守るうちで、「では、今度は僕が」とでも言ったのだろうか、赤貝が、もとの動作をとり始める。

「ヘエッ！ この二匹、相互に……。ち、ちつくしょう。なんとも、すげえ、すげえ！」
ものには動じない青蛇が、スットン狂な声をあげるほど、それはまことに、みごとな協同作業であった。

呻きから喘ぎへ、喘ぎから鳴咽へ。そしてそれが叫びへ、けだものじみた絶叫へと、貴子の痴声は、とくに屈辱の限界をこえていた。

玉のような汗が流れ出すと、たちまちお腋が吸いとり、乳房の谷に浮く脂汗は、舌長が舐めとる。そして赤貝と沖の石が……。

「姫、いかがじゃな、”狎鸚”の味は」
水野が声高く叫んだが、七彩のつむじ風に巻きあげられて嵐の大海原に投げ出された小舟のように、波濤にもちあげられ波間に突きおとされている、いまの貴子には、聞えようはずもなかった。

哭く白蘭

結び灯台の光にてらし出された貴子の姿態は、もう生きている気配はなかった。黒塗りの台から解放されたことにも気づかぬかのうちに、ながながと備後疊に仰向けのまま横たわっていた。

「御老中さま。もうこのあたりで、私たちにもお裾分けを頂けませんでしょうか」

昭吉が血走った目で水野を見上げたが、

「なにを申す。まだこれからじゃ」

「まだこれから！ これ以上責めつづけるとお内儀さまの身に……」

「案ずるな」と大盃をあおった水野は「女というものは、これしきのことでは死にはいた

さぬ。フッフッフ……それどころか、こうなってもなお、もっと、もっと——と求めるものよ。のう、元禄屋」

「いかにも、そのとおりでございますな。ことにこの元禄屋が囲っております女なら……昭吉。御老中さまの前で、はしたないことをいうものではないわ」

「しかし、旦那さま。これでは、あまりに、お内儀さまが、おかawaiiそうで」

「いつからお前さまは、この貴子の亭主になりじゃな。私が心配ないと申しておりますのじゃ。今宵は、すべて水野さまのご差配どおり、の、昭吉さんや」

「ハ、ハイ」

二人のやりとりを耳にしながらニヤニヤ笑っていた水野が、

「では、まいるぞ、元禄屋」

「いかようにもなされませ。夜は、まだまだ長うござりまする」

「承知じゃ。青蛇、これを口に含ませてつかわせ」

印籠からとり出した丸薬を三粒、さし出された青蛇が、水をとりに出ようとすると、

「バカめがのう、酒があるではないか。それを口うつしでのませてやれい。主人の元禄屋

が見ているとて遠慮はいらぬ」

「これはどうも、あつしとしたことが」

頭かきかき青蛇が、貴子のそばによって上体を抱きおこし、片手で徳利の酒をのみ、丸薬をふくむと、

「貴子姫。では、お唇を拝借いたします」

無理に口をひらかせて、ながしこんだ。

「ゴボ、ゴボッ……」

むせるのを、背中をたたいてやると、

「青、青蛇さん……」

うっとりと眸がひらく。

「お氣がつかれましたか」

返事はなく、そのまま再び畳にぐったりとのびてしまったのだが、青蛇はこのとき、貴子の肌に、ちっとも犬の匂いのしないことに気づいていた。

「御老中さま。狎さまには匂いがないのでございまするか」

「ないと申すか。あるじゃろう、もそつと姫のほうぼうを嗅いでみい」

首領から肩、それに脇腹へと自分が狎にでもなったように鼻をつけていた青蛇は、

「ありました。匂います、が、これは、また何とも言えぬ佳い香りでございます。それが姫の肌の薫りとまじりあいまして」

「姫の匂いは麝香じゃが、その狎には『花散里』が、しみこませてある。フッフッフ、今宵のためにな」

「花散里」とは遠く室町時代に風流をもってきこえた八代將軍足利義政が選出した香木六十一種のなかの、ひとつであり、青蛇ごとき無頼の徒の知るところではなかった。

「はなちるさと——へエッ、いかにもおつな名でござりまするなあ。どうりで犬の匂いがまったくしねえわけです」

と答えたとき、貴子の躰が、うごいた。

「今度こそお目ざめだ。さあ、ご反抗のないうちに、台に俯伏せて縛りつけることよ」

「俯伏せて——でございますか。すると四つ這いになさるおつもりで」

「さよう、いままでは表で遊んだ。裏でも遊ばせてやらすば、狎たちから苦情がでようというもの」

「いかにも筋が、とおっております」

昭吉たちに目配せした青蛇は、主人の元禄屋に、ふかぶかと挨拶したあと、三人がかりで貴子を抱きおこすと、いくらか人心地がついたのか反抗の気配をしめす裸身を黒塗りの台の上に向いている四本の脚に、手足を、それぞれ、括りつけていく。

仰向けの場合は、手首に南蛮錠をはめるだけでよかったが、俯伏せとなると、そうはいかず、手首、肘、それに二の腕と三力所は縄をかけなければならなかった。

その間、夢心地のようにされるがままになつていた貴子であったが、青蛇の手が右足首を強く攣むと、

「な、なにをなされます……」

まるくなった背をのぼすようにして抵抗の声をあげたのは、さらに意識がもどり、我に返ったことを示すのであろうか。

だが、いまとなつての抵抗が何の役にもたないことは、わかりきったことであつて、足首、膝と、黒塗りの台から突き出した小さな丸柱に縛りつけられ、つづいて左足も同じように固定されてしまった。

そのポーズを長ったらしく表現すれば次のようになるであらう。

開股尻上げ四つん這い両腕直立の姿勢。

簡単に言えば「四つん這い」であるが、膝を折って畳につけるのではなくて、膝を立てて双膝を肩よりも高く聳えさせ、しかも大きく開いているという女にとっては考えてみるだけでも恥かしくなる姿と言えた。

黒塗りの台の上で、結び灯台の光を浴びる

イメージギャラリー 『新品入荷』 マエダ・ヒオミ



その白くなまめかしい裸身に向って、盃を挙げそた水野は、
「まさしく天下の美姫じゃわ。フッフッフ、この柔肌の色艶のよいことよ」

一膝、身をのり出して、貴子にひとしきり悲鳴をあげさせると、
「舌長、行けい！」
と五匹のうち、一匹の首輪を外した。

「キャ、キャン、キャン……」

喜び勇んでいるのか——と思われる動作で部屋をひとめぐりした舌長が、その暗褐色のいくらか突き出した眼を押しあてたのは、膝の内側であった。が、すぐ、ペロペロッと長い舌を出して太股へと舐めあげ始めたが、体高一尺余りでは届くはずもない。

細長く垂れている耳をひらひらっとさせていたが、水野が「ポン！」と手を拍つと、

「キャ、キャン、キャン……」

前肢をあげて飾毛のついている爪を貴子の太股にあてがう。

そして後肢をズズウィーッとふんばると、どうやら舌が目標まで届いたらしい。

「ア、アレツ！ アツ、アツ……アウー！」

あきらかに人間のものではないザラザラした舌端を感じて貴子は、双膝をいっそう高く上へと突き出すと同時に眸をひらいた。

両腋の間、乳房の谷、そして太腿の向うに見えたのは、絹糸のような長毛につつまれた舌長の腹面であった。

見るべからざるものをみた嫌悪感が、ツウインと背筋をかけめぐると、ほとんど同時に、

「ヒ、ヒャアアアッ……」

という叫びを、ほとばしらせていた。

黒髪が備後置の上を、おおきくくねった。

貴子は、あるときは「めす」のように吼えあるときは、奥歯をギリギリと噛みならしてこみあげてくる悪寒と、たたかった。

が、その巨大な錐を思わせる舌長の燃えるような舌は執拗に獲物を狙う。

水野には手にとるように、それが見える。

結び灯台の明りだけでは不足だとばかりに百奴蠟燭に火を点じた昭吉が、肌が焦げるのではないかとおもわれるほど焰をちかづけると、いっそうその妖しく艶めく光景が、うかびあがってきて、男たちの視線を釘づける。

男たちが呼吸をとめ、ただ貴子のすすりなきだけがもれる何分間かが、すぎた。

「この女の責められ好き、しかと、見届けたぞ。そちも果報な男よ。のう、元禄屋」

言いおわるなり水野は、残りの四匹の狎の首輪を外した。

まっさきにお腋が腋毛にとびつくと、つづいて沖の石と赤貝は、貴子の下にくぐりこんで、枝もたわわに実った水蜜桃のような双つの乳房にすがりつく。負けじとばかり毛虫がどこにその柔らかい爪をたてたかは、その名のようなところとだけ申しあげておこうか。

すすりなきが、絶叫をよび、つづいて悲鳴となり、号泣へと移っていく。

「フッフッフ……哭く女というものは、なんともはや、美しく悩ましいものよのう」

まんじりともしないで、五匹の狎に翻弄されてる貴子を眺めていた水野であったが、やがて、その酒であからんだ顔をニヤッと眺めると、なおも後肢だけで立っている舌長をみて

「下世話にチンチンという言葉があるそうじやの。なぜチンチンというか、もうわかったであろうが、青蛇」

突然の問いに、キョトンとなる青蛇に、

「わからぬかの。この言葉、須磨の浦のように古くからあるわけではなく天下も泰平となつた五代將軍綱吉公のころから始まったといわれておる。それも大奥の女中たちが、いはじめたのが、いまでは日本國中、津々浦々にひろまってしもうたのじゃ」

「五代將軍とおっしゃいますと、あの犬公方さま……」

「さようじゃ。その頃はお犬さまの天下であつたそう。上これを好めば下もこれにならうと申してな、奥女中たちも盛んに犬を飼うた。なかでもこの狎をな」

そばから昭吉が、

「するとチンチンというのは、犬の狎からでたことばなのでございますか」

「さよう。男子禁制の大奥のこと、女どもは男に飢えておつたが叶わぬ願いじゃ。そこで狎を代りにいたした。いっしかそれがチンがふたつ重なってチンチン」

「するとなんでございますか、御老中さま。

いま舌長のとつておりますように、前肢をあげて後肢で立った姿を、よくチンチンをさせるとか、チンチンしてごらんとか申しまするが、これは……」

「わからぬかの。奥女中たちが、よく見るためにさせた姿よ。云わば犬の品定めのためのものよ」

「ヘエッ……は、ほんとのことで！」

半信半疑の青蛇たちに水野は、元禄八年刊行の「好色旅枕」や「春色入船帳」「守貞漫稿」など、名だたるその道の貴重な書籍の名をあげて納得させながらも、

「フッフッフ……」と、淫らな視線を貴子の裸身に、そそぐことは忘れなかった。

そして――

「『花散里』と『麝香』の香りがまじりあつて、いよいよ芳ばしうなつたようじゃ。そこ

で、これを所望じゃ」

と、昭吉の手から五百匁蠟燭をとりあげ、
「舌長、おさがり！」と命じて、舌長をどかせると、

「もう少し明るく照らし出してみようて。のう
昭吉、和吉」

「では、御老中さま、私めが」

輝ひとつの昭吉が、貴子の背中にうしろ向きに、またがる。

「ア、アッ、アアア……」

貴子の、せつない喘ぎのなかで、

「まだまだ」

「かとして水野さま、とてもこれ以上は」

「もそっと、もそっと！」

「そう仰せられても……」

「うむ、それ以上はダメのようじゃの。フッフッフッフ、無理もないこと。では、しばらく、こうしておこうか」

という水野と昭吉の会話が交わされた。

「この蠟涙がしたたるとき、どんな声で哭いてくれるやら」

——ジ、ジジイ……

ポタツと最初の蠟涙は、あおあおとした備後畳におちたが、つぎはスウィツと蠟燭に沿って、ながれおち、

「キ、キャアアッ！」と貴子の乾いた唇から
つんざくような悲鳴があがった。

「哭くがよい。花が哭くとはもう。美しい白
蘭の花が哭くか……これはよい、これはよい。またとなき見ものでききものよ」

つづいて、したたりおちた蠟涙を、うけた
貴子が、

「ム、ムウ！」

と奥歯を、かみしめて耐える。黒塗りの角柱に縛りつけられた、しなやかな両腕が硬直し、よりたかだかと凝脂ののった双脛がもちあげられて、背骨から、ながれる艶めく起伏の体線が、あますところなく曝け出される。
とめどなく、ながれおちる蠟涙が蠟燭のつけねをくると半回転して、まさしく水野の云うとおり、またとないみものであった。青蛇、昭吉、和吉と三人の男もこれに加わって熱心に眺めこみ、飽きることを知らない。

と、そのとき、

「昭吉さんや」

ひとり黙々と人垣のそとで盃をあげていた元禄屋の大驚のような眼がキラリと光った。

あわてて振り向いた昭吉に、

「どうやら、天が曇ったらしいの」

「旦那さま。天、天とおっしゃいますと天井

のことでしょうか。それとも空が？」

「わからぬかの！」

天井の一角をみあげて、元禄屋は、めずらしく真剣な声で云った。

和吉、青蛇はもちろん、水野までが上を振り仰いだ、そこには、すでに何の異常をも認めることは、できなかった。

○ ○ ○

「お前さん。元禄屋って、いかす男かも知れないねえ。あたしたちのことに気づきながら天が曇るなんていきなことを」

元禄屋が「天が曇った」といった刹那、甲賀忍法虹移しの秘術で、雑司ヶ谷の寮の天井裏から石神井川の畔へと移っていた虹の陣兵と洗い髪のお妻であった。

「天が曇るといふのはなあ、お妻。天下の御政道が曇っているということなのさ」

「いまさら、あんな老中などに言ったところで何の役にも立たないのにねえ」

「立つか立たねえか、ともかくあの元禄屋、やはりいかす男のようにも思われる。ハッハッハハハ、天が曇るとは面白い」

「お前さんなら、なんというだろうね、今夜は日蝕だな」とでも、お云いかえ」

「バカ。日蝕どころか、ここんところ数十年

「というもの、太陽は腐ったままさ」

「そのとおりだよねえ」

お妻は髪を、はらりと夜闇になびかせ、

「それにしても、あの貴子姫、いまじゃあ、

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十三日確実発売!

一月分	1冊	四〇〇円 (送共)
三月分	3冊	一二〇〇円 (送共)
半年分	6冊	二四〇〇円 (送共)
一年分	12冊	四八〇〇円 (送共)
		郵便番号 558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力年分と御指定下さい。

○購読お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替(大阪四二七八三番)』のいずれかをご利用

すっかり元禄屋の、いいなりになっているらしいけど、いったい何なのだろうねえ」

「何って、なんだい」

「たとえばさ、お内儀さんとか奥さまとか北

願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代四〇〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎年二十三日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

の方だとか女房だとか……」

「情婦、恋人、妾に、隠し女。いとしい人に最愛の人。色女……おい、お妻。お前は、いったい、この俺の」

「あいよ、女房さ」

「情婦」

「バカ」

「バカ」

「バカ」

と今度はお妻が陣兵の肩を手でたたいた。

「これ、お前さん」

「なんだ」

「いまは福寿草が咲いているけどさ。早く雪割草が芽を出して、梅がほころびて、桃と桜が一度にパアッと咲きみだれてくれないかねえ。そうすりゃあ徳夜叉さまのお傷もよくなられるのにねえ」

「まったく。一日も早く五夜のロザリオの謎をといて、大坂の大塩平八郎先生にお知らせしなくっちゃあな」

二人寄り添いながら石神井川の畔から消えていったが、行先はもちろん、相模と武蔵の国境・丹沢山塊にある怪盗徳夜叉の隠れ家であろう。あとを慕うように雑木林で鳴いているのは、こどりであった。

春も、もうほとんど訪れてこよう。

——(つづく)——

カット・マエダヒオミ



懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

視 盗 録

(音入考現学)

多 田 野 平 助

私が女性の排泄中の姿を視るようになってから早いもので、もう三年になります。その間に視た女性の数は約三百名。幼女から老女まで、さまざまです。

その中から、いまでも記憶に残っている女性達の姿を思い出すままに、まとめてみたいと思います。

○ 私の住んでいる町は、東京近郊を走っている私鉄E線の沿線にあり、人口は、ほぼ三万ぐらい。東京のベッドタウンとして近々十年ぐらいの間に開けた住宅地です。

この沿線の駅のトイレのいくつかは、まだ共同トイレで、私の利用していた駅のトイレも最近まで、そういうトイレの一つでした。

トイレの構造は、木造モルタル造りの水洗式で、入ってすぐ右手が男子小便用、その並びにボックスが二つある、ありきたりの造りでしたが、ただ一つ違うところは、二つのボックスを遮断してある、厚さ10センチのコンクリート壁を貫通している、のぞき穴があいていたことです。

この穴はボックスの床から15センチぐらいの高さにあり、直径が2センチぐらいありました。

ここからのぞくと、隣のボックスが、ほとんど視角に入り、もし女性が用をたしていたら、金かくしにじゃまされることなく、ななめ右前、30センチの至近距離から観察できる位置にありました。

が、難点は胸から上が見えないことで、用をたしている女性の顔が見えないことですがそれも直きに解決しました。

ドアのちょうど目の高さの所に、8ミリぐらいの穴があいており、そこからトイレの入口が見えるようになっていました。

つまり、手前のボックスに人がいないのをたしかめた上で、奥のボックスに入り、ドアの穴からトイレへ入ってくる女性の顔を見定め、下方の穴から、もう一方の顔を観察できる、しくみになっているわけです。

○ 実際に観察を始めたのは、そのカラクリをみつけてから二、三日たってからで、最初に出会った女性は、三才ぐらいの男の子をつれ

た、二十七、八のやせた主婦で、赤いサンダルを、はいていました。

夏の午後で、じっとしていても狭いボックスの中は汗ばむほどで、ドアの穴から入口の方を見つめているのも楽ではありません。

入ってくるのは、どういうわけか男ばかりで、なかなか女性が入ってこないのには閉口しました。

駅のトイレを利用するのは、私の統計では男子八人に女性一人の割合で、意外に女性の利用者は少ないのですが、そのときは、そんなことはわかりません。ただ、期待と不安が入り交り、何ともいえないような緊張感が体を支配し、全神経を目と耳に集中して、女性が入ってくるのを待ちました。

トイレの入口に、彼女の姿を認めたときの私は、これから始まるであろう出来事を予想して息苦しくなるほどで、自分がこれから行なおうとしている行為のことが急に恐ろしくなり、といて見ないでは、とてもすまされないうふうで、罪悪感で胸が痛くなりながらも、とうとう、その罪悪の目をそらすことができませんでした。

ドアが開き、赤いサンダルが便器をまたぐのが見え、スカートをまくりあげる、けはい

がすると同時に、私の目の前に、白い双丘がおりてきました。

その白い双丘が視野いっぱいになると、心臓はノドのところまで、せり上ってくるような感じで鼓動し、体をささえている手足が、どうしようもなく、ふるえ始め、放尿が始まると、さらに、それは激しくなりました。

この女性は、つれていた男の子を便器の前面にしゃがませ、

「ママ、これからオシッコするのよ」

といいながら放尿し、

「ママ可愛いでしょう。○○ちゃん」

と子供に話しかけ、子供はその間、おとなしく母親の姿をみていたのが印象的でした。

この時の出来事は私にとって、すべてが初めての経験でしたが、こういうケースは、このときが最初で最後でしたので、この日のことは、よけいハッキリ憶えています。

○

初めのうちは、ただ漠然と一点をながめているだけで、満足していましたが、そのうちノートをつけるようになりました。

記入事項は、

○日時

○服装

○髪形

○はきもの

○下着の色

○足の開き方

○部分の特徴

○大か小か

の順で記します。

例えば、

十月十日。黒ブレザー、グリーンチェックミニ、狼ヘア茶色スリッポン、白地オレンジ水玉、外向、薄毛土手高④、大小。という具合につけます。

④は部分が上品であるという印です。

私の場合、これだけで十分、その時の情景を想い出すことができます。

この時の女性は小柄な女子大生で、筋肉質の美人でした。

彼女がトイレへ入ってきた時、隣のボックスには、中年のサラリーマンが入っていましたので、ドアをノックした彼女が帰ってしまったのではないかと心配しましたが、彼女は入口のところまで戻り、使用者が出るまで待つそぶりを見せました。

普通、こういう場合の女性は、よほどせっぱくしている時でもなければ、ひき返してし



まうもので、待っている間、入れかわり立ちかわり、男子が小用をたしにくるものですから、若い女性などは、恥かしがって帰ってしまふケースがあり、彼女の場合もそれが心配だったのです。

そこへゆくと中年の女性は平気で、あらぬ方をながめながら、平然と、あくのを待っています。

そんな私の気持とは関係なく、隣のボックスのサラリーマンは、ゆうゆうと用をたしているらしく、このときほど、心中イライラしたことはありません。

その間も、私の耳は隣のボックスの物音を聞きのがすまいと集中し、目は彼女を注視していました。

彼女は胸に抱いている本をギュとだきしめ足を交互に組みかえたりして落着かぬ様子。必死にこらえているその姿がいじらしく、また可愛ゆく、抱きしめてやりたいような気持になってしまったほどです。

気の毒で見ていられなくなった私が、ドアをあけようと思ったとき、ガチャガチャというベルトの金具がふれ合う音が聞こえ、サラリーマンが立ちあがって、身づくろいをしていいる気配がわかりましたので、(ほっ)としました。

このときの気持は、彼女のためによかった

という感情と、これで彼女を観察できるという、喜びとが入り交っていたようです。

○
ボックスに入った彼女がまずしたことは、「臭いわあ」

といいながら小窓をあけたことで、先人の残していった臭いが、よほど強烈だったのでしょう。

同情しながらも、おもわず笑ってしまいました。もち論、声はたてませんでした。

やがて可愛らしいクツが便器をまたぎ、形のいい腿がまがり、まっ白なお尻がおりてきたときの感動は、筆舌につくしがたいほどです。太股からお尻にかけての肌が淡いピンク色で、栗色がかった薄いヘアーという、品のよさでした。

私はあとにも先にも、これほど美しく、見事なのは見たことがなく、できることなら口づけしたいような、魅力がありました。

放尿を始めたのをながめ、このまま時間がとまってくれば、などと夢のようなことを考えながら、ただ見とれていました。

小用を終えた彼女は、二、三度お尻をふったのですが、そのままの姿勢で立つようすがないので、これはひょっとしたらと思っていると、案の条でした。注視箇所が小さきみにふるえはじめ、やがて黒いコリコリしたカリ

ン糖のようなものが見えはじめた時は本当にうれしくなりました。このうれしさはその間彼女をながめていることができるという、うれしさです。

私はスカタロ的な興味は、あまりありません。ただ、女性の部分をながめるといいう事だけで満足なのです。

ですから観察をはじめた当初は、女性の放尿をみてもショックをうけたぐらいで、たまたま観察中の女性が大便を始めたときは、おもわず目をそらし、その日は気味が悪く、食事もノドを通らず、しばらくの間は、観察を中止したぐらいです。

そのうちに放尿にもなれると、今度は女性のその時の姿が、とても可愛らしく感じられるようになりましたが、大きい方は、なにかグロテスクな気がして、やはりダメでした。しかし、この時ばかりは、そういう感情がおこらず、ただその行為が一秒でも長びいてくれればよい、と思ったぐらいですから、勝手なものです。

彼女の場合には、黒いカリン糖がひとつ、またひとつというぐあいには押し出されてゆく様子が、きたならしいとか、グロテスクとかいう感じではなく、なにか神秘的ですら、ありました。

これ以後、私は女性の大きい方をみても、

あまり不快感をおぼえぬようになりました。この後、彼女はペーパーで後始末をしましたが、ペーパーには、ほとんど異物はつきませんでした。

このペーパーの使い方ひとつをとっても、人によって違いがあるのは、おもしろいようで、ふき方は大小とも、後ろから手前の方へもってゆきます。これはほとんど同じですがただ一人、金髪の外人女性ときだけが例外で、手前から後の方へ、ふいていました。

これは外人女性すべてがそうなのか、それとも私の視た婦人の場合だけか、そのところは、わかりません。

使い方にも個人差があり、これは性格も多少、関係しているかもしれません。

ハンドバッグからペーパーを抜きとり、そのままの形でぬぐう人。二三枚をいねいに重ねて中指を押し込むようにする人。一部分だけをチョコンとぬぐう人。一度ぬぐい、さらに二つに折ってぬぐう人。ペーパーを丸めて、化粧をするように軽くたたくようにぬぐう人。それから全くペーパーを使わぬ人。

このペーパーを使わない人は、小のときだけでなく、おどろくことに、大の方をしても使わぬ人がいます。そのまま出ていってしま

うのです。これには本当に私もビックリしました。

手持ちのペーパーがない場合、はたして女性、どうするのか。

これも、さまざまです。

まず、ふかないで出てゆく人。これが一番すごい。

あとはペーパーのかわりに代用品をつかうわけで、これも色々なものが使われます。

新聞や週刊誌など、トイレにおいてある印刷物を利用する人。パンティ、ハンカチ、肌着、色々といっても、せいぜい、このぐらいです。

ただし、これは大の場合で、小の時は、たいてい、そのままパンティをひきあげるケースが多い。

なかでも一番、使われるのが、ハンカチ、それから古新聞などで、この二つが大部分をしめています。

肌着を使って処理したのは中学二年の女の子で、あわただしくかけこんできて、ものすごい勢いで用をたし終え、カバンの中やポケットをさがし、とうとうペーパーがないとわかると、しばらく、そのままの姿勢で考えこみ、やおら立ちあがると、狭いボックスの中

で制服を脱ぎはじめました。

スリップの肩ヒモをはずし、肌着を悪戦苦闘の末、脱ぎ、さらに、その下のブラジャーまで、とってしまったから身づくろいをし、再び、しゃがんで肌着で始末をするまで、私にも事情がわかりませんでした。

カバンの中にはノートもあるだろうにと、私などは思ったのですが、なぜか彼女はノートを使いませんでした。可愛い乳房と、名札の名前をハッキリ憶えています。

新聞紙を使う女性も多いのですが、こういう女性にはハンカチも不思議に持っていないのです。

ペーパーを忘れるぐらいですから、当然かもしれませんが、事後処理のあと、手も洗わずに、かけ去ってゆきます。

パンティを使えば、よさそうなものですが、ミニスカートの場合、これは絶対にできない相談なのでしょう。

したがって、床やタナにおいてある古新聞を使うわけですが、それもないときは一体どうするのだろうか、人ごとながら考えてしまいます。

新聞を使う場合は、まず、手ごろな大きさ



に紙を切りとることから始めます。そして切りとった紙を柔らかくするわけですが、この間、大抵の女性が水を流したりして、紙をやぶく音や、もみこむ音が外にもれないように気を使います。

やはり新聞紙を使うということに抵抗があるのかもしれませんが。

これも一種の見栄なのでしょう。

これを使うときは、あまりにねいにねいうと、本人にはわかりませんが、とんでもないことになります。

中学生か高校生か、年令はハッキリわからなかったのですが、ヘアーがなかったことを思うと、中学生かもしれません。カカトの高いサンダルにホットパンツ、Tシャツ姿の女の子の時です。

彼女も手ぶらでかけこんできて、新聞を使ったのですが、何度もいねいにぬぐったものですから、まっ白いお尻が、印刷インクのために黒く染まってしまったのでした。少女が真剣なだけに、よけいおかしく、ユーモラスな光景でした。

○
休みを利用して前から興味があった、浴線の共同トイレを調べたことがあります。

その結果わかったことは、男達が女性に対して、というよりは、この場合、女性器に對

して抱いている関心の強さです。

どのトイレのボックスも、境の壁は傷だらけで、現にあっていいる穴、つめものをして補修してある穴、ただ今工事中の穴などが、入った瞬間、目につきます。

おそらく駅側も見つけるたびに修理するのでしょうか、追いつかないようです。

しかし、共同トイレでありつづける以上、半永久的にイタチごっこで終るでしょう。

これは、ただ単に好奇心とか探求心とかでは説明できないことで、本質はもっと根深いもの、つまり男が生れながらに持っている宿命、業のようなものではないかと思っています。

それでは女性には、のぞきがないかという、これがいるのです。

すぐ近くに女子高のある駅のトイレへ入った時です。

ブロック造りの水洗式で、入って左手が男子小便用、正面に左右二つのボックスという造りです。

左手のボックスに入ると、女子学生が書いたと思われる落書のひとつに、(このトイレのドアのスキ間から、男性のアレがよく見えるわよ。私、毎日、ここからみてるの)というのがあり、ドアのところを見ると、なるほど喋番の関係なのでしょう。ドアの間が5ミリぐらい、あいていました。

そこからのぞくと、ちょうど男が小用をたしている姿が、ま横から見えるのです。

もち論、男性のアレなるものも、その全貌が、すっかり見えてしまします。

この駅は、朝夕の登下校時には、ホームが女学生で埋ってしまうような駅ですから、この落書きの主は多分、彼女達の一人と思われるます。

反対に露出趣味の方は女性の方が多いようです。

私が視たのは三件です。うち一件がトイレで、あとの二件は同じ女性で、家の近くの公園においてです。

公園の方の女性は三十ぐらい。色白で大柄な女性です。長イス風のベンチを机がわりにしてノートをとっているようですが何かおかしく感じたので、前へ回ってみますと、私のいたところが低くなっていたので、ちょうど、しゃがんでいる彼女のスカートの中が丸見えになりました。(ただしパンティーは、つけていました)

それでも彼女は平気で、ときどき、わきにおいてある買物カゴの品物をあらためるようなふりをして、ノートをとっていました。

この時の彼女は、あきらかに私に見られていることを意識して顔が上気していました。なにしろ、私との距離は3メートルぐらい

だったのですから。

そのあとしばらくしてふり返ってみると、私のいた位置には別の男が立っていました。

二度目に会ったのは公園の砂場です。彼女は小さな男の子を遊ばせていました。

私が近づいても、彼女の姿勢はかわらず、子供のそばにしゃがみこんでいました。ただ無心に子供と遊んでいるというポーズなのです。

私は砂場のへりに腰を下ろし、正面から彼女の腿に視線を集中させていました。

そうすることが彼女に対しての礼儀でありサービスである。そう思ったからです。

トイレでみた女性の場合、その行為が人に見られることを期待していたのかどうかは、いまでも、はっきりとはわかりません。多分そうだろうとは思いますが。

彼女は小太りで、色の黒い二十六、七の女性で、顔に薄いソバカスがありました。

例のごとく観察している途中、彼女のボックスのドアが、勢いよく開いてしまったのです。用をたしていた彼女よりも、ドアをあけた四十ぐらいの婦人の方がおどろき、「あっ」とさげんで、ろうばいし、

「ごめんなさい。ドアが少しあいていたものだから」

とあやまっているのに、彼女は便器をまたいだまま、顔だけを向けて、

「いいんです。このドア、カギがこわれてい

るんです」

だから当り前だ。というような感じで、そう

いったのだらうと思いましたが、そうでもな

いらしく、あけた方の婦人があたふたと行っ

てしまっても、やはりカギはかけずに、その

まま、顔をヒザの間に入れてながめたり、

指先で何かしたりしながら、20分ぐらい、そ

うしていました。

多分、彼女は先ほどと同じようなことが、

トイレへ入ってきた男によって、くり返され

ることを期待していたのかもしれない。

もしそうだとしたら、皮肉なもので、彼女は最も恥かしい姿を私に視られていたのです

が……しかし、彼女にとって大事なことは、自分がいま見られているという意識なのかも知れません。

体と比例して複雑なようです。

観察をすすめてゆくうち、気づいたことがあります。それは女性の体型と女性器の関係です。

グラマーな女性達と筋肉質の女性達では、外見上のスタイルが違います。同じように隠された部分の形も二つのタイプでは違うように思えるのです。

私は専門家ではないので、系統だてて説明することはできませんが、今まで私が観察してきて感じたことを記してみます。

女性を大雑把に分けると、三つのスタイルに分けることができます。

やせた女性、グラマーな女性、それに筋肉質の女性。この三つです。

この場合のグラマーとか、やせているとかの基準は、私がみて、そう感じたものです。

よく十人十色とかいいますが、部分の場合も同様で同じものはありません。

千差万別、多種多様です。形、色、ヘアの濃淡、位置、大きさ、みな違います。それだけに一そう、興味があるわけです。

ただし、小学生ぐらいまでの幼少女のものは、全体的にみて、そう違いはありません。



まず、一番形のきれいなのは筋肉質の女性に多いようです。

私のノートにある④の上品の持主は、たいてい、このタイプの女性達です。

上品とは、まずヘアーが淡く、線があざやかで、全体的にみて色、形とも美しく、上つきであることが、私の条件です。

上つきとか下つきとかいうのは、たいていの人が、ご存知だと思います。

筋肉質の女性は、ボディー全体がひきしまり、よくカモシカのような腿の持主、といわれるタイプの女性です。

このタイプの女性は、中年の婦人でも顔のしわが少ないようですし、太股の肉などもダブついておりません。

例をあげると、タレントの芳村真理や歌手の南沙織。それに肉づきがよくても筋肉のしまっている元女優の内藤洋子なども、このタイプに入ります。とくにオデコの女性は、あちらの方も、ふっくらと盛り上っているケースが多いといえます。

放尿姿勢は、いちがいに、こうだとはいえませんが、外股でお尻を浮かす感じの人が多く、尿も一条の滝となって落下するため、ヘアーをあまり、ぬらすことがありません。

このタイプの女性の特長は、なんと目もふっくらと盛り上っていることと、見た目

にもキリツとしていること、それにヘアーが淡い人が多いことです。人によっては、多少の濃淡はありますが、おおいにかくして何も見えないというケースは、ほとんどありませんでした。

○

グラマーな女性の場合は、筋肉質タイプの女性に比べると、全体的に平らな感じがすることと、何かもう一つ、しまりが無いという感じがするケースが、ずい分ありました。

ヘアーは濃淡さまざまですが、全体をおおっているという人も多く、前のタイプとくらべると毛深い人が多いといえそうです。

肌の色は白い人が大部分ですが、不思議に思うぐらい、部分は黒味がかかった人が多く、反対にそうでない人には、あどけないぐらい白い色をしている、美事な人もいます。

黒味がかかった人は、既婚、未婚を問わずこの傾向があるようで、一度、色白なグラマーな女学生のを視て、ほんとうにおどろいたことがあります。

目の前に真実を見ても、今、顔をみたばかりの可愛らしい女学生のととは、どうしても思えぬぐらいの、不気味さを感じるぐらいでした。

この時は、オナニーのしすぎか、何かの婦人病だろうと思ったのですが、その後でも同

じようなケースにぶつかったものですから、これはグラマータイプの一方の特徴ではないかと思うようになりました。

放尿姿勢は、外股でお尻をふくらはぎの裏側につけるようなスタイルで、腰を落とす人が大半で、ヘアーの多い人には雨だれのようにポタポタ流れてゆくような状態の人が、結構います。

ペーパーを使う際も、ぬれたお尻にペーパーが付着し、本人は気づかずにはパンティをあけてしまったりします。

以前、観察を始めて間もないころ、お尻にはりついて肌の一部のようになっているそれを見て、これは何かの膏薬をはっているのだろうと思ったそれが、実はペーパーの残骸だったわけです。

やせたタイプの女性のは、よくいえば幼なく、悪くいえば貧弱な感じで、女性らしいふくよかさに欠けているような気がします。

それは筋肉質の女性達のふくよかさ、愛らしさ、美しくひきしまったお尻。グラマータイプの女性の迫力のあるお尻や太股の丸み、温かさなどが感じられないせいで、骨ばったお尻や、やせたお腹などから貧弱さを感じるために、よけい、そう思われるのかもしれない。

放尿姿勢は、内股の人が他のタイプに比べ

ると多いようで、放尿するときも神経質な感じがします。

つまり、腰を下して、しばらくしてからチロチロと出てくるような感じで始まり、じょじょに激しさを加えてくるような傾向の人が多いようです。

これはグラマータイプや筋肉質タイプの、腰をおろすと同時にたたきつけるような勢いをみせる傾向と趣きを異にしている、おもしろいと思います。

もち論、グラマーや筋肉質の女性がすべてそうだという意味ではなく、やせ形の女性達と比較した場合、その数が多いということにすぎません。

このタイプの女性は潔癖性の強い人が多いのか、ただ単に神経質なのかはわかりませんが、ボックスに入ってから、あまり物音をたてません。

またボックスが汚れていたりすると、入らずに引き返す人が多いのも、やせ形タイプに多いようです。グラマータイプは（あら、汚ないわねえ）などといいながら入ってきますし、便器のまわりが汚物でよごれているような時でも、（だから公衆便所はイヤなのよ）などといいながら、新聞紙でそうじするよう

な人もいます。

事後処理のあと、キッチンと手を洗うのが、やせ形の女性で、意外にルーズなのが、グラマータイプの女性です。

女性というものは、当初想像していたよりも複雑で、放尿時の姿勢ひとつをとっても、各人のスタイルがあるようです。

同じ外股でも、右足を退く人、逆に左を退く人、お尿を落とすようにかまえる人、浮かす人。

内股でも事情は同じです。尿道の位置の関係で、自然にもっとも楽な発射角度を会得したのでしょう。

発射角度で想い出しましたが、女性でも立小便をする人がいるのです。ごく少数なのですが……。

男の場合と、ちょっと違うところは、ヒザを曲げてお腹をつき出す感じで背をそらし、中腰よりは、ちょっと高めの姿勢です。

尿は、ゆるい放物線を描いて落下します。これは中年の婦人と、和服の老女の二人でした。

どこかの農村では女性も立小便をするというところを、本で読んだことはありましたが、実見したのは、この二例だけです。

その他にも、妙な大便のしかたをする婦人がおりました。

中年の、やせ型の婦人で、メガネをかけた一見、教員風のインテリタイプの女性でしたが、顔を出した、黒く硬い便を、ペーパーでつまみ、ゆっくりと左右にふるようにして、つぎつぎと摘み出していきました。

何であんなことをしたのか、見当もつきません。いつもそうしていたのか、それとも便秘でつまっていた宿便を、そうしてとりのぞいていたのか、本当のことは彼女にしか、わかりません。

この観察を通して知り得た女性の姿こそ、飾らない女性本来の性のような気がします。百聞は一見にしかず。いままで読んだ、どんな本よりもこの経験は、私にとって女性を理解する上で、どれほど役に立ったか、はかりしれないものがあります。

トイレのカラクリを造った人。そして私と同じようにそれを発見し、秘かに利用していた、何十人・何百人かの男達。延べ何千人・何万人の女性達が、そこで出会い、赤裸々なポーズで男達を悩まし、魅了し楽しませていた小さな古い建物は、今はもうないのです。

——（おわり）——





〔カメラ〕と〔ペン〕のルポルタージュ

M女26のマゾぶり

まさに抜群

玉木章子たまきあきこの巻まき

塚つか

本もと

鉄てつ

三ぞう

M女のあえぎ

八月下旬、南加津子から電話が掛かった。無事、女兒出産という知らせであった。約東通り、退院してすぐ、自宅から掛けてくれたのであった。

お国訛りの、まだ抜けきらない素朴で可愛い彼女の言葉をきいて、私は我がことのように喜んだ。

あの、出産間際の、怒張したような膨大な臨月腹を抱えての激しいSMプレイを知っているだけに、私は、母子ともに健全という知らせを聞いて、ほんと安堵したのだ。

それから九月になって、すぐ南加津子から電話があった。というのは、九月に入って、もし、プレイが可能のようだったら、是非、連絡してほしいと頼んでおいたからだ。

妊娠中の激しい責めを甘受した加津子。だが、私は彼女の妊娠していない状態での羞恥責めを、どうしても、やってみたかった。

M女南加津子の可能性の限界まで、徹底的に責めてみたかった。どこまで苛酷な羞恥責めに耐え得るか、果たして、どんなに燃えあがるのか、それを試すことは、私にとって、たまらない楽しみだった。

生まれたばかりの赤ん坊の世話で、彼女はかかりきっているとのことだった。核家族の代表のような二人っきりの水いらずの生活だから、彼を勤めに送りだしてしまうと、もう彼女が、たった一人である。のんきなようだが、育児も家庭のことも、誰一人、手伝ってくれる人は、いないわけだ。

育児書と首っ引きでの毎日。それは結構、楽しく、そして忙しかった。

電話の向うから、彼女のそうした若奥様ぶりが窺えて、私には、ほほえましかった。

その次に彼女から電話があったとき、私は受話器の向うから、南加津子の吐息に似たようなものを感じた。外出したいんだけど、赤ちゃんを抱えていては、思うようにならないので残念であるというのだ。産後の肥立ちも良くて、身体の方は非常に元気で、母乳も順調に出ているので、回復した体力は、SMプレイを憧れているのだろう。

身軽になったところで、思いつきり、虐めてほしいというのが、彼女の望みなのだが、その点、私も臨月腹の南加津子に対しては、責めも自ら腹の中に孕んだ子供のことを思っ



て、手加減せざるを得なかったのだが、今度は違う。子供を一人か二人、産んだあとは、

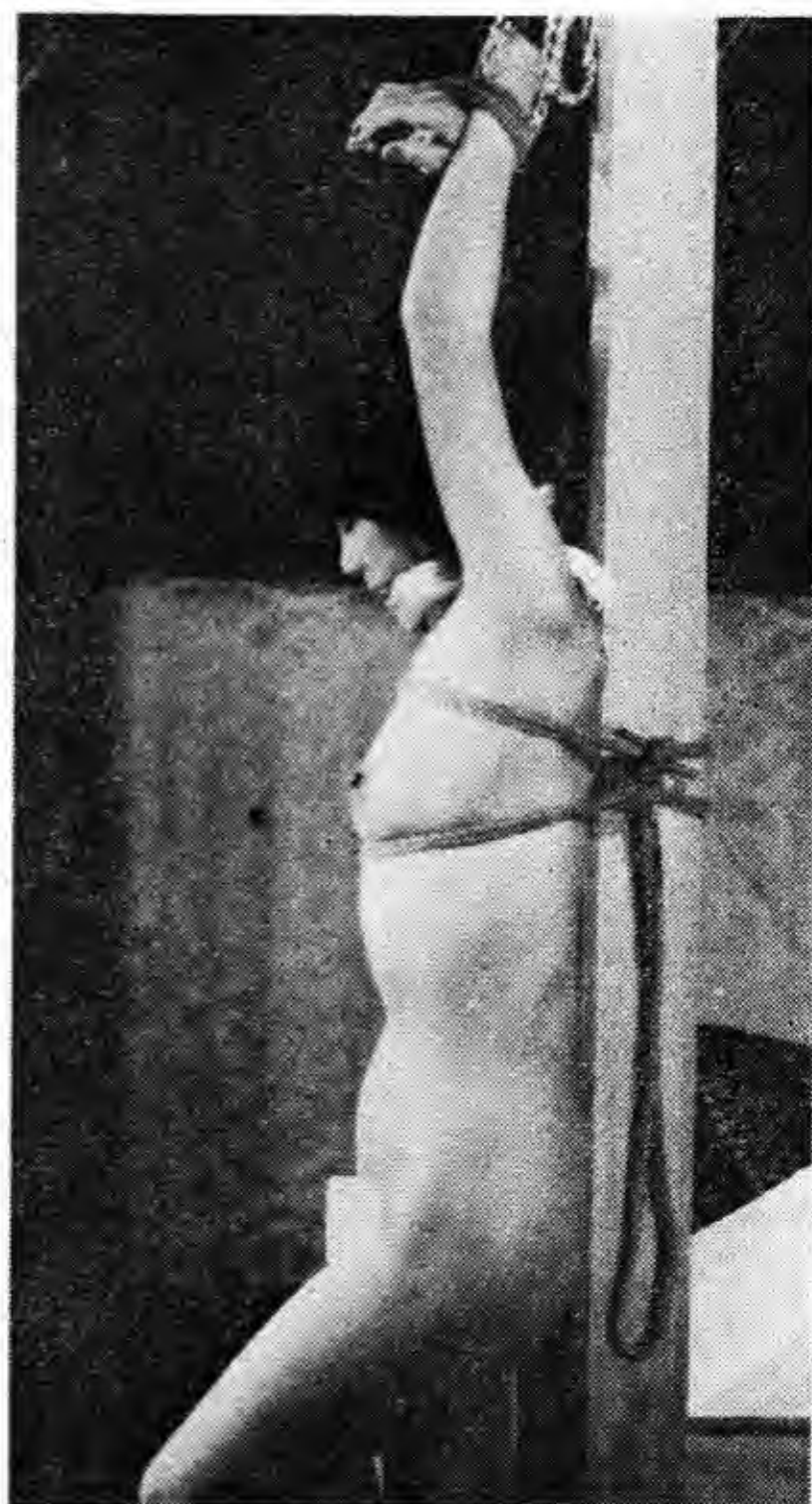
あの方の感覚も鋭くなるという定説だが、この類稀な南加津子ではどうだろうか。未婚のときから、あんなに読者通信やら、奇クサロンを寄せてきているくらいの女性であるから、きっと、目を瞞るようなSMプレイを展開させてくれるだろう。私は、それが楽しみであるが、今のところ、赤ちゃんの手が放せないのでは駄目である。

読者の皆さんからの便りを拝見していると新しいM女の「責めプレイ」を紹介せよ、という意見が少なくない。幸いにして、十一月

号に、「私に御主人様をお与え下さい」という一文を載せられた苗木陽子取材することが出来て、百枚近いカメラ・ルポの記事を十二月号に書いたばかりである。

その苗木陽子から、再び来阪するという連絡があり、一カ月ぶりに第二回目の惑溺のプレイをやる機会があった。剃毛のあとが、チクチクする度に、あの激しいSMプレイを思い出して、たまらなくなり、矢も盾もたまらず、出てきたというのであった。

夕刻から翌日の昼前まで、ぶっ続けのプレ



イは、カメラそっちのけの責めオンリーにな
ってしまつて、緊縛写真の方は、予期したほ
どの枚数は撮れなかったが、それだけまた、
SMプレイの激しさを物語っているといえる
だろう。十月中旬には、所用で京都を訪れる
と約束しているので、そのときには、奇抜な
羞恥責めの濃厚なフォトを、ふんだんに撮影
して、皆様のお目を楽しませたい。

緊縛フォト好き

正式に結婚していない男女間に於いては、

愛人とか恋人とか呼ぶのが、いいと思うが、
情婦という下品な用語を使う者もいる。

玉木章子の場合は、どうであろうか。彼女
は自分から、四月号に載せた告白で、八日陰
の女Vという表現を用いていた。もっとも、
そのときの題名は、『日陰の女から日向の女
に』というので、ニュアンスは大分、違ふの
だが、彼女が読者通信に寄せている文章では
「私はあくまで日陰の女です」と、はっきり
書いている。

この『日陰の女』という文句が彼女の主人

である藤坂氏には気にいらなかったらしいの
だ。俺がこれだけ気を使って、親切に世話し
てやっているのに、日陰の女とは、何てこと
を言うのだと、大分お冠だったらしい。

玉木章子に対するカメラ・ルポを、『美し
い「責め」の記録』と題して二月号に掲載し
て、割合に好評だった。

その反響としては、一寸拾い上げてみても

◎四月号「奇クサロン」

◎玉木章子論（峯村比等志）

◎「玉木章子責め」についての私のアイデア
（宇野高夫）

◎「M女26」玉木章子を、こうして責めてほ
しい（西村真）

◎六月号「奇クサロン」

◎玉木章子取材者立候補の弁（吉田遥）

◎七月号「奇クサロン」

◎玉木章子礼讃（金沢十三）

◎八月号「奇クサロン」

◎「玉木章子」の鼻検査（江川花芯）

という風に、目じろ押しにある。そして更
に、彼女自身の告白文が二月号に載っている
のである。それで私は、なんとかして、第二
回目の密度の高いプレイをやりたいものだと
考えていた。それが、ちょっとした言葉の行

き違いのトラブルから、折角、樹てていたプランが実行されずじまいになっていた。

それが、第一回目の取材から数えて、丁度一年近くになって、再び、玉木章子とSMプレイが出来ようとは、世の中は一寸先は、わからないものである。

「主人の緊縛フォト好きには、私も、あきれ位です」と彼女も言っている通り、藤坂氏は、ねっからの責め写真ファンである。だから、この道から足を洗っている筈はない。

「主人は、流石に塚本様だと言って感心していました。私の責め写真を見て、物凄く興奮してるんです。今まで見た、どの縛りフォトよりも、お前の緊縛写真は刺激的だといって一晩中、私を寝かさないので。お前が開股縛りにされて、ああ、それから、どうされたのか、と思うと、もう全身がわくわくして、耐えられないって言うていました」

私がレストランで彼女と逢ったとき、声を忍ばせて、そんなことを言っていた。

やはり、藤坂氏は、自分の愛人の縛り写真を私に撮らすためにだけ、SMプレイをさせたのだろうか。あれから、玉木章子に三度ばかり、喫茶店やレストランで逢っているうちに、彼女がSMプレイを私としたいという気



持を持っていることが、よくわかったが、藤坂氏の許可が中々おりなかった。

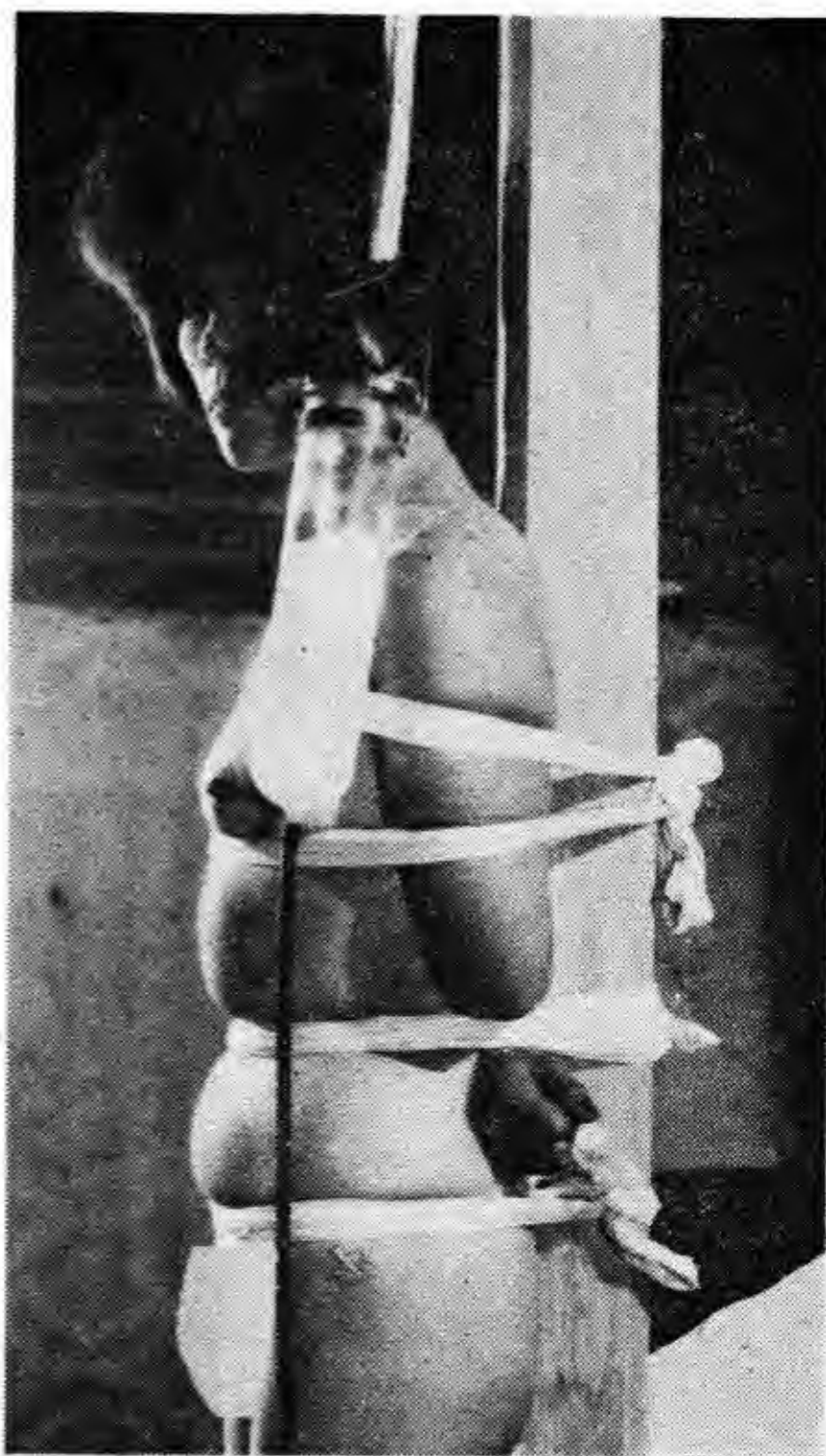
最愛の掌中の珠である玉木章子を、他人の手によって羞恥責めさせることの危惧を、藤坂氏は多分に抱いたに違いない。章子がM化してゆくことは嬉しいには違いないが、第三者の手によって次第次第にマゾ女性として啓発されてゆくことに対して、言いようのないジレンマを感じたのだろう。

私は、藤坂氏の顔を、運転台に座っている

ところを硝子越しに、ちらっと見たに過ぎなく、直接言葉を交わしたことはないが、彼の気持は痛いほど、よくわかる。

「実は私、彼と口喧嘩したんです。日陰者という文句を主人が怒って。だって、主人が書けというから書いたんです。それを、今頃になって怒るなんて、私、困ってしまいましたわ。貴方と、お約束してましたけれど、しばらく、待って下さらない？」

彼女は、そんなことも言っていた。玉木章



子というマゾ女性を挟んで、藤坂氏と私と、奇妙な三角関係が出来上ったのだ。

春から夏が過ぎて、秋もたけなわになって冷戦も雪解けを迎えたのか、「塚本さんに、思いつきり、責められて、可愛がって貰って来い」という具合に、風向きが変わってきた。

人なつっこい玉木章子は、彼氏との言葉のやりとりから、閨房の機微に至るまで、なんでもかでも、あからさまに喋るのだが、その代り、私とのSMプレイも細大洩らさず、逐

一、彼に報告するに違いない。

私は自分もSMプレイの処上にあがったつもりで、玉木章子を責めることにした。

これがSM料理の献立だ

「彼はね、私の緊縛写真がほしいのよ。今度はカラーのも写してもらって来いって、言っていましたわ。貴方だったら、一回に百枚ぐらいは撮るでしょう。だから、彼って、それを全部、貰えるって、喜んでましたわ」

会心の作だったら、四つ切ぐらいに伸ばして進呈したい気持だ。だが、藤坂氏の好みについては私は詳細に関しては知らない。

第一回のときは、専ら、開股縛りと足挙げ縛りという羞恥責めに終始したが、私としては、相手が飼育済みのベテランのM女だということを考慮して、最初から相当、厳しい縛りを敢行したつもりであった。

だから私も、初対面の彼女に対して、よくもまあ、あんな、どこもかも開けびろげな縛りをやったものだ、と、あきれもしたものだ。

縛って責めているときは、玉木章子には、痛い、痛いと言って、大分怨まれたし、事実彼女の意志に反して、開股責めのために、足首に縄を掛けて、その縄尻を、じりじりと引き上げたときなんかは、「そんな極端なポーズになったら、彼に叱られるわ」と、いささか、牽制されたものであった。

責められている間に、愛人の彼のことを思うことで、一層、玉木章子はエキサイトして燃えに燃えあがり、このSMプレイは、私にとっても結構、楽しいものであった。

そして、出来上った緊縛フォトが、藤坂氏を凄く興奮させたらしい。この三者関係というものは、一体、どうなっているのだろう。

やはり、私としては、藤坂氏という玉木章子の愛人を意識せざるを得ない立場にある。

郵便局の窓口で事務をとっていた彼女を見染めた彼。そして、また玉木章子も、藤坂氏を愛したに相違ない。相思相愛の二人の間に展開された縛りを中心としたSMプレイ。

それは彼女が十九才の年から二十六才になる現在まで続いたのだが、マンネリを打開したために寄せた読者通信で、知り合った人とのプレイでは、気に入った緊縛フォトも出来なかったことから、私への誘いかけとなったわけである。

第一回目に出来上った写真には、非常に満足した彼も、いつも眺めているうち、次第に飽きてきて、再び、玉木章子を私の前に提供してきたというのが実情ではないだろうか。

「貴方さえよければ、私のマンションに来て下さってもいいんですよ。私以外に誰もおりませんし、広くはないですけど、写真を撮るぐらいだったら出来ると思いますわ。それに縄やら、一寸した責道具ならありますのよ」

そう言って彼女は、私を自分の部屋へ来るように誘ってくれたが、私は彼と彼女の生活の場へ訪れることは避けたい気持だった。

泥棒猫のように、彼の不在を狙って、のこ



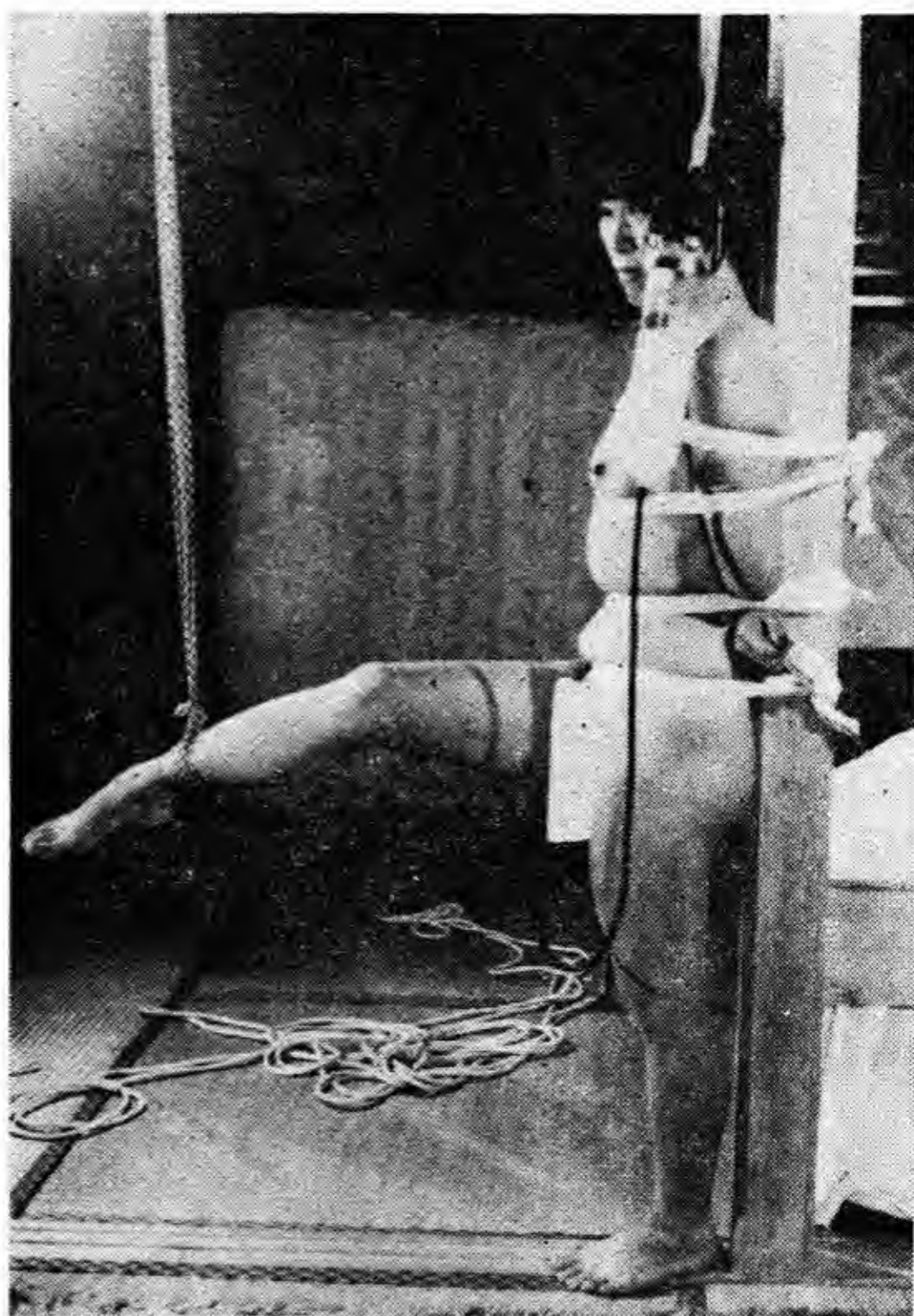
のこと上ってゆくのは、「一盗二婢三妾四妻」の中の「一盗」の快味かも知れないが、私の性格としては、どうも好ましくなかったの彼女の好意を謝して婉曲に断った。

こうしたいきさつを、詳しく書くということは、どうせ、彼も彼女も、この私のルポを当事者としての興味から、いの一冊に読むであらうから、私としても、いささか書き辛い気持だ。といっても、私の書くルポの文章は奇クの読者を対象としているのであって、彼

一人のために書いているわけではない。

玉木章子の写真にしてもそうだ。やはり、奇クの読者に見て貰うために写しているのであって、彼の依頼で撮影しているわけではない。幸いにして、一年前のフォトは彼にとつて満足すべきものであったらしいが、今回は果して、どうであろうか。

私としては、与えられた玉木章子という素晴らしい素材を活用して、『これこそ、SM料理の献立だ』と自負するに足る作品を完成し



たいものだと考えていた。

光る目と目

私が縄を手に持って近づいたとき、玉木章子の目が、きらっと微妙な光を放った。

空中で私と彼女の視線が交差して、そこで激しく火花を散らした。何分の一秒かの短い

時間で、責める者と責められる者との意志表示が、その瞬間、交わされたのであった。

彼女の目は、おびえている目ではなく、むしろ、何かを期待している目であった。何かに、すがりつくような捨身の目であった。

私の目は、きっと餌物を狙う鷹の目のように鋭く輝いていたことだろう。私は先ず、目

で射すくめておいて、彼女の両の手首に縄を掛けた。か細い手首に、縄が掛かると、美しいマニキュアした白い指がピクピク動いた。

その縄に紐を通して鴨居に縛りつけた。

両手を上にあげた無防備の姿だ。だが、それ自体、苦痛を伴うものではない。

私は彼女の胸から下半身にかけて、ぴっちり巻きつけてあったバスタオルを剥いだ。

「ああ、あーあ」

彼女は両膝を合わせて身をくねらせ、赤い唇から、かすかな喘ぎの声を洩らした。

そこには、すべすべした白肌に似合わぬ漆黒の房々したものが現われた。剃毛された苗木陽子を見慣れていた私の目には、殊更、それが濃密で豊富なように見えた。

剃毛されて童女のようになった道具立を探検するのも楽しいものだが、密林の中にかくされた堂宇を調査するのも又、楽しい。

両手を万才のような格好に縛りあげて剃毛したとき、苗木陽子は電撃的なショックで狂うように、もがき回った末、失神してしまっただが、今、玉木章子は、全身を羞らいのなかに、うねうねとくねらせながら、私の目の前に、その裸身をさらしている。

両手を揃えて上に吊られているのだから、

如何に恥かしくたって、身をかくすことも、どうすることも出来ない。次には、どのような羞恥責めが襲ってくるか、それを只、待っているばかりである。いや、そうした責めに対する期待が大きいのだろう。私が近づいただけで、美しく除毛された腋の下が、風にそよぐ葦のように、おののいた。

そうになると、私の嗜虐心が一層あふりたてられた。舐めるような視線を、腋の下から、乳房のまわり、お臍、臍下へと走らせていった。身をうねうねとうねらす章子に、私はたまらなくなつて、視線ばかりか、ねっとり汗ばんだ掌を滑らせていった。

「いやーっ、やめて、やめて……」

彼女の悲鳴とは、うらはらに、身体の方はすでにSMプレイの渦中に没入していることは、目に見えていた。

私はしゃがみ込んで、房々ともやっている纖毛に手を触れた。両手の自由がきかずに、どうすることも出来ない彼女。私の執拗な触手は、悪魔の使いのように跳梁する。

「ああ、やめて、やめて！」

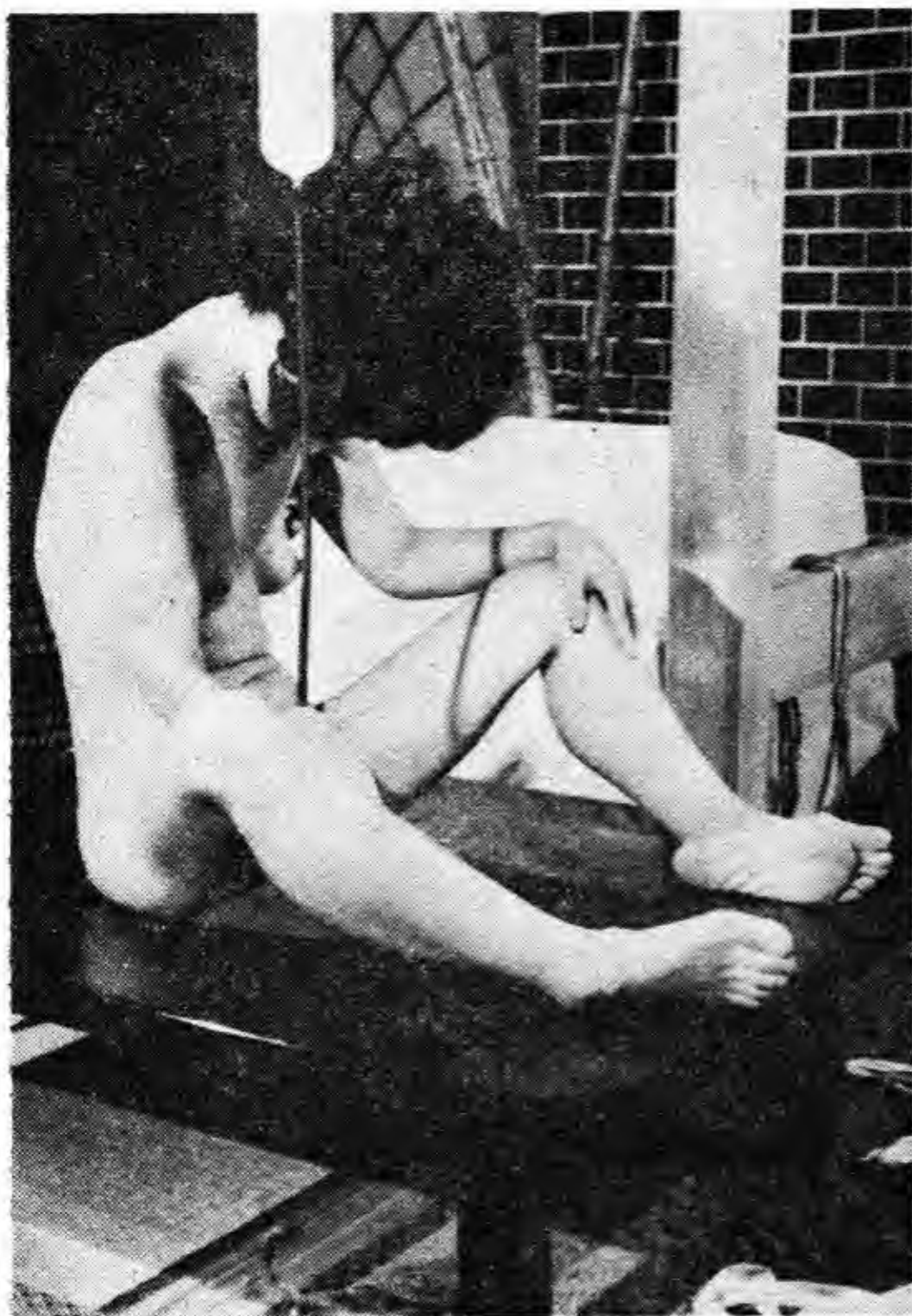
熱気の充満する狭い部屋のなかに、章子の悲鳴だけが、甘く切なく響くのだった。私はその弄戯を更にやり易くするために、足首に

紐を括って引きあげていった。すでに、ムードに酔ってしまった彼女は、ためらうことなく私の言う通りになつていった。

“浣腸” という羞恥責め

「どうだい、浣腸はされたことあるの？」
「いいや、彼は縛るばかりよ。浣腸なんて、

一回もされたことないわ。でも、雑誌を読んでいると、自分もされたらって、考えることもあるのよ。だけど、羞かしくって、自分からは、そんなこと言えないわ」
「彼は、縛りが好きなんだね。本当に。そりゃ、身動き出来ないように縛りあげるのも、いいもんだが、只、責めるだけだったら、少





しは動ける余地を残しておくのも面白いもんだよ。羞恥責めが目的だったら、なにも堅い麻縄で、ぎゅうぎゅう肌の色が変わるほど、縛ることはないと思うけどね」

「私、彼に縛られているうちに、縛られることが好きになったみたいだけど、浣腸されてみると、浣腸も好きになるかもしれないわ。」

「ただ、経験がないから怖いよ。だから、急に、浣腸なんかしないでね」

「浣腸を一回もされたことがないというのは僕にとっても興味があるね。いわば、浣腸の処女地というわけだ。といって、急に、無理矢理、浣腸するなんてことは、しないよ。やはり下地を作っておいて、充分ムード作りが

出来た上でやろうね。それよりも、痛くない縛りの羞恥責めというのをやろうか」

私は白い晒の紐をとりだして、彼女を柱に縛りつけた。女体を拘束する上に於いて麻縄も、この紐も大差はない。むしろ、物理的な痛さが軽いだけに、ねちねちとしたいたぶりを長時間、続けるのには、この方が余程適しているのだ。実質的に女体の動きを封ずるだけなら、こうした紐がいいにきまっている。

柱に密着させて紐を掛けただけで、彼女はS Mムードの坩堝のなかに、とっぷりと漬ったように諦めの表情で全裸の女体を私の目に晒している。私が背後へ回っただけで、何をされるのかと、一瞬、おびえた視線を足もとへ落すが、それでいて、何かをされてみたいという期待が、全身にぞくぞくとするほど、現われているのが、よくわかる。

こうしたところに、飼育済みのM女としての玉木章子のポーズがあるのだろう。いみじくも、西村真氏が四月号で言った「M女26」というニックネームが、今の彼女には、ぴったりのような気がする。

「さあ、もう、どうとでもして頂戴！」と観念した彼女の表情のなかにも、未知なものに対する危惧と恐怖が、ありありと窺える。

未知なもの——それは彼女にとっては、浣腸プレイ——。雑誌なんかで読んで、一応の興味は持っているものの、いざ浣腸されてみると、それは、落花狼藉のどんな場面が展開されるものやら、それは、彼女にとっては、一切わからないのだ。

私にとっても、こうした玉木章子の捨身のポーズは、凄く興味があつた。一年ぶりに見る彼女の裸身は、少し痩せたようだ。洋服を着ていたときの彼女は、まるで未婚のOLのように若々しく潑刺と見えた。それが、こうして素裸にしてみると、美しい肢体のなかにも、SMプレイによって爛熟した大人の女としての臭いが、ぶんぶん匂っていた。

見たところ、娘の体のようでも、内容はベテランの〔M女26〕の面目が躍如としているのだ。こうした女体こそ、S人士にとっては最高の魅力ではなからうか。

私は彼女の顔の傍らに、石鹼液をいっぱい満たしたイルリガートルを吊るした。

「いやー、これなんなの？ 冷たいわ」

「これがイルリガートルといって、浣腸する道具なんだよ。ほら、このゴムの管の先に、嘴管といって、こんな先がついてるだろう。これをアヌスへ挿し込んで、浣腸液を、お腹

の中へ注ぎ込むんだよ」

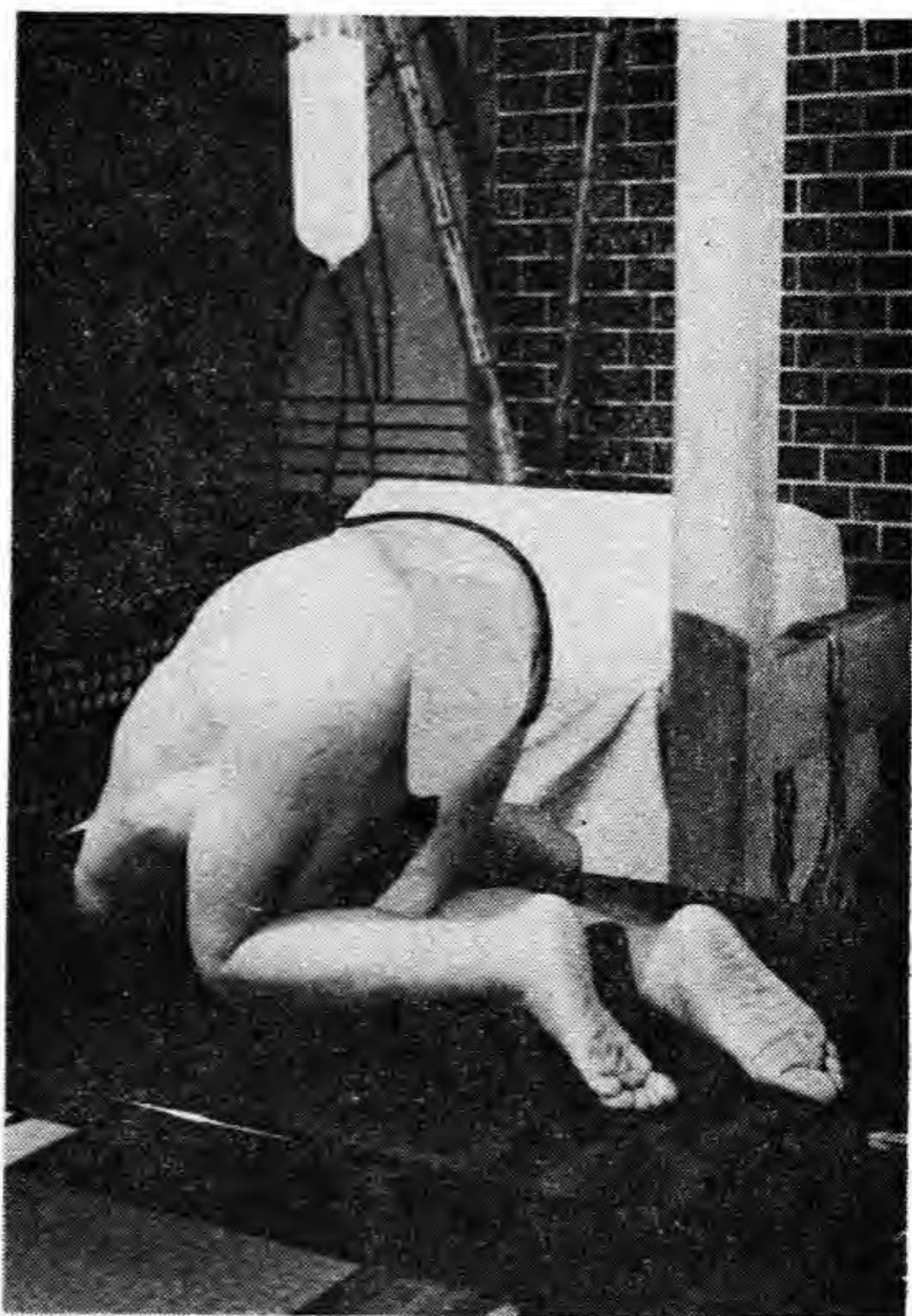
そう言って、私は彼女の目の前で水止めの把手を押してチュチュッと石鹼水を送り出す。白い液体は弧を描いて、彼女のお臍のあたりを濡らす。

「いやいや、気味が悪いわ」

「気持わるがるのは、まだ早いよ。この嘴管

にメンソレをたっぷりつけておいて、貴女の肛門に、ぶっすりと挿し込むんだ。そうしておいて、一気に、この石鹼水を、お腹の中へ送り込むという寸法さ。それから、また、なかなか面白いんだよ。お腹がぐるぐると鳴って、便意が激しくなってくるんだが、貴女は、このように両手の自由がきかないし、上





半身も柱に縛られているだろう。だから、そのあとが、素晴らしい浣腸責めの場面が展開されるってわけさ」

「いやよ、いやよ。今、浣腸するのだけは勘忍して。どうしても浣腸しなきゃいけないのだったら、貴方の見ている前で、私、自分で浣腸してもいいから、ねえ、お願い。今、や

るのだけは待って……」

「そうか、そんなに言うんだったら、今、浣腸を施すのだけは許してやろう。そのかわりあとで、自分で浣腸したり、私の目の前で排尿したりするね。その前に小便の材料になるように、ビールを飲ましてやろう」

私はコップについだビールを彼女の口元へ

持ってゆく。

「私、ビールは嫌いじゃないけど、こんなに括られたままで、飲まされるのは、始めてだわ」

「文句を言わないで早く飲むんだ」

ビール一本分は忽ち彼女の腹中に入る。

「うん、なかなか、飲みっぷりがいいぞ。浣腸は今しないが、そのかわり、嘴管を挿し込み易いようにアヌスだけは探っておこうね。こう、脚を揃えて立っていると、アヌスを見ることが出来ないから、足を挙げてごらん」

「うわあ、ずるいずるい。そんなこと言って今、浣腸するんですよ」

「浣腸はしないさ。嘴管をアヌスに挿し込むポーズなんてのも、一寸乙なものだよ。きつと彼も喜ぶに違いないと思うな」

「彼のことは言わないで——」

「でも、写真を撮っておかないと、帰ってから、彼に叱られるはしないかな」

「だったら、早く写真だけ撮って——」

「写真を撮ったら、貴女のアヌスを、ゆっくりと見せてくれるかね。この嘴管が早く入りたい、入りたいって、言ってるんでね、一応アヌスの具合を調べておきたいんだよ」

「この前のとき、すっかり見られたじゃあり

ませんか。私、こんな立ったままで片足を挙げた格好じゃ、恥かしいですわ」

「以前は以前、今は今だよ。さあ、挙げた足をもっと開いて。そうそう、その調子」

私はしゃがみ込んで、彼女のお尻の下へ視線をやる。予想した通り、ちんまりと可愛いく微笑んだ菊の蕾は、かぶりつきたいほど美しい。放射状に走った皺曲が、定規で計ったように、規則正しいのは、括約筋の極めて健康なことを物語っている。

但し、こうしたポーズでの浣腸は最初から無理なのはわかってる。私は嘴管の先をアヌスに当てるだけで彼女を解放してやった。

浣腸オンパレード

「約束だから、自分で浣腸してみるか？ それはそうと、折角、ビールを飲ましてやったのだから、勝手にトイレへは行くなよ。私の目の前で堂々と排尿してもらうことになってるんだからな」

私は彼女を柱から解放してから一服もさせないで卓の上へ追い上げた。

「私、今まで一度も浣腸なんか、されたことがないって言ったでしょ。だから、自分で浣腸するなんて勝手がわからないですわ」

「だったら、僕が手をとって、こうして教えてあげるから、自分でやってごらん」

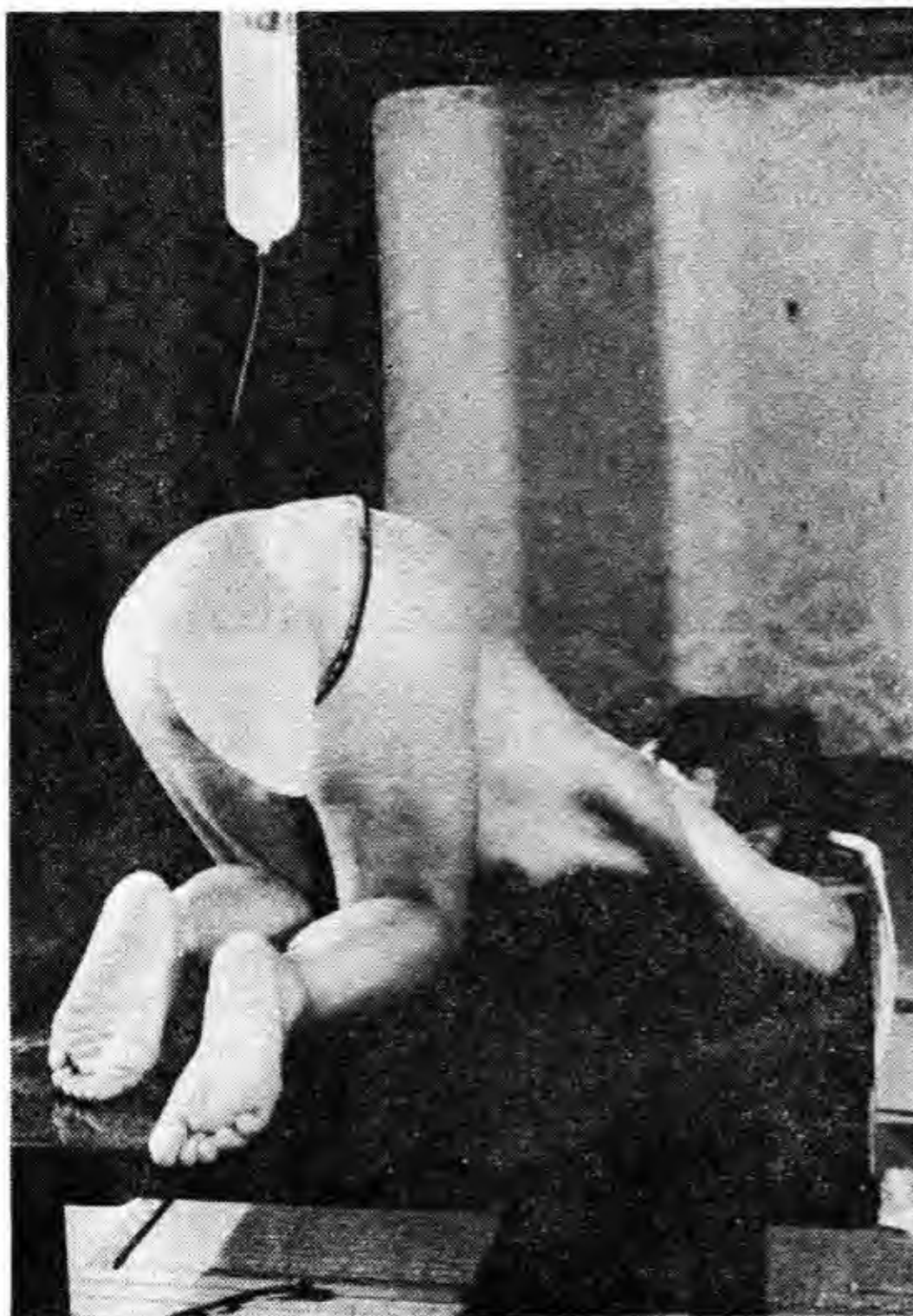
「恥かしいわ。自分で浣腸するなんて――」

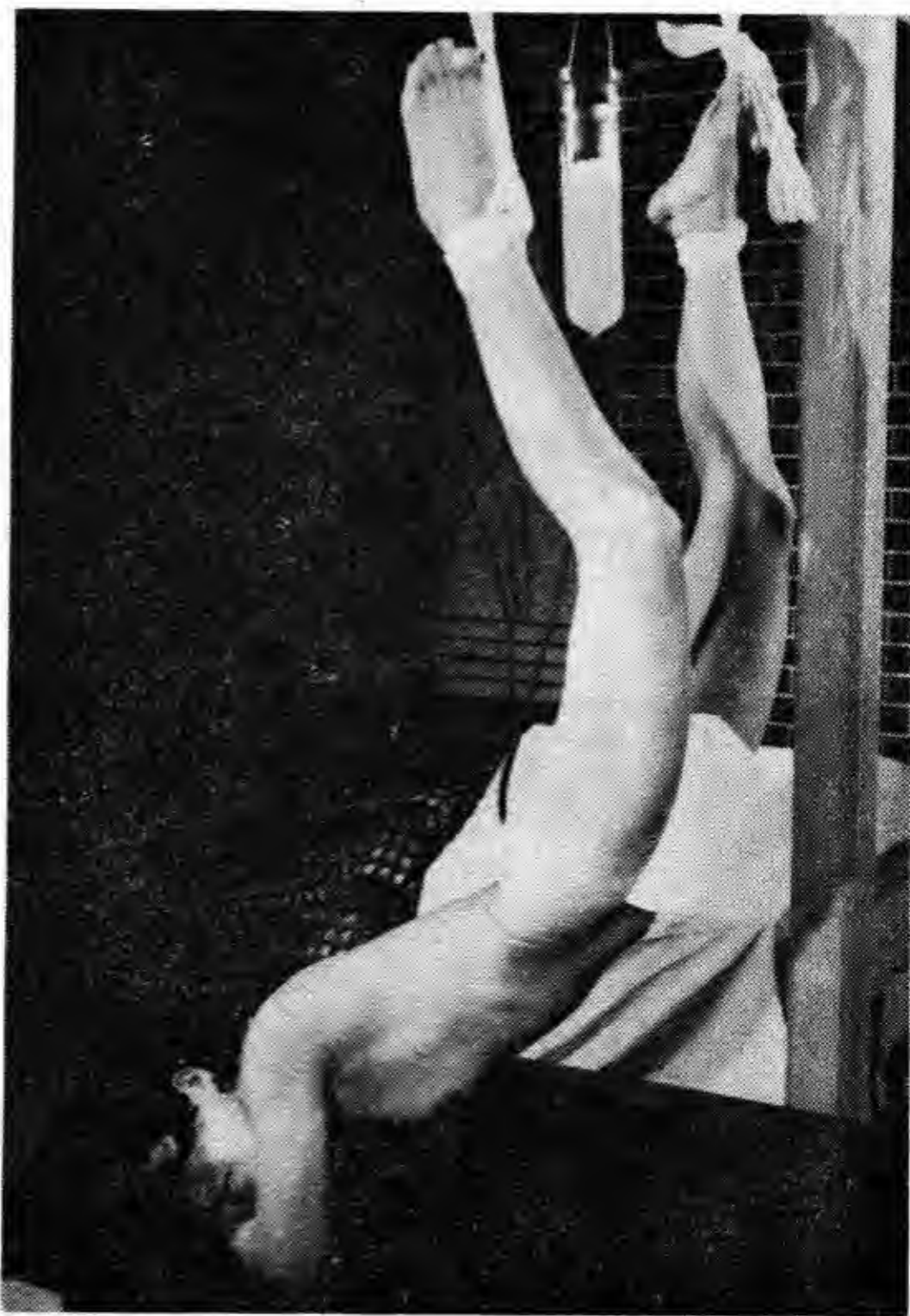
男の人から無理にされるんだったら、仕方がないって諦めますけど……」

「ということは、他人の手で強制的に浣腸されたらいいって、願っているわけだね」

「私、浣腸されたいなんて思っていないですよ。ただ貴方が浣腸をするって、おっしゃるもんですから、私、浣腸されるなんて、物凄く恥かしいんですけど、仕方なしに……」

「されてみるって、言うんですか？ それだったら、テーブルの上へ寝てごらん。いろんな浣腸のポーズで、貴女のアヌスに、このゴ





ム管の先についている嘴管を、ぶつつりと挿し込んで浣腸してあげよう」
「うあーっ、凄く羞かしいわ。縛られるんだったら、少しは自信あるんだけど、浣腸だなんて、勝手が十分、違うんですもの。もし、浣腸して、お腹が痛くなったら、トイレへ行かせてくれるんですの？」

「トイレへ行かなくてもよいように、オシメもオムツカバーも準備してきてあるから、心配しなくてもいいんだよ。その中へ、思いつきり出したら、そりゃ気持ちいいから——」
「いやあ、悪趣味だわ。赤ちゃんじゃないのに、そんなこと出来るの？」
「そうさ。今日一日、貴女は赤ちゃんになっ

たつもりでいればいいのさ」

「じゃあ、こうすれば、いいんですの？」

「それじゃ、嘴管を挿し込むことが出来ないじゃないか。もっと、お尻を高く上げて、カメラの方へ、よく見えるようにするんだ」

「いやあ、羞かし。それじゃ、なにもかも、すっきり見えてしまうじゃないの？」

「そうさ。貴女の可愛い菊花に、嘴管がすっかり入ってしまったところを、皆さんに、よく見て頂くんだよ」

私はテーブルの上で全裸の玉木章子を、いろんなポーズに介添えして変えてゆく。みんな、お尻をつきだしてアヌスをあらわに、レンズの方へ向けた格好である。

私はポーズを変えるたびに、嘴管をアヌスに挿入して浣腸の態勢をとる。縛っていないのに、玉木章子が物凄くエキサイトしているのが、私にはその部分の変化からして、よくわかる。カメラのシャッターが切れて、四方からストロボの閃光がきらめくと、彼女は、黒いゴム管をお尻から垂しながら、うっとりとした表情で、次の指示を待っている。

「入れちゃいやっ。浣腸液を入れちゃ、いやよ。このままで、じっとさせておいて……」
シャッターを切り終えた私が、近寄って嘴

管の水止めを持とうとしたら、彼女は突然、頓狂な声を挙げた。縛っていないのだから私が無理に近寄ると、彼女はゴム管をぶらさげたまま逃げだしてしまうかもしれない。

それにしても、あけすけに、こんな場面を見られているということが、そして、カメラのレンズで狙われているということが、これほどまでに、女体のその部分に、変化を与えるものなのだろうか。

浣腸を施す部分が、平常は誰にも見せない隠された場所であるだけに、羞かしさも相当なものであろうけれど、また、それだけに、M女としての彼女の心情には、複雑な変化があったことは想像するに、かたくない。

私は、テーブルの上に横たわった玉木章子を、じっと眺めていた。彼女は、殊更、嘴管の挿入された箇所を、私に見せつけるようにして、そのままのポーズを続けていた。

強制浣腸に踏みきる

操り責めとか、ムチ打ちにしたって、もし縛っていないとしたら、どうだろうか。逃げ出してしまうか、手足を使って激しく抵抗するに違いない。縛るということで、その何れをも封じてしまうのだが、M女性の側からす

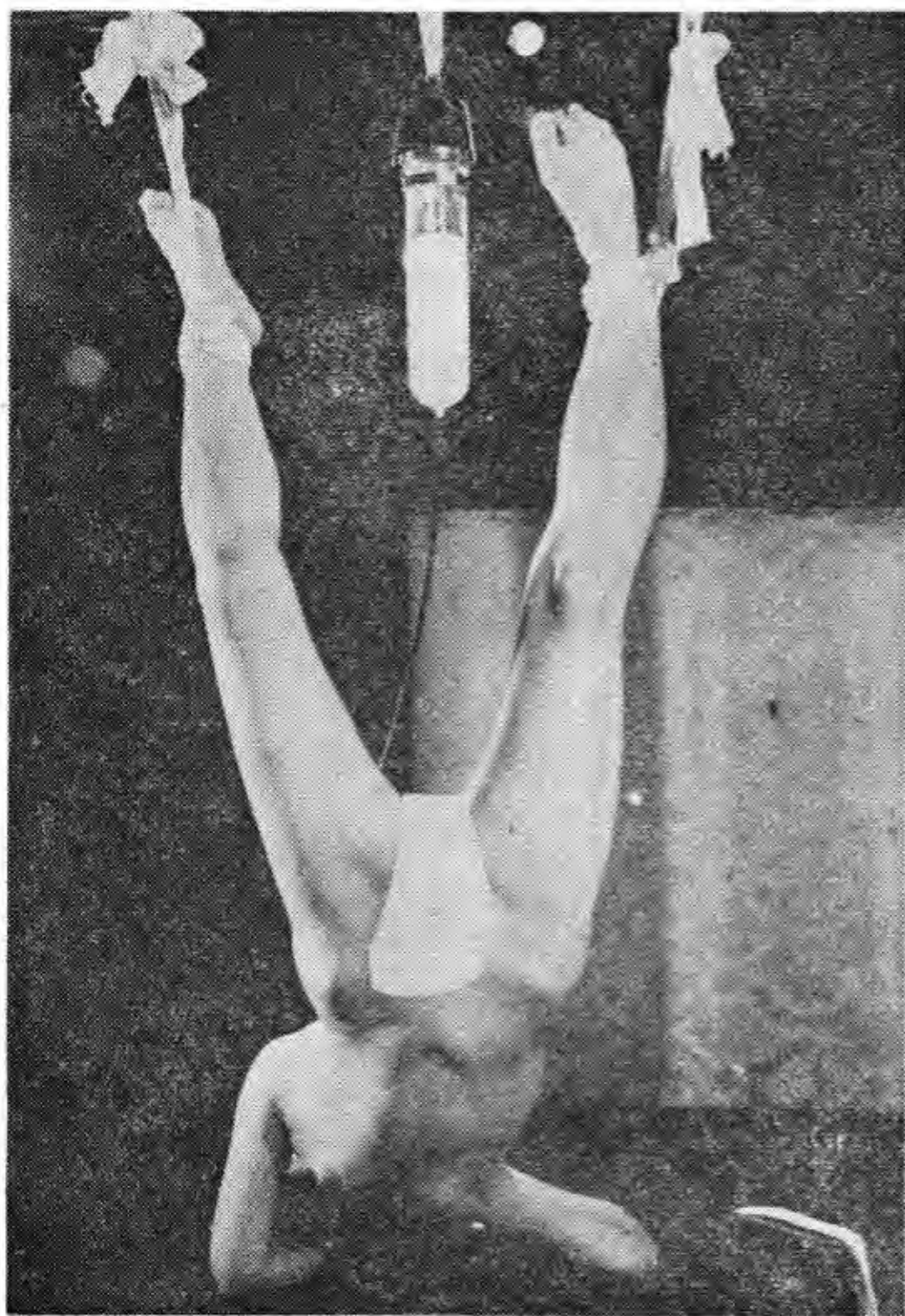
れば、縛られることによって、その後に起るであろう淫らな責めの場面を空想して、興奮してしまうのだろうか。

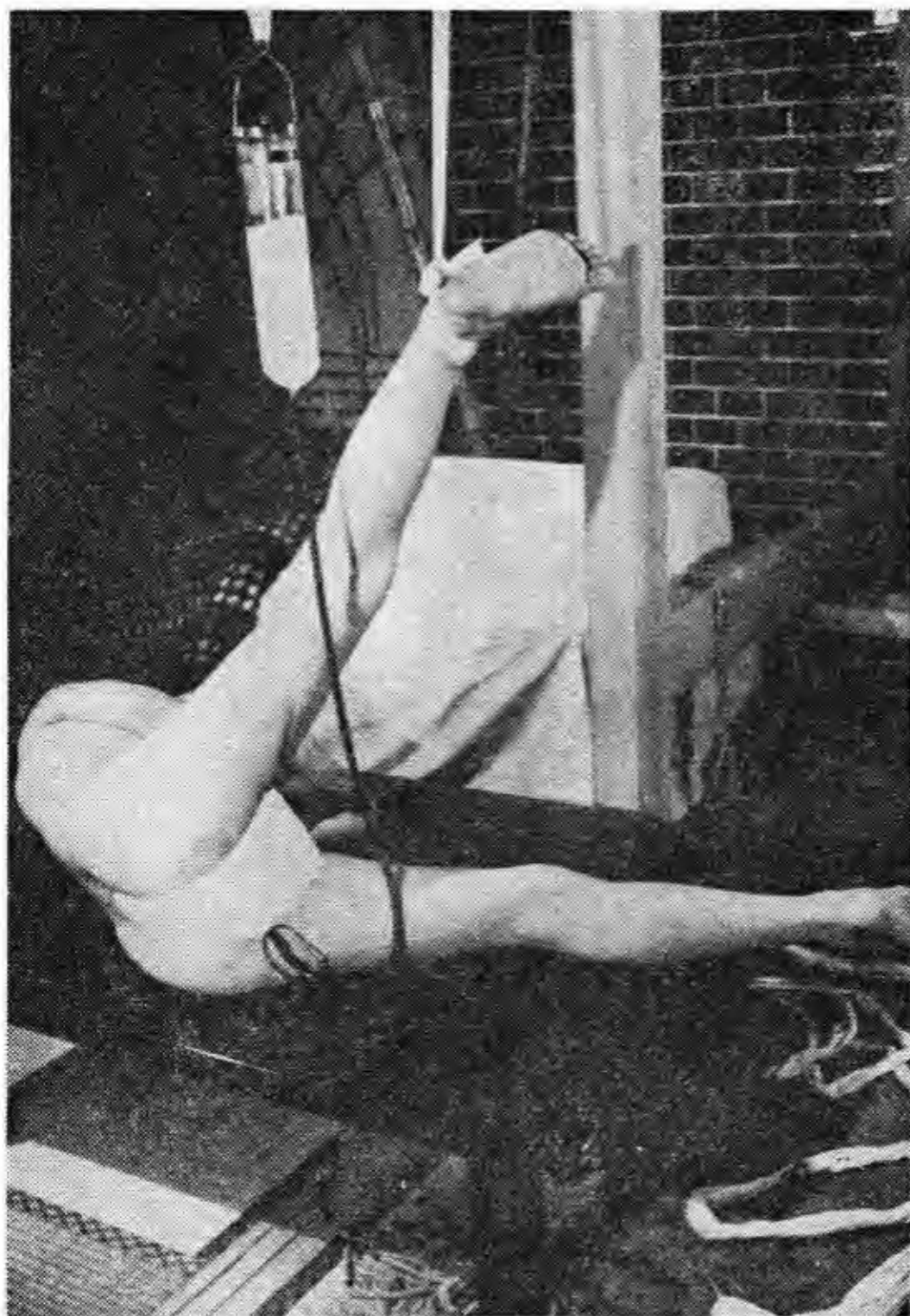
だから、M女は縛るだけで、何もしくなくても、凌辱されることの準備態勢が出来上ってしまうものだ。縛りの後に訪れる御馳走が、美味しければ美味しいほど、条件反射によっ

て、縛りそのものを好きになる可能性も極めて多いわけだ。

玉木章子の場合、縛りと浣腸の連鎖反応によって、果して「浣腸マニア」になるであろうか。

「入れちゃいやっ。浣腸液は入れちゃいや」と言っている章子の片方の足首に紐を結び





つけると、鴨居へ通して引き上げた。片足が
じわじわと、上へあがってゆくので、必然的
に股が開き、いやでも嘴管が挿入された部分
が、すべて、はっきりと視野の中へ入ってき
た。彼女は、自由な両手と残りの片足とで、
なんとか、もがいているが、吊られた片足は
上ってゆくばかりだ。

ここで私は、少し残酷だったが、自由に残
していた足の足首にも紐を掛けて、じりじり
と鴨居へ引き上げた。

「ううう、く、苦しい。苦しいわ」

両手でテーブルを支えて、彼女は両足首を
吊られたまま逆さ立ちとなってもがいたので
アヌスの嘴管が、するりと、はずみで抜けて

ぶらりと、ぶらさがる。

このポーズだったら、完全にお尻が上で、
お腹が下なのだから、浣腸を施すのには、絶
好の態勢である。彼女は両足を高々と掲げた
まま、いかにも苦しそうである。

「早く、早く降して。苦しい、苦しいわ」
伸びた脚がビクビクと痙攣している。白い
足の甲に静脈が蒼くふくれて脈うっている。

私は左手で双丘を開いておいて、アヌスに
嘴管をするりと侵入させた。今は、もう一刻
も猶予しているわけにはいかない。水止めを
握って、すうーっと石鹼水を流し込む。

ポーズがいいので、忽ちのうちに、イルリ
ガートル一杯の石鹼水は、玉木章子の腹中に
吸い込まれていった。

「ああ、早く降して、降して、降して……」
液を注入し終ると、急に彼女は、もがきだ
した。腹の中で、どのような異変が起ったの
だろうか。それは知る由もないが、私は、ゆ
っくりと、両足首を吊った紐を、ゆるめた。

途端に彼女は、足首に紐を結びつけたまま
で、あわててトイレへ駆け込もうとした。

「おっと、待った待った。トイレへは行かな
い約束だったろう？」

「だってえ、お腹がごろごろして、とても気

持が悪いのよ。ねえ、お願い、トイレへ行かせて。トイレへ行かせてくれたら、あとのことは、貴方の言われる通り、どんなことでも言うことをききますから……」

「それは駄目だな。約束は約束だからな。オシメの中に排便すること、僕の目の前で排尿すること、これは約束済みだよ」

「それ以外のことでしたら、どんなことでも言われる通りにしますから、どうか、トイレにだけは行かせて下さい」

「それ以外のことといったら、どんなことなんだい？ さあ、言ってみよう」

「それは、貴方がおっしゃって下さい。私に出来ることでしたら、どんなことでも、お聞き致しますから、オシメの中に出すことだけは、お許し下さい。お願いします」

「それだったら、私の目の前で排尿することは、やるんだナ。その方を先にやろうか」

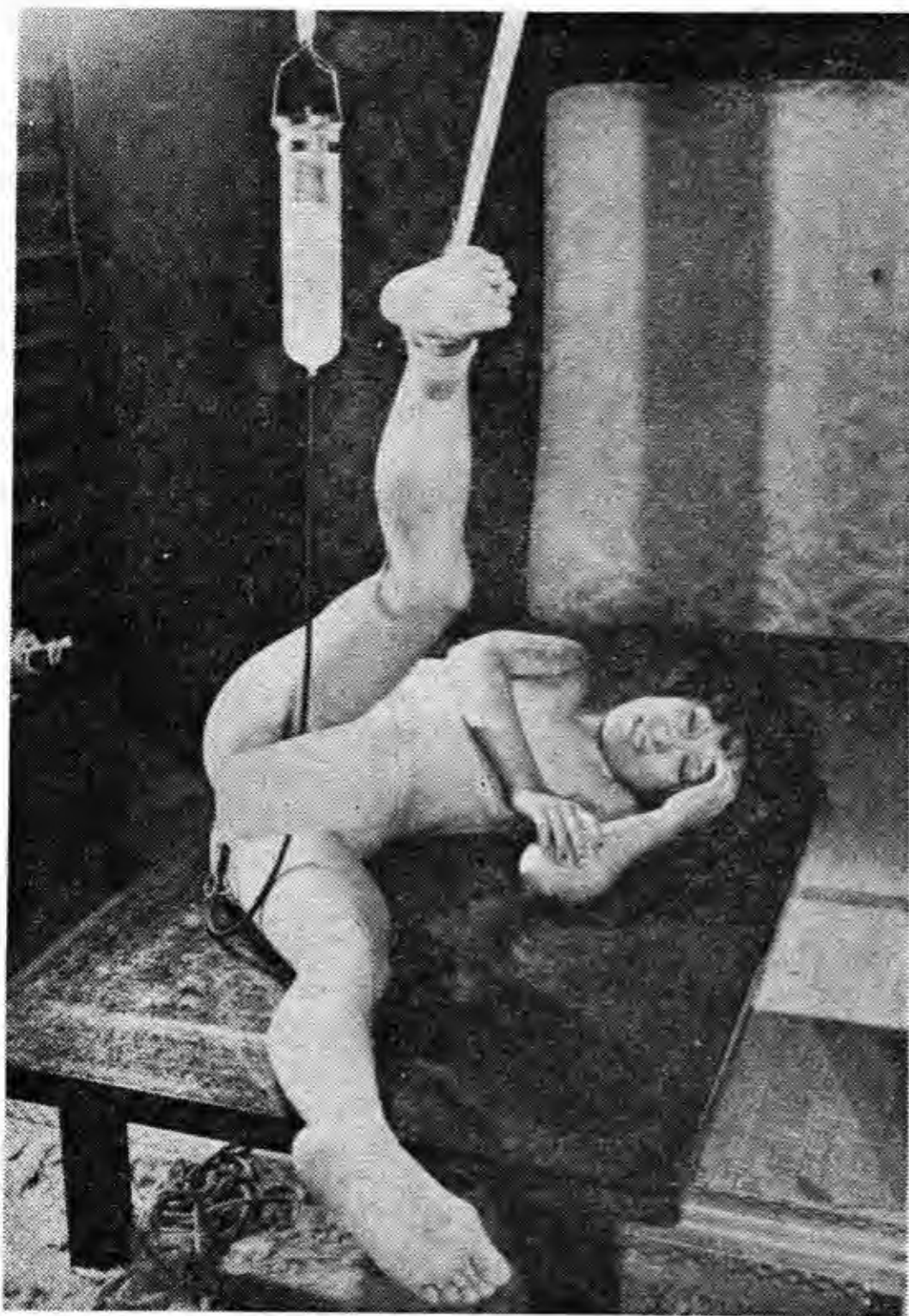
「ああ、許して、許して下さい。お腹が、しぼるように痛くなってきましたわ。このままじゃ、トイレへ行きたくなって、たまりませんもの。お願いします。やらせて……」

「そんなにトイレに行きたいんなら、先ず、あの手すりの上から洩らしてみんか。今だったら、僕が見ていても、きつと出るぞ」

私は彼女をせきたてて、短か目の白晒紐で両手首だけを背後で括っておいて、手すりの方へ追い立てる。普通だったら、人が正面から見ていたり、カメラを構えていたりしたらとても排尿なんて出来るもんじゃない。しかし、今は条件が違う。この部屋へ入ってきてから、一度もトイレへは行かしていない。

それにビール一本を飲まして、一〇〇〇Cの石鹼液を腸内に送り込んでいたのだ。こうした切羽詰まった状態にしておいてこそ、不可能なことも可能になるのだ。

私は舌なめずりしながら、彼女の真正面にカメラをセットした。エヤレリーズのゴム球を握りながら彼女に声をかけた。





「さあ、早く出してしまいな。出してしまっ
たら、さっぱりしたところでトイレへ行き
たけりゃトイレへ行かしてやるさ。もっとも、
トイレへ行く必要はないと思うがね」
畳の上にビニールシートを敷きつめ、その
上に新聞紙を並べ、丁度、落下地点とおぼし
き個所に洗面器を置いた。

「さあ、どうした？ 出さんかっ」
「出ない、出ないのよ。お腹が張って、した
くてしょうがないんだけど、どうしても出な
いのよ。ああ、どうしよう、どうしよう」
「その洗面器へ向って思いきって出すんだ。
カメラなんか忘れて、トイレの中でやってい
るつもりで、しゃあっと出すんだ。それっ」

「あああ、許して、許して……」

「さあ、出すんだ、出すんだ」

「どうしても出さなきゃ、いかなの」

「思いきって出すんだッ。出さないと、また
次の責めが待っているゾ」

「あああ、どうしよう、どうしよう。羞
かしいわ。とっても羞かしいわ」

排泄をトイレに行うということは、これ
は人間であれば誰でも幼児からの習慣で、当
然なことであるが、トイレ以外の場所で行う
排泄ということになると、これこそ、まこと
に異常である。有り得るべからざるところに
於いて行われることこそ、真のアブノーマル
ということが出来るのだ。

その上、男性である私がカメラを構えてい
る前で、排尿を強要されているのであるから
玉木章子にとっては進退きわまった切羽詰ま
った状態に追い込まれたわけである。尿意は
愈々激しく体内をさいなんでいるのだろう。
額から項にかけて汗が、びっしょりだ。

「あああ、見ないで、見ないで……」

直線的に激しい水流が突然、進り出た。

一台のカメラがシャッターを切り、続いて
二台目のカメラのシャッターが切れた。

水流は一度、堰を切ると、あとは止めども

なく噴出して洗面器の周囲に水しぶきを上げて、あたり一面を濡らしに濡らした。

両手首を背後で括られているので、ぐらぐらと安定を失って倒れそうになる彼女を支えて、その場に坐らせる。幸いビニールのシートが大きかったので、畳の上には少しも、こぼれていない。

「ねえ、貴方の見ている前で出してしまったわ。写真にうまく撮れたかしら？ 私、トイレへ行くわ。早く、この縄、解いて……」

「そう、早くすることはないだろう。本当はね、貴女の小の方は今、とっくりと見せてもらったから、大の方も見せてもらおうと思っているんだよ。大分、熟してきただろうからな」
「ずるいわ、ずるいわ。そんな約束じゃなかったでしょ。終わったら、すぐ、トイレへ行かせてくれるって言ってなのに……」

「そんなことを言ったかもしれないが、オシメの中へ排便するということも、たしか言っていた筈だね。大の方を僕の目に、じかに見せるのが恥かしかったら、オシメの中でやるんだな。ここに、ちゃんと準備してあるんだ」
「小の方だって、とても羞かしかったわ。それよりも、早くしてよ。私、もう、お腹がしぼるように痛くなって、辛抱できないわ。ああ

あ、早く、早く……」

「早く、オシメを当てろと言うんかい？」

「意地悪。私を徹底的に困らせようというのね。仕方ないわ、早く、オシメをして。うろうろしてたら、出てしまうわよ。早く早く」
私は、そんな彼女のあわてぶりを冷ややかに眺めながら、白い紐をとりだして、足首を

括って、八の字に開股させて固定する。既にすべてを観念した玉木章子は、素直に、私のなすがままになってゆく。

それがまた、M女としての彼女にとってはたまらない恍惚境であったのかもしれない。浣腸液によって、体内の内臓を責められるということは、女性にとっては、耐えられない





羞恥と共に、喜悅なのであろう。

今まで、外部からの縄による△緊縛△という刺激が、彼女をマゾの醍醐味に浸らせていたが、今日の責め方は、内部からじわじわと内臓を虐めてゆくやり方なので、大分趣きが変わっている。

彼女の額には、うっすらと、脂汗がうかんでいる。あれから、どのくらいの時間が経ったであろうか。オシメとオシメカバ。その中に、耐えに耐えた排泄物を、息もつがせず排出するのも、もう時間の問題だ。私は、ゆっくりと、それを待った。

〔M女26〕の

マゾぶり

入浴を済ませて戻って

くると、玉木章子が今までとは変わった新鮮な女に見えてくるから不思議だ。女体の内部と外部とから洗滌して綺麗になったからだろうか。一回のプレイが終って入浴する度に新しく変貌して挑んでくる女性もあったが、体内の宿便を排泄してしまうと、気分も変わってくるのだらう。

「羞かしかったわ、私。あんなの、生まれて初めてだったわ。それで、次は、どんな責めをするの？ 私ね、ぎゅうぎゅうに縛られてね、そして、思いつき恥かしい格好にしてほしいの。そんなの、カラーで撮って……」

「ふん、ふん。さっきは、僕の言うことを、よく聞いてくれたから、今度は、貴女の好みの責めをやらうかね。どんな責め方がいいか言ってごらん？ 藤坂氏の好みの縛り方でもいいんだよ。彼は、カラーの写真がほいって言うてたそうだね」

「ええ、この前の写真が凄く気に入ってたそうなの。だから、今度も非常に期待してるらしいわ。昨日もね、塚本さんに、思いつき責めてもらって来いって、言ってたわ。それからね、彼ったら、うふふふ……」

「気持悪いね、含み笑いなんかして——」

「いえね、それから、たんと可愛がってもら

って来いだって、真面目な顔で言うのよ」

「可愛いがるって、こんなことをするのか」

私は浴衣を羽織った彼女を抱きしめた。

襟元から、かすかに化粧石鹸の匂いがして湯上りの、しっとりとした肌の感触が浴衣を透して、快く私の両腕に伝ってくる。

「いや、いや。今は、いやよ。もっと、私を虐めてからにして……」

玉木章子は両手を背後に回して、縛られのポーズをとる。私は、白の綿ロープを手にして、二つ折りにすると、先ず両の手首を揃えて括り、それから、二の腕から胸へ、一卷、二巻、三巻、四巻と、ロープを締めてゆく。か細い二の腕に白縄は痛々しく喰い込んでいて、まだ一度も子供を孕んだことのない乳房が、あどけない顔をのぞかせている。

玉木章子は、ふううと熱い吐息を洩した。

女体を、くびるように締めつける凄じ緊縛感に、彼女は酔っているのだろう。白い顔がだんだんと紅潮してくるのは、あながち、湯上りのせいばかりではないようだ。

「座禅ころがし」っていう責め方、知ってるかい？」

「座禅ころがし？ そんなの知らないわ」

「座禅って、知ってるだろう。禅寺なんかで

最近はお女の子なんかも、よくやってる、あれだよ。こんな風に、あぐらをかいて、右の足を左の股の上にのせ、左の足を右の股の上にのせるんだよ」

私が格好をしてみせると、彼女もその真似をしようとするが、なにしろ、両手の自由がきかないものだから、うまくいかない。私は

手をかしてやって、足首から先を、股の上へのせる。肢体がやわらかいので、くねくねとされていて、た易く股の上にのるのだが、爪先が柔軟すぎて固定しにくい。

こうした姿勢で、「ころがす」と、いわゆる「座禅ころがし」となって、女の当然かくしておかなければならない二穴が露呈してし





まって、思いのままに責めの目標にされてしまった挙句、犯されてしまうのである。

玉木章子は、そんなことを少しも知らぬげに、縛られた上半身を、しゃんと起して、座禅を組んでいる。私は、これから行われる、あとの責めを思って、澄ましている彼女の顔を眺めていて面白かった。

峯村比等志氏は、四月号の文中の、八玉木章子論Ⅴの中で、私に対して玉木章子のセックスプレイにまで発展させよと言って、次のように述べている。

「——さて、私の今回言及したいのは、二月号に初めて登場した玉木章子のことである。十九才の年から七年間もSマニア

の男性から飼育されたという彼女の全裸の姿態を眺めていると、これこそ、本当に飼育用M女性、愛玩用飼育向き女性、という気がした。

今まで二十六才の今日に至るまで、埋もれ木に火がついたように、地の中で、くすぶりが続いていたのが、塚本氏の巧妙な縄捌きによって、一挙に燃えあがったように思う。

白くて、たおやかな章子の女体を、すべて塚本氏の手になかせきったことによって、彼女の開花は北国の春のように、一挙に全身にわたって漲ったものと思う。玉木章子の肢体は、実にマゾ的に出来ていると思うが、精神は必ずしも、マゾに徹しているようには、思えない。

塚本鉄三氏よ。鉄は熱いうちに鍛えなければならぬ。玉木章子もマゾの熱のさめないうちに、次の責めを是非、加えてほしい。

第一回目の縛りから、あのような素晴らしい開股縛りを甘受する彼女であるから、第二回目以降は、どのような羞恥責めが展開されるか、今から大いに楽しみである。

彼女の主人にしても、玉木章子が塚本氏に責められれば責められるほど、心中では、わくわく、いらいらして、大いに楽しんでいる

に違いないのだ。SM愛好者として、私は彼の心情は大いに理解できるつもりだ。

自分の愛人、玉木章子がベテラン塚本氏の手で責められる不安と期待は、誌上に彼女の麗姿が載ったことで、いやが上にも、たぎってきたことと思う。

塚本氏よ、次回は玉木章子に、とことんまでの凄絶な羞恥責めを加えた挙句、燃えに燃えた彼女を、遂にはセックスプレイにまで誘導してほしいものだ。私は彼女の主人の側に立って、その心情を思っ心をうずかせ、更に、その反対の立場から、嗜虐心を満足させたいと思う。

いわば傍観者である私は、二方面からの興味を満足させたいのである。どうか、そうした記事で、今後の奇クの誌上を美しく飾ってほしいものだ。——中略——

また、塚本氏も、その方で、さぞ忙しいことだとは思いますが、玉木章子に対するセックスプレイだけは、是非共、敢してもらいたいものだと思う。」

峯村比等志氏が言及していられるように、私も、玉木章子に対するセックスプレイは、なんとしてもやりたいと考えていた。

第一回目の華やかな開股縛りでは、彼女の

秘奥の隅々までも、具に觀賞し弄戯に徹した責めをやったのだから、その次の責めということになる、羞恥責めの行きつくところ、もうセックスプレイに移行して、総仕上げをするより仕方がないところへ来ていた。

彼女の主人である藤坂氏としては、そうした報告を聞いた上で或種の危惧を抱いたとしても、これは当然のことだろう。

第一回目の百枚以上に亘る玉木章子の緊縛フットに、いたく満足しながらも、第二回目のSMプレイについて、彼女をモデルにすることを躊躇していたというのも、私としては充分うなずくことが出来る。

最愛の玉木章子を、私に責めさせるということ

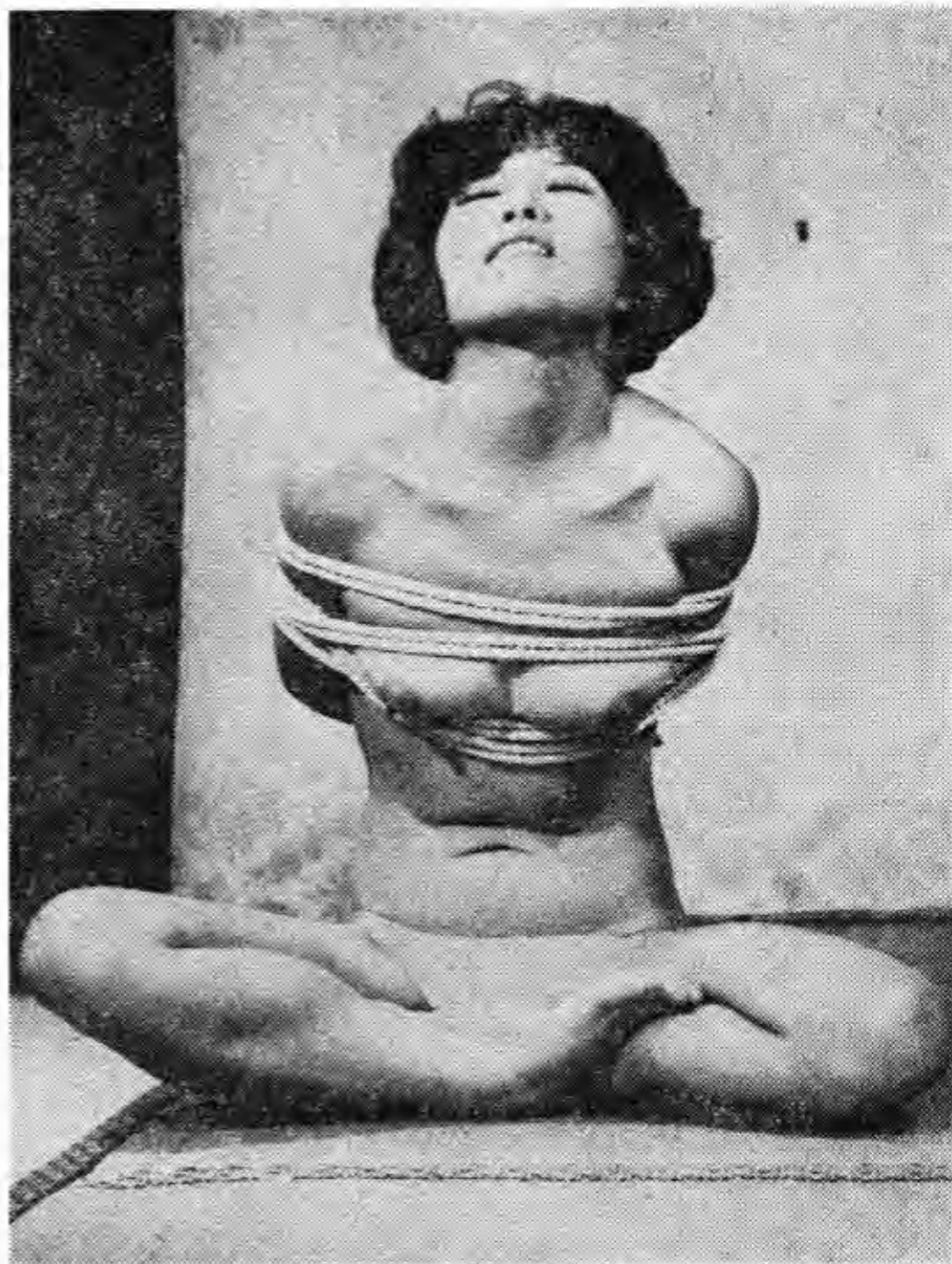


は、猫に鯨節を与えるようなものだと考えてためらう反面、うずくような嫉妬心と嗜虐心を感じたことだと思う。

どうした風の吹きまわしか、今回、私の手元へ玉本章子を委ね、そして、「思いつき可愛がって貰って来い」というところなんかまことに意味慎重なものがある。

私が玉本章子に、座禪ころがしをやらせたのもそこに、一つの根拠があった。あわよくば、AとVとを座禪ころがしによって露呈させておいて、地獄の獄卒ならぬSMプレイの使者として、彼女にSM×セックスプレイの素晴らしい醍醐味を味わせてやりたいと思っていたのだ。

私は、さっと手を伸ばして、彼女の上半身にかけると、ぐいと横倒しにした。だが、私の予想に反して、組んでいた脚は横倒しになる前に簡単に解けてしまった。



海老縛りで昇天

M女の中には、縄で縛り上げるだけで、忽ちエキサイトしてしまつて、セックスプレイの下地を作ってしまう女性がある。

極く最近では、苗木陽子なんかは、その代表的なもので、初対面のいの一審、責めの開

始と同時に、激しいセックスプレイの展開となつてしまった。勿論、緊縛写真を撮影するという至上命令があるため、責めと写真撮影と併行して、セックスプレイを楽しんでゆくわけであるが、M女にとって、必ずしも、それが最上の仕打ちであるか、どうか、私にもわからない。

縛れば直ちに、凄く反応してくるのは、松本たえもそうであった。SM的なセックスプレイの中に身も心も没入させたいという逸りきった気持を押えて、冷静に、責めプレイを進行させてゆくということは、男性にとっては、特にSMルポライターとしては辛い限りである。

一度なんか、松本たえとのプレイで、当初から、セックスプレイに感溺して、カメラもペンも投げすてたことがあった。

あの絶妙の表情とポーズで、Sマニアを酔わせてくれた関谷富佐子にしても、豊満な臀

部に対して、ムチの乱打を浴びせたとき、彼女の体内に燃えに燃えたエネルギーは、どのように醗酵しているのだろうか。

鞭撻によって、狂ったように悶え、全身を波うつようにうねらせるだけだろうか。決して、そうではあるまい。火のように燃えに燃えた女体は、責めている私には、どうなっているか、一番よくわかつて

いる。その結末は、もうセックスプレイによって解決するより他、方法はない。

中河恵子という可愛いM女を、椅子の上で正面の開股縛りにしてカメラを向けたときの、あの目ざましい女体焦点の変化は、流石の私も目をむいた。だが、そのとき、私は、あらゆる理性を失って、彼女と完全に一体となることを、ひたすら、願った。

縛り——責め——。そしてSMプレイが、忽ちのうちに、セックスプレイへと発展していったしまったの

だ。

そういったM女は数え上げれば十指に、はみ出してしまふ。だが一方、縛りは好きだけれど、即セックスプレイの準備態勢にまでは至らないという女性も結構多い。玉木章子はどちらかといえば後者に属するようだ。

そういったM女は、緊縛のあとの羞恥責め



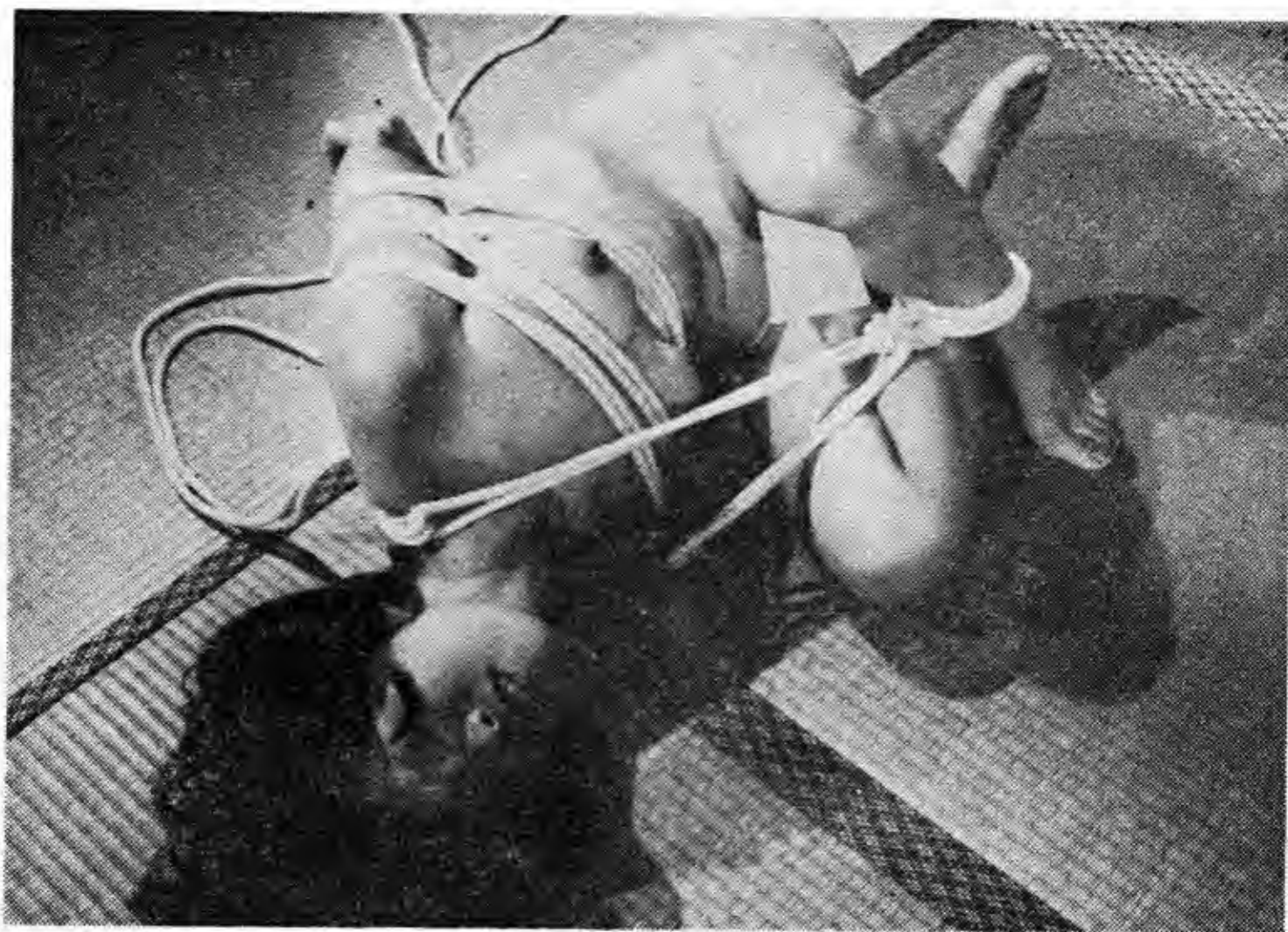
によって、女体の練れるのを、熟柿の落ちるのを、待つように楽しみにするわけである。

さて、座禅縛りで失敗した私は、それではと、直ちに次の試案が頭に、ひらめいた。

更に一本の白ロープを取り出して、胡坐を組ませて揃えた両方の足首を、きっちり縛った。普通だったら、若い女性のそんなところを、無作法に触れること

すら出来ない筈だが、荒々しい縄は、乱暴に、その間をくぐって、肩から背へと回って、後手の縄と連結しておいて、ぐいぐいと締めつける。

背中を押えつけて、彼女の口から「ぐう」という呻き声が洩れたところで、私は縄止めをした。見ていると、白かった肌が次第次第に紅潮して、脇腹のあたりから、ふつふつと玉の汗が盛り上って、その数が、みるみるうちに増えてくる。きつと苦痛と戦っているのだろうか一言も発しない。



私は、頃よしと、見定めて、彼女の上半身に手をかけて、ころりと転がした。

「うう、い、痛いわあ。

ああ、痛い！」

玉木章子の口から初めて悲鳴が洩れた。

「どこが痛いのだ？」

「ひ、肘が、肘が畳にすれて痛いよ」

私は彼女の上半身を持ち上げておいて位置を少し、ずらす。

「いたたた。下になった肘が、肘が……」

無理矢理、曲げさせられた両足首が、つっぱろうとして伸ばすことが出来ず、足の拇指が私の目の前で、そり返ってピクピクと痙攣をくり返している。さぞ、苦しいことだろう。痛いことである。

「肘だけが痛いのか？ このあたりは、どうなのか。痛くはないのか？」

私は背後へまわって、張りきったお尻を撫でまわした。私の視線が、その方へ移ったことを知って、彼女の口から吐息が洩れた。

「うううう、ふーむ、ふふふ……」

徐々に、苦痛が快感に変わってゆくのだ。

私は、そこに露呈された玉木章子の部分に對して、目を注ぎ、快感の源泉が湧き溢れる様子を、じっと観察した。

見られているだけで、その泉は絶え間なくこんこんと湧いてきた。手を触れて攪拌しているわけでもないのに、坊主地獄の温泉のように沸騰しているのだ。

こんな、あられもない格好で縛られて、見られているということによって、彼女の体内で、いや心中で、どのような激しい変化が起きているのだろうか。

私は顔を近づけてみた。彼女は、もう縄目の疼痛を訴えることは、しなくなっていた。「羞かしいわ。そんなところを、見られたら羞かしいわ。見ないで、見ないで、お願い。見ないで、見ないでほしいわ」

彼女の小さな口から、嘆言のように、とめどもなく呟く声が洩れる。

事実、私にしても、見ていただけでは気がすまなくなってきた。彼女の「見ないでほしい」という言葉は、それを裏返せば、見ていただけではなくて、もっと、他の責めをやってほしいという暗示かもしれない。

だが、そのときの私は、パイプなんかを使う気にはなれなかった。強いて言えば、舌を伸ばして、舐め、含みたい気持だった。

美しい可憐な、朝露に濡れそぼつ秋海棠のその場の有様を、もし制約が許すものであるならば、私は詳細に報告したい気持にかられる。一人で見ていないで、同好者の誰かと話し合いたい気持で、いっぱいである。

これは平静な状態ではない。温泉の坊主地獄が、噴火寸前にさえ見える。だが、噴火しそうで、なかなか噴火しないのが、坊主地獄の坊主地獄たる所以であろうか。

それも女性の体と、男性の体の違いであろうか。これほどまでに——と、男性の私が思っている、女性の体は、とめどもなく、坊主地獄の活動を続けているのだ。

別府温泉とか雲仙の温泉で、所謂「坊主地獄」と呼ばれている泥中から温泉が噴き出している有様をこらんなった方も多いことだろう。今の玉木章子の状態を、それに擬すと

いうことは、いささかも誇張した言い方ではないと思う。いや、むしろ、実際は、もっともっと複雑で怪奇なのだ。

私は、これぞわ、ちよっと、指先で触れてみた。これぞわというのは、あの、食虫植物の花弁に触って指の先を噛まれはしないかという単純にして明快な恐怖であった。虫取り

すみれなんかの、粘っこい花弁からくる連想が、私を捉えていた。

「いそぎんちゃく」の触手に、ちよっと触ったら、さっと、筒の中に触手をかくしてしまふ、あの感覚であった。

私の指が、触るか触らないうちに、その打てば響くような明らかな反応があった。そんな



な私の行動を待っていたかのような敏捷で、激しいゼスチュアの動きであった。

こんなに反応が大きければ大きいほど、何度でも、繰り返して、悪戯をやってみたくなるのも人情である。

私は悪戯少年のように、そんな弄戯を、くり返して、ここを触ればこうなる。ここは、こうなる——と、じっと見詰めていた。

玉木章子の顔は、汗びっしょりである。

目を固くつむって、奥歯をかみしめたように、口は「む」の字に閉じているが、鼻からは荒い息が激しく出入りしている。脇腹にふきでた汗の玉は、ころり、ころりと肌を伝って畳の上に吸い込まれてゆく。

海老縛りというものは、時間が経てば経つほど苦痛の増してくる責めである。苦痛が快感に、すり変っていられる限度というものは、そう長くない筈である。

私は洋服を着て澄ましていたときの玉木章子の顔を思い浮かべて、今、目の前で呻吟している汗まみれの顔を冷

やかに眺めていた。

蛙を潰したように、二つ折れになって、自分の足先を舐めんばかりに海老縛りになって

いた玉木章子も、横に転がされて、もがきにもがいているうち、縄が伸びて、苦しい前屈みの姿勢が幾分、楽になったようだ。交差して縛られた両足首は、必死になって

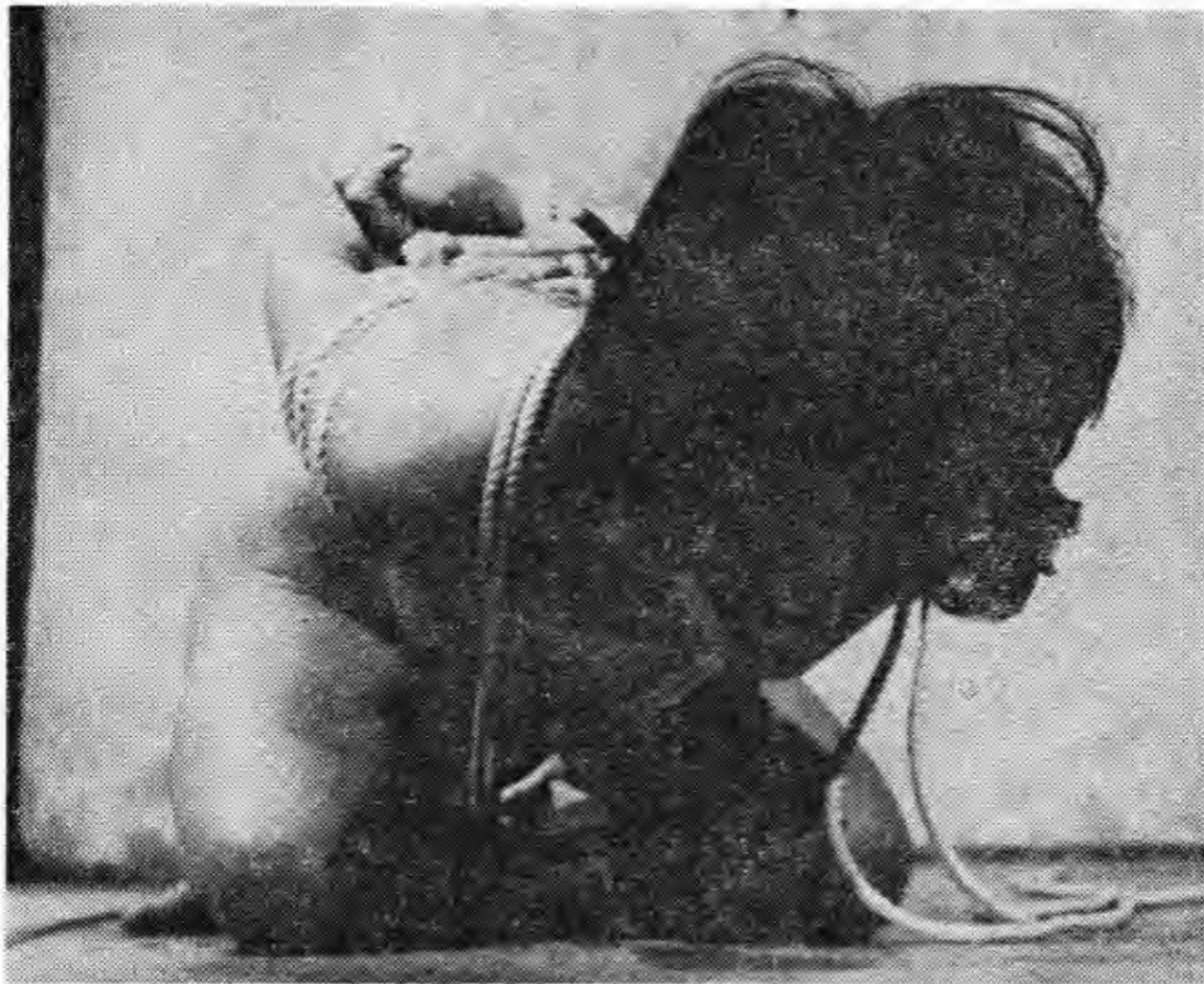
延ばそうとしているうち、ロープを皮肉に喰い込ませながら、足の五指が花が開いたようにひろがって、力いっぱい、突っぱっている。

私は煮えたぎるように昂進した胸の中の熱い塊りを押えて、じっと我慢すると、次の責めへ移行するための情熱を、辛くも温存するのであった。女体をじらすことも責めの一つのテクニクでもあるわけだ。

今日の圧巻クリップ責め

今日の圧巻は、なんといっても、「クリップ責め」であった。

『海老縛り』によって、充分すぎるほどの下地の出来ている女体は、私が縄を解いても、くたくたと畳の上にくずれ折れて、自分自身の意志では、も早や、立っておれないほどだった。十九才の年から二十六才の今日まで、七年間の飼育によって爛熟



した玉本章子の女体は、私という変わった男性の手によって調教され、新しい發育を遂げたらしい。

私は彼女の裸身を軽々と抱えあげた。

腋の下と膝の裏へ両手を差し入れて抱えあげたのだ。彼女の暖かい息が私の耳に、くすぐったく触れる。

「ねえ、どうするの？」

甘い声は何かを期待しているらしい。このまま、寝室へ抱えていったとしても、不自然なムードではない。私の返答如何によつては、そのまま玉本章子の裸身が、くたくたとくずれてくる気配である。私は多年の経験によつて、そうした直前の彼女の様子を、いち早く感じとっていた。

勿論、それぞれの女性によつて個性があるものだから、そうした気配は皆、違っているのだが、それは私には痛いように、よくわかるのだ。はつきり口に出して言う女もあれば、首に手を回してきたり

口づけを求めてきたりして、態度で示す者もある。こんなのは判断が容易だが、婉曲に匂わせてくるのなんかは、その兆しを見抜くのは、やはり経験が必要というものだろう。

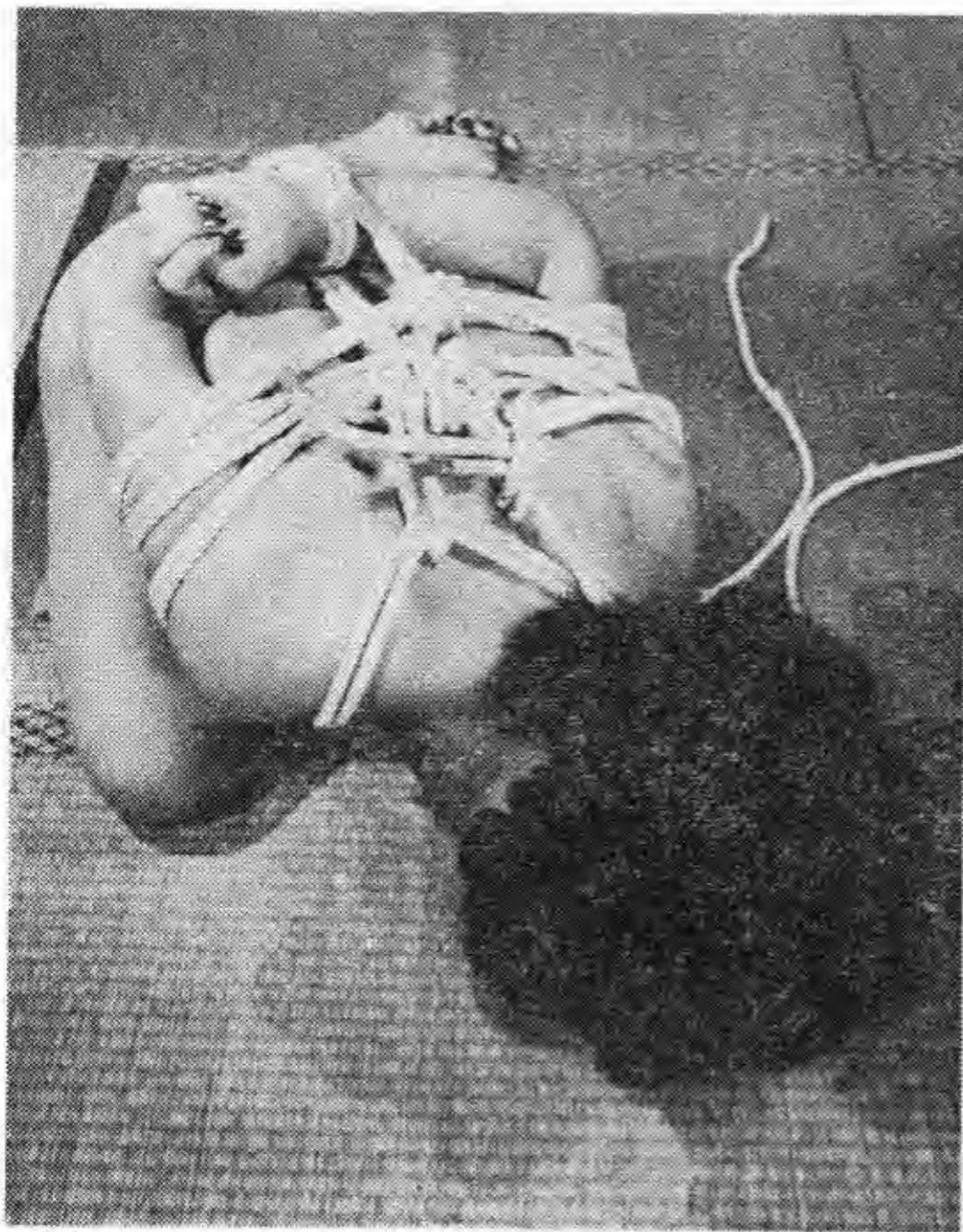
私は、そうした玉本章子の気持を充分に察しながらも、最後のセックスプレイへ持つてゆくのを焦らなかつた。こうした下練りが充分に出来ているときこそ、面白い羞恥責めのプレイがやれるものなのだ。私は、彼女を、そうした羞恥責めの祭壇へと運び込んだ。

食事でも、そうであるが、或一時期、同じ種類のものばかりを好んで食べるときがあるものだが、責めに於いても、一つの責めに籠る時がある。蠅責めや針責めに熱中する人。

或は、ムチ打ちや操り責めに、うつつを抜かす人。私には、その気持が、よくわかる。

今の私は、対象の相手が変わっても、一度はやってみたいと、考えているのは、『クリップ責め』なのである。といって、これは責める場所が場所だけに、誰にでも、直ぐに——というわけには参らない。

やはり、その責めの中に全身を没入させてしまつてもう、どんなことをされても悔いはない。いや、どんなことをされても、それが直接、快感や喜悦につなが





るのだ——というところまで責めのムードを盛り上げておかないことには、こうした特異な責めは、成功しないだろう。

そのかわり、この『クリップ責め』がやれたとしたら、そのあとの御馳走もまた、素晴らしく豪華なものになる筈である。といって、これは理屈や空想ではないのだから、実際にやってみれば、よくわかることだ。なにしろ両手両脚の自由を奪われておいて、開股縛りにされるのだから、もうこれだけで女性は、いやM女だったら、これから、どうされるのかという大きな期待で、胸をわくわくさせて全身をおののかせることになる。その上、正面からカメラが狙いをつけて、幾枚となく被虐の羞恥ポーズを撮影するのである。その緊縛写真はといえば、数万のSMマニアの目

に触れる雑誌に載るのだ。そうしたファンはどんな熱い目で、彼女の全裸の緊縛肢体を眺めることだろう。

私一人が見ているだけではないのだ。数多くの同好者が好奇の眼を輝かして喰い入るように眺めるのだ。M女性にとって、こんな凄惨に感激してあるだろうか。まさに血の逆流するような亢奮を覚える一瞬であろう。

私は玉木章子をイケニエの祭壇へ運び込むと、紅白斑らの紐をとりだして、手と足を背後の棧に固定した。殊更、縄を用いなかったのは、カラー写真になったときの視覚的な美しさを狙ったのは勿論であるが、緊縛部分の疼痛によって、徒に感興がそがれることを恐れたからでもある。

彼女は、もう両足を大きく開いたまま、羞恥の部分、かくすことも出来ない。徐々に段階的に責めを積み重ねていったので、彼女としても、こんなあられもない開股縛りにされながらも、羞恥が爆発的な衝撃に移行するまでの快感に浸っているようだった。

「どうだ？ こんな縛り方は好きだろう。きつと、彼氏も、このポーズは喜ぶぞ」

「いやいや、見ないで——。写真を撮るんだったら、早く撮って頂戴！」

「すぐには写真は撮らない。もっと変った趣向の責めを、さんざんやってからね。うっとりとした君の表情を写真にして、それを君の彼氏にプレゼントするのさ」

私は藤坂氏が、どんな思いで、この写真を見るかと思うと、大いに興味があつた。彼が私の手元へモデルとして玉木章子を寄越すのを危惧して渋れば渋るほど、更に嗜虐的な感興が呼び起されるのであつた。

私は、畳の上に腹這いになって、クリップを取り上げた。手術をするとき、止血鉗子をいくつも、いくつも使つて挟み込むように、私は多大の楽しみを以て、その小ささまざまなクリップを挟み込んでゆくのだ。

それはM女にとつても辛い責めだった。

如何に、疼痛が快感にすり変つてゆくといつても、刺戟——疼痛——快感——爆発というコースが、うまく連鎖してゆくものだろうか。もう、どうなつてもいい——という境地に到達するまでには、試行錯誤の迂余曲折が当然のように、暫く続いた。

そうした場面が長ければ長いほど、私にとつては、クリップを持つ指先も、わななくような亢奮の連続であつたが、彼女にとつては辛くて長い試練の時間であつたに違いない。

玉木章子にとつては、こんな責めは、きつと最初の経験だろう。

私は彼女の御主人である藤坂氏に、はっきりと告げたい。「玉木章子は、素晴らしいM女であることを」

それは、私が他のM女性にも何回となくクリップ責めをやっていたので、よくわかる。

『口は口ほどに、よく物を言う』下の口と上の口との別はあるが、私はクリップ責めをやつていて、そのことが、はっきりわかつた。

玉木章子は、自らの頭を、自らで支えておれないほど、深い陶醉境に陥つていた。

もう彼女の紐を解く時期がきたようだ。



小説よりも奇なる事実

「彼はね、印刷して本になった写真よりも、印画紙に焼付けた緊縛写真の方が好きらしいのよ。いつも私に、速達で買わすんだけど、手に入ったその日は、きつとよ。それが凄いの。いいえ、その写真を見ながらなの。私を縛らないのよ。でも、私、この頃、なんだか縛られたままの方がいいみたい。だから、今日は縛ったままで、してね。お願い」

「そんなこと言って、彼に叱られないかい。叱られたって、僕は知らないよ」

「いいのよ。今日は彼の公認なの。そのかわり、彼のために、いい写真を沢山、撮っておいてね。そうしたら、きつと、彼、喜んで私を可愛がってくれるわ。貴方と仲良くなったって怒らないって自信あるのよ。若し、怒ったら、私、お仕置でも折檻でも受けるわ」

「その覚悟があったら頼もしいね。藤坂氏が羨ましい位だよ。また、こんな話をして、二人で、きつと燃えるんだろう？」

「いやだわ。そんなこと、きまつてるじゃないのよ。彼と私の仲だもの、当然でしょ」

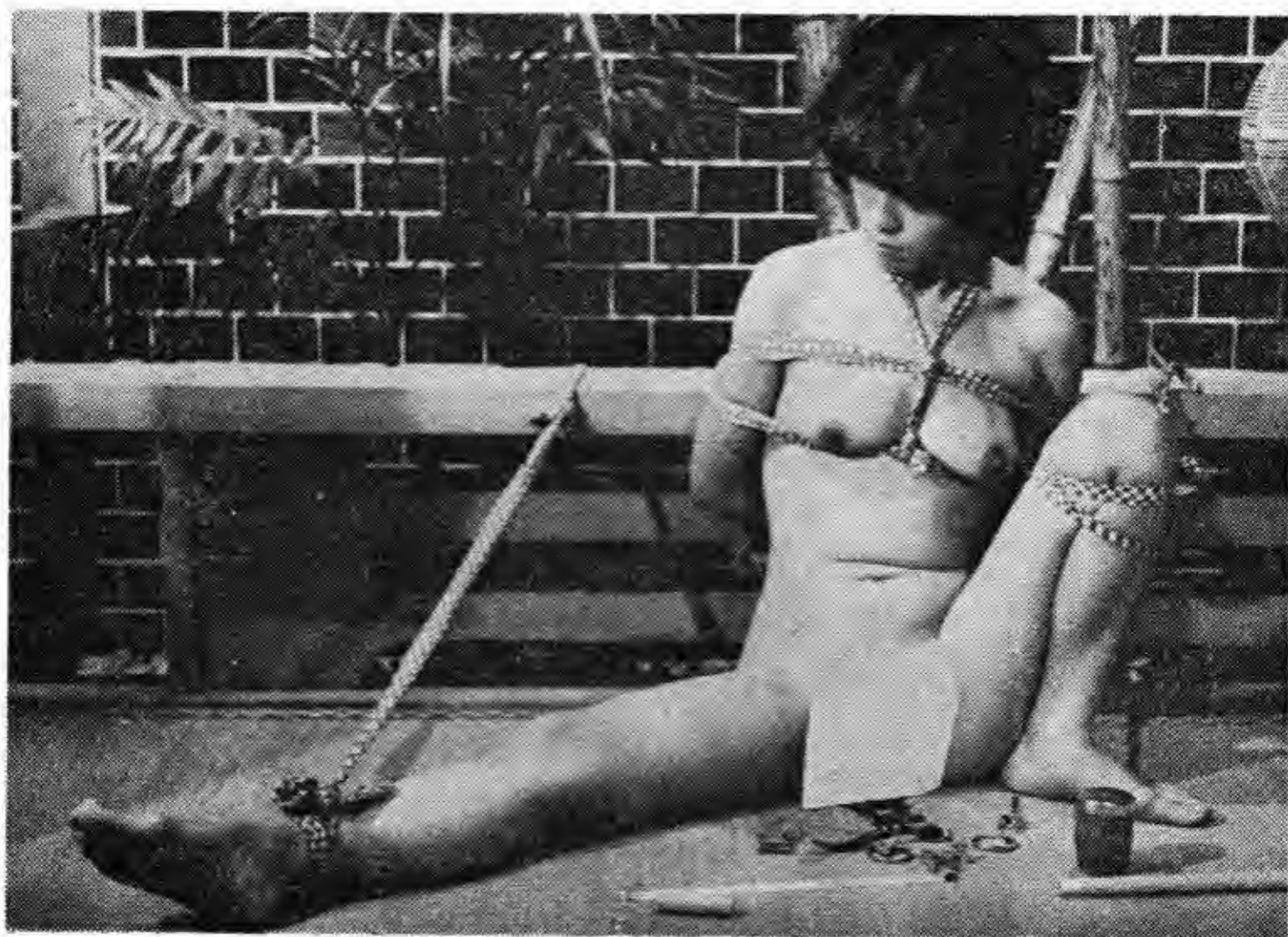
「そんな話、聞きたいもんだな」

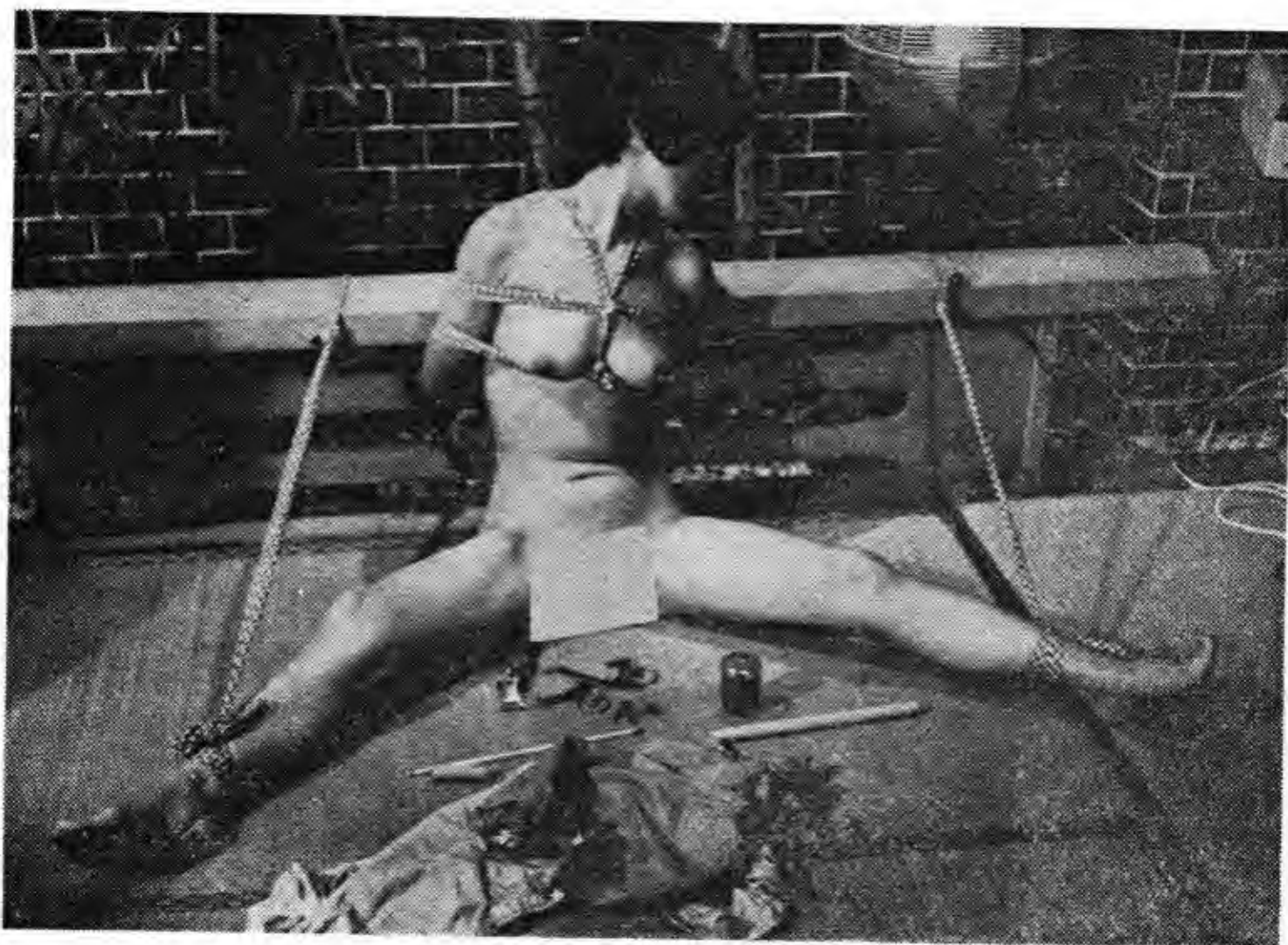
私は、ロープをとりだして、胸のところで

コブが出来るくらいに、厳しく縛った。さっきの卓の舞台の上に置いて、手足や体の各部に紐を通して鴨居から吊り、操り人形のように、いろんな緊縛姿態に変化させて、それを藤坂氏へのプレゼントにしようと思った。

「それよりもね、私、今のマンションに移ってくる前にいたアパートで面白ことがあったのよ。私、昼間は暇で暇で仕方ないでしょう。そりゃ、お料理や編物のお稽古、それにビューティースクールなんかも通ったわ。でもね、どれも情熱をこめてっていうわけにもいかないわ。それが、私立探偵みたいなことをしてそりゃ面白かったの」

「ほほう、私立探偵とは面白そうだね」





彼女の語る話を要約すると、そのアパートの住人で、彼女の部屋の隣に居住する四十前後の一人暮らしの女性が、その主人公である。

保険の外交員をしているとかいう、その女性が年下のハンサムな男性や自分より遥か年上の男性を、その部屋に連れ込んでする情事の数々が、ベニヤ板一枚の壁を隔てて筒抜けに聞えてくるのである。

そこで、マジックミラーや盗聴器も登場してくるし、相手の数々の男性に対する彼女の追跡調査が始まるのだが、その私立探偵の私立探偵たる所以は、相手の男性の配偶者にまで及ぶのだから、暇人でないと出来ないことである。

車による尾行や、公衆電話の盗聴と、スリル満点の探偵ごっこは、まさに、事実は小説よりも奇なりを地でゆく物語の連続である。「貴女は文章もうまいのだから、一つ、告白として書いてみたら、どうだい？」

私は、その話を彼女自身の告白として書くように、すすめた。私が書いても、どうせ、また聞きの作り話にしか思われないだろう。それよりも、玉木章子の日常生活と、からませて、告白してもらった方が、いくら注目されるかもしれない。

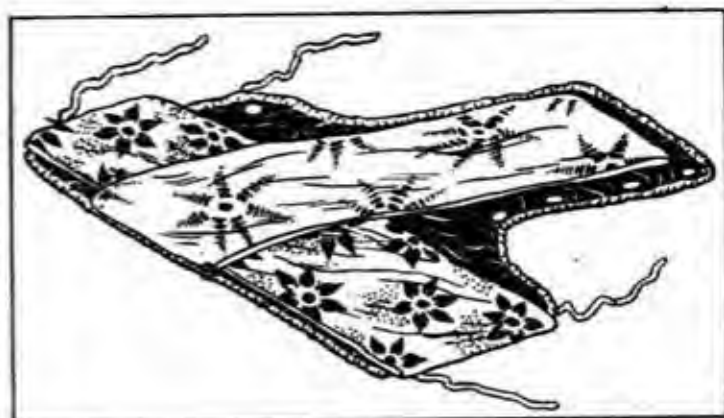
そんな、とりとめもない話を繰り返しながら、私は彼女の緊縛姿態の操り人形を、さまざまに操作して、写真に収めていった。

話の内容が極めてエロチックで、奔放な中年女の情事であるために、話していて、彼女自身が、その話に酔ってきってしまった。

目がしっとりとうるみ、ぐみのように朱い唇が、ぽっかりと開き気味になってくると、私も何条、たまらなくなってきたしまったのは、当然のなりゆきであった。

手にしたカメラを投げ捨てるように畳の上に置くと、期待に満ち満ちた瞳で私を見上げる妙なる「M女26」の縛られた裸身へ、やおら、私は近づいて行った。

(終)



一、赤ちゃんへの郷愁

おしめカバーマニアにとって、おしめカバーとは、現実を使用するためのものではない。

おしめカバーを本来の機能である実用性の故に使用しているとすれば、それは赤ちゃんであり病人であり、夜尿症あるいは恍惚の人である。これらの人々は客観的には、おしめカバーに関連があるが、主観面において「赤ちゃんへの郷愁」という目的が欠ける。ここに赤ちゃんへの郷愁とは、人間の本来の性質からして、追いつ

私 の おしめ理念

おしめカバーの
現実的意義

大場 公夫

められて孤独となり、苦しく淋しく悲しくなったときに、赤ちゃんのように全て、お母さんが面倒をみてくれ、自分が無責任であることができたなら、と考える願望である。ところが、この願望は現実には不可能なことである。大人が赤ちゃんに帰することは、宇宙の法則をどのように変更しても、ありえないことである。しかも、たとえ赤ちゃんに帰ることができたとしても、生活力を失い、記憶を失って、下宿で一人ミルクを求めても育ててくれる母親はいないのであ

る。ここに、おしめカバーの現実的意義がある。現実には不可能と考えられる、この困難を、おしめカバーという触媒を使うことによって、実現することができるのである。おしめをすることによって赤ちゃんになり、心の緊張をとき現実の社会の厳しさに素直に適応することができるのである。つまり、おしめカバーは赤ちゃんになる触媒であるとともに、つぎることのない優しい愛情に満ちたお母さんであり、いつまでもいつまでも、慈しむ母親の全てを信頼して任せていた懐かしさの効用を覚えているのが、おしめカバーマニアであり、その中に母親の愛情を感じとるのがおしめカバーマニアの本質である。もちろん、本誌の告白でみれば、おしめカバーマニアでありながら異説を唱える人もあるが、それは形式的な面からのみ見られるからであって、実質的におしめカバーマニアに共通するところを捕えるなら、その本質は常に赤ちゃんへの郷愁なのである。

二、おしめカバーマニアの要件
どの程度をもって、おしめカバーマニアとするか、これがおしめカバーマニアの、要件の問題である。程度に従って分類すると

(イ) おしめカバー想像説
(ロ) おしめカバー愛玩説
(ハ) おしめカバー使用説

がある。(イ)のおしめカバー想像説によれば、おしめカバーを理念的にのみ存在すると考え、理想化されたおしめカバーを想像して慕う程度が、おしめカバーマニアであるとする(本誌、同説、羽路四郎、江原美那子各氏)。

次に(ロ)のおしめカバーマニア愛玩説によると、おしめカバーの感触を通じてのみ、赤ちゃんになった境地になれるとするもので、おしめカバーを愛玩するのが、おしめカバーマニアとする(本誌、同説、高畑勝則、陸奥和夫、谷口裕司各氏)。

次に(ハ)のおしめカバー使用説によれば、大人用のおしめカバーを使用して、その使用感を通じて赤ちゃんになった心境になれるとするもので、おしめカバーを使用するのが、おしめカバーマニアであるとする(本誌、同説、井上俊

彦、杉並夫、御園京子、岩手信夫
山本羊子各氏。

以上は、真正おしめカバーフエ
ッチであって、純粹におしめカバ
ーに限るとするものであり、これ
とは別に、不真正おしめカバーフ
エッチがある。これは、おしめカ
バーとともに、広くゴム類、異性
の下着に至るまでとするもので、
赤ちゃんの境地のみでなく、恥意
識を重要視するものである（本誌
同説、須田章、安田隆夫、水城由
紀子、仁平せんじ、並原新一、
藤田公一、山本一郎、加藤明夫各
氏）。

三、私のおしめカバー観

おしめカバーマニアは、どの程
度が都合が良く、適当であろうか
？これが、おしめカバーマニア
にとって最大の関心事である。
(イ)の、おしめカバー想像説の段階
であれば、本誌購入の限度であっ
て、本物のおしめカバーを購入せ
ず、理念的にのみ考えているのだ
から、おしめカバーの保管に困ら
ない反面、実は、おしめカバーは
欲しいけれども、理性に抑圧され
て購入できない者も含んでいるの

で、不安定ではないかと考える。

次に(ロ)のおしめカバー愛玩説の
段階であれば、本当のおしめカバ
ーを愛玩物とするものであるから
自分が赤ちゃんのとき使用してい
た貴重な、おしめカバーを愛玩す
る人と、何種類ものおしめカバ
ーを購入して困っている人を含むも
のであるから、おしめカバーの保
管、処分に問題があるが、(イ)段階
の欲求が充足されないのと比較す
ると、その点においては恵まれて
いると考えられる。

次に(ハ)の、おしめカバー使用説
の段階であれば、大人用のおしめ
カバーを本来の機能に従って使用
するものであって、オネショやウ
ンチをする者を含むものであって
おしめカバーだけでなく、その他
の、おしめ、ベビーパウダーなど
を必要とするもので、これらのも
のを保管、処理、洗濯、処分をし
なければならぬ困難がある。

私見によれば、おしめを自分の
体に触れて、そのおしめカバーの
感触を楽しむのが、おしめカバ
ーマニアの限界ではないかと、考え
る。

また反対説もあるが、やはり、
おしめの洗濯が必要な程度となる
と、現実的、社会的限界があるの
ではなからうか。また本誌に、こ
の段階の人があるということは、
すこぶる疑問であると考ええる。

けだし、本誌の投稿を見ると、
この段階の人が多いけれども、真
実は(イ)あるいは(ロ)段階の人が、こ
んなにしてみたいという想像をし
て、本誌に投稿するものではな
からうかと考えられる。

最後に、不真正おしめカバーフ
エッチであるが、この範囲の人は
赤ちゃんへの郷愁が恥意識によっ
て、かなり不明確になったもので
ある。

従って、もはや純粹には、おし
めカバーマニアといえないもので
あるから考慮に入れる必要はない
ようであるが、性欲の実現できな
いためにオナニーをする人は、真
実は純粹なおしめカバーマニアで
あると考えられるので、注意的に
この種の分類として、注目してみ
たい。

四、おしめカバーの社会性

私たち、おしめカバーマニアは

現在の合理的な厳しき社会条件の
下にあつて、極めて強い社会的適
応性をもっています。岩手信男さ
んの論文で指摘されましたように
私たちおしめカバーマニアは、常
に社会人であることを自覚しなけ
ればなりません。おしめカバーの
効用を社会人としての自覚のもと
に使うときに、この社会的適応性
が生まれてくるのです。従って社
会の信頼を失ってはなりません。
社会の信頼を失えば、これらの全
ては無意味になります。社会の信
頼を失った、おしめカバーマニア
は恍惚の人そのものとなるでし
ょう。

マニアだからといって、おしめ
カバーを顔にあてて日本中を歩き
まわる必要はありません。エレガ
ントな恋人も去って行くことでし
ようから……。しかし知れてしま
ったら、仕方がありません。悲し
いけれども、ついに赤ちゃんのと
きから所持していた朽ち果てたお
しめカバーに寿命が来たのですか
ら。

全国のおしめカバーマニアの皆
さん、意見の交換をしましょう。

入美貌のサジスチン春日ルミ・待望の告白

舐陰と神酒授与のことなど

春日ルミ

自分が普通ありきたりのセックスでは、少しも燃えない体、いわゆる世間一般でいうところの冷感症とか、不感症とか言われる女性であると気がついたのは、二十四、五才になってからだろうか。

そういうことには、人一倍関心が強くて、本や雑誌から、そうした知識を得たいという気持ちも、少なからず持っていた。また、女としての性衝動も、決して弱くはなかったのだ。

男性に接したいという気持ちを誰よりも強く持っていないながら、いざ、そうした場面になってみ



ると、私の体は少しも燃えないのであった。そうした欲望が、全然ないのであったら、また諦めもつくのであるが、誰にも負けない位、好きで好きでたまらないのに、男と同じ褥になってみると、私の体は貝殻を閉ざしたようになってしまっ、どうしても、快感なんて感じないのであった。

こんな筈ではなかったという深い失望が、いつも、私を落胆させるのだった。本や雑誌で得た知識からすれば、決して、こんなものである筈はないという気持ち、私をあわてさせた。男

に接したいという切実な思いが、これ程までに高まっているというのに、どうしてなのだろうか、と、じりじりした。

自分に欠陥があるのか、と考える前に、先ず相手の男性がいけないからなのだと気がつき、私の男性遍歴が始まった。

その気になりさえすれば、物欲し気な男はいくらでもいた。そうした幾人もの男達を渡り歩いても、私は、いつも不満足だった。体は期待している筈なのに、心の方は冷えきったままで、少しも燃えてこなかった。

どうしてなのだろう、どういふわけなのだろうと、私は自分自身の体が不思議に思え、イライラした気持で頭に血がのぼった。

生理のあとでは、特に男が欲しいと思うことが強く、男友達を無理に誘いだしてみようとしたが、そんな私の体を知っている彼達は一人去り二人去りしてしまった。

そんな時、私の救いの神となったのが、ふと、書店で見かけた奇クであった。奇クに限らず、若い女が、こんなものを読むのか、と

びっくりするようなエロがかった雑誌を、私は好んで読んでいた。

奇クは、本当に一風変わったユニークな雑誌であった。一目見て、何かしら、ぐっと引きつけられるような何ものかがあった。その魅力が何であるかは、その時の私には、わからなかったが、とにかく、手に取っただけで買いたくなくなってしまいう雑誌であった。

家へ帰って、ゆっくりと奇クを開けて、目

を通してみると、そこに展開されている縛られた女の記事や写真、それに女に虐められる男の文章が、目の中に痛いように飛び込んできた。殊に、女性の尻の下になっている男性の絵と記事に、体の中心部が棒で貫かれたみたいなのを覚えた。

とにかく、奇クという雑誌の全体が、物凄く気に入ってしまった。もう、自分の気持ちにぴったりで、わくわくするような思いに、居ても立ってもおれなかった。

早速、奇クの編集部へ長文の手紙を書いたことによって、私と奇クの切っても切れない密接な関係が出来上がった。

私は暗闇のトンネルから抜け出たように、目の前が、パッと明るくなった気持だった。

朝起きるのが楽しくて仕方がなかった。その頃、私は生駒山の山裾の郊外に住んでいたが、夏の早朝、家の庭を一步出ると、生い茂った夏草に、朝露がいっぱい降りていて、サンダル履きの私の素足を、びしょびしょに濡らした。

私は只、わけもなく、膝から下





を朝露だらけにしながら、山道を歩きまわった。可憐な紫露草が蝶がとまったような花をつけているのが印象的だった。私は下半身を水びたしにしながらも、生きている喜びというものを深く感じた。なんとなく、生甲斐を覚えた。

私は、奇クという雑誌を通じて幾人かのMの紳士達と知り合うことが出来た。所謂、S Mプレイというものを通じて、私は、いろんなことを実際に学び、そして、男女間の人情の機微や自分の性欲の謎についても、次第次第に感得することが出来た。

キッスをしても、少しも感興を覚えない私

足を覚えた。

マゾ男の歓喜が大きければ大きい程、私もまた、凄く亢奮した。例えば、素裸に剥いた男が私に無理矢理、洋服を脱がされて、忽ちのうちに、その性器を怒張させているのを見ると、私も体中が、かっかとした。

直接、手を下さなくても、私の口頭による命令で、男が意のままに動くのも心地よく、いつの場合も、マゾ男の喜悅は、また私のエキサイトしに連動した。

なのに、マゾの男に足の指を舐めさせることで、ぞくぞくするような亢奮を覚えた。

それは多分に精神的なもので大の男に、自分の汚れた足の裏を舐めさせているという優越感に、たまらない刺戟を感じるのと、そのマゾ男が、如何にも有難いものを頂戴しているという没我奉仕の精神に徹しているのを冷ややかに見下しているというところに、耐え難い性欲の満

従って、ゼスチュアの大きい男程、私は満足することが出来た。

例えば、私が鞭を揮って、マゾ男の背に赤いミミズ脹れを、幾つもつけている際など、泣き叫び、喚き、涙ながらに許しを乞うのを見ると、私もまた、忽ちのうちに、洩らしてしまう程にエキサイトした。

ハイヒールで踏みつけたり、人間犬や人間馬にして乗りまわしたり、或は縄による緊縛や鞭うち、それにチューイングガムの食べかすを床の上に吐き出して食べさせたり、いろんな虐め方や凌辱の仕方をやってきたが、やは



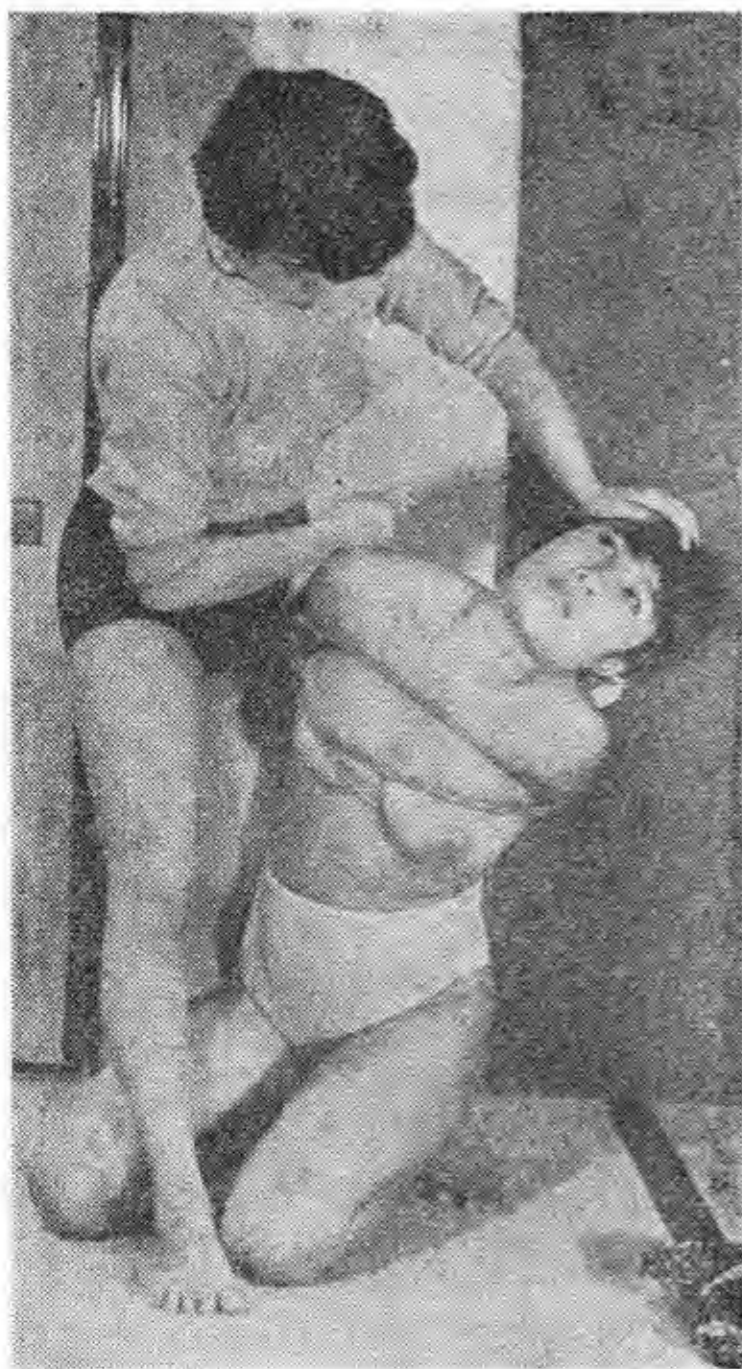
り、なんといっても、私が一番満足したのは祇陰の奉仕ということになる。

私のことを、女御主人様とか女王様とか崇めていながら、やはり多くのマゾ男は、私の秘密の部分の口にしたがった。優越感に浸ることが出来るのは、足舐めにしたって同じことなのだが、こうした奉仕を許すということとは、優越感に誇るということばかりでなく、多分に、閨房的な私の享樂の面が、正面に押し出されている時に限っていた。

マゾ男の殆どといっていい位、この奉仕をしたがったし、許可を与えたときの喜びがあったら、なかった。芸を

仕込んだ挙句の御褒美とか、足舐めをうまくやった賞品として、多くの場合、許可を与えるのであるが、もうその頃になると、私の方も気分がのっているのです、積極的に、男性の顔面に騎乗のポーズで窒息責めに入る場合もある。

私の方からすれば、臀部でびったりとマゾ男の



口と鼻を中心とした顔面を押え込んでしまうのだから、確かに責めということになるが、マゾ男の立場からすれば、女王様に対する奉仕ということになる。

奉仕といえば、仰向けに安楽な姿勢で寝てゐるがっている私に対して、猫が水を飲むような音を立てて、没我隸属の誓いをするマゾ男には、私は誇らしげな心身両面の快感を、心ゆくまで満喫することが出来る。

必ずしも、コプロ趣味的なマゾ男でなくても、アヌスを含めて汚れている筈の、その部分に対する舐賞は、マゾ男の一番好むところ

であるし、私も正直いって大好きである。

ただし、プレイを、そこにまで持ってゆくには段階的な手続きが必要であって、いくら私がサジスチンだからといって、余程のことがないかぎり、最初から、そうした閨房的なプレイに入ることは稀である。

だから、足舐めの段階で終わってしまうものや緊縛だけで終わってしまうもの、或は、鞭打ちだけで遂情して果ててしまうものも多い。

単純な物理的な刺戟だけでは、ついで満足しなかった私も、マゾ男を足下に征服しているのだという男性支配の気持が介在すること

によって凄く快感を味わうことが出来た。刺戟の度合とか時間の長短とかいうことよりも、その際の支配——隸属の關係のムード作りによって、私の快感の度合いもまた違っていた。だが、いつの場合でも、マゾ男の歓喜が大きければ大きい程、私も又、気持がよかった。

私のお臀の下に顔面をひしやげるように押え込まれて、僅かな隙き間から、必死にな

って呼吸をしようとして
もがくマゾ男を見ている
と、私はたまらなくなっ
てくる。

この世に、こんな楽し
いことって、あるのかし
ら——と、私は体の奥底
から盛り上ってくる痺れ
のような快感に、思わず
知らず、はしたない吐息
を洩らしてしまうのだっ
た。

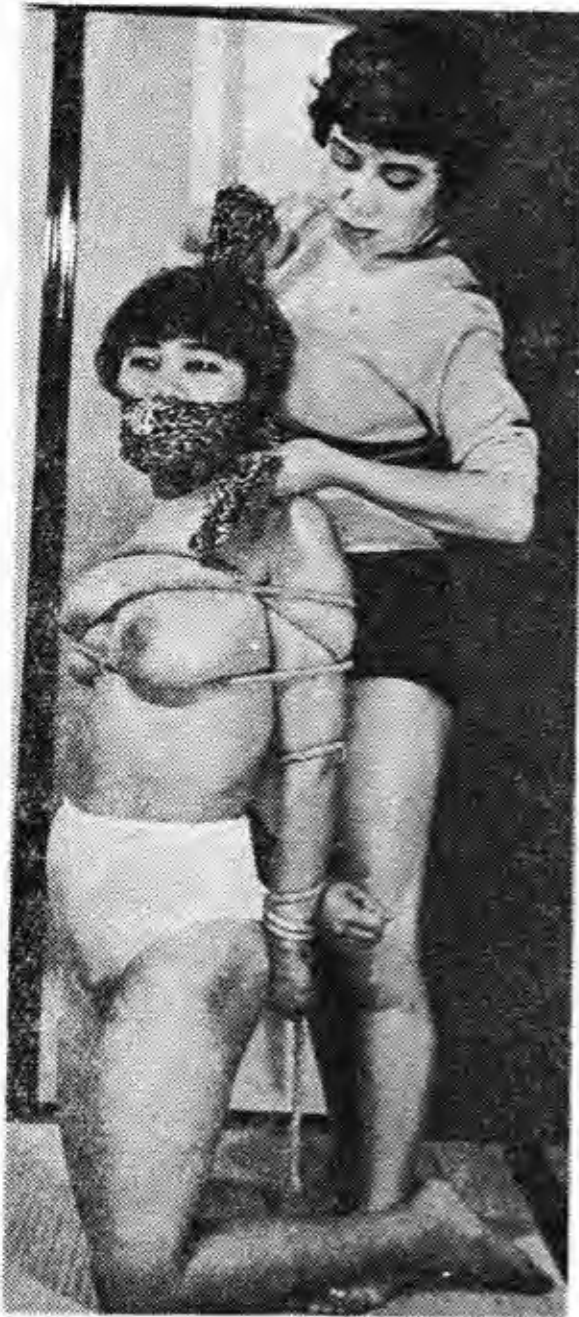
これは、多くのマゾ男というわけではなか
ったが、中には私の神酒を奉戴したいという
切実な願いを申し出る者も決して少なくはな
かった。このプレイは、コップとか
便器とか他の用器に排泄したものをも
とって、与えるというのは、比較的
容易であった。

この場合でも、私は、自分の用済
みの体液を、男性の口から、その体
内へ注ぎ込むということに、強い刺
戟と興奮を覚えた。殊に、SMプレ
イの最高の昂まりの結末として、こ
の神酒奉戴をやった時は、その感激



も一入であった。

だが、なんといっても、直接、神酒をマゾ
男の口へ、口移しで飲ませるということは、
皆が皆、強く願望していながら、テクニク



足感が、出来ないことを可能にするエネルギ
ーになるのだと思う。

そうした昂揚の状態に陥った私は、直接口
移しの神酒授与が、なにものにも換えがたい
衝動となって、全身を

襲うのである。そうい
う場面を想像しただけ
でも私は絶頂感を味わ
うことが出来る。それ
はまた、なんという夢
幻境を、さまざま様な
快感であろうか。

夜の寝室なんかで
事前に、ビニールシー

の面で容易ではなかった。勿論、私
としても直接の神酒奉戴の方が、い
くら楽しいかしのれないのだ。事情が
許しさえすれば、すべての神酒は、
こうして与えてやりたい位なのだ。

普通の状態であれば、そんな状態
での排尿なんて、出来る筈のもので
はないのだが、やはり、なんといっ
ても、マゾ男達を眼下に見おろして
いるという絶対優位の立場から、私
の心と体とに充滿してくる性的な満

トを敷くとか、濡れてもよいバスタオルを置くとかして、万全の準備を整えた後での、人間トイレは一番楽しいプレイで、股下に組み敷いたマゾ男の顔面を眺めながら、私は幾度となく、山頂を征服する事が出来るのだ。

浴室なんかで、離れたマゾ男の顔面に、勢いよく注ぐという神酒授与の儀式も、やらなわけではないが、私自身としては、やはり直接、口移しのプレイの方が好きだった。

時には、神酒ばかりでなく、固形の方を戴きたいと願うマゾ男もいた。そうした男に対しては、私も相手を犬か豚のように考えて、辱かしの限りをつくした上で、最後の切札とばかりに、徹底した引導を渡してやるのであったが、私としてはやはり口移しの直接授与が好きである。

或時、私の眼の前で、排泄したばかりの新鮮な私の固形を、こわごわ、爪楊子の先で舐めるよう

に味わっているマゾ男を見た時、俄然、私のSの心が鬱勃として湧き起り、この顔を固形物の上へ押しつけて、無理に食べさせたことがあったが、この時は、直接授与と同じ様に亢奮したものであった。

苦痛を与えられて喜ぶ男、縛られることによって快感を覚える男、辱かしめを与えてほしいと願う男、犬になりたい男、馬になりたい男。マゾ男といっても、その傾向は、一人

一人が違っている程、千差万別であったが、一樣に私の体には興味を持っていた。

私の身につけている下着を介したり、或は唾液、尿などの体からの排泄物を通してであったり、足の裏とか踝、臀部の汗なんかを、ペロペロ舐めたりすることで、私の体とのつながりを求めようとした。

私の体の中でも一番汚い個所に接吻することによって、激しい屈辱感を味わうと共に、私と一体になろうという、はかない望みをつないでいるようだった。

私の巧妙な誘導、例えば、脱衣の強要なんかによって、一時的に性器の怒張を見せることがあっても、その後の苛酷なまでの私の責めによって昇天、或は昇華して殆ど萎えてしまうのが実情であったが、中には、最初から性器が平静なマゾ男も少なくなかった。

Mフォト撮影のために、カメラのT氏とモデル志願のマゾ男の三人でプレイしたことがあった。さまざまな趣向のフォトを撮影しているうちマゾ男の方がエキサイトして、私にむしゃぶりついて、舐陰の奉仕をや





りだしてしまった。T氏の見ている前で、二人のMプレイが最高調に達し、さながら、傍に人なきが如し——といった有様になった。

私もまた、Mフォト撮影という役目を忘れて、そのMプレイに熱中してしまったのだが見ていたT氏が、突然怒りだし、マゾ男を押しつけて、私の中へ闖入してきた。

この時程、私は素晴らしい絶頂感を味わった事は未だ嘗てなかった。マゾ男の見ている前でT氏と私のあくなき狂態は、いついつまでも続いた。そのあとT氏は、私にマゾ男を責める事を要求し、二人で一緒になって、責め

まくったのであるが、それが又、二人を亢奮させて、ベッドをきしませる結果となった。

後で聞く所によると、そのマゾ男も、演技ならぬ真実味を帯びた責めプレイに遭遇して大いに満足したとの事であった。私にしてもその時の体験は、一生忘れる事の出来ない突発的な出来事であったが、そんな経験をしてからは、私にとってT氏は忘れる事の出来ない存在になってしまった。

不感症だ、冷感症だと思ひ込んでいた私にも、こんな素晴らしい一面があるのだと考えると、夢よ再び、そうした境地を何度でも味わ

ってみたいなるのも人情であった。

T氏なら心憎いまでに、そうした私の心情を弁えて、手玉にとって呉れると考えると心が晴々と明るくなってくるのだった。

朝起きて胸がはずみ、何を食べても美味しく、何をしても楽しかった。

正常な交りにも、愉悦を覚えることが出来るという発見は、私にとって新しい人生が始まった様な驚きであった。

マゾ男、マゾ女を混じえての四人プレイや五人プレイもやった。マゾ男を、さんざんに山車に使うて虐めた挙句、ベッドの脚に括りつけておいて、その前でT氏と二人で戯れた事もあった。一度、その愉悦の味を知った私の体は、止まる所を知らず暴走した。

マゾ男を責める時は、暴虐の限りを尽くしハイヒールの踵の金具で男の手の甲を突き破ったりした。それが又、私のサジスチンとしての名声を高めた。

春日ルミというのは、一体、どんな女だったのだろうか。それは、自分自身でもわからない。だが一つ、はっきり言える事は、自分自身に忠実に生きた事だけは確かだろう。

そして、そんな私にも、新しい生活への展開が待っていたのだった。

苗木陽子さまへ——

SMの血騒ぐ、この頃

夫 志 吐 月 大

苗木陽子様

早速ですが、お呼びかけさせていただきま
す。奇ク十一月号を読んで、私はSMの血が
沸きたつように騒ぐのを覚えました。

巻頭のグラビア写真の小肥りの若い女性が
両手を挙げて縛られているフォトを見て、思
わず、ぞくぞくとしてしまいました。

昭和四十年から奇クを愛読している私です
のに、この慌てようは、また、なんとした事
でしょう。私も、生れながらSM好き、そし
て奇クのファンなのです。

揃えて正面向けて挙げた両腕の腋の下に生
えた黒々とした纖毛が密生しているのを眺め
た時、私は或種の連想から、思わず知らずカ
ットされた下半身をのぞいたものです。

のけぞらして見えない顔も、心憎いばかり
の撮影者の配慮なのか。私のS心は、急速に
もぞもぞしました。まんまるい豊かな二
つの乳房。これだけ両腕を挙げていて、これ
だけ膨らんでいるのですから、余程、大きい
乳房なのでしょう。

くるみを割ったようなお臍。これは可愛い
いですね。ずんどう型の胴体が、このお臍で
どれだけ映えているか知れません。

下腹部に、くっきりとついている二筋の皺
が、この女性の肉づきの豊かさを物語ってい
て、私は俄然、嬉しくなってくるのです。

SM的に見て、この女体と手吊りポーズの
良さは、全く、無防備感に晒されているとい
うことです。若し、この女性が、針金のように
にガリガリに痩せ細った女体の持主だったと
したら、どうでしょうか。とても、このポー
ズでは、あばら骨の一本一本が数えられて、
見られたものではないでしょう。

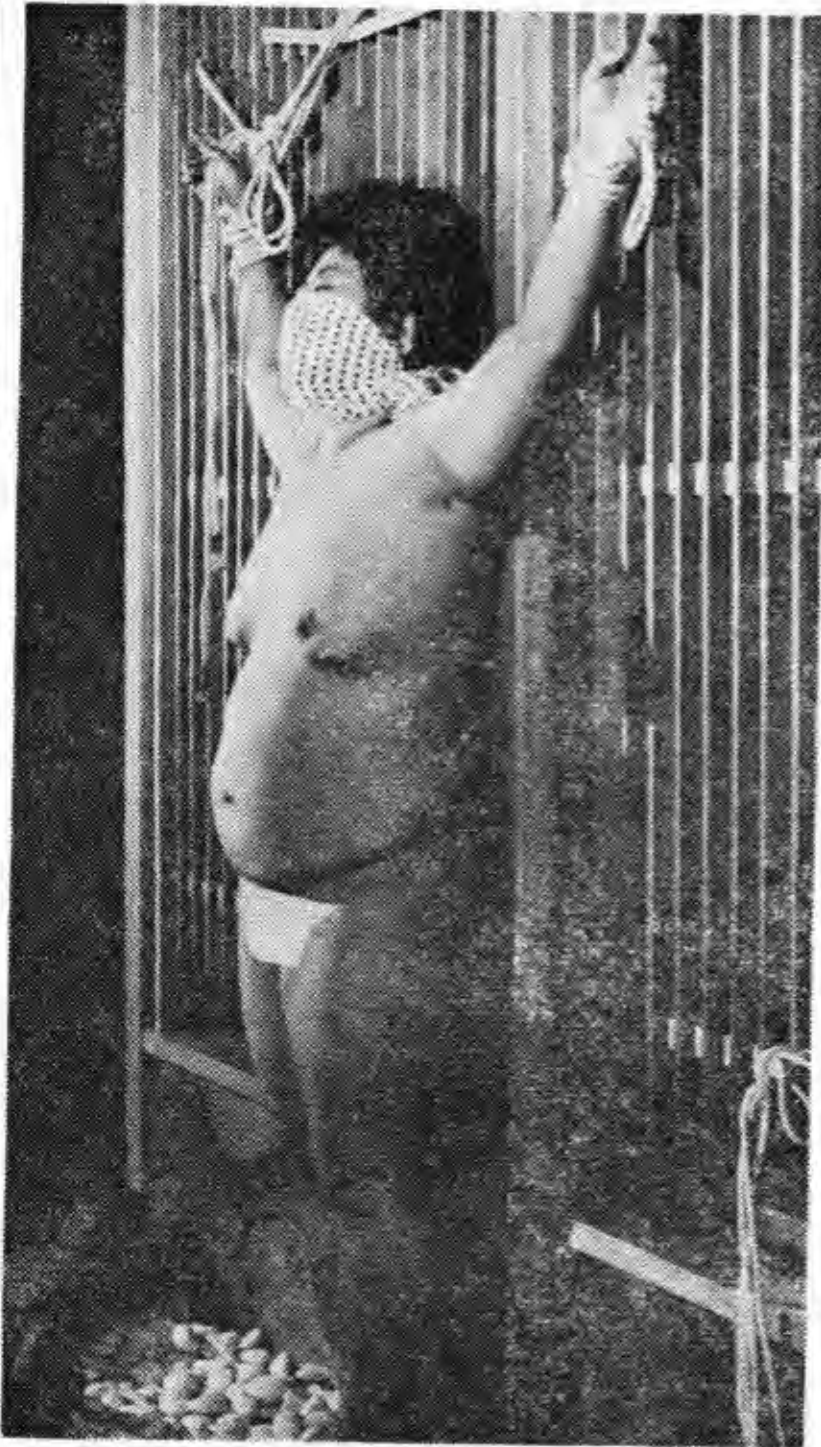
苗木陽子様

これで、私の言わんとした事は、いち早く
わかって頂けた事と思います。

十一月号で、貴女の書かれた八人に御主人
様を、お与え下さいVという文章を読んで、
貴女のMとしての情熱が文面から、ひしひし
と感じとられ、強く鋭く、私の心を打たずに
はおきませんでした。

第一に、私はムチが大好きだということ
です。大好きというより、ムチだけにしか、興
味が無いと言った方が良いかも知れません。
私にとっては、SMプレイ即ムチプレイとい
う感じなのです。

そして、不思議に思われるかも知れませんが、ムチプレイの場合は、私はSでもMでも
良いのです。要するにハムチ打ちVという行
為と、「人間」という生き物が組み合わせられ
たところに、何とも云えない、此の世の最高
のものを感ずるのです。そうした観点から、
私に言わすれば、ハムチ打ちVに興味を示さ



ない人間が、哀れに見えてくるのです（これは一寸言いすぎかも知れませんが）。何はともあれ、貴女と私とはムチ一本を絆として最高の人生を創りあげようではありませんか。私は今迄に、何回となくムチプレイを経験してきましたが、頭で想像する様に仲々うまくゆかないものでしてね——。まあ、私の経験を少しばかり述べてみますと、どのSMプレイでも、そうでしょうが、ムチプレイが成功するか、しないかは、結局、「乗れるか」

「乗れないか」だと思います。

観客がいて衆目環視の中でのプレイ——これは確実に最高に乗れます。本来、プレイはこうありたいものです。私も、こういう状態のプレイを三回ばかり経験しましたが、その満足感は最高でした。

問題は、二人だけのプレイで如何に気分が乗れる様にするかです。これは本当は大変むずかしいのです。私の過去のプレイも、殆どが此の二人だけのプレイで、二人が親しい間

柄になった後で、漸次ムチプレイに進んでゆくというパターンをとったものばかりでしたが、結論から云えば全部、不満足でした。

それは、どうしても親しくなった後です。MはSに甘えるし、SはMに対して、可哀そうだという感情になるし、ということ。こういう感情が芽ばえれば、もうプレイは台無しですよ。

特にムチ打ちというのは、ものすごく痛いものですから、少しでも、この様な感情が入れば、もう到底、耐えられるものではありません。痛いからやめてと言え、いつでもやめる様では、それはもうプレイにはならないですものね。

いや、誤解のない様にしていただき度いのですが、私は何も快楽を通りこして、既に苦痛の段階になっているのに、プレイを続ける様な無茶を言っているではありません。

私の言いたいのは、気持の持ち様で、相当な痛さにも耐えられるものだ。そして、それを耐え抜くことによって、本当のムチプレイの満足が得られるのだ。ということ。言いたいのです。そして、そういう精神状態でプレイが出来る様に工夫する——。これがプレイを成功させる秘訣だと云いたいのです。

勿論、プレイですから、其処にルールはあります。ルールの範囲内で如何に最高のプレ

イのムードを創りあげるか、これが二人でプレイする場合、最も工夫を要する所で、又、研究の、し甲斐のあるテーマです。

苗木陽子様

貴女の文面を見てみますと、貴女は、まだ実際にムチ打ちを受けた経験はない様ですね（もしあったのなら御免なさい）。実際のプレイと、頭の中で想像するのとは、大変違うものです。

私は前に述べた様に、衆人環視の中でのガッツなプレイを経験しました。それは、尻、太股、背中が全部、ムチ痕でおおわれる程のものでしたが、気分さえのつていれば、その位は十分、耐えられます。

二人だけでも、その様なガッツな気持ちになれるかということですが、これは二人で研究しようではありませんか。それは要するに、どの様なルールでプレイするかという工夫の問題でしょう。

私の頭の中だけのアイデアですが、こんなのは、どうでしょう。

Mは両手を上にあげて、何かにつかまりポーズをとります（たとえば鴨居でもよい）。

Sは尻、太股、背中をムチ打ちます。あらかじめムチ打ちの回数を決めておきます（たとえば百回）。途中でMは必ず痛さに耐えかねて手を離すでしょう。一回離す度毎に、罰

打ちが三回、追加されるという趣向です。

つまり、どんなに痛くとも、手を離さず我慢していなければ、いくらでも罰打ちが増えて、いつまでたっても仕置は終わらないという仕掛けですね。だからMは歯をくいしばっても、痛さに耐えるということとなります。

これは以前から私が頭の中に温めていたアイデアですが、さて、実際にやってみて、どうでしょうか。とにかく、前にも言った様に頭の中で考えるのと、実際にプレイするのとは大変な違いで、私も「こんな筈ではなかったのに」という経験を何度も味わいました。

苗木陽子様

次に参考迄に私の経験から二、三、抜粋してみます。ムチ打ちの回数は、気分さえ乗ってれば百回や二百回は大丈夫です。耐えられます。但し、ムチの種類が問題で、種類によっては一回でも音をあげてしまいます。

まあ、良い音がして数多く打てるもの、ムチ痕の、きれいにつくもの等が、良いでしょう。打つ場所は、背中、尻、太股で、胸、腹、急所はさけます。又、首筋は外から見えるので注意したいものです（夏なら腕等も駄目）。ムチ痕は一週間で凡そ治り、二週間もあれば完全に消えます。緊縛してのムチ打ちは、よく頭の中で想像されますが、或程度の動きの自由がなければ耐えられません。

Mに苦痛を与えるポイントは、同じ場所ばかり連続で打つことです。これは非常に、こたえます。つまり、一回打つと、その余韻は五秒から十秒位あるのですが、その余韻が消えない中に打つのですね。

それから、もう一つ。ムチプレイはMが苦痛に耐えるものと思われるでしょうが、どうして、Sの方がはるかに、きついのですよ。何せ、力まかせに百回もスクングするのですからね。だからといって力加減することは、もう興味半減です。あく迄、全力投球でなければならぬ。しかし、それにも、まあ、限度がありますから、結局、前に述べたムチの種類との、かね合いになりますよ。

苗木陽子様

Mには不満でも、軽い力で痛さを与え得るというムチを選沢することで妥協せねばならないかも知れませんね。私が経験した場合はSが二人で、私一人の相手をしました。本当は此の形が理想でしょうね。

まあ、いくら書いても限りがありませんから、これ位にしますが、貴女といいプレイが出来ることを心から願ってやみません。では、お会い出来る日を楽しみに。

九月二十九日

苗木陽子様

大月吐志夫

砂登子抄 (後)

深き水の底に沈んで

カット・志羽利也



(五)

朝が来た。

くるみ色の輝きが訪れると不思議に人間の傷は、いやされるものである。絶望の底で泣

久留木

栄

いた悲しみも、翌日の朝の爽快さまでもさまたげる力はない。

日がたつにつれて砂登子は苦しみを忘れ、二週間たつと責めに憧れすら抱くようになった。

月二回だから、三回目は来月の第一日曜、二回目の撮影から三週間目にあたった。行くまい、行くまいと思いつながら、その日が近づくにつれ、心が落ち着か

ず、その日が来ると、やはり屠場にひかれる豚のように、身を着かざって、約束の場所に行かずにいられたかった。

あるいは、昭二と毎日、顔をあわせねばならない生活環境が意地にも、そうさせたのか

あるいは、縄の魅力にひかれたのか。とにかく、自分自身で処理せよといわれた昭二の言葉は、二度と砂登子の脳裏から消えるものではなかった。

第三回目の責め場は最初と同じ料亭であった。

ブルーグリーンの地に白の大きな水玉模様をぬいたコットンサテンのブラウスを着、薄いベージュのタイトスカートをはいて砂登子は出かけた。最初のモデル代で昭二に借金の一部をかえし、そのモデル代の残りとも月給の残りで何とか生地だけを買ひ、三日三晩かけて作りあげた晴着だった。

その晴着を大平か昭二に見せたいと思ったが、大平に知らせる気にはなれず、昭二にも

イのムードを創りあげるか、これが二人でプレイする場合、最も工夫を要する所で、又、研究の、し甲斐のあるテーマです。

苗木陽子様

貴女の文面を見てみますと、貴女は、まだ実際にムチ打ちを受けた経験はない様ですね（もしあったのなら御免なさい）。実際のプレイと、頭の中で想像するのとは、大変違うものです。

私は前に述べた様に、衆人環視の中でのガッツなプレイを経験しました。それは、尻、太股、背中が全部、ムチ痕でおおわれる程のものでしたが、気分さえのつていれば、その位は十分、耐えられます。

二人だけでも、その様なガッツな気持ちになれるかということですが、これは二人で研究しようではありませんか。それは要するに、どの様なルールでプレイするかという工夫の問題でしょう。

私の頭の中だけのアイデアですが、こんなのは、どうでしょう。

Mは両手を上にあげて、何かにつかまりポーズをとります（たとえば鴨居でもよい）。

Sは尻、太股、背中をムチ打ちます。あらかじめムチ打ちの回数を決めておきます（たとえば百回）。途中でMは必ず痛さに耐えかねて手を離すでしょう。一回離す度に、罰

打ちが三回、追加されるという趣向です。

つまり、どんなに痛くとも、手を離さず我慢していなければ、いくらでも罰打ちが増えて、いつまでたっても仕置は終わらないという仕掛けですね。だからMは歯をくいしばっても、痛さに耐えるということとなります。

これは以前から私が頭の中に温めていたアイデアですが、さて、実際にやってみて、どうでしょうか。とにかく、前にも言った様に頭の中で考えるのと、実際にプレイするのとは大変な違いで、私も「こんな筈ではなかったのに」という経験を何度も味わいました。

苗木陽子様

次に参考迄に私の経験から二、三、抜粋してみます。ムチ打ちの回数は、気分さえ乗ってれば百回や二百回は大丈夫です。耐えられます。但し、ムチの種類が問題で、種類によっては一回でも音をあげてしまいます。

まあ、良い音がして数多く打てるもの、ムチ痕の、きれいにつくもの等が、良いでしょう。打つ場所は、背中、尻、太股で、胸、腹急所はさけます。又、首筋は外から見えるので注意したいものです（夏なら腕等も駄目）。ムチ痕は一週間で凡そ治り、二週間もあれば完全に消えます。緊縛してのムチ打ちは、よく頭の中で想像されますが、或程度の動きの自由がなければ耐えられません。

Mに苦痛を与えるポイントは、同じ場所ばかり連続で打つことです。これは非常に、こたえます。つまり、一回打つと、その余韻は五秒から十秒位あるのですが、その余韻が消えない中に打つのですね。

それから、もう一つ。ムチプレイはMが苦痛に耐えるものと思われるでしょうが、どうして、Sの方がはるかに、きついのですよ。何せ、力まかせに百回もスクングするのですから。だからといって力加減することは、もう興味半減です。あく迄、全力投球でなければならぬ。しかし、それにも、まあ、限度がありますから、結局、前に述べたムチの種類との、かね合いになりますよ。

苗木陽子様

Mには不満でも、軽い力で痛さを与え得るというムチを選択することで妥協せねばならないかも知れませんね。私が経験した場合はSが二人で、私一人の相手をしました。本当は此の形が理想でしょうね。

まあ、いくら書いても限りがありませんから、これ位にしますが、貴女といいプレイが出来ることを心から願ってやみません。では、お会い出来る日を楽しみに。

九月二十九日

苗木陽子様

大月吐志夫

砂登子抄 (後)

深き水の底に沈んで

カット・志羽利也



(五)

朝が来た。
くるみ色の輝きが訪れると不思議に人間の
傷は、いやされるものである。絶望の底で泣

ず、その日が来ると、やはり屠場にひかれる
豚のように、身を着かざって、約束の場所に
行かずにはいられなかった。
あるいは、昭二と毎日、顔をあわせねばな
らない生活環境が意地にも、そうさせたのか

いた悲しみも、翌日の朝の爽快
さまでもさまたげる力はない。
日がたつにつれて砂登子は苦
しみを忘れ、二週間たつと責め
に憧れすら抱くようになった。
月二回だから、三回目は来月の
第一日曜、二回目の撮影から三
週間目にあたった。行くまい、
行くまいと思いつながら、その日
が近づくにつれ、心が落ち着か

久留木

栄

あるいは、縄の魅力にひかれたのか。とにか
く、自分自身で処理せよといわれた昭二の言
葉は、二度と砂登子の悩裏から消えるもので
はなかった。
第三回目の責め場は最初と同じ料亭であつ
た。

ブルーグリーンの地に白の大きな水玉模様
をぬいたコットンサテンのブラウスを着、薄
いベージュのタイトスカートをはいて砂登子
は出かけた。最初のモデル代で昭二に借金の
一部をかえし、そのモデル代の残りど月給の
残りで何とか生地だけを買ひ、三日三晩かか
って作りあげた晴着だった。

その晴着を大平か昭二に見せたいと思つた
が、大平に知らせる気にはなれず、昭二にも

また逢う気がしなかった。最初の撮影がはじまってから、もう丸一カ月。その間に、ついで一度も大平を訪ねる機会がなかったが、こんどあったら、どうしてその言い訳をしたらよからうか。料亭に行きながら、砂登子は足が、わなわなと、ふるえるのだった。

家を出、映画館の前からバスに乗った。バスの中から町を通る人波をみていると、ふとその中に大平が、まじっているのではないかと思われた。大平がいるとするなら、学生服にちがいない。砂登子は学生服をみるたびにふるえ、バスの片隅に小さくなった。もし今道路上で大平にあうとすれば、きっと砂登子は、こそこそと逃げ出すだろう。

それにしても、なぜ大平は自分をたずねてこないのだろうか。手紙か、呼出しでも……。今度の仕事のことを、まだ大平は知らないはずである。それなら訪ねてきてもよさそうなものだ。それがこないというのは何かあったのか。或は、もう体の関係ができてしまった安心したのか。以前は少なくとも一週に一度は逢っていた。こちらがでかけるか、あちらからやってきた。しかし、いまはこちらからは、いきたくないし、むこうからもこない。以心伝心というが、はたしてそうなんだろう

か――。

砂登子が料亭についたのは十時を十分すぎていた。定刻は十時だった。秋山が紺のズボンにブロードのカッターという相変らずの、やぼったい姿でいた。砂登子を見て破顔一笑した。

「やあ、いらっしやい。もうこないかと思っ
たよ」

「すみません。本当にあのときは、もうこり
ごりだと思っただのですよ」

「そうでしょう。ハ、ハ、ハ。だれだって、
そう思うでしょう。ところで、きょうも、ま
た、お一人？」

「ええ、もうずっと一人でくるつもりです」

「では、お兄さんは何も、いわないのかね」

「ええ、余り私の顔を見たがりませんのよ」

「ふうん、では何か――」

秋山が、まだ何かいいたそうにしたとき、小田野カメラマン夫妻、仲居の清子が顔を出した。したがって話は、それなりに途切れ、あれこれ、にぎやかな応酬があった。三回目ともなれば情が移るのだろう。千代子が更衣室に案内しながら「きょうは午前中、方円流の昔風の縛り。午後は算盤責めと、えび責めそのあとで、浴室でのヌード撮影」と説明し

た。

はじめから全裸で、座敷に出されると、すぐ縄が体にまきついた。縛りながら小田野が「いやでしょうけど、今日からは顔を入れて振ります」

と、一方的に宣告した。どうせ、いつかはそうなるのだからと思っていたが、一方的にいわれると腹が立った。

「いやですワ」

「いやでも、とるつもりだぜ」

「とりたければ、勝手にとればいいじゃないの。縛られてから、とるもとらぬもないワ。その代り、今日は縄をといたら逃げてかえるから」

「すごい見幕だなあ。そんなら一日中、縛っておかなくちゃならないぜ」

「勝手にすれば、いいわよ」

「困ったなあ、秋山さん、なんとか助け舟を出してくれよ」

秋山が廊下の長椅子から、ゆっくりと立ちあがると、砂登子に近づいた。

「朝から喧嘩かね」

砂登子は、だまっていた。

「それじゃなかったら、和睦しなさい」

「はい。先生のおっしゃるとおりにします」

「じゃ、君の決心は？」

「そうね。顔は、とってもかわないワよ。縛っておきたかったら、一日中でも放つたらかしていたら、いいんですワ。癪にさわると何でも反対したくなるの」

「困った人だな。しかし、君にそんな勇気があるとは思わなかった」

「あら、おっしゃるわねえ。勇気がなくても勝手に縛って、勝手に鼻をつまんで泣かせるじゃないの」

「いや、あれは君が望んだから、サービスのつもりでやったんだ」

「お口がうまいわねえ。どうせ、最後には滅茶苦茶にされるんですもの。最初から、そう宣言されていた方が、心置きなくやれるワ」

「そりゃそうだな。じゃ今日は、どんなことがあっても、帰る時間まで、二度とこの縄はとかんぞ」

「どうぞ、ご自由に」

「じゃ、そうしよう。きょうは一日中、裸ですむような割りふりだから、その方が、便利だろう。小田野君、きょうは絶好のチャンスだ。すまないが、もう一人モデルを呼んでくれ。相責めでなく、チョットした後姿だけでいいから、中川君ところのお嬢さんでも結構

だ。おひるまでに、ぜひ、たのむって」

秋山の目が急に、いきいきと輝き出した。

「どうしたんですの」

「うん、いまにわかるよ。君も、たのしみにしておけよ。スケジュール以外の、いい記念写真になるぜ」

そういって、砂登子にポーズをつけさせながら、砂登子の耳に口を近付け

「君も、縛られるのが好きになったのと、ちがうか？」

と小声で、つぶやいた。

それを聞くと体がカッと、ほてった。まさかとは思ったが、そういえない何物があるのを感じとっていた。と、いつか何かの本か雑誌でよんだ。女は男の愛情に縛られるものだ。という迷句が浮かんだ。男と女の愛情。それは、やはり思い思われ、逢引きを重ねるうちに深まっていくのだ。その縄が、この本物の縄みたいに強かったら、どんなに幸福だろうと思っただ。解いても解いても解けない。切っても切っても切れない、くもの巣の糸のように、ねばっこい縄なら、どんなに幸福だろう。そう思った。

いま自分に、はりめぐらされている愛情の縄は、一つは太いのか細いのか全くわからず

一つは自分の心をおさえてはいるものの、干切れそうで細りかけているのだ。なぜ私を縛る愛情の縄だけが、この縄みたいに、がんばりで絶対にとけないものではないのだろうか――。

方円流の縛りは、たいして、きついものはなかった。

うしろえび責めのように手、足、首の三カ所が一緒にしめあげられれば、きつい、そうでなく、上半身だけだと、やたらに縄が嚴重にかかるだけのようである。その縛り方を順序にしたがって、たんねんに撮っていくので、よほど根気よくカメラマンの相手をつとめないでと退屈になるくらいだった。

一番最後に、一番きつちりと前後とも菱縄をかけられて撮影が終わった。

「さあ、ひるめしだ。砂登子さん、そのままたべな」

秋山が、ひやかした。

「意地悪っ」

「約束だぜ」

「じゃ食べさせてよ」

「お安い、ご用だ。ついでに、小用もさせてやろう」

「いやーだ、それは……」

「みる」

「いいワ、このまま行くから……」

「ハハハハハ、それを小田野君にとってもらうか。きっと素晴らしい写真が……、いや、これは冗談だ」

砂登子に、すごい顔で、にらみつけられて

秋山は、てれた。

「そう、ふくれるなよ。その代り、君がぜったいに好きになるような縛り方を、ちょっとしてやるからさ」

「ほんと」

「うん、立てよ」

秋山は砂登子をひきたてると、その縄じりを小田野に持たせ、自分は別に、よく使いらされた太目のロープを持ってきた。ちよつと拇指大のものだ。それを砂登子の腹に、ぐるぐる二巻きすると、ヘソの上で結び、それを足の間から尻、背中に回して、後ろ手の手首に連絡して、しめあげた。ぞくにいう股間縛りというやつだ。

秋山と小田野が手を放すと、砂登子は顔をあからめ、もじもじと身もだえしながら

「アッ、アッ、イヤーン。何てことするの。」

秋山さん、といてよ。イヤーン」

「約束だから、とかないよ。いくら女囚でも

全裸では恥かしからうと思って、縄のパンテ

イト、しゃれたんだ」

「バカ、イヤーン」

「だまらなと、サルグツワだな」

そういいざま、秋山は砂登子の口に布を押し込んだ。そして布の上を、やわらかい赤い絹布で、まいた。

「さしも強情なお嬢さんも、これには、まいっただろうな」

素晴らしいながら、秋山は、さも面白そうに笑いだした。

砂登子は前回のあの吊し責めるときより、はるかに恥かしい緊縛の方法があるのに驚きカッとしもよもない恥かしさで頭があげられなかった。

「どうだい、解いてあげようか？ それともそのままがいい？」

秋山が、きいた。砂登子は、うなずいた。こればかりは一刻も早く解いてもらいたいと思った。ところが何と、

「オヤ、そのままがいいの。じゃ、お好きなだけ、そのままで居なさい」

と秋山は、うそぶくのだ。二回目るときと全く同じ手口だった。その手にのるまいと思っても、すぐ乗ってしまう自分の心の弱さ。

畜生！ だれがなんといっても、もう解かしはしないぞと、砂登子は、はらわたが煮えくりかえる思いだった。

秋山という男は、こういう心理をつくのうまい。それが女をくどく手でもあるのだろうか。のせられて腹を立てる自分が愚かしく思われる。だから砂登子は精神的にも肉体的にも、こんな目にあうのだ、とすぐ考えは同じところにおちつき、堂々めぐりをする。

その時、八畳のふすまが音もなくあいて、一人の若い女性が入ってきた。中川春美だった。絹のような光沢の紅のコードュロイで作った、しゃれたオーバースラウスを着、砂地色のごく薄いウール地でできたタイトスカートを、はいていた。十七、八才の高校を出たばかりのような、あどけない、顔の女であった。長身の砂登子と比べると肩ぐらいまでしかないのではないかと思われた。入ってくると、すぐ部屋の中を見回し、鼻にかかった声を出して秋山に甘えた。

「こんにちは、先生。どうして急に呼んだりなんかしたの。あら、随分すごい縛り方ね」
「あれが砂登子さんだよ。膚の白いきれいな人だろう。この恰好が一番好きで、ぜひこうして縛ってくれだってさ。君に来てもらった

イメージギャラリー

『下宿への訪問客』

T · 原



のは、ちょっとした間つきあってもらいたかったのさ、彼女に」

「ふうん、じゃ私も縛られるの？」

「バカ。君を縛ったら、それこそ君のお兄さんからドヤされるぜ。縛られたかったら、彼

氏に縛ってもらえ！」

「あら、春美には、彼氏、まだないワ」

「困った奴だな。まあいい。その砂登子さんも、ごはんが、まだなんだ。食べさせてくれよ。そのところを写真にとりたいんだ。まず

そのままの姿でお膳の前にすわらせ、君がいしそうにたべているポーズ。それから砂登子さんのサルグツワをとり、君がたべさせているポーズだ。いいか、わかったか」

「仕方ないわね、砂登子さんに叱られないかしら」

「大丈夫だよ、あの人は心の優しい、いいお嬢さんだからね」

何ということだろう。秋山は、ちゃんと二人の女性の、操縦法を心得ているのだ。春美が砂登子に近づいてきた。その一步一步の軽い足音が、まるでキリのように耳につきささる。裸体緊縛三回目ともなれば、砂登子も相当、度胸ができていた。しかし、いま目の前に立っている女性は、自分と同じ年頃の良家の女性らしいのだ。服装も、しっかりしている。それだけに恥かしさが先に立った。

「イヤ、イヤ。秋山さん、いや」

と、何だか秋山に甘えつきたいような気になった。思わず、ひざをくずしていた姿勢をたて直し、ちゃんと両ひざをそろえて正座すると、その途端にキーンと縄がひきつり、砂登子はアッとサルグツワの奥で声をたて、尻を、うかした。クスクス笑う人の笑い声が耳につき、思わず泪ぐんだ。

「砂登子さんですね。中川春美ですワ。秋山さんの友達の妹です。きついでしょう。ほんとに、ひどい人たちですからねえ。この人たちは獣よ。そう思えば、少しは気が楽になりますワ」

春美はそういうと砂登子の髪に手をかけ、おくれ毛をかきあげ、ピンのみだれを直してくれた。いきとどいた心づかいである。

サルグツワをされているので、砂登子は仕方なく上体を前にたおして、頭を下げ、おじぎをした。春美は言葉をつづけた。

「なにしろ、兄同志が親友でしょ。私、仕方なく、責め写真に、しょっちゅう引き出されますのよ。お前はアクセサリーだって。友達のお情けをもって縛られはしません、縛られた人は見慣れていますから、ご心配なく。砂登子さん」

春美は、しゃべりながら、どうしてこんな美しい人が、責め写真のモデルになったのだろうかと、ふと不審を感じ、私はおせっかいなのかしらと思った。秋山が、そこに割込んできた。

「さあ、写真だ、食事だ。砂登子さん、となりの六畳に行こう。この縄尻は君がもって」と腰の縄の縄尻を春美に渡した。砂登子が

立つと、その反動で縄がゆれ、それだけで、たえられないほどの屈辱があった。砂登子はすべてをあきらめ、そろそろと歩き出したがついにこらえかねて、春美をひきずるようにして小走りに走り、テーブル前の座ぶとんにすわりこんだ。

胸がどきどきし、肩が激しく上下した。秋山がポーズを指示しはじめた。

「ハイ、お肉」

と微笑を浮かべた春美が砂登子の顔の前にピフテキの小片をつきつけたところで、二、三枚、フラッシュ。それが終わると、春美がサルグツワを、はずしてくれた。

「すみません、中川さん」

「あら。それ、私がいう言葉だわ」

春美は、いぜん明るい態度をくずさず、砂登子に食事をさせてくれた。それを四、五枚とると、本格的な昼食が、はじめた。おいしそうにたべる人々を横にみながら、自分だけポツンと縛られ、はじめて逢った若い同性から食べさせてもらっている——と思うと、胸が切なくなつて涙がポロポロと流れた。

それを人目につかないように春美が自分のハンケチで巧みに、ぬぐってくれた。その素振りをみてみると、手をあわせて、おがみた

いようでもあり、こんな妹がいたらと、春美の兄がうらやましく、感じられた。

春美は皆が食べ終わったあと、ただ一人でそくさと食べ、すつと部屋をぬけ出し、帰って行った。全くあざやかな、ひききわであった。

(六)

午後の撮影が始まった。午前中とちがって砂登子の口にはピッチリと、かなり本式のサルグツワがはめられたが、第二回目の撮影ほどではなかった。

ソロバン責めというのを写真でみせられ、おぞけをふるっていたら、何と膝の下に敷く薪は、ゴム製品で痛くもなんともなかった。石抱きで膝におく石も、はりこの紙製品であった。それでも、ぞくぞくとするものを感じたのだから、実際はどんなにか苦しかったろうと想像された。

きついと聞かされていたエビ責めも思ったほどではなかった。というのは本格的なエビ責めでなく、膝が頭のところにつくよう、体を折り曲げさえすればよいという形のものだけに、そう苦痛は感じなかった。しかし、縛られたまま仰向けにされた姿は、股間縛りよ

り恥かしかつた。よくもこう恥かしい姿態がつぎつぎに考えだされるものだ、全くあきれるくらいだ。

最後の浴場での責めは一種のサービスのようなもので、くたくたに疲れた体を強制的に暖め、強制的に、もみほぐしてくれた。このため、いろんな恥かしめは多かったが、きょうの責め写真撮影は、砂登子には忘れられない楽しい思い出の一つとなつてしまった。

皆に送られ、車で料亭を出たのは午後五時過ぎだ。車には秋山編集長が、のつていた。

「ひる間は、すまなかつたな」

秋山が、むつつりした声で、珍しくあやまつた。

「あなたから、あやまつてもらいたくありませんワ」

「そんなら、いま一度、くりかえしてやってほしいぜ」

秋山が、にやつと笑つた。そのとたん、砂登子の白魚のような左手が、秋山の頬にとんだ。

「うっ！」

不意をつかれて、秋山は思わず顔を押し、それを見て、しまったと心に叫んだのは砂登子だった。

砂登子には毛頭、秋山を打つ気持もなく、腹を立てる筋合いもなかったのである。それなのに——砂登子は、あわてて秋山に、すがりつくと思わず、その顔をのぞきこんだ。

「すみません！ 先生」

「いや、ぼくが悪かつたんだ。ちょっと、ふざけすぎたようだ。実は、いっしょの車に乗つたのは、ちょっと君に話したいことがあつたんだ」

「はあ？」

「別に深い意味じゃない。何か事情のありそうな君に、嫌味をいうつもりでもない。もちろん、縛りをネタに君をいじめようとするんでもない。ちょっと、どうしても聞きたいことがあつたんだ。実は、君が兄さんと呼んでいる人のことなんだが……」

「え？」

砂登子は驚いて、いったい何を言い出すのだらうかと、秋山の顔を、まじまじと見た。

「知っていらっしゃいますの？」

「知るはずがない。あるいは、知っているかもしれない。ぼくは榎並昭二という男のことなら少し知っている。その男は東京にいた。建築屋で有名だっただけでなく、学生時代にすでに名を売っていた。ぼくは、そんなこと

を知らなかつたが、この前、今日、ここに来た中川さんの家、すなわち春美さんの兄の家だ。そこへ行って話しているうちに、偶然、君の名が出た。そのとき、ぼくははじめて榎並昭二というのが君の雇主だということを知つた。偶然といつたが、中川さんは榎並の後輩で大学時代に榎並に空手の手ほどきを受けた。そこで、ぼくは偶然、あのお兄さんと君がいった人間が榎並昭二ではなからうかと思つた。ぼくは榎並という男は直接には知らない。しかし榎並という人間は、妹や、あるいは自分の雇つた事務員を、こんなところに連れてくるような男でないと聞いている。すると、一体、これはどういうことになるのだらう。ぼくの聞いた人相、人柄ともに、君の兄さんといった人と、ぴったりする。とくに控え間から一步も出なかつた態度は見あげたもので、常人では考えられない。ぼくは榎並という男に魅力を感じている。それで、もう少しくわしいことが知りたいのだ」

話しているうちに、自動車はある小料理屋の前にとまった。秋山は中に砂登子を案内して二、三品、注文すると、また話し出した。「たとえば、いま、あの兄が榎並昭二だったとする。すると最初、一度来て二度、三度目

は来ない。これは一体、何を意味するのだろうかと思った。榎並のような男が君についているのなら、二度、三度と来るはずだ。すると榎並に來れない理由があるとしなければならぬが、これも謎だ。それに、いま一つ。最初のときは、たいてい縛られた女は、泣くか叫ぶか、興奮するものだ。そして興奮した女は皆一様に、ひどくいやだと、わめくものだ。わめきながら実際は、そういやではないということだ。ところが君は、やることなすこと皆、逆だ。何とかすきを見つけ、自分の体を傷つけよう、傷つけようとしている。それでいて、君の体は、ぼくらの目からみれば一番きれいだし、また清らかだ。あれこれ考えるうちに、さっぱり、わからなくなったのだ。そして何か、おこりそうな気がしてならない。おそらくその場合、最大の被害者は君だろうが……。いらんことに、おせっかいする気は、さらにない。しかし君が責めてくれるというのを真にうけて、君を虐め、君という人間をたたきつぶすほどの仕打ちは、したくない。といって、このままでいいとは、それもない。君に関する心配があつて、いい写真はとれるものではない。たとえ、くだらない責め写真でも、まじめにとろうと思えば

気になるものは整理しておきたい。むりに聞く気はないが、よかったら話してくれ」

そういうわれても砂登子は、だまっていた。たまりかねて秋山が、きいた。

「あの男は、やっぱり榎並君か？」

砂登子は、だまって、うなずいた。

「じゃ、あの男には奥さんがいるのか？」

砂登子は首をふった。

「じゃ、君の恋人か？」

砂登子は、答えなかった。答えられなかったのだ。そんな砂登子の顔を秋山は、じっとにらみつけながら、語をついだ。

「恐らく、ぼくの想像するところ、あの榎並という男は、君にとんでもない大きな愛情をもっているか、あるいは別の野心をもっているはずだ。君は奥さんがないというのに、中川は結婚したといった。するとその奥さんはなくなつたということになる。しかも、なくなつて間がないということになる。するとあの男なら、どう考えても君に対する愛情がな

い限り、こんなところに来て君の介添になるはずはない。あるいは、そうする以外に君の人生が救えないと考えたか、何かさういうところだろう。君の雇主でもあり、悲しみの絶頂の時でもあり——そういうことを考えあわ

せると、ほぼ榎並という人間の性格も、つかめてくる。すると問題は君だ。ぼくの見目では、君はいま自暴自棄としか見えない。僕が君の肉親なら、恐らく、本当に今日や、この前の責めのように君を自分の膝下に縛りつけておきたくなる。そのくらいだ。君の背後に、何がかくされているか知らないが、このまま手放していたら、将来、君がどんな不幸な人間になるか、想像しただけでも恐ろしい気がする。こんな責め写真を取り、責めの雑誌を出している僕が、なにも忠告する柄ではないし、また、この三日間、存分にいじめさしてもらつたお礼といえ、さらに、おかしなものだが、注意してみなくなった。とにかく少し、話をしてくれないか。君も気分が軽くなるだろう」

いうだけいうと、秋山はタバコをくゆらせて、目を砂登子からそらし、窓を見た。と、突然、砂登子が食膳の上に突伏し、嗚咽しはじめた。

秋山は深いまなざしで砂登子を見詰めた。泣くだけ泣くと砂登子は、ぼつぼつ話しはじめた。自分が榎並のところにつとめた、いきさつから、大平との恋愛、その関係、榎並の家庭の状況などを、くわしく話した。

僕のイメージ画集

『王妃の豪華な悦楽』

室井亜砂路



秋山は、それだけ聞くと、
「で、君は榎並君と大平君と、どちらが好き
なんだね」

と聞いた。砂登子は答えられなかった。秋

山は、じっくりと考えたあとで、結論を下す
ような口ぶりであった。

「もうこの話は、これでよそう。結論を下す
には、まだ少し早いようだ。しかし、ぼくに

は、よくわかるのだ。君は、もっと榎並とい
う人物と大平という人物を比較し、結論を出
す必要があると思うね。それからもう一つ。
これは、ぼくの君へのお願いだが、もっと体
を大切にしまえ。虐めた張本人がいうのだ
から、おかしい話だが、間違いないと思う。
責め写真以上のものを他人にやっては、いけ
ないよ。いいね。これから君の写真が雑誌に
出る。たとえば仮名であっても見る人は君と、
わかる。君だと知ったら、世間の人が今まで
のような純真な娘さんとして通してくれるだ
ろうか。やはりアプレと見るだろう。無軌道
な、ならずもの。そうみるのが日本の習慣に
あった見方だ。だとすれば、逆にいえば危険
な誘惑も多い。今は君も商売だと思いい、私も
そう思っている。われわれは、それでいいか
もしれない。しかし他人は、そう思わないか
もしれない。君は誰にでも裸をさらし、手を
縛られて、なぶりものにされているとしか理
解されない。そういう世間の荒い波風が押寄
せてきたとき、耐えうるかどうかは、皆、君
の心掛け一つだ。いまのように自暴自棄にな
らず、足をしっかり大地につけていくことが
大切だ。今の君は責め写真を商売としてとら
えているんでなく、体を切り売りしているよ

うな、やり方だ。さいわい、まだ十分、君は立ち直れる。それには、もっと自分の肉体を愛し、無心を愛し、おおらかな気持でモデルをつづけることだね」

「ハイ、ほんとに有難うございました。すみません」

「いいんだ。叱っているんじゃないんだ。それから縛られるのは罪悪じゃないんだよ」

「ええ、わかりました。これから、もっと素直な気持でお仕事に協力いたします」

「ありがとう。君がわかってくれさえすればうれしいんだ」

二人は夕食をたべて別れた。

その夜、砂登子は、ねむれなかった。本当に秋山のいうように、榎並昭二が自分を愛してしてくれるのだろうか。榎並が好意を持ってくれているのは知っている。しかし、榎並の行為が果たして愛情があるかどうかは断言しかねた。榎並は、やはり、亡妻しか愛していないのではないか。榎並の愛は隣人の愛で恋人の愛ではないのではないかと――。

(七)

早いもので、それから三カ月、経った。砂登子のところに秋山から、本や写真が送られ

てきて、かなりたまった。その写真や本をみると、縛られている自分の変化がわかった。最初のは、ひどくギスギスしたものが多かったが、縛られる回がかさなるごとに柔らかな味が出てきている。

大平は、ついに訪ねてくれなかった。手紙を三度も出したが返事は、こなかった。しかし、そう気にもならなくなってきた。なぜなら、体を大平にくれたあとほど距離ができたということ、彼女には耐えがたいことであり、そのことが大平への憎悪と、かわってきつつあったのである。建築設計所に出ても比較的、明るい気持になってこられた。

昭二は、あれからついに二度と介添に行かなかった。そのことが非常に心の負担になっていた。砂登子は何も語らなかったが、事情は好転しているのではないかと思われた。しかも、借用した金は月々返済してきているので、昭二はこれを、こっそり砂登子の名で貯金しておいてやった。

あれだけ必死になって緊縛モデルになった甲斐があったと思っていた。ふとしたことから友人の中川に会い、いい娘さんだと秋山がいつていたと聞かされ、思わない関係が近くにあったことを再発見し、これでいいのかも

しれないと思った。砂登子さえ、丸くもとの大平武夫のところに戻り、長く関係が続けられて、いよいよ結婚に、のぞみができれば、いいと思っていた。砂登子の明るさが、どこにあったか――それは昭二の理解のいかに世界のできごとであった。それだけ一途に砂登子の幸せだけを願う気持が強くなった。

ところが関係は、そんなにうまく、いかなかった。大きな嵐が突然、砂登子の上に襲いかかってきた。

大平武夫が突然、嵐を伴って砂登子を訪問したのだった。

夏も終わりに近い水曜日だった。夜の十時ごろ、もう寝ようと思った砂登子は、外で洗面をしていた。

砂登子の下宿は、ある薬問屋の薬品倉庫を改造して貸し間としたものだった。したがって、居間の三方はコンクリートの壁で、その一つに窓がついていた。窓は少なく小さな高い天窓が二つあるのだが、鉄格子が、はまっていた。残りの一方は杉の厚い大戸で、住み家らしくするのに一苦労していた。だから杉の大戸をしめきると格好の責め場にもなり、女の城ともなった。中の広さは建具をのぞいて、六畳ほどあり、廊下がついていて、押し

入れの前にフスマがあった。このため、便所炊事場は建物の外にゲイを降ろして造築してあった。

洗面を終えた砂登子が帰ってみると意外にも大平が酒に酔ってきていた。大平は目を真っ赤に充血させて坐っていた。

砂登子は大平と関係ができてから、時たま大平を、この家のそばに連れてくることはあっても、家には一度も入れなかった。これは世間の目に対する用心と、彼女の潔癖さによるものだった。その代り、ほとんど砂登子は外でデートしていた。

「まあ！」

と砂登子は、それでも、いそいそとあがっていった。潔癖な砂登子の口から「出て行って！」という言葉が出かったが、やめた。

胸には懐かしさが、いっぱい、こみあげていた。思わず、その傍にかけようとした。その足を大平が鋭く払った。このため砂登子は手にもっていた洗面道具をとばし、もんどりうって、ぶったおれ、頭を洋服ダンスに、したたか、打ちつけた。

「何するのよおー」

と叫んだが、その上から大平は無言で、とびかかるようにして乗り、砂登子の頭を畳に

押しつけて四、五回、頬をなぐった。

それから血走っている目をすえて砂登子にらみつけた。砂登子はカッとなり、肩であいでいた。二人は数分間、にらみあった。

大平が、まず目を伏せ、カバンから一冊の雑誌を取り出すと、狂暴に砂登子に、たたきつけた。その雑誌には「悦虐の賦」と題して砂登子の写真が、のっていた。一番、最初に長襦袢姿で写されたものである。

本はとんで、砂登子のミケンに当たった。

「いんばい、気狂い、ヘンタイ」

と大平が叫んだ。

それを聞くと砂登子は、うなり声をあげ、泣きながら、大平に、むしゃぶりついていった。この男のために苦労したんだ。この男のために、こんな姿になったんだ。そうわめきながら、めっちゃめっちゃに暴れた。しかし、ものの五分とたたため間に、砂登子は反対に大平から殴り倒されてしまった。畳に突伏して泣きたいだけ泣くと砂登子は、ささえのように口をつぐんでしまった。大平が何をきいてもしゃべらなかった。

大平は、そんな砂登子をみているうちに、むらむらと残忍な欲望と、薄ら笑いが口についてきた。

「畜生！」

そういうと、手頃な得物を搜した。

洗濯物を干す細引が二巻き、みつかった。それをとると、いきなり砂登子にとびかかり砂登子を床の上に押倒した。砂登子は全然、無抵抗だった。大平武夫は一本の細引で砂登子を縛りあげると、別の細引をムチにして、気がすむまで砂登子を叩きのめし、そのあげく、声をあげて泣いた。そして、そのまま、ふらりと外に出ていった。

長いこと、砂登子は床にのびて、うめいていた。しかし、なぜに話し合う機会が持てなかったのか。それが残念だった。恐らく話しても信用は、してくれないという気が先に立っていたからであろう。

一人になると砂登子は泣く気には、なれなかった。ただこれでよいのだと思い、自分で縄をとく意志も失せて、そのまま気を失うような細々とした意識の下で、縄目がひとりではずれるのを辛抱強く待った。それでも夜半から、もがきはじめ、翌朝になって砂登子は、やっと縄を抜けた。

家の戸じまりをみると、だれにもあうのがいやで、どうしたら自分の気持が処理できるだろうかと思い、床の中で、まんじりともせ

ずに暮した。あの様子なら、武夫は今日中に必ず今一度、来るにちがいないと考えたが、その考えは、むなしかった。

金曜日にも武夫は、こなかった。

たまりかねて土曜日の夜、大平の下宿を訪ねた。午後八時半ごろだった。通いなれた草のはえた間道を、大平の下宿まで足音を、しのばせて歩いて行った。足音を、しのばせて歩くことは、砂登子の癖の一つだった。風に体を、もてあそばれるように、この道を武夫と肩をくみ家路に向かったときの幸福な二人の姿が、幻のように浮いて消えた。あのカラタチの生垣のところで、よく別れの接吻をしたなと思うと、熱い感情が、たぎり立つようであった。

しかし、今日の砂登子の足は、そこでギクリと止まった。一見して大平武夫とわかるシルエットが、誰か別の人と、見知らぬ女と、いっしょになっているのである。みるみる砂登子の眸から、血の気がひき、頭がくらくらとして立っていることも、どうすることもできなくなってしまうた。

死にたいと直感的に砂登子は思った。しかし死ねなかった。死ねなかったのは責め苦を思い出したからである。責め苦を味わうこと

によって、知らぬ間に砂登子は人生に執着をもつて向かっていったようであった。砂登子は夜道を、あてもなく、ふらつき歩いた。その足は、いつしか、昭二の家の方に向かっていった。

砂登子は、さすがに昭二の家に入ることはためらわれた。そのまま、きびすを返すと家に帰り、まんじりともせず、その夜を明かした。武夫が自分以外に女をつくったのも、自分の愛が不足していたのではなからうか。それなら仕方がないと、あきらめ、考えつめ考えつめた結論は結局、武夫を忘れられないという一事だった。

(八)

武夫が再び砂登子の家に来たのは、日曜日の夜だった。

砂登子は、ぼんやりして責め写真をみていた。武夫が来たとき、別に誰も、うらむ気は、おこらなかつた。武夫は何か考え込んでいた。砂登子は一目で武夫の思っていることを体感した。

「そんなに責め写真が、いいのか？」
入ってくるなり、武夫は薄笑いを浮かべて写真を、とりあげた。

「あら。それ、どういう意味？」

「別に、どうということもないが、実は——」
武夫が何か言いたそうにしたとき、砂登子は手を上げて制した。

「いわないで、何も。——お別れにきたんでしょ。私は、あなたの、いい人を見ました」
「何！ 知っていたのか！ 知っていてお前は、お前は、このことをオレのせいにするのか？」

武夫の顔に、青筋が、みるみる走った。
「お前は、お前がオレを追い込んだのを知らないのか？」

——それはおかしいと砂登子は思った。武夫が写真の件を知ったのは、ごく最近である。すると口実だと砂登子は判断した。だが、だまされるかと思つたが、さからえば捨てられるという弱味があつた。心とは別に口ではうそをついていた。

「そんな、そんなこと……。信じて下さい。私はまだ、あなたのものです。あなただけのものです。ねえ、信じて下さい。そればかりは嘘ではありません。武夫さん信じて」と涙ながらに訴えた。このことに嘘はなかったのだ。それがよけい武夫を追いつめる。
「だ、だ、だが、この写真を信ずるといえ

るんだ。何を証拠に、どうして信ぜよというのだ。このウソつきめ。お前は初めからオレをだましていたんだ。オレは、だまされた。オレは信ぜぬ。断然、信ぜぬ」

武夫はカッとして、また打ってかかった。砂登子は、その手に、とりすがった。するとその途端、砂登子のヒザから五、六枚の写真が、こぼれおちた。

「この写真だ、この写真だ。オレも、このとおり、お前をたたきつけてやる。お前は人間の皮を着た、けものだ。これでも信ぜよというのか。オイ、砂登子、調べてやる。裸になれ！」

武夫は、いいつのった。

砂登子は、いわれるままに、すなおに裸になった。それが武夫の坎に、さわった。裸になるのを待ちかねて、武夫は砂登子の腕を背後に曲げて細引で縛りあげた。その縄を首に回して締めつけると、縄尻を窓枠に括りつけた。砂登子の髪をとり、顔をみすえた。

「この目でオレを、だましたんだ」

「この口でオレに、うそをついたんだ」

「この体で人を誘惑したんだ」

と目を、こづき、口をひねり、肩をうち、乳房をたたいた。この前の水曜日の武夫のム

チ打ちで砂登子の膚には紫色のアザが各所に残っていた。

それをみつけると急に、いきりたち、

「ほらみる、このアザ。このアザは、だれにつけさせたんだ」

と再び別の細引で乱打した。よっぱらっていても意識していいことはなからう。それなのに——砂登子は、もう何をいってもダメだと観念していた。これだけ踏みつけられると、もう別れられるだろう。もうあきらめられるだろうという気持が心の底にあった。武夫は武夫で、抵抗してもらいたかった。抵抗すれば、何かの口実をつかんで別れられると思った。抵抗すればするほど、普通なら潔癖と判断されるところだが、そう判断できないところに狂った関係があった。武夫の方に、うしろぐらいところがあるだけに、そのことを相手が知っているだけに、うす気味が悪かった。

「オレは、お前を打ってるんじゃない。オレは、お前に一番、好きな饅頭を送りに来たんだ。お前は変態だろ。みる、喜んでるじゃないか。最後の饗宴だ。目には目をだ。お前みたいな奴は、これで、ちょうどいい」

武夫は、狂気のようになって、嗜虐三昧に

とけ込んでいった。

(九)

昭二の建築設計所から見る青空に、白い雲が浮かんでいた。その下に一本のクスノキがあり、小鳥が二羽、三羽むれて遊んでいた。こういう光景が、昭二の一番、好きな風景だった。

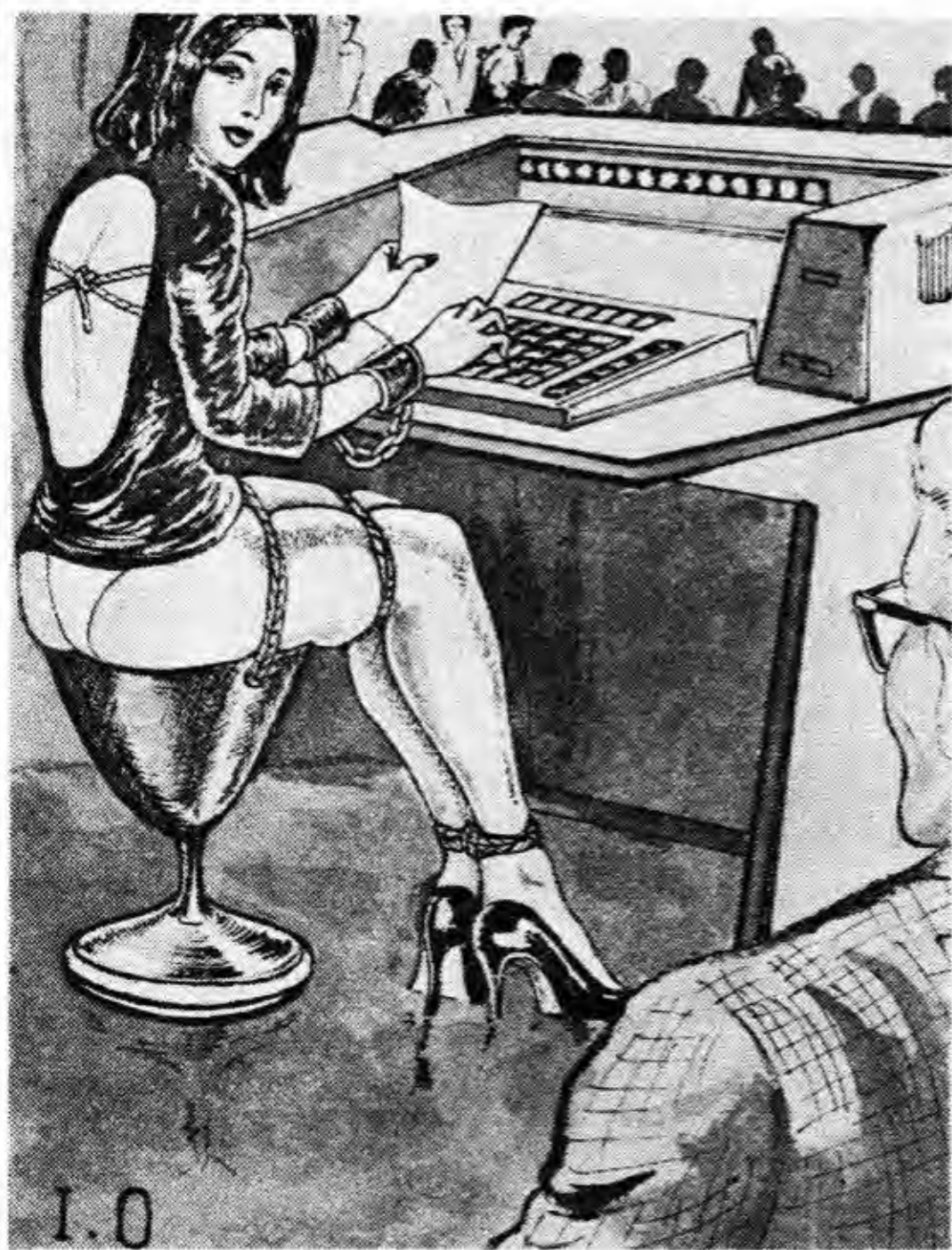
砂登子は今日も無断欠勤している。一体どうしたのだろうかと思った。

最初、休んだのは前週の木曜だった。平日に休んだことのない人なので、おかしいと思った。金曜日に無事に出てきたが、どこことなく姿に、かげりがあった。しかし、それにしても病気とは思えなかった。表情は、あくまでも、にこやかであり、動作は、きびきびしていた。ひょっとすると、その裏に大きな悩みを押しかくしていたのではなからうかと思った。

それが今週になって月、火、と続いて休んだ。そんなはずはないと彼は思った。火曜日の午後になると昭二は、たまりかねて砂登子の家を、たずねていった。行ってみると、玄関の戸にカギがかかっていた。

砂登子の家は、窓が高くて中が覗けない。

イメージギャラリー 『執務中』 三鷹 I・O



仕方なく台所と便所を調べてみたが、使ったらしい跡はなかった。しかし水杓子が炊事場の真ん中にころがり、あのまじめな砂登子にしては珍しいことだと思った。留守らしいことは明白である。帰ろうかと思ったが、昭二は、いないという気が、しなかった。

昭二は玄関の戸口に近づくと耳を戸につけて中の物音に耳をすました。何もなかった。右手で、こぶしを握り、コツコツと、たたいてみた。応答は、なかった。しかし、諦めきれず、それをくり返しているうちに、ム、ム、ムという、うめき声を耳にした。

はっと思った。あいつだ、という考えが、頭にピンときた。

コブシをかため、ヤーッと気合いを入れると、一撃で戸口の板は割れ、そのはずみで錠が、けしとんだ。戸をこじあけるようにとびこみ、居間にふみこんで、あっと驚いた。

一面、異臭がたちこめる落花狼藉の中で、砂登子が獣のような姿で、あえいでいた。頭を、いろんな衣類で、めっちゃめっちゃにまかれ素裸で窓枠から縄で繋がれ、後手に縛られた砂登子が、畳に突伏していた。洗面器が二つころがり、一つに牛乳の飲みかけ、一つには汚物が、たまっていた。

昭二は思わず靴のまま、砂登子の傍にかけよった。体に手をかけ、調べてみると、余りのむごたらしさに思わず身ぶるいが出た。体のいたるところに打身の紫斑があり、ムチ跡があった。頭は小筆にハンケチをまいたものを口に押し込み、その上からスリッパで顔中をつつみ、そのまま顔中に麻縄を、まきつけて縛り、さらに、その上から幾重にも、いろんな布や、ひもがまかれており、外界との呼吸は、ただ一つ、口に押し込まれた小筆に、たよるほかはないという、ひどさだ。

砂登子は、こんな姿で、さぐりさぐり牛乳

をのみ、汚物をたれ流して生きのびたものらしかった。あとで聞いた話によると、砂登子は日曜の夜から、このままの姿にされ、月曜の夜にも武夫が来て、いじめて行ったということだ。顔を縛ったのは、顔を見ること声をきくことが、こわかったのではなからうか。

とにかく、昭二は事態をのみこむと、行動は迅速だった。小刀をとり出すと、まず頭の細引を切り、布類をとり去った。ついで手のナワを切った。水を汲んできて、のませ、体をふいてやり、打ち身には、とりあえずメンソレをぬった。

布類がとり払われると、むくんだような悴憊しきった砂登子の顔が現われた。昭二は砂登子が長く、くらやみの中に置かれていたのではないかと思ひ、うすいガーゼを捜して、直射光線が入らぬように目を、おおった。砂登子は、苦しうに口びるをかみしめ、胸を波うたせて、あえいでいた。目からポロポロ涙が洩れ、忽ちガーゼを、したしたにした。一言も口をきかず、口を開けば、どっと号泣になりそうな気配であった。

頭の布をとられたとき、細々とした声で「昭二さん、来てくれたのね、やっと救けに昭二さん！」

と、息もたえだえに、いったただけだった。昭二は洋服ダンスを開き、下着類をとり出してやり、一々手にとって着せてやった。

砂登子は、昭二の手が肩にかかれば、うめき、背にふれれば、もだえた。昭二は余りのことに、はらわたが煮えかえるようだった。

「大平だな」

昭二の声に砂登子は弱々しくうなずいた。

「とりあえず、ここを出よう。この家の跡始末は谷村君に、たのむ。荷物は、どこだ」

「洋ダンスと押し入れの右すみに、トランクが二個、あります」

昭二は、さっそく身の回り品をとり集め、押し入れからトランクを出して、つめると、大通りにとび出しハイヤーをやってきた。砂登子を抱きかかえてハイヤーにのると

「外科の畑病院」

と、友人の医師の名をいった。

(十)

翌日、榎並昭二は、ある温泉町の旅館に砂登子を運んで、あずけると、すぐにひきかえして大平武夫に逢いに行った。東西大学を訪れ、授業の間の休みに呼び出した。大平は学生服をポケットに突っ込んで、軟派な服装で

腰をふるようにして出てきたが、昭二を見ると一瞬、表情が、こわばった。顔をみにくくゆがめ、目が恐怖に、おののいた。

昭二は大平を知らなかったが、大平は昭二を知っていた。砂登子から、いろいろ聞かされていたし、東京の大学時代、空手部の主将をしたことは、あまりにも有名だった。その上、悪いことに、昭二は大平の中学校の先輩に当たるのだ。したがって、この出合いは、たたかわずして勝負があった。

「大平君だな、胸に覚えがあるだろ。話をつけようじゃないか。ついてこい」

そういうと昭二は、ゆっくりと廊下を歩き校門を出て付近の松原に向って歩きだした。はじめ昭二は料亭か何かに連れて行って穩かに話をつけるつもりであった。あれほど、ひどい仕打ができるのだから、それだけ愛情が深いのではと考えてみた。しかし大平を一目みて、そんな甘い考えは、ふっとんだ。こんな手合いには、こんな話し方が一番いいとみてとった。

「砂登子のことだ。手をひくか、それともオレと斗うか」

低いドスのある声で昭二は、いった。大平はふるえるだけであった。そして、やたらと

ペコペコした。

「すみません、先輩。先輩のいいように、お願いします」

その言葉を聞くとバカヤローと大喝一声、ぶち倒したくなった。しかし相手は学生だ。

榎並昭二は、やっと、その衝動に耐えた。砂登子が、大平に別の女がいるということを昭二に告げていなかったのが、大平にとって幸であった。それを知っていたら、熱血漢の昭二は、とてもじっとしていられたかっただろう。

「じゃ、これから砂登子はオレのものだ。手を出すな」

という、念を押すように畑医師の診断書を出してみせた。

昭二は大平にあうが、あうまで大平を、いい男と信じるつもりであった。したがって本当に大平が、いい男であったなら、砂登子が大平に、めあわせてもいいと思っていた。あれほど残酷に女をいじめることは、めったにできるものではない。だから愛情があったんだと大平は見えていたのだ。

しかし、その考えは、大平にあって、みじめに打ち破られた。昭二は自分のお人好し加減が、悔まれてならなかった。一体この、や

るせない気持ちを、だれにうつたえたらよいのだろうか。昭二はその夜、町の盛り場を、うろつきながら、しきりに亡妻の名を、よんでいた。

○

二週間、たった。

砂登子のいる山峡の温泉宿では白い湯気がゆっくりと立ちのぼっていた。砂登子はここに連れてこられてから、だれにも逢っていない。昭二も二度ほど顔をみせたが、何もいかなかった。自分で、ゆっくり考えるんだ。なるようにしか、ならないよ。と一言だけ、いった。そして砂登子に対し何の質問も、しなかった。砂登子は、そこに昭二の愛情を、ひしひしと感じないわけにはいかなかった。

ここは昭二の生れた土地で、この旅館も昭二が設計した建物だそうだった。時折、老夫婦が顔を出して、たわいもない話をしていった。昭二の父が道楽で失敗した話や、昭二が子供時代、腕白すぎて手におえなかったことなどを老夫婦から聞いた。昭二が設計したというだけで、何か身につきまとう膚着のような親しさを感じるのは、やはり昭二のことが気にかかるせいではなからうかと思った。体の痛みは消えていた。青血も、のいてきた。

離れの一室で、浴衣を着、髪を無造作に束ねながら、豊かなコケの香りを愛していると生きていることが、不思議なくらい楽しかった。

昭二に対し、こんなにも、お世話になるのなら、なぜもっと最初から卒直に、所長の愛にこたえられなかったのだろうかと思う。昭二を好きであることは、武夫と逢う前からのことで、自分には、とくにわかっていたはずのものである。それが卒直になれなかったのは、やはり昭二との関係が主人と従業員であることや、昭二と奥さんの、あまりにも仲むつまじい生活を知っていたからであろう。すると自分は奥さんに嫉妬していたのではなからうか。今その覆いがとれ、恬然と覚ったような気がする。

砂登子の責められる姿は見たくないと心を抑えた昭二と、自分の恥は棚に上げて、お前は人間の皮をかぶった畜生だと、人をまるで抗弁のできない姿にし、目の前に責め写真を一枚一枚、ならべ、責め続けた武夫とは、人間的にも愛情の面からみても、あまりにへだたりが多すぎた。砂登子は、はじめて人間というものに目を開かれた気がした。そう思うだけで、心はずんで仕方がないのだ。

武夫のムチで傷ついた体を優しく洗い、心身に痛手を受けた女を、暖い素振りと慰めの言葉で、思いやり深く、いたわってくれた。

そんな昭二の愛に、自分は一体、何を捧げて応えたら、いいのであろうか。自ら、あやまり、自らを、けがした砂登子には、昭二の愛に、こたえられる何物も残されていないことに思い至っていた。だから、このまま昭二の愛を求めるのは、人間として、いえることではないと知っていた。しかし、そういう素晴らしい人間が主人であったと思うだけで、いまの砂登子には救いがあった。自分には、あの人の奥さんになる資格はない。ただあるのは一生を捧げた奉仕があるだけだと、砂登子はその心に期すものがあつた。

今は、なるようにしかならない。今は、その流れに、まかすよりほかはない、とは、傷ついた体で体得した砂登子の人生哲学であつた。そう思うと武夫から受けた死に勝る苦しみも決してムダではなかったのだと思つた。

ふと気がつくとき砂登子は、思わず秋山の送ってくれた雑誌を手にとっていた。あの大騒動のさい、とりまとめた膚着にまじってボストンバッグの中にまぎれこんだものらしかった。砂登子は、それをペラペラと二、三枚め

くつてみた。すると、グラビアに「悶える白魚」と題し、浴室での砂登子の全裸緊縛写真が、のっていた。顔もはっきり写っていた。

あの日は確かモデルになって三回目だった。

「今日は顔も撮りますが、いいですか」といわれ、砂登子は「どうぞ、ご自由に」と言葉少ない返答をした。それがきっかけとなって午前十時から午後五時まで、縛られ放しで十分、縛られる気分を堪能させられた。食事にも便所も縛られ放しだった。股間縛りという、口にいけない恥かしい姿にも、された。自暴自棄だったとはいえ、よくも、あんなことをさせたものだと思う。浴場で仲居のお清さんから面白半分乳房を、もてあそばれたが、そんな目にあいながら、大平武夫のときのような、いたたまらない、苦しさはなかった。

「君も縛られるのが好きになったようだね」と秋山にいわれ「あら、そうかしら」と、とぼけて答えたが、そのとき、ふと私という女は、そんな風な女かなあと思つた。

「君みたいな女を縛っていると、犯したくて仕方がない」と奥さんの前でヌケヌケと冗談をいったのは小田野カメラマンだが、そのカメラマン氏が奥さんの一睨みで小さくなる

ところは、一幅の人生喜劇だった。善意が、あふれ出ていて、気持がよかった。

自分は、あんな恥かしい姿を売りものにはしたが、そこに何か暖かいものが流れていると信じたかった。ところが、大平の行為の中には、そんなものは全然なかった。それでいて自分は大平を今、憎む気を持っていない。——全く私という人間は底抜けの善人にできていると砂登子は、そう思った。その時、砂登子は自分の背後に迫る、ひそかな足音を聞いた。

もしやと見ると、昭二だった。

「あらッ、いらっしゃい。いつ、お着きになったの」

「いまさ。もう体は、大丈夫かい」

「ええ、すっかり、よくなりました」

「そうかい。おや——大変な写真、みているじゃないか。あんな苦しい目にあっても、まだ、こりないのかい。縛られるのって、そんなに好きか」

「三つ子の魂百までといえますわ。どうせ女は男の愛情で一生、縛られるものですから」
「なるほど、じゃ縛ってやろうか！ オレだって縛れる。おい、縄を出せ！」

そういわれても温泉町の一室には縄はなか

った。どうするのかなと昭二がみていると、砂登子はユカタの紐を解いて、昭二の手に渡そうとした。砂登子の胸がはだけて、白い乳房が見えた。それを見ると昭二は思わず手をおぼし、浴衣を荒々しく剥いだ。両腕を掴んで、思い切ってねじ曲げて縛り合わせると、「オレが好きか」

と、きいた。砂登子はギクリとした。次に来る言葉を本能的に、さとしたのだ。

「好きですワ」

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	貳万円
佳作	一篇につき	壹万円
可作	一篇につき	五千元

☆規 定☆

- 一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。
- 一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。
- 一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

「じゃ、結婚しよう」

「それは、いけませんワ。そんなこと、私はできません。私は体が汚れ、結婚の資格がありませんもの」

平静にいつているつもりだが、声がひきつった。それは仕方がないことなのだ。

「バカなことをいうな！」

昭二は声を荒げて叱ったものの、砂登子の目は澄み切り、必死なものが現われていた。

「じゃ結婚は、やめた。だが、オレの求婚を

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思えます。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

断わった罰として、一生オレのドレイとして酷使する。どうだ異存はないか」

「ハ、ハイ。それなら喜んでおうけします」と砂登子は、うれしそうに目を輝かした。

「じゃ、いまから契約書を、わたす。よく見て、あとでこれに署名捺印しろ」

昭二は、ポケットから婚姻届をとり出し、砂登子の目の前に、つきつけた。ちゃんと昭二の名前が書いてあり、あと配偶者の砂登子が書き込めばよいだけに完備されていた。砂登子は目を疑った。しかし、まぎれもないものであることがわかったと、みるみるうちに、その目に大つぶの涙が、あふれてきた。砂登子の胸の中に「あの男は、よほど君に大きな愛情を抱いていたのではないか」といった秋山の言葉が鮮かに思い出された。

昭二は砂登子の横に坐って、その体を、やさしくヒザに抱きかかえた。そして両手で砂登子の頬を、かるくはさむと、ひたいに、そっと口づけしたあとで、手の平を返し、両の乳房を押え、かるくもみながら、かぶさるようにして口を吸った。

砂登子の胸に新しい火がともし、感情の渦が、ごうごうと音をたてて渦巻きはじめた。



——想いつのりて——体験告白——

Mの妖美△深田菊子嬢▽再会 乃美対造

九月号に、『SMアバンチュールの一夜』という拙い短文を掲載してもらい、その謝礼を呈したいという編集部よりの連絡を受けたので、秋の一日、大阪へ出向いた。

その席上、部員の方から「深田菊子さんが貴方のことを、どうしておられるのかと、聞いていましたよ。どちらも、距離も遠くないことだし、何なら連絡しておきましようか」という親切な話であった。

そう言えば、私が71年10月号の奇クサロンに、深田菊子嬢の緊縛記事「想いを遂げて」を書いたように、美しくも、たおやかな彼女の裸身を縛る機会を持ったのであった。

写真も自分ながら、興奮で指がわななき、情ないほど、手ぶれを起しているのを知りつつ、それでも幾枚かのシャッターを切っていた。出来上ってみると、いずれも臀部と菊花

にばかり狙いをつけたアップばかりで、何のことはない、真白いお月様を見ているようでとても他人に見せられるようなものではなかった。

文章にしたって便箋にやっと三枚ばかりをエンピツの先を嘗め嘗め書き上げたのが関の山で、まことに、お恥かしい次第であった。

折角、宝の山を前にしながら、カメラもペンも駄目ということになると、編集部厚意に対して、申し訳ないの一語につきるのだ。とは言っても、私としては、憧れの美女、深田菊子嬢の裸身を、この目で、じかに眺めることが出来たばかりか、この手で縛り上げることが出来たのだ。

そればかりか、多年夢にまで描き、念願していた、うら若き美女のアヌスを、心ゆくまで観察し、そして責めを加えることが出来たのだから、こんな幸せなことにはなかった。

あのととき、自分が撮影した写真を、宝物のように保存し、時折り取り出しては一人で眺めては、悦に入っていた私。でも、こんな責めの手先な私のことなんかは、もう、とっくの昔に、彼女は忘れてしまっていると思っていた。自分の好みである、お尻とアヌにばかり熱中している偏執ぶり。その上、甘い

香りの尿の匂いに憧れる異矯さに、きっと、愛想づかしをしていたと思っていたのだ。

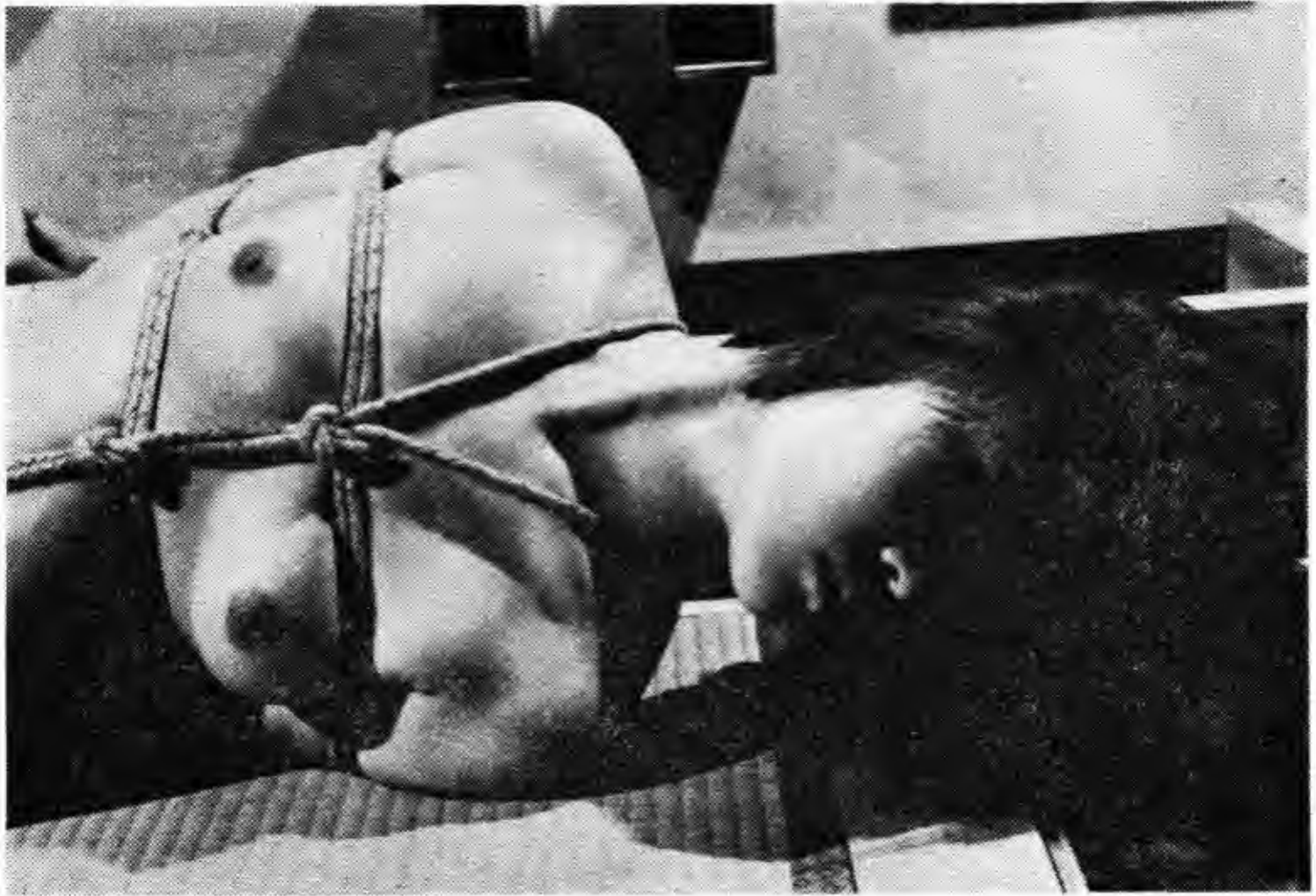
それが、よくもまあ、忘れずにいてくれたものだ、感謝感激、雨あられ、早速、御厚意に甘えて連絡をとってもらうことにした。

秋の爽やかな空気のなかで、再会したのは私と彼女の住む丁度、中間の街、といっても

距離にしたら、そう遠くはない。

あくまでも私は乃美対造（飲みたいぞ）であり、彼女は深田菊子（この名前は、彼女が読者通信を寄せた時に、つけてきたそうだが私は菊子という名を非常に気に入っている）である。私は奇ク誌上に顔を見せた深田菊子という女性に、ぞっこん参っているのだ。





あとで彼女に聞いたところによると、深田という名前は彼女の住んでいるアパートの名に、関連しているそうだ。

△菊▽は勿論、大好きな雑誌△奇ク▽にも通じるし、それに、もう一つ、アヌスならぬ「菊花」の菊でも、あるわけだ。この方は私も大好きだ。

初対面ではない二人。だが黒の清楚なスーツの深田菊子の白い顔を見たとき、私は柄にもなく、一寸、たじろいだ。気持になった。彼女もまた、耳たぶを、ぽっと紅くしたのは、必ずしも寒さのためばかりではなからう。

甘い声に、甘いムード。同じ趣味を持つ者のみの有する近親感が、二人の間に、ほのぼのとして芽生えてくる。ともすれば、ありきたりの世間一般の話題から、SMの方面へとは行きたがらない自分にもどかしく思いつつも、つ

とめてカメラルポ的に、持っていこうと心がけた。

やがて、二人きりの部屋に落ちついてからもぎたての水蜜桃のような臀部の双丘を、さっと左右に割り開いて、かすかに、淡灰褐色に色づいた秘奥の中心の鎮座まします深田菊子嬢の花卉と菊花に目をやった時、思わず目が、くらくらとしてしまった。

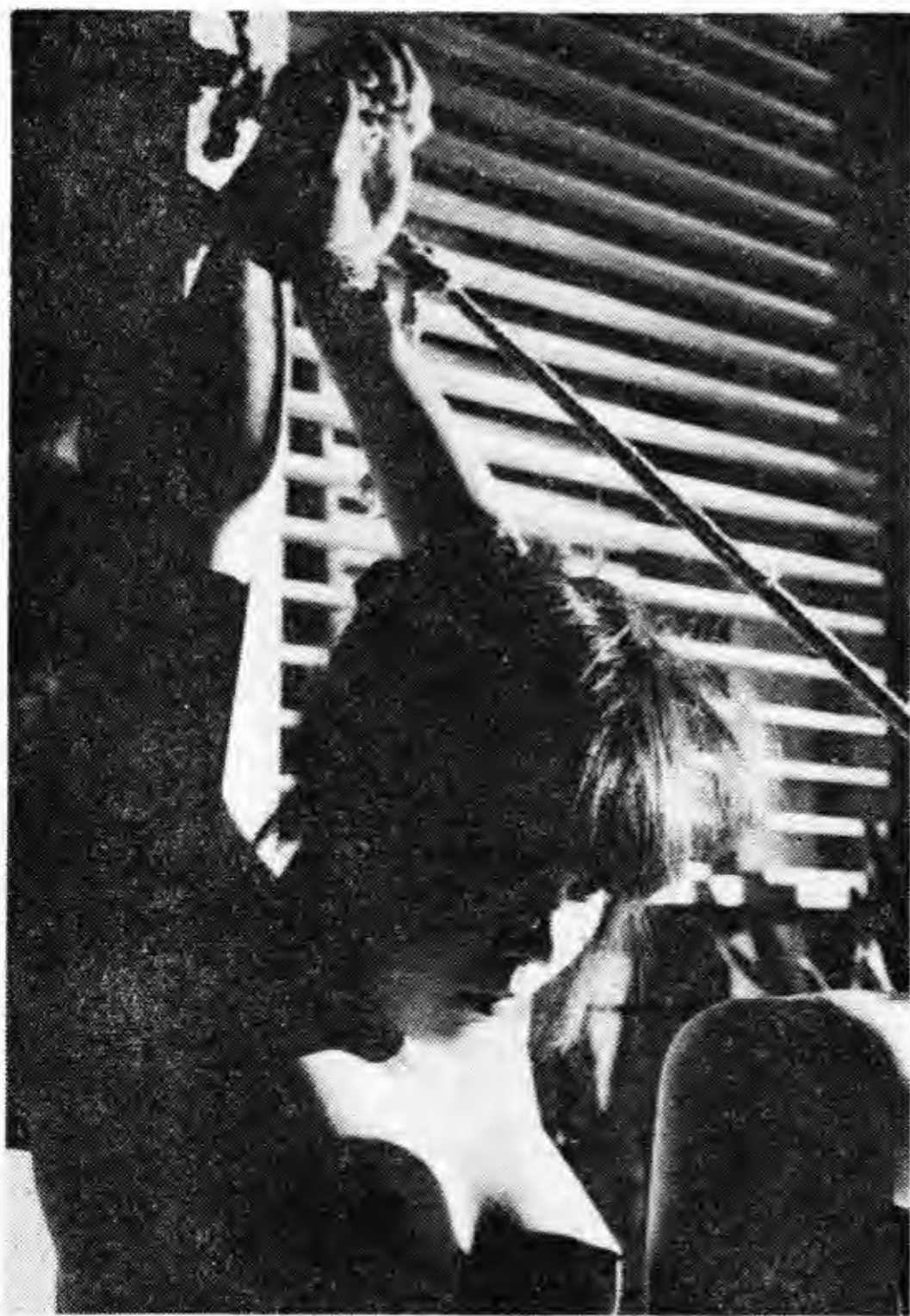
そればかりか、口はからからに乾き、唇はわなわなとふるえ、これでは、とてもカメラルポなんか書けるものじゃないと観念した。

こんなに胸の動悸が激しくて、指がふるえるようだったら、とてもカメラなんか持てるものじゃない。冷静に、冷静にと、自分で自分自身に言い聞かせながら、気を静めて、菊子嬢の裸身に、次の責めを加えようとする。

私自身では、△責め▽のつもりでいても、菊子嬢にとっては、こんなのは、責めの中に入らないかも知れない。

私のこよなく愛するもの、それは、まろやかな、ほろ苦いアヌスの味である。人さし指を、つけ根まで出し入れしては、口の中に、ほおばった旨い味。これは、何にも、たとえばようもない、たまらない味なのだ。

美しい菊子嬢の目の、ぱっちりとした表情



を眺めながら味わうアヌスの味は、それは又格別の美味さであった。彼女のふくよかな胸を縛しめる縄も、彼女を責める縄ではなくて私の菊花観賞を助ける縄かもしれない。

次に私が、菊子嬢に求めたいのは、温かくて芳醇な出来たての神酒である。これを直接口に頂戴できたら、といって、私はMではな

いのだが、この気持を、一体、どう説明したら、よいのだろうか。もし、それが許されないうとしても、湯気の立つ、ほのかな香り。むせかえるような匂いの中に、自分の全身を包まれてみたいのだ。

もぎたての白桃のように、なめらかな肌からは、むんむんとする若い女性のみが持つ強

い体臭が私の鼻を宇頂天にさせる。

私の持つプロニカ特有の大きなガシャリというシャッター音に混じって、彼女の喘ぐ吐息が、かすかに聞えたような気がした。

臀部の真正面に、ニッコール標準75ミリレンズで、至近撮影距離60センチまでアップすれば、今度もまた、真白いお化けのようなフオトが出来上るのではなからうか。

永遠の神秘を宿した深田菊子嬢の菊花の皺縮の一筋一筋さえ、はっきりとルーペの中に総天然色で浮かび上っているのであるが、私の腕の未熟さの故か、その天使は、私の手元に、ほほ笑みかけてはくれぬ。

○

私が帰路を急ぐタクシーの中で、撮影済の貴重なフィルムを数えると、十二枚撮りのプラスXプロニー判が一本、ネオパンSSS十二枚撮りプロニー判が二本、コダック・エクタクロームX、プロニー判が一本あった。

カラーは自分で現像できないので、注意して限界をわきまえて撮影したつもりだが、それでも全裸の美女の緊縛女体を見たら、ラボの連中、きっと驚くだろうと独り苦笑する。

菊子嬢の妖しい緊縛美を心に浮かべながら今夜は徹夜で現像するぞと車中で誓った。



カット・岡 たかし

連載・M派交友録 (46)

グラマーな猛女

—植座たき子の巻 (9)—

鬼 山 絢 策

賃上げのための責め

たき子は橋本宇吉に、おしっこを飲ませてやることを考えていた。

この頃のたき子は、かなり荒っぽい責め方をするようになり、こんな虐め方をしたら、いまに宇吉に愛想をつかされるのではないかと考えることもあった。

かつて友達の花井ゆう子が、三石銀行の鈴木頭取をパトロンにもった時、ゆう子は、たき子の所に遊びに来て「あんな助平爺いは奴

隷にしてやるのよ」と話した時、二人の仲はそう長く続くまいと、たき子は思った。

案の定、間もなく二人は別れた。

ゆう子は手当たり次第に若い男を引き入れて浮気の仕放題をやり、「あたしの自由を束縛する権利は、爺いにはないわよ。そんなこと契約しなかったもん」と啖呵をきっていたがあれでは鈴木頭取も愛想をつかさずには居られないだろう。

その頃、たき子は宇吉を心から愛し、パトロンというより、恋人のように迎えていた。——あたしには、ゆう子のようなことは、と

てもできないわ——と思っていた。

それが、いまは、どうだろう。

いつの間にか花井ゆう子と同じようなことを橋本宇吉に対して、しているではないか。

別離の危機！

漠然と、それを感じないでもなかったが、

——あたしの場合が違うわ！

とも考える。鈴木頭取は普通の人間だが、橋本宇吉はマゾヒストである。あたしが虐めてやったり羞かしめてやったりすることを喜んでい。それに、あたしは、ゆう子のような浮気ではなく、安井を愛している。宇吉だ